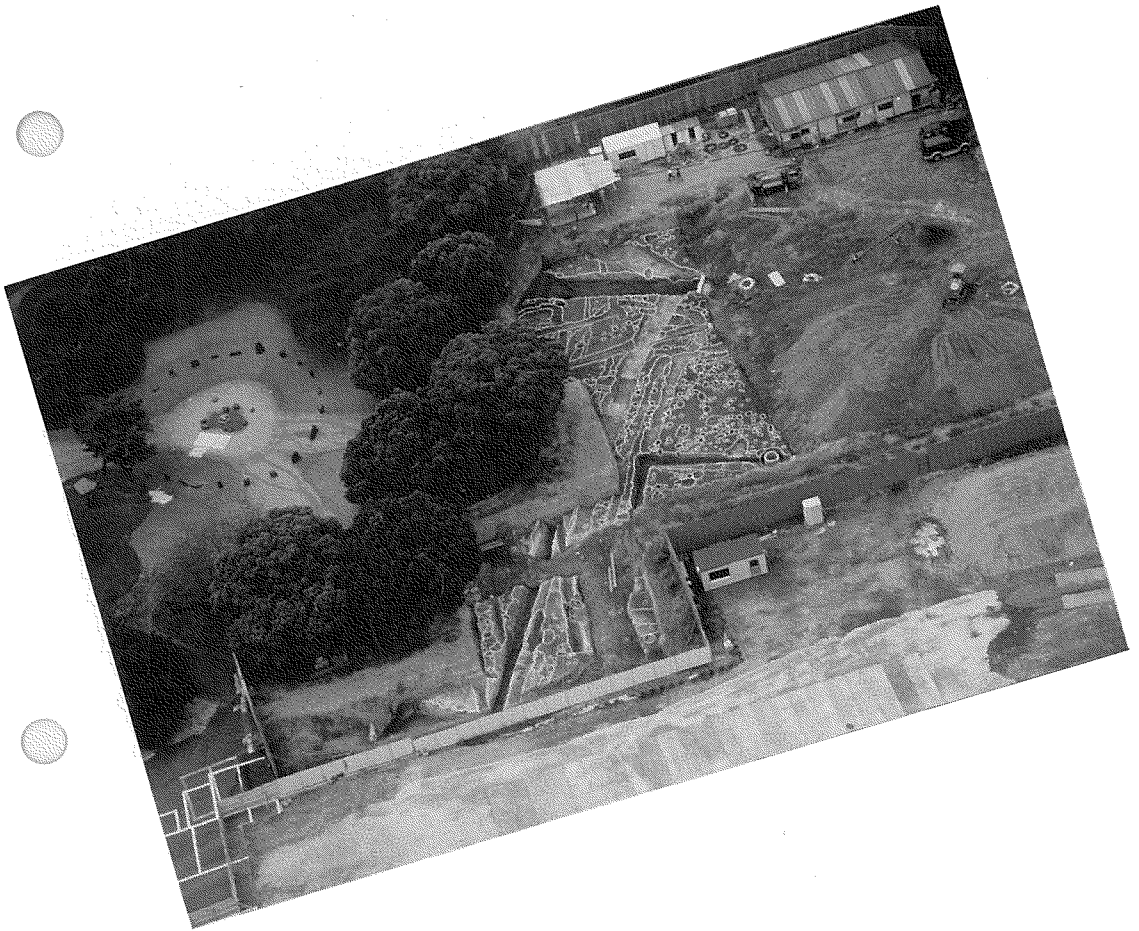


名古屋城三の丸遺跡第6・7次 発掘調査報告書



1995

名古屋市教育委員会

■例言

- 1 本書は、名古屋市中区三の丸に所在する名古屋城三の丸遺跡の第6・7次発掘調査報告書である。調査地点は名古屋市中区三の丸一丁目1番3号にあたる。
- 2 発掘調査は、名古屋市経済局の能楽堂建設に伴う事前調査（記録保存）であり、名古屋市教育委員会が実施した。調査期間は平成5年12月13日から平成6年11月30日まで、調査面積は、2,400㎡（底面積約2,050㎡）である。
- 3 調査に関する調整事務は教育委員会文化財課（平成6年3月まで文化課）学芸員 小島一夫、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員 松村冬樹 尾野善裕 村木誠が担当した。
- 4 調査にかかる排土工事は、第6・7次調査とも大島造園株式会社と請負契約を結んで実施した。
- 5 遺構平面図の作成は、第6次調査分を朝日航洋株式会社、第7次調査分を国際航業株式会社に委託した。
- 6 出土人骨についての鑑定を京都大学霊長類研究所の毛利俊雄氏に依頼し、結果について寄稿いただいた（付編1）。
- 7 出土鉄滓の分析については、新日本製鐵株式会社釜石文化財保存処理センターに委託し、提出された報告書の抜粋を掲載した（付編2）。
- 8 本書で用いる標高は、T.P.（東京湾平均海面）、北方位は国土座標（建設省告示平面直角座標）第Ⅶ系による座標北である。
- 9 発掘調査および整理作業にあたって下記の参加者の協力を得た。
中上孝子 小林寿美子 近藤和子 吉田裕子 加藤隴子 若井晴子 佐々木佳子
水野享子 青木さわ子
杉浦仁美 高橋真理子 川口昌代 石神教親 竹迫健一 藤原時造 平野亜紀
脇山めぐみ 野澤恵美（以上、愛知学院大学学生）
田中隆史 立松直樹 彦坂健太郎 株根秀之 岡井俊二 大村実 渡辺直世
木下淳 西垣直樹 長谷屋貴子 山本博之 牧和男（以上、中京大学学生）
深貝佳世 斎藤めぐみ 野村千鶴 山田ゆり子（以上、名古屋女子大学学生）
加藤由美 久原智穂（以上、明德短期大学学生）
- 10 発掘調査の実施および資料整理に際して、下記の方々、機関からご教示、ご協力いただいた。記して謝意を表す。
檜崎彰一 加藤安信 井上喜久男 三鬼清一郎 丸山竜平 松原隆治 藤澤良祐
内堀信雄 中野晴久 森勇一 遠藤才文 松田訓 小澤一弘 佐藤公保 鈴木正貴
金子健一 下村信博 森泰通 江崎武 岡本直久
日本園芸株式会社 中部電力株式会社 清水・間・永楽特別共同企業体
名古屋市建築局 名古屋市北土木事務所 名古屋城振興協会
- 11 本書の作成は尾野が担当し、加藤真琴 水橋公恵（名古屋市埋蔵文化財発掘調査員）がこれを補佐した。執筆分担は下記のとおり。
第1～3・5～7章…尾野 第4章…水橋
- 12 調査記録・出土遺物は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

■本文目次

第1章 遺跡の所在位置と歴史的環境	7
第1節 遺跡の所在位置	9
第2節 歴史的環境	10
第2章 発掘調査に至る経緯と調査の経過	11
第1節 発掘調査に至る経緯	13
第2節 発掘調査の経過	14
第3章 基本層序	17
第4章 古代以前の遺構と遺物	23
第1節 方形周溝墓	25
第2節 古墳	28
第3節 その他の遺構および包含層出土遺物	30
第5章 中世の遺構と遺物	33
第1節 溝	37
第2節 土坑	63
第3節 その他の遺構・包含層	85
第6章 近世の遺構と遺物	97
第1節 溝	101
第2節 土坑	105
第3節 井戸	113
第4節 その他の遺構・包含層	127
第7章 考察	133
第1節 中世遺構の時期区分	135
第2節 近世遺構の時期区分	137
第3節 歴年代観	139
第4節 調査地点の景観変遷	140
付編1 名古屋城三の丸遺跡室町時代（15世紀）土坑墓出土人骨について	151
付編2 名古屋城三の丸遺跡出土鉄滓の金属学的解析	154

■表目次

第1表	古代以前遺物一覽表	32
第2表	中世遺物一覽表(1)	87
第3表	中世遺物一覽表(2)	88
第4表	中世遺物一覽表(3)	89
第5表	中世遺物一覽表(4)	90
第6表	中世遺物一覽表(5)	91
第7表	中世遺物一覽表(6)	92
第8表	中世遺物一覽表(7)	93
第9表	中世遺物一覽表(8)	94
第10表	中世遺物一覽表(9)	95
第11表	中世遺物一覽表(10)	96
第12表	近世遺物一覽表(1)	128
第13表	近世遺物一覽表(2)	129
第14表	近世遺物一覽表(3)	130
第15表	近世遺物一覽表(4)	131
第16表	近世遺物一覽表(5)	132

■挿図目次

第1図	調査地点位置図（国土地理院1/25,000地形図による）	9
第2図	グリッド設定図	13
第3図	遺構平面図（1:400）	15
第4図	基本層序模式図	19
第5図	S X 01（S D 04・18・22）平面・土層断面・出土遺物実測図	26
第6図	S X 02平面・断面図	27
第7図	S X 03（S D 53）平面・土層断面図	29
第8図	石器実測図	30
第9図	縄文土器・弥生土器・土師器実測図	30
第10図	灰釉陶器実測図	30
第11図	須恵器・埴輪実測図	31
第12図	中世遺構配置図	36
第13図	S D 01土層断面図	38
第14図	S D 01出土遺物実測図（1）	39
第15図	S D 01出土遺物実測図（2）	40
第16図	S D 01出土遺物実測図（3）	41
第17図	S D 01出土遺物実測図（4）	42
第18図	S D 01出土遺物実測図（5）	43
第19図	S D 01出土遺物実測図（6）	44
第20図	S D 01出土遺物実測図（7）	45
第21図	S D 02土層断面図	46
第22図	S D 02出土遺物実測図（1）	48
第23図	S D 02出土遺物実測図（2）	49
第24図	S D 03出土遺物実測図	49
第25図	S D 19土層断面図	50
第26図	S D 19出土遺物実測図	50
第27図	S D 38・39・40土層断面図	51
第28図	S D 39・40出土遺物実測図	52
第29図	S D 44土層断面図	52
第30図	S D 44出土遺物実測図（1）	54
第31図	S D 44出土遺物実測図（2）	55
第32図	S D 46土層断面図	56
第33図	S D 46出土遺物実測図	57
第34図	S D 47・50・54出土遺物実測図	58
第35図	S D 48土層断面図	59
第36図	S D 48出土遺物実測図	60
第37図	S D 49土層断面図	60
第38図	S D 49出土遺物実測図（1）	61
第39図	S D 49出土遺物実測図（2）	62
第40図	S K 09平面・土層断面図	63
第41図	S K 09出土遺物実測図	65
第42図	S K 10平面・土層断面図	66
第43図	S K 10出土遺物実測図（1）	68
第44図	S K 10出土遺物実測図（2）	69
第45図	S K 11平面・土層断面図	70
第46図	S K 11出土遺物実測図	71
第47図	S K 12出土遺物実測図	72
第48図	S K 13出土遺物実測図	72
第49図	S K 14・18・19出土遺物実測図	73
第50図	S K 22・25出土遺物実測図	74



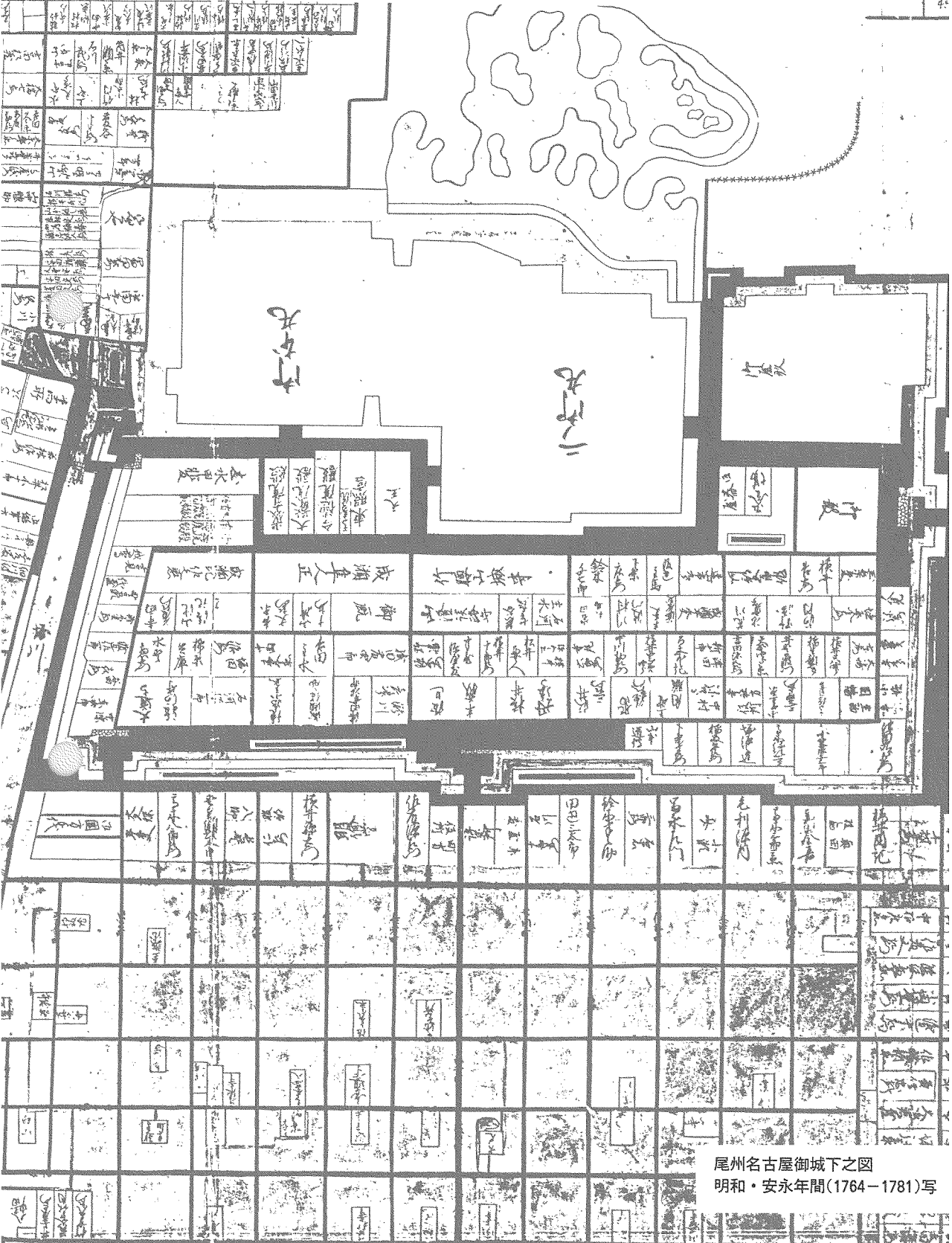
第51図	S K 70平面・断面図	75
第52図	S K 70出土遺物実測図	75
第53図	S K 78平面・断面図	76
第54図	S K 79平面・断面図	77
第55図	S K 79出土遺物拓影	77
第56図	S K 80・82平面・断面図	78
第57図	S K 82出土遺物拓影	79
第58図	S K 88平面・断面・出土遺物実測図	80
第59図	S K 92平面・断面図	81
第60図	S K 104・105平面・断面図	82
第61図	S K 110平面・断面図	83
第62図	S K 111出土遺物実測図	84
第63図	その他の遺構・包含層出土遺物実測図	86
第64図	近世遺構配置図	100
第65図	S D 15土層断面図	101
第66図	S D 15出土遺物実測図	102
第67図	S D 25土層断面図	102
第68図	S D 27土層断面図	103
第69図	S D 21・25出土遺物実測図	103
第70図	S D 55出土遺物実測図	104
第71図	S K 05出土遺物実測図	105
第72図	S K 21出土遺物実測図	106
第73図	S K 24出土遺物実測図	107
第74図	S K 26平面・断面図	107
第75図	S K 26出土遺物実測図	108
第76図	S K 27平面・断面図	108
第77図	S K 27出土遺物実測図（1）	109
第78図	S K 27出土遺物実測図（2）	110
第79図	S K 108出土遺物実測図	111
第80図	S E 01・02出土遺物実測図	114
第81図	S E 02出土遺物実測図	115
第82図	S E 05出土遺物実測図（1）	116
第83図	S E 05出土遺物実測図（2）	117
第84図	S E 05出土遺物実測図（3）	118
第85図	S E 05出土遺物実測図（4）	119
第86図	S E 08出土遺物実測図	121
第87図	S E 11出土遺物実測図	122
第88図	S E 12出土遺物実測図（1）	124
第89図	S E 12出土遺物実測図（2）	125
第90図	その他の遺構・包含層出土遺物実測図	127
第91図	中世遺構変遷図	136
第92図	V層上面検出遺構図（1:400）	137
第93図	近世遺構変遷図	138
第94図	『尾府名古屋図』部分（宝永6（1709）年写）	141
第95図	『那古野古図之写』	142
第96図	『尾張国名古屋古図』	143
第97図	名古屋城三の丸遺跡発見中世遺構概略図（1:5,000）	145
第98図	「三の丸内邸宅古図」（『金城温古録』所載）	147
第99図	山茶碗時期・産地別底部残存率図	148
第100図	中世集落遺跡出土土器・陶磁器組成比較図	150

■写真目次

写真1	前半調査区全景	20
写真2	後半調査区全景	21
写真3	S X02	27
写真4	S X03	28
写真5	S D01	37
写真6	S D02	47
写真7	S D02	47
写真8	S D19	50
写真9	S D44	53
写真10	S D44	53
写真11	S D46	56
写真12	S D46土師器皿出土状況	56
写真13	S D48	59
写真14	S D48・49	59
写真15	S K09	63
写真16	S K09 (左)	64
写真17	S K09 (手前)	64
写真18	S K09 (左)・S K11 (右)	64
写真19	S K10	67
写真20	S K10	67
写真21	S K10	67
写真22	S K11	71
写真23	S K11	71
写真24	S K22	74
写真25	S K70	75
写真26	S K79	76
写真27	S K79	76
写真28	S K82	79
写真29	S K92	80
写真30	S K105	82
写真31	後半調査区上面全景	99
写真32	S D15	101
写真33	S D25	103
写真34	S D55	104
写真35	S K21・24	105
写真36	S K26	108
写真37	S K27	109
写真38	S E02	113
写真39	S E07	119
写真40	S E08	120
写真41	S E11	122
写真42	S E12	123
写真43	S E13	126



第1章 遺跡の所在位置と歴史的環境



尾州名古屋御城下之図
明和・安永年間(1764-1781)写

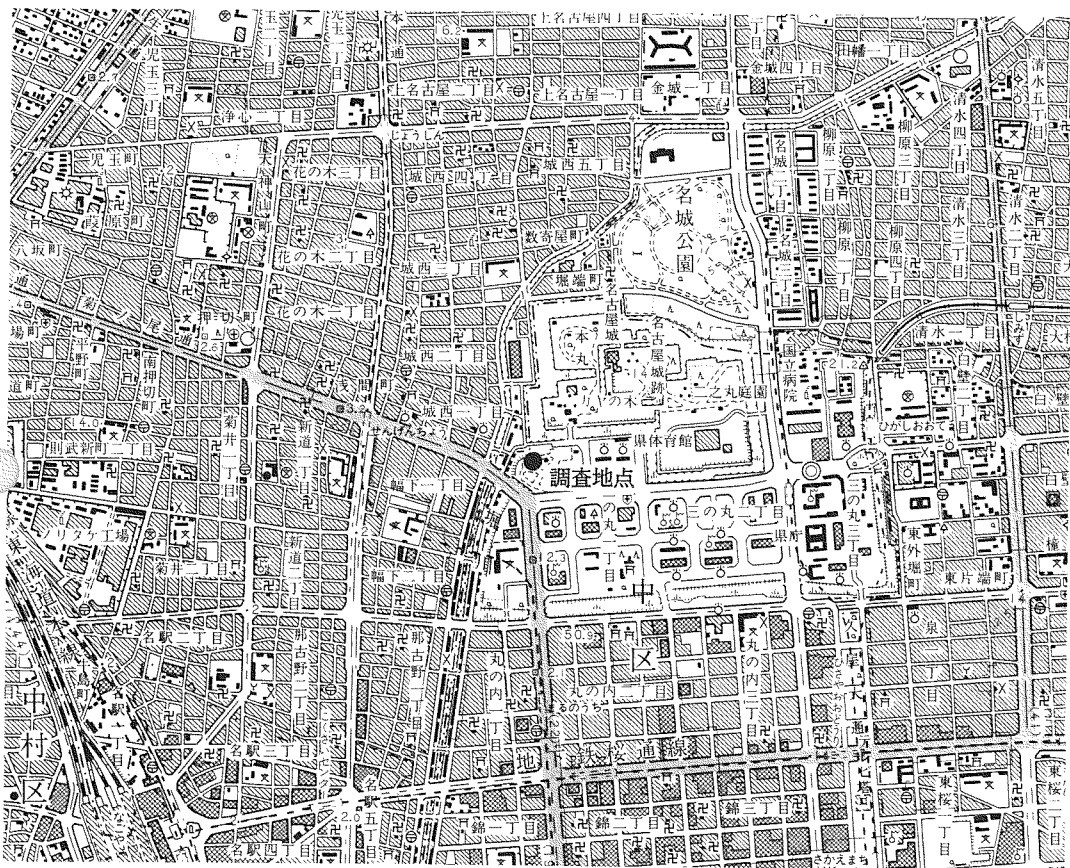
第1章 遺跡の所在位置と歴史的環境

第1節 遺跡の所在位置

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区三の丸に所在する。昭和62年、名古屋市公館と愛知県立図書館の建設予定地で、相次いで埋蔵文化財の所在確認を目的とした試掘調査が行なわれ、名古屋城の三の丸一帯（名古屋市中区三の丸一丁目～四丁目）に弥生時代から江戸時代の遺跡が埋もれていることが知られるに至った。これが名古屋城三の丸遺跡（名古屋遺跡番号7-27）である。

名古屋城三の丸遺跡は、堀川を西縁とする那古野台地の北西端に位置している。那古野台地は、那古野・熱田・御器所・瑞穂・笠寺の5つの小台地からなる名古屋台地のうち、最も北西寄りの標高15mほどの台地で、地質的には約6万年前の洪積世後期に形成された熱田層を基盤としている。遺跡の南・東には台地が続き、北および西側には広大な沖積低地（濃尾平野）が広がっている。

今回の調査地点は、この名古屋城三の丸遺跡の北西端で、台地の縁にあたる。



第1図 調査地点位置図（国土地理院1/25,000地形図による）

第2節 歴史的環境

那古野台地上に初めて人類の足跡が印されるのは、旧石器時代～縄文時代草創期である。名古屋城三の丸遺跡の南約1.5kmにある竪三蔵通遺跡からは、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・有舌尖頭器などが出土している（第5次発掘調査）。このほか、名古屋城三の丸遺跡からも縦長剥片の出土が知られている（市教育委員会第4・5次発掘調査：中部電力地下変電所地点）。しかし、三の丸地内を除いて、那古野台地上での発掘調査は再開発に伴う小規模発掘が多いこともあって、縄文時代以前の遺構・遺物は、全般に断片的であり、実体はよく判っていない。

続く弥生時代から古代にかけては、名古屋城三の丸遺跡（弥生時代）・竪三蔵通遺跡（古墳時代）・富士見町遺跡（古代）などで竪穴住居が比較的まとまった数みつまっているが、南に続く熱田台地と較べると、やや分布密度が低いようであり、地域の拠点となるような大集落はこれまでのところ確認されていない。但し、名古屋城三の丸遺跡からは、古代の布目瓦も出土していることから（愛知県埋蔵文化財センター第Ⅲ次発掘調査：家庭・簡易裁判所地点、市教育委員会第4・5次発掘調査：中部電力地下変電所地点）、この時期には寺院が建立されるなど、一定規模の開発が進んでいたと推定される。

また、平安時代末期には、小野法印顕恵（九条顕頼の子）を開発領主として荘園〈那古野荘〉が成立したことが文献から知られている。那古野荘の位置については、はっきりとしてはいないものの、おおむね現在の三の丸一帯と推定されている。その後の那古野荘の領有関係については詳らかでないが、古文献上に永享3（1431）年の那古野の領主として「今川左京亮」の名がみられ、『満濟准后日記』の永享5（1433）年7月7日条にも「尾張那古屋 今川下野所領」といった記事が存在することから、15世紀代には今川氏の所領となっていたことが知られる。

さらに、大永元（1521）年には今川氏親が〈那古野城〉を築き、一族の氏豊を城主としたというが、天文初（1534～1538）年には織田信秀に奪われ、後に信長が城主となった。弘治元（1555）年、織田信長が清須城へ移ると、那古野城へは叔父信光、次いで林通勝が入る。この後、那古野城に関する記事が古文献上から消えるため、廃城年代については明確でないが、林通勝が追放された天正10（1582）年頃に廃城になったと推定されている。この那古野城については、現在地上からその痕跡を全く窺うことができないが、江戸時代の文献『金城温古録』によれば、現在の二の丸付近にあったという。

慶長15（1610）年、徳川家康の命により、元の那古野城を含む一帯に名古屋城の築城が開始され、〈清須越〉と呼ばれる清州からの町の移転が始まる。調査地点付近は、〈清須越〉後暫くは空き地であったようであるが、寛永3（1626）年に尾張藩家老の志水甲斐守（1万石）の屋敷となり、そのまま明治を迎える。明治維新後、三の丸一帯は陸軍用地となり、明治11（1878）年名古屋衛戍病院（陸軍病院）が建てられ、建物は戦後も暫く国立名古屋病院として使用されていた。

第2章 発掘調査に至る経緯と調査の経過

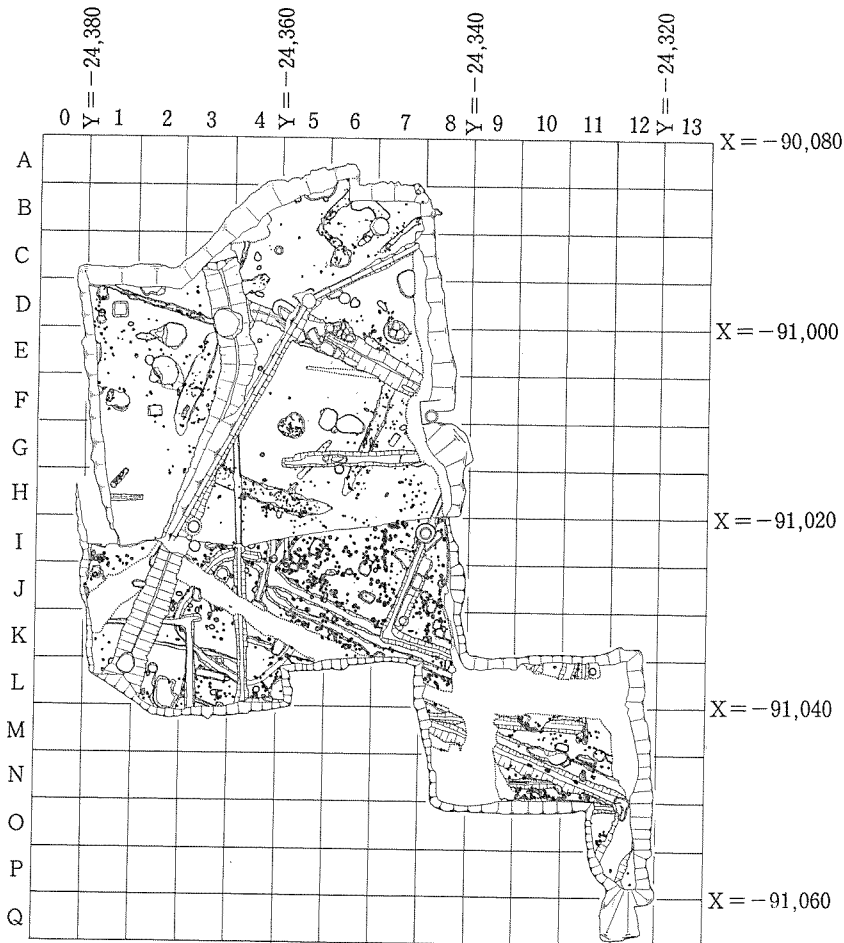


陸軍病院時代の湯呑

第2章 発掘調査に至る経緯と調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

今回発掘調査の対象となった名古屋市中区三の丸一丁目1番3号地点は、第1回名古屋市都市景観大賞受賞の公園の一部として広く市民に親しまれてきていたが、名古屋市経済局による名古屋城振興事業の一環として、名古屋城能楽堂（仮称）が建設されることとなった。これに伴い、地中の埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想されたため、名古屋市教育委員会文化課が試掘調査を実施したところ、当該地点は既に上層を大きく攪乱されているものの、下層に須恵器の包含層が遺存していることが判明した。このため、文化課は事業者である経済局と能楽堂の設計・施工を担当する建築局との間で日程等についての調整を進め、隣接する中部電力株式会社地下変電所建設予定地地点の発掘調査が終了する平成5年12月中旬から発掘調査に入ることで合意に至った。



第2図 グリッド設定図 (1:800)

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、敷地内にまとまった排土置き場を確保できなかった関係で、調査区を南北に2分割し、表土・攪乱土の半分を持ち出した上、スイッチバック方式で行なうこととした。また、敷地内への工事関係車両の進入路確保の都合上、作業は北側半分（前半区）を先に行なうこととし、このうち800㎡を平成5年度事業（第6次発掘調査：平成5年12月13日～平成6年3月25日）、北側部分の残余と南側部分（後半区）を平成6年度事業（第7次発掘調査：平成6年4月5日～平成6年11月30日）として実施した。

前半区調査開始時点では、試掘調査の結果から、遺構面は古代（ないし古墳時代）の1面のみであり、その直上に須恵器の包含層が存在するものと考えられていた。しかし、表土除去を始めるにあたって深掘りを行なったところ、古代の遺物包含層と目された熱田層の直上の黒色土層は遺物を含んでいないことが判明した。このため、試掘調査で確認された須恵器の包含層は遺構の埋土であろうという想定のもとに、重機による表土除去で一気に熱田層上面まで掘り下げを行なった。

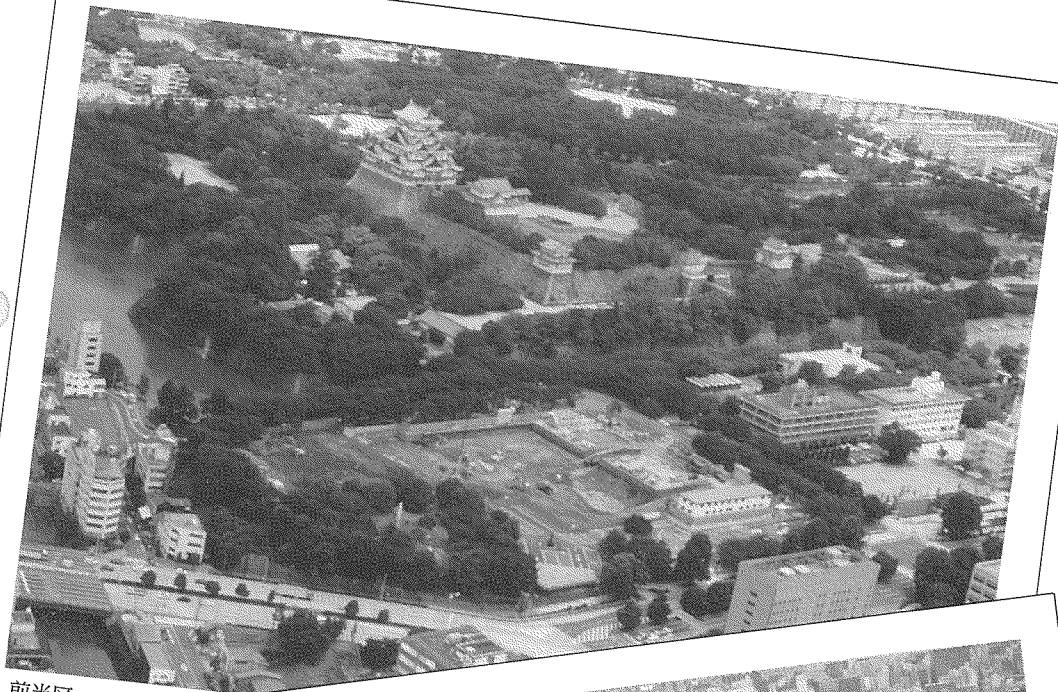
ところが、掘削を進めていくにつれて熱田層上面の黒色土は自然堆積の黒ボク土であり、中世の遺構はその上面から掘り込まれていること、黒ボク土上に一部中世遺物の包含層や近世の整地層が遺存していることが明らかとなった。しかしその一方で、試掘調査時の須恵器包含層に対応すべき古代以前の遺物包含層は確認できず、調査未着手の後半区については、少なくとも中世・近世の2遺構面を調査する必要があると認められた。また、熱田層上面の黒ボク土層は、今回の調査区に近接する第4・5次発掘調査地点でも類似の層が検出され、テフラの分析からアカホヤ火山灰降灰（縄文時代前期）以前であることが明らかとなっていたため、該期の遺物包含層である可能性を考慮し、前半区表土除去時の無遺物層との所見を補強すべく、テストグリッドの掘削が望ましいと考えられた。

こうした認識のもとに、調査を担当していた見晴台考古資料館では、発掘作業を進める傍ら、調査所見を文化課へ通報し、調査期間と経費について関係部局との協議を依頼した。幸い、要求が大筋で認められ、好天候が続いたこともあって作業は順調に進み、後半区については中世・近世の2遺構面調査後に、黒ボク土残存部分の5%についてテストグリッドの掘削を行なうことができた。



第3図 遺構平面図 (1:400)

第3章 基本層序



前半区



後半区

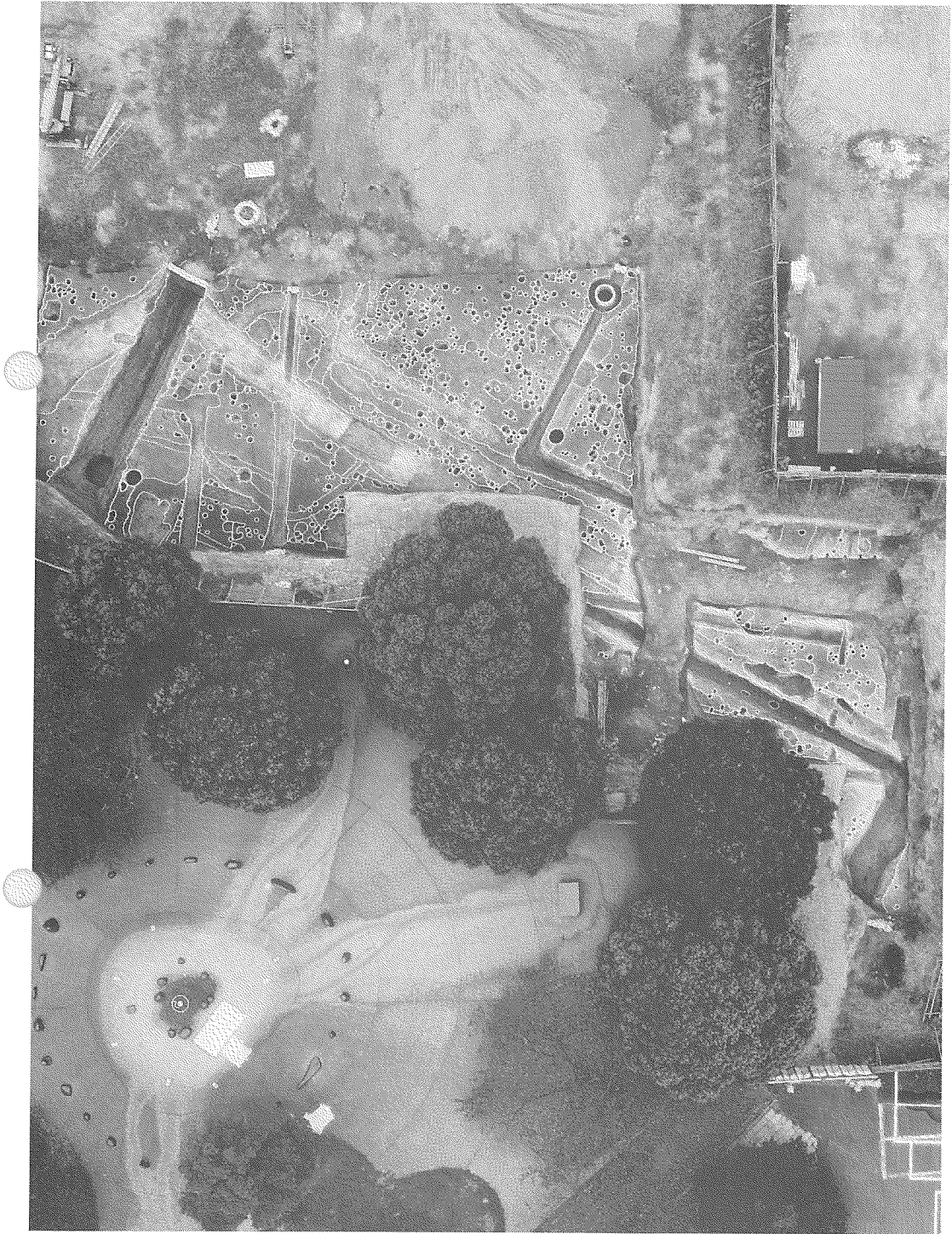
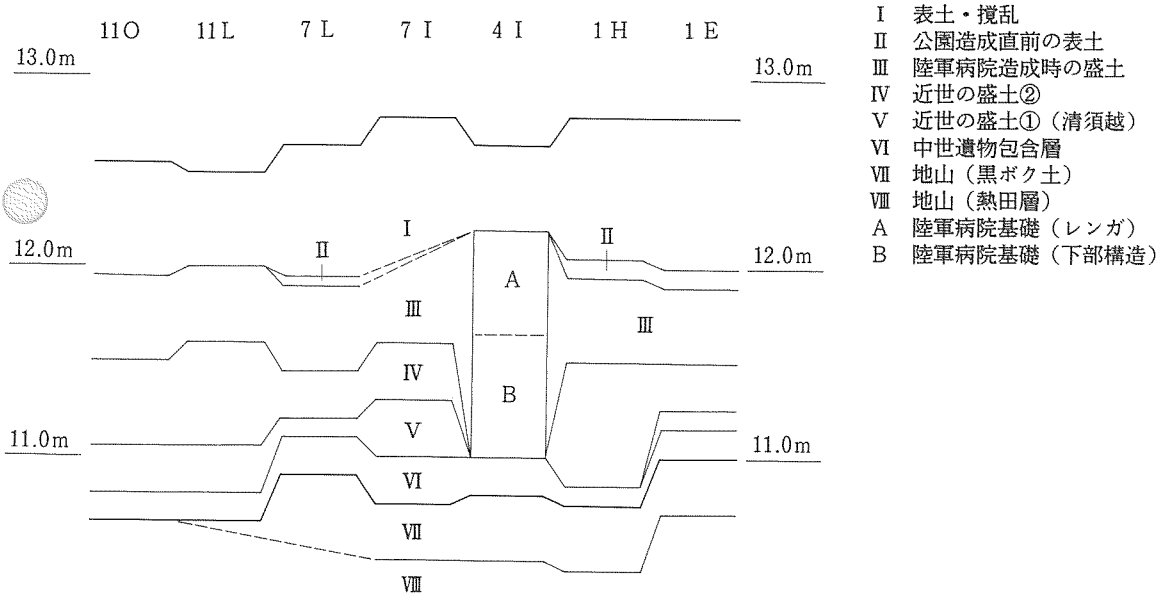


写真 2 後半調査区全景

第3章 基本層序

調査地点の基本的な層序は、上層から、表土・攪乱層（Ⅰ層）、部分的に玉砂利や炭化物の集中が見られる暗褐色土層（Ⅱ層）、灰白色粘土ブロックや黄褐色土ブロックを含む褐色土層（Ⅲ層）、黄褐色土ブロックや灰褐色砂を主体とする層（Ⅳ層）、地山小ブロックを含む灰白色砂・暗褐色土・黒褐色土の薄い互層（Ⅴ層）、中世遺物を包む黒褐色土層（Ⅵ層）、無遺物の黒ボク土層（Ⅶ層）、熱田層（Ⅷ層）の8層に大別できる。

各層の年代については、陸軍病院基礎（レンガ）上面の水準値とほぼ一致することからⅡ層を陸軍病院（国立名古屋病院）時代の表土層、陸軍病院基礎の下部構造がⅣ層上面から掘り込まれているように観察されたので、Ⅲ層を明治11（1878）年の陸軍病院建設時の整地層と考えている。またⅤ層は、16世紀末～17世紀初頭と考えられる遺構を直接覆っていることから、慶長15（1610）年に始まる名古屋城の築城に伴うものかと推定される。したがってⅣ層は、慶長15年から明治11年の幅の中で捉えられるが、この間の土地利用の大きな変化としては、寛永3（1626）年に志水氏の拝領屋敷地となっていることが挙げられよう。いまⅣ層を、志水氏の屋敷建設に伴う整地層とする積極的な根拠は見い出せないが、Ⅴ層の上面に硬化が認められ、Ⅴ層がある時期の地表面であった可能性が高いことから、Ⅳ層の形成は慶長15年までは遡らないのではないかとと思われる。



第4図 基本層序模式図

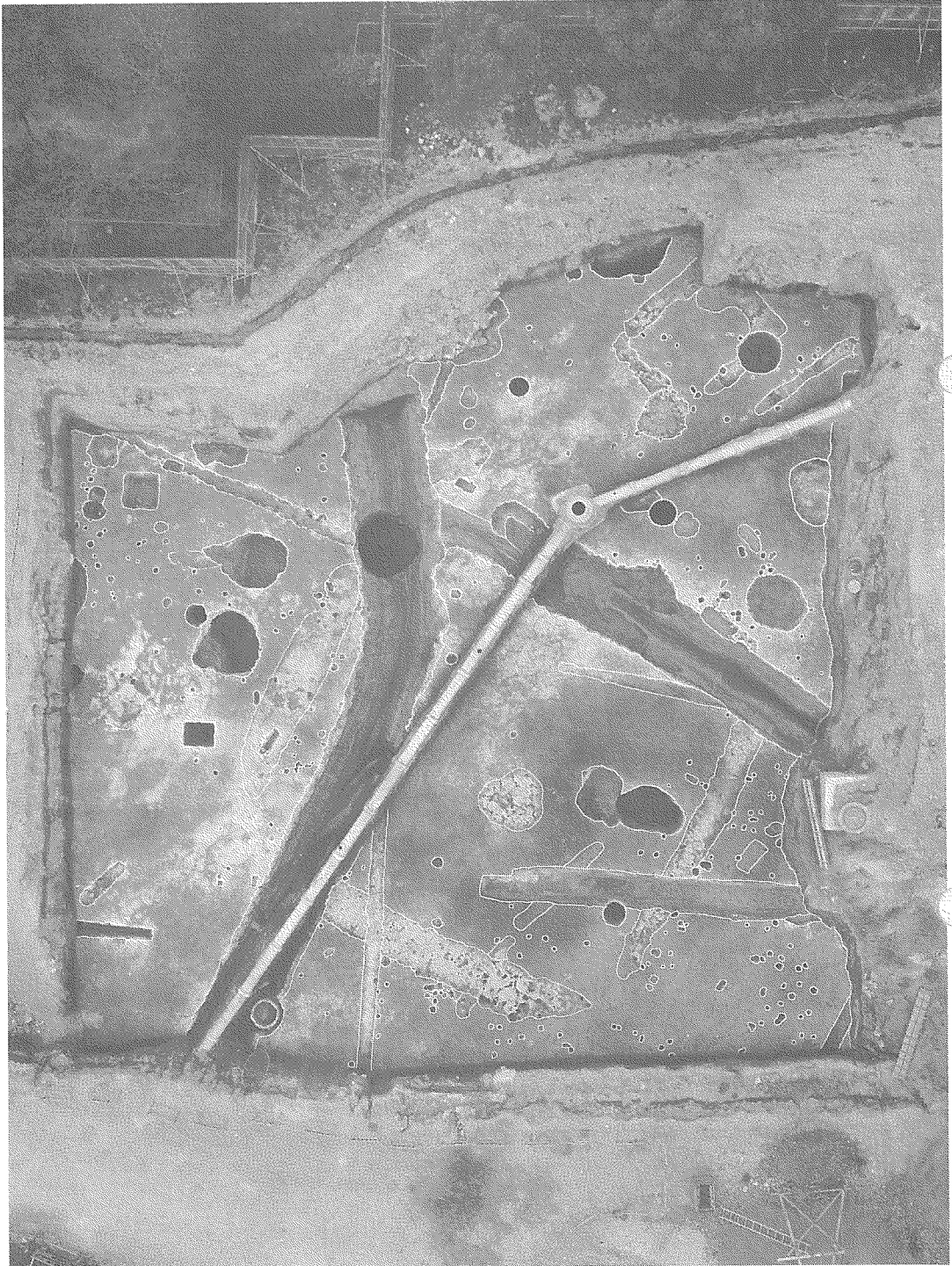
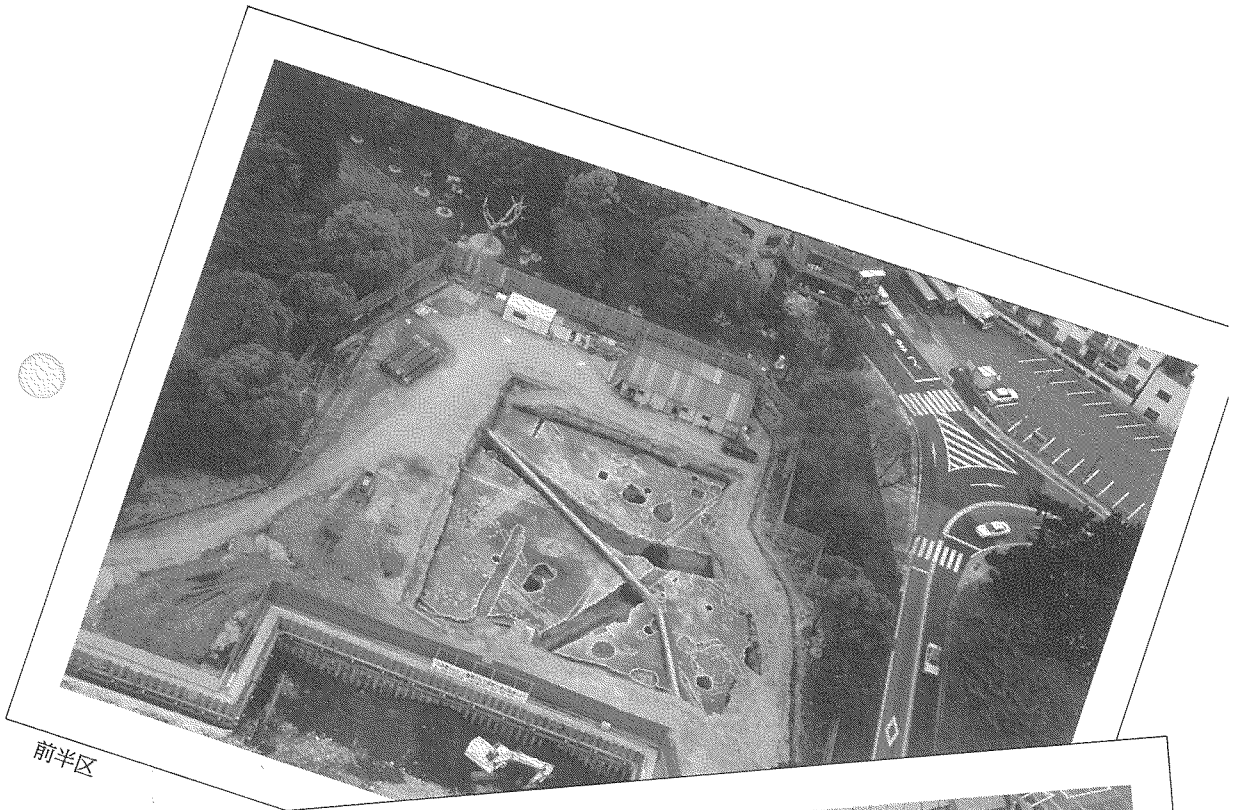
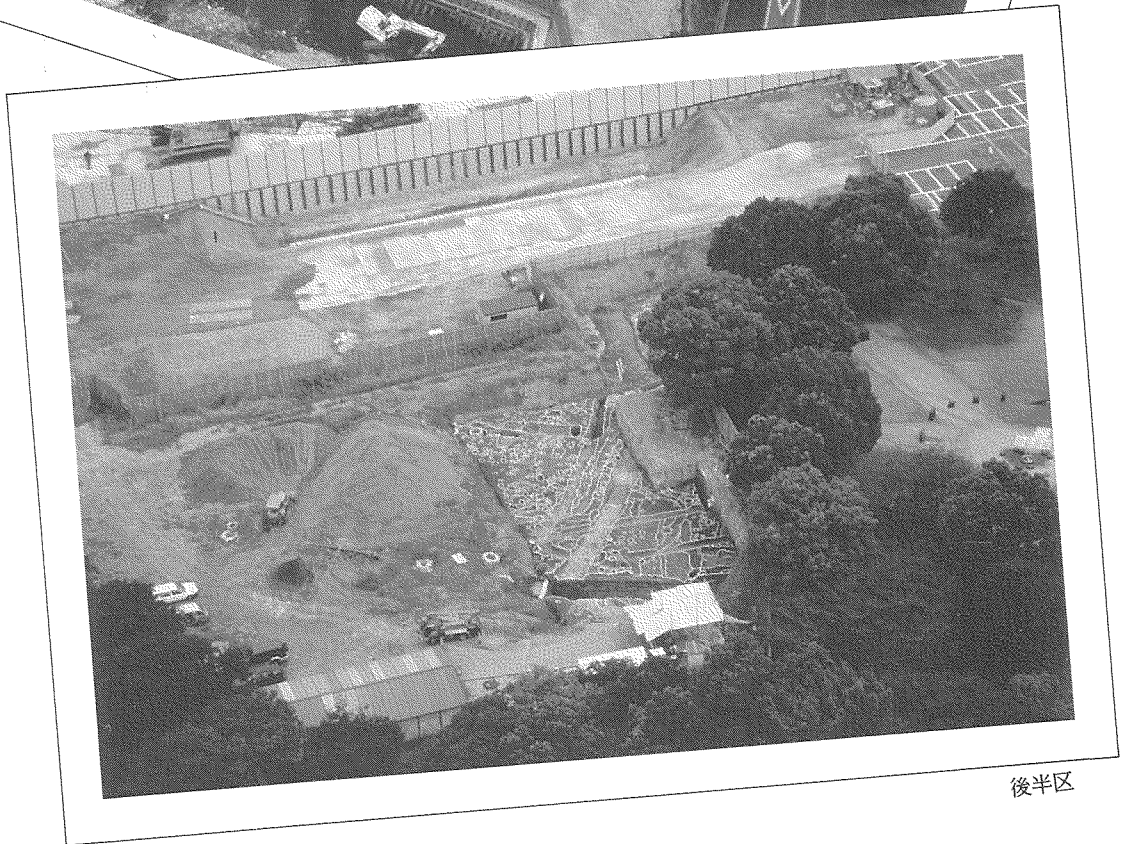


写真1 前半調査区全景

第4章 古代以前の遺構と遺物



前半区



後半区

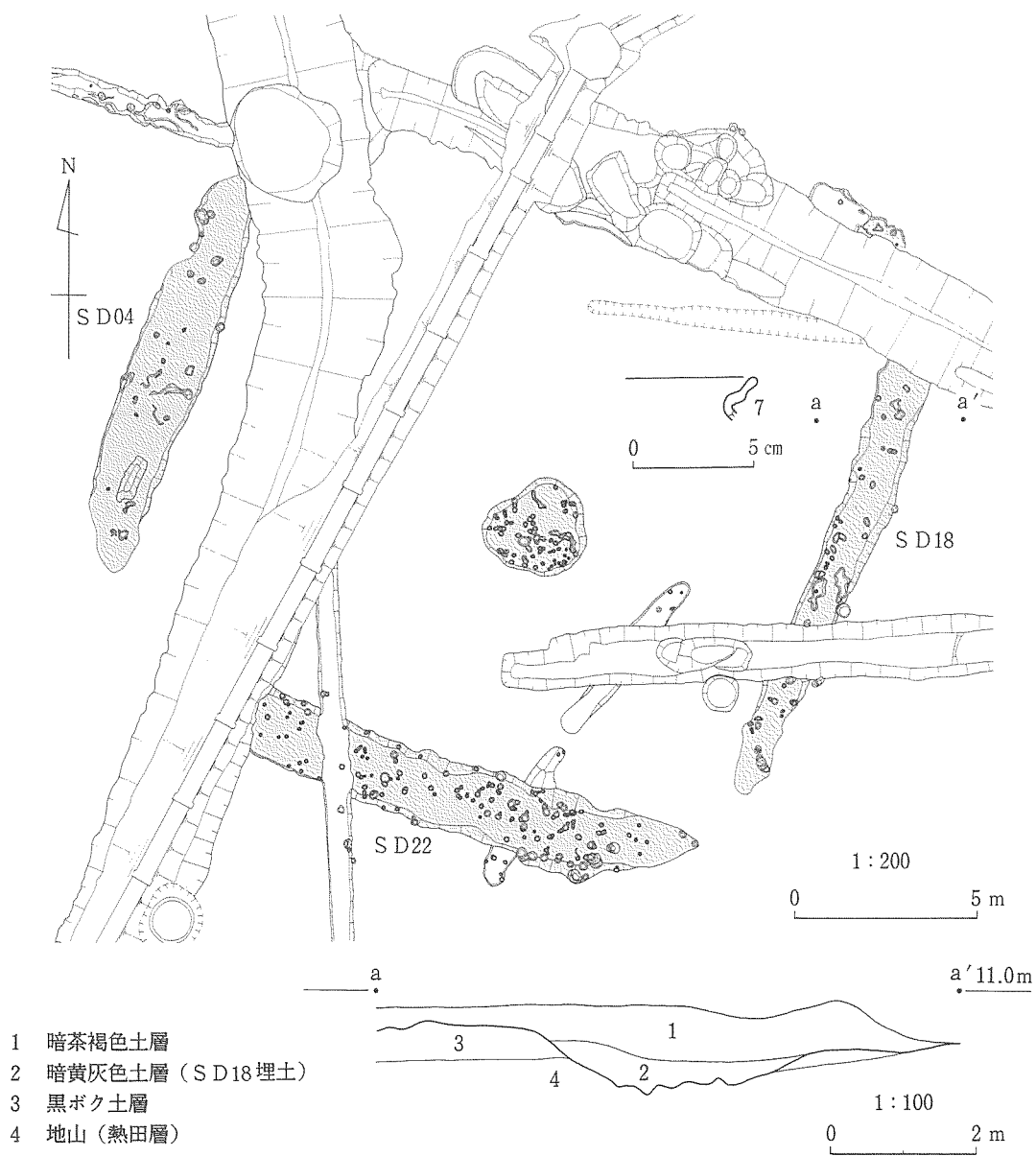
第4章 古代以前の遺構と遺物

この時期の遺構には、方形周溝墓2基と古墳1基が挙げられる。いずれも後世の削平をうけており、墳丘部分は残っていない。また、周溝についてもかなり削平されているようである。遺物は、確実に遺構に伴うものではなく、大半は後世の遺構や包含層から出土している。

第1節 方形周溝墓

SX01 (SD04・18・22)

一辺長約21mの正方形を呈す。北西辺の溝の主軸方位はN-21°-Eである。周溝は、最大幅約2m、検出面からの深さ約0.4mである。周溝は、四隅のうち、南西隅と南東隅で切れており、残りの2箇所は攪乱のため不明である。周溝底面には、著しい凹凸が認められる。中央部の土坑は、墓壇であるかは不明だが、底面の状態が周溝と同じであることから一連の遺構とみなした。出土遺物は、SD22埋土から元屋敷期（大参1968）のS字状口縁甕（7）が出土しているが、遺構に直接伴うものかは不明である。この他に遺物が出土していないため、時期は不明である。



第5図 SX01 (SD04・18・22) 平面・土層断面・出土遺物実測図

SX02 (SD10・11・12・24)

6.6m×5.2mの長方形を呈す。長軸方位はN-41°-Eである。周溝は、最大幅約1m、検出面からの深さ約0.2mである。周溝は、南隅では溝が明確に切れて陸橋状になっており、西隅では浅くなっている。底面にはSX01と同じく、著しい凹凸が認められる。遺物が出土していないため、時期は不明である。

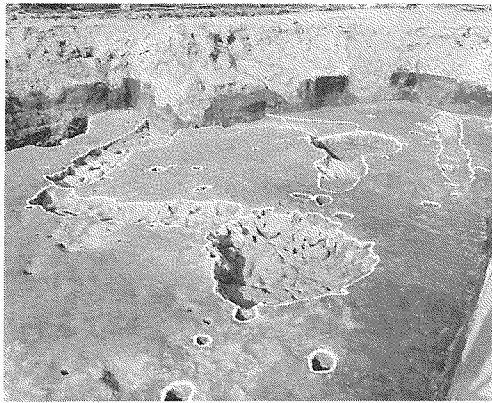
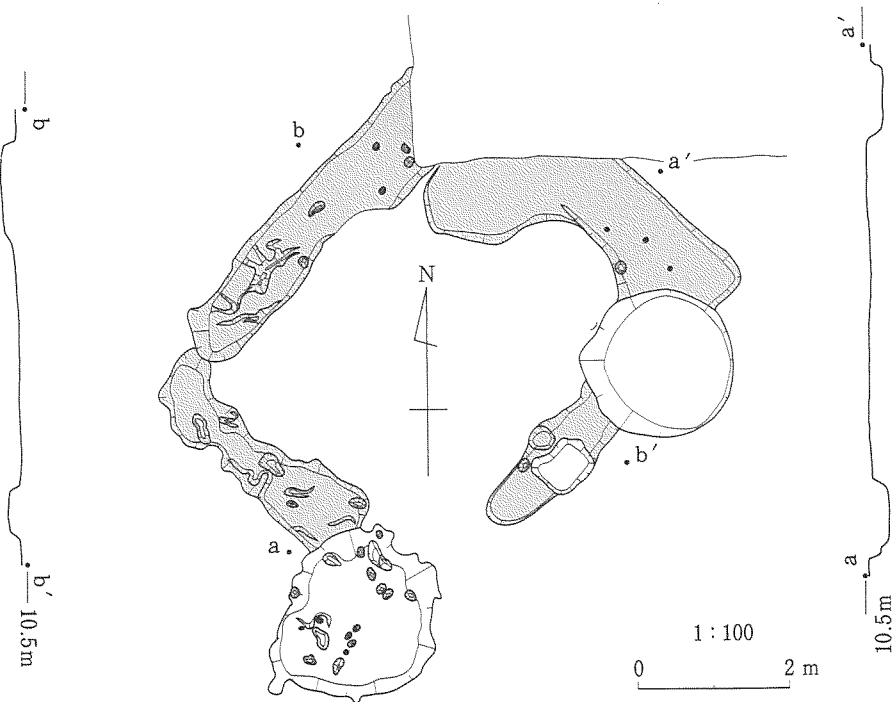


写真3 SX02



第6図 SX02平面・断面図

第2節 古墳

SX03 (SD53)

北東隅を後世の遺構に切られており、正確な規模は不明であるが、一辺長約13mの方墳と推定した。主軸方位はN-39°-Eである。周溝は、最大幅約1.5m、深さは、最も残りの良い部分で検出面から約0.36mである。墳丘や主体部は残存せず、遺物も出土していない。しかし、重複するすべての中世遺構よりも古く、第4・5次調査（服部・水野1994）時に検出された2号墳に規模・形態が似ていることから古墳と推定した。また、5世紀代の須恵器が周辺から出土し、南半区から弥生土器が殆ど出土しないことも傍証として挙げられる。

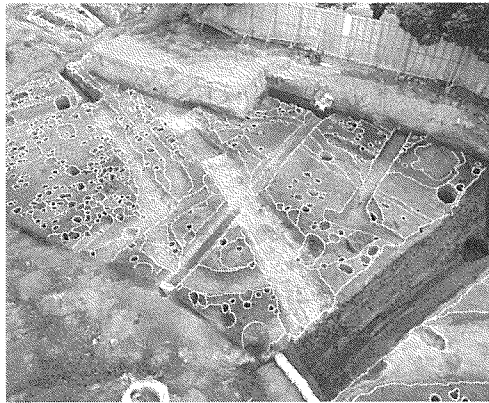
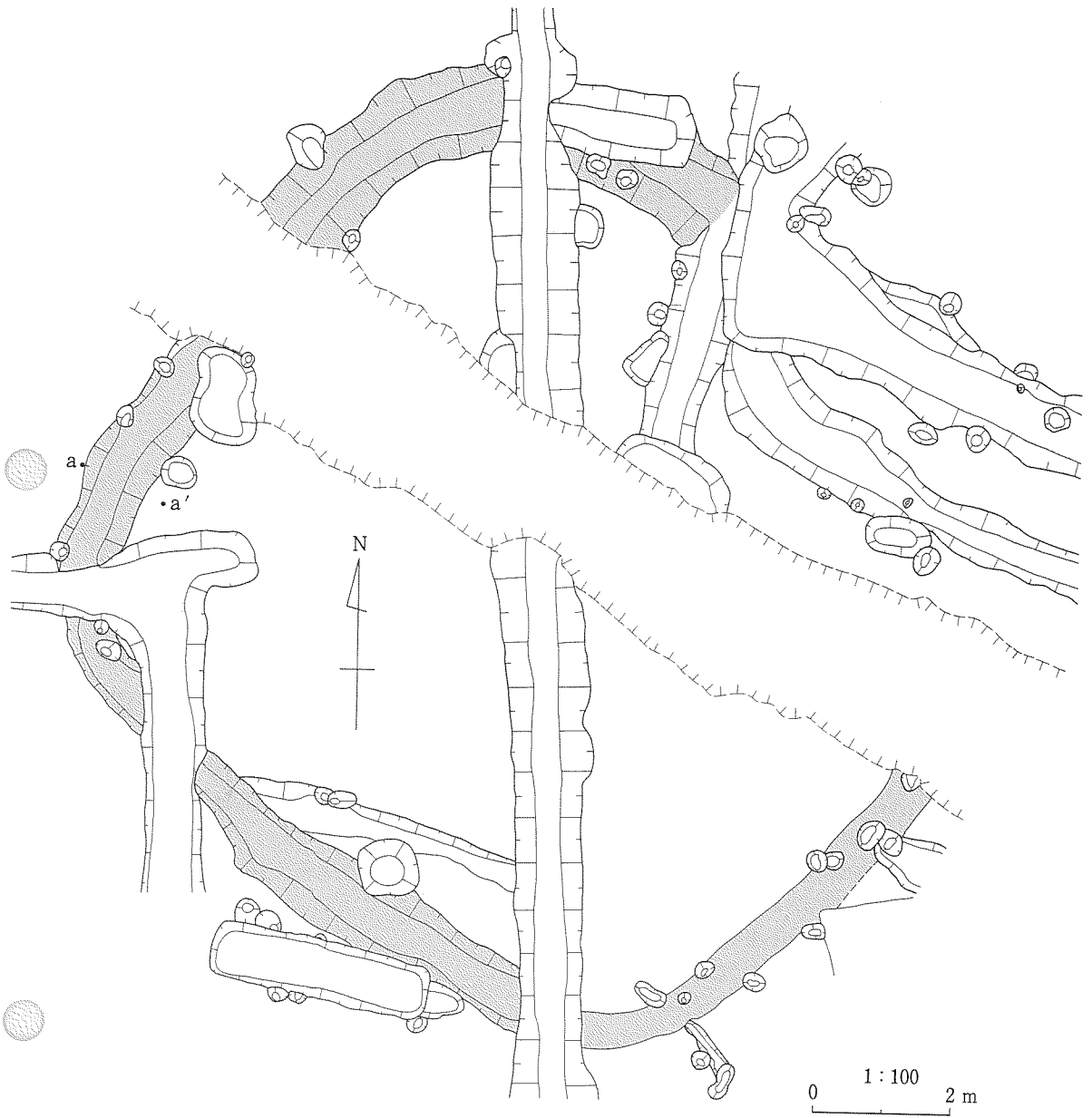
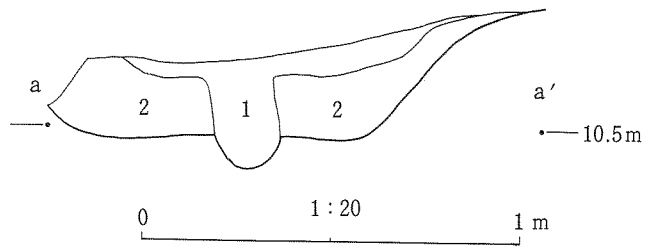


写真4 SX03



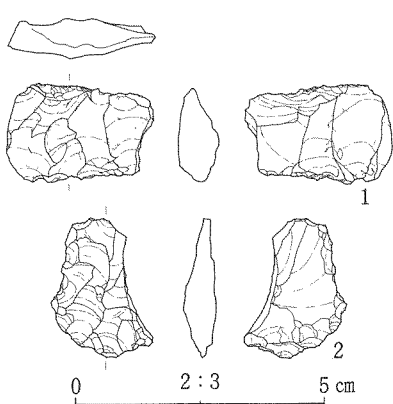
- 1 褐色土層
- 2 暗褐色土層 (SD53埋土)



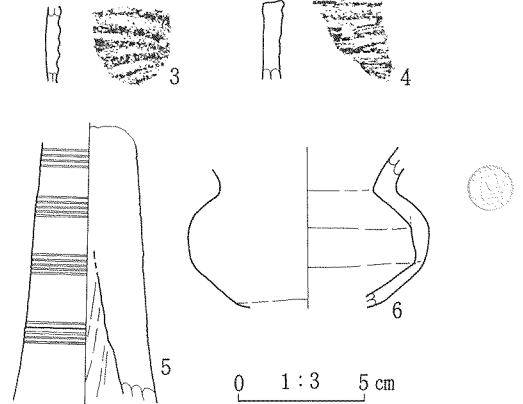
第7図 SX03 (SD53) 平面・土層断面図

第3節 その他の遺構および包含層出土遺物

後世の遺構や包含層から、縄文時代から古代までの遺物がコンテナ1箱程度出土した。大半は須恵器で、弥生土器・土師器・埴輪は少ない。石器・縄文土器・灰釉陶器もあるが、僅少である。



第8図 石器実測図

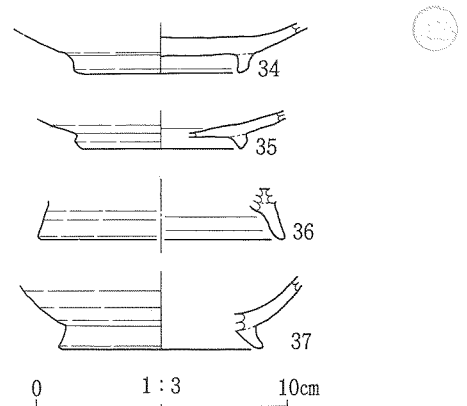


第9図 縄文土器・弥生土器・土師器実測図

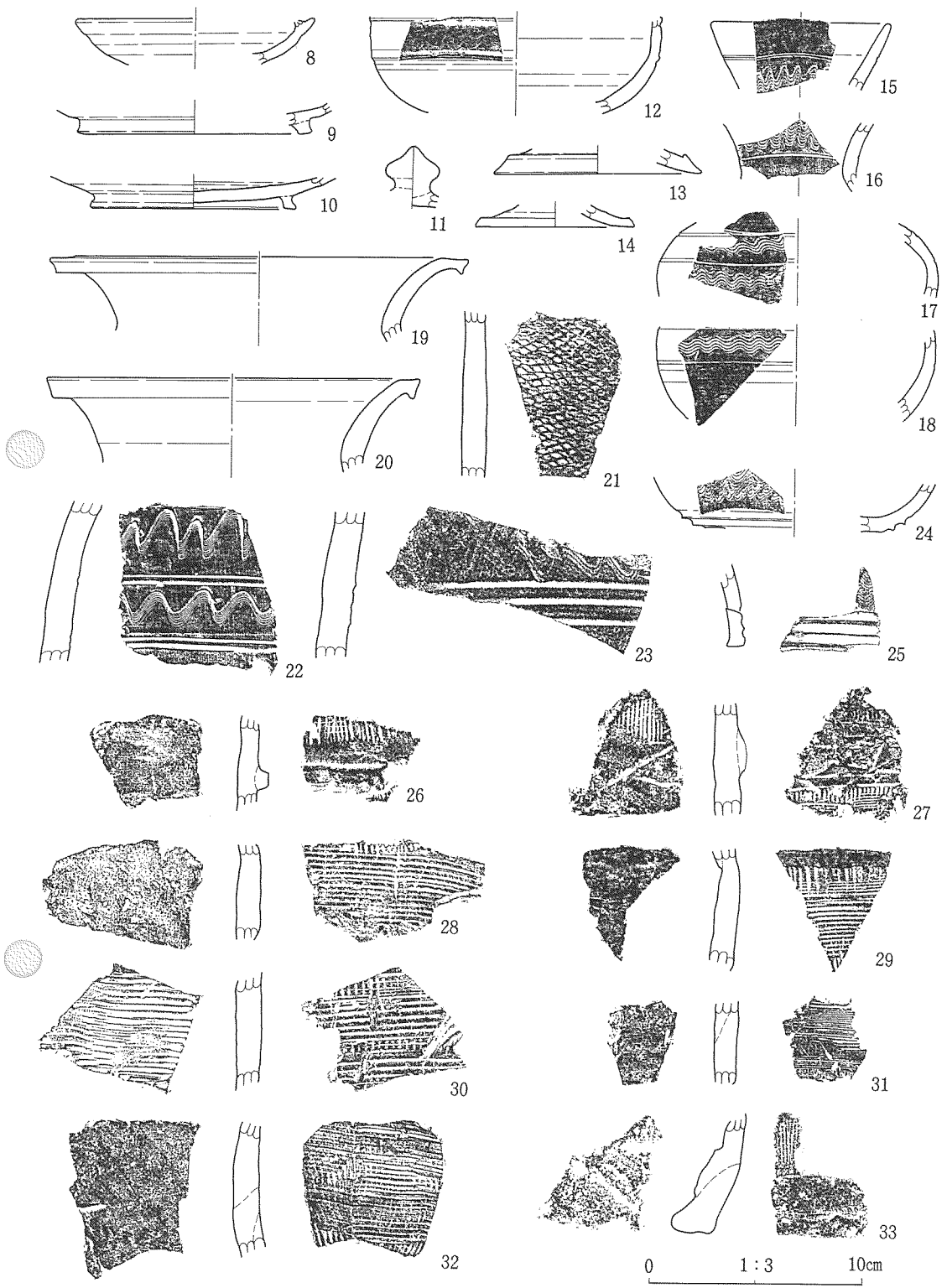
須恵器は調査区全域から出土するが、SD01とSX03付近に若干集中する傾向がある。時期は、5世紀代と7・8世紀に、大きく2分され、中でも5世紀中葉頃の初期須恵器と思われるものが目立つ。実測図を掲載した遺物の時期は、高杯(12)・壺(15~18)・甕(19・21)・器台(24・25)が5世紀中葉、高杯(13)が5世紀末、杯(8~11)・高杯(14)・甕(20・22・23)が7・8世紀である。

埴輪は、土師質と須恵質の両方が出土している。土師質のものにも黒斑が認められないため、すべて窯窯焼成と推定される。外面調整は、タテハケ後C種ヨコハケ(川西1978)で、内面調整は基本的にヨコナデである。時期は、須恵器生産開始以降埴輪生産衰退以前の5世紀中葉から6世紀前半である。

灰釉陶器は、点数は非常に少ないが、猿投窯編年(植崎1983)の黒笹90号窯式または折戸53号窯式から百代寺窯式までの各段階のものが揃っている。



第10図 灰釉陶器実測図

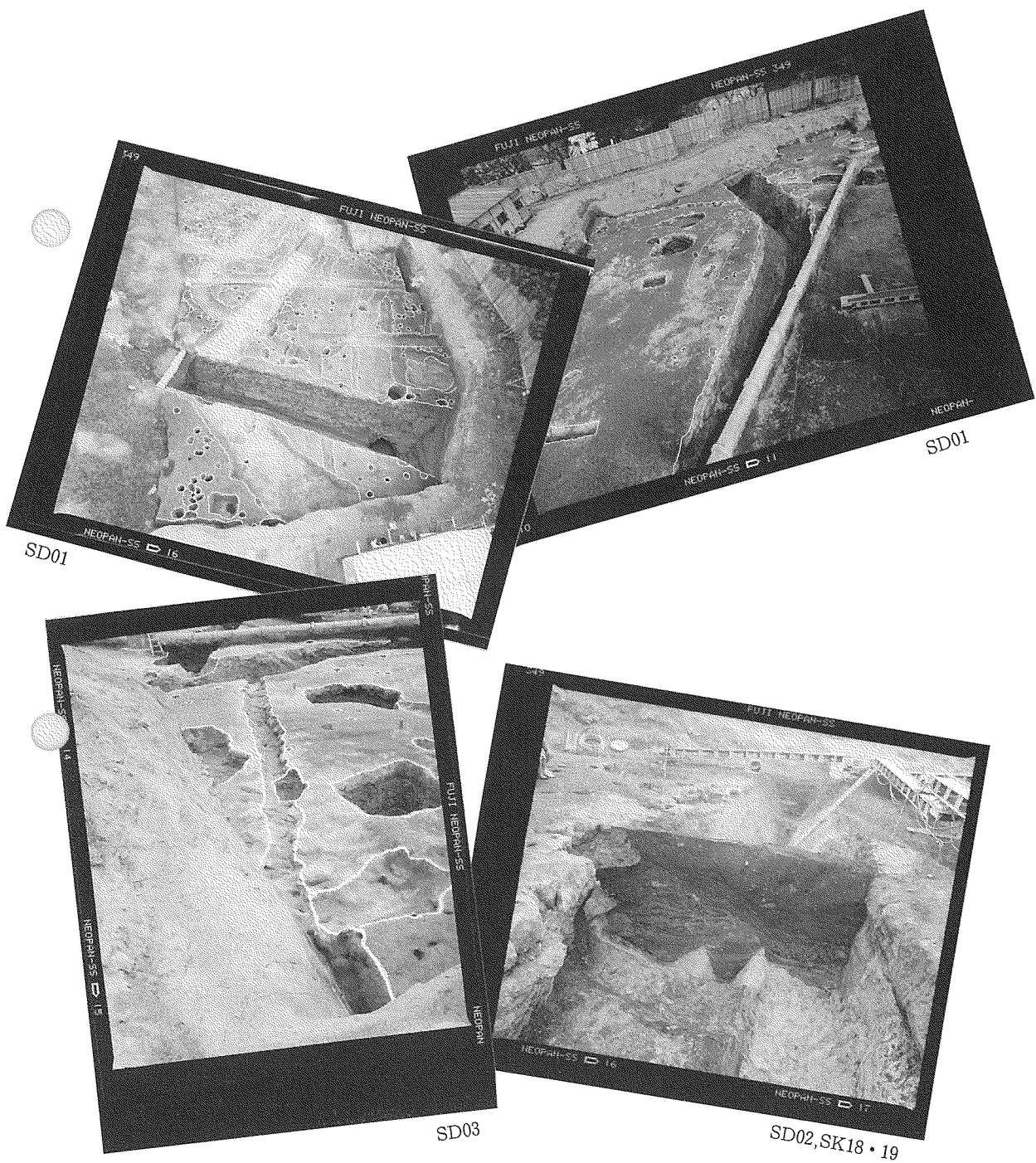


第11図 須恵器・埴輪実測図

第1表 古代以前遺物一覽表

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
1	SK10		下呂石	楔形石器					
2	SD01	3G	チャート	剥片					
3	SD01	3F	縄文土器						浮線文
4	SD18	7F	縄文土器						条痕文
5	SK10		弥生土器	高杯					山中式
6	SD02		土師器	小型壺					
7	SD22	4H	土師器	甕					S字状口縁
8	SD50	5J	須恵器	杯					
9	SK10	3D4D	須恵器	杯			10.3		
10	包含層	8L	須恵器	盤			9.5		
11	SK10	8C	須恵器	杯蓋					擬宝珠鈕
12	SD01		須恵器	高杯					櫛描波状文
13	SK12	5B	須恵器	高杯			9.7		
14	包含層	4J	須恵器	高杯			7.4		
15	SK85	4J	須恵器	壺					
16	SK45	5J	須恵器	壺					
17	包含層	5J	須恵器	壺					
18	包含層	4J	須恵器	壺					
19	SD02	6E	須恵器	甕					
20	SD49	7K	須恵器	甕					
21	PIT	2K	須恵器	甕					外・格子タタキ
22	SD02	6E	須恵器	甕					櫛描波状文
23	SK22		須恵器	甕					櫛描波状文
24	SD19	6G	須恵器	器台					櫛描波状文
25	包含層	4J	須恵器	器台					櫛描波状文
26	SD01	3E4E	埴輪						
27	SD44a	11N	埴輪						
28	SK10		埴輪						
29	SD19	5G	埴輪						
30	SD01	2I	埴輪						
31	検出	5K	埴輪						
32	SK10	3D4D	埴輪						
33	SK18		埴輪						
34	SD44	8M	灰釉陶器	皿			6.3		K-90~0-53号窯式
35	検出	3I	灰釉陶器	皿			6.2		0-53号窯式
36	PIT	6J	灰釉陶器	深椀					H-72号窯式
37	SD44	8M	灰釉陶器	椀			7.7		百代寺窯式

第5章 中世の遺構と遺物



第5章 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、すべてVI層を除去した段階で検出された。したがって、VII層上面が遺構検出面となるが、中世の生活面（地表面）は〈清須越〉の際に大規模に削平を受けており、検出面より1mほど上位にあったものと考えられる。

遺物については、基本的に産地・材質によって大分類し、各大分類項目ごとに器種・型式別内訳を記した。但し、山茶碗（栢崎1977の瓷器系中世陶器第2類）については猿投窯・知多（常滑）窯・瀬戸窯（南部）、東濃窯・瀬戸窯（北部）の厳密な産地同定が困難であるため、前3者を尾張系、後2者を東濃系として一括した。また、土師器皿・土師器鍋については下記の分類による。

■土師器皿



法量 特大皿：口径15cm前後のもの。

大皿：口径12cm前後のもの。

中皿：口径8cm前後のもの。

小皿：口径5cm前後のもの。

成形 I類：非ロクロ成形のもの。

I a：口縁部に横ナデが認められるもの。

I b：外面一面に指頭痕が認められるもの。

I c：体部と底部の境が明瞭でなく、全体の形状が円盤状になるもの。

I d：その他、非ロクロ成形のもの。

II類：ロクロ成形のもの（底部に回転糸切り痕が残る）。

II a：口縁部が外反するもの。

II b：体部から口縁部が直線的に挽き出されているもの（底部非突出）。

II c：体部が内彎するもの。

II d：体部から口縁部が直線的に挽き出されているもので、底部が突出するもの。

■土師器鍋（土師質の煮炊具）



鍋A：頸部がくびれ、口縁端部が内側に折り返されるもの。いわゆる伊勢型鍋。

鍋B：内耳をもち、全体の形状が半球形を呈するもの。いわゆる尾張型鍋。

鍋C：鍋Bを扁平にした形状を呈するもの。ほうろく鍋。

羽釜A：体部上半が強く内彎し、胴部が最大径となるもの。

羽釜B：全体の形状が半球形を呈し、鏝部分が最大径となるもの。

茶釜A：外耳を有する扁平な壺状の器形で、胴部に鏝をもつもの。

茶釜B：外耳を有する扁平な壺状の器形で、胴部に鏝をもたないもの。

なお、各遺構の出土遺物量については、基本的に接合前破片数法（単位：点）と口縁部残存率法（単位：個体）による数値を併記したが、土器・陶磁器以外は破片数のみ、土師器皿・鍋の内訳は口縁部残存率法による個体数のみとした。また、口縁部残存率の計測は5%を区切りとし、端数については4捨5入した。

また、基本的に遺構の時期の判定は、出土量が比較的多く、研究の進んでいる瀬戸美濃陶器の編年（藤澤1986・1991b）によっているが、必要に応じて土師器皿などの型式も考慮した。



第12図 主要中世遺構配置図 (1:400)

第1節 溝

SD01

幅約4m、深さ約3mの断面V字形を呈する葉研堀。調査区の中央やや西よりを南北に縦断している。溝の主軸方位はN-21°-Eであるが、調査区の北端近くで屈曲し、ほぼ真北を向いている。埋土は自然堆積土と考えられる下層(A-A'断面の15~18層、B-B'断面の7~11層)と人為的埋戻土とみられる上層(A-A'断面の1~14層、B-B'断面の1~10層)に大別でき、観察の限りでは滞水していた痕跡は認められなかった。また、3Hグリッドには小貝層が形成されており、ブロックサンプル(30cm×30cm×10cm)を水洗選別した結果、ほぼオオタニシのみで構成されていることが判明したが(28個体)、1点のみカワシンジュガイ?の小片が含まれていた。

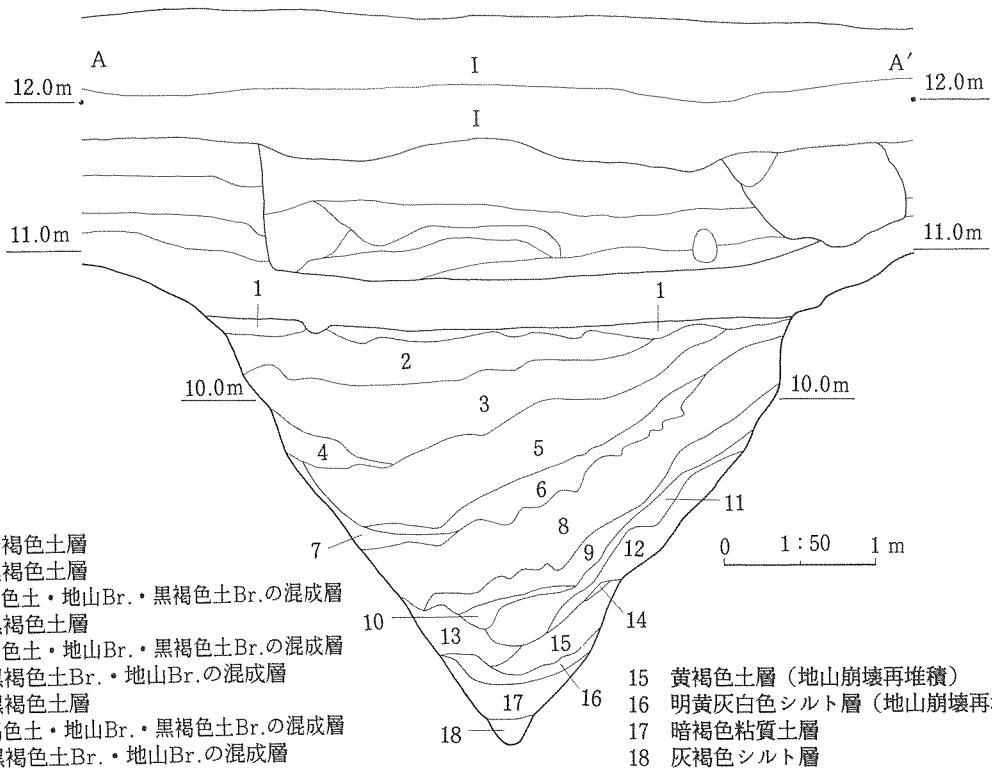


写真5 SD01

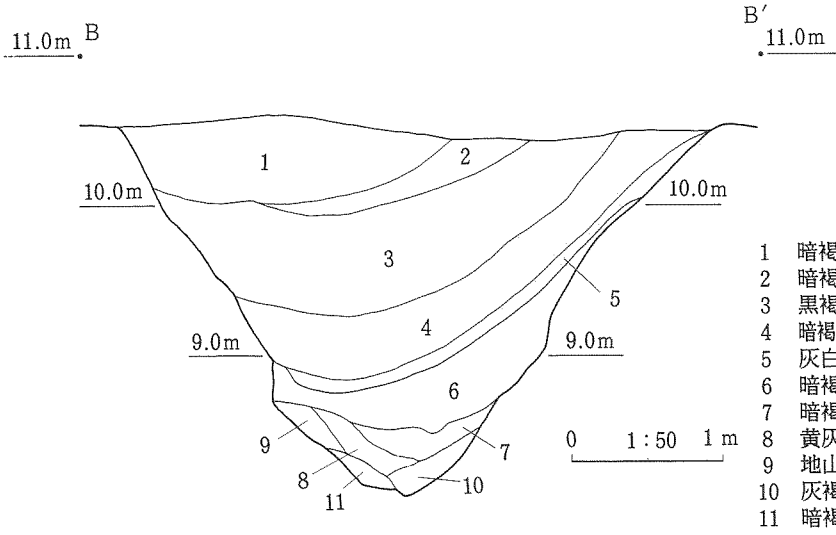
SD01出土遺物

今回の調査で最も多量の遺物が出土している。遺物の出土は調査範囲全体にわたっているが、総出土量2,505点(79.60個体)のうち60.5%(55.2%)にあたる1,515点(43.95個体)が2I・2Jグリッドに集中している。出土遺物の内訳は瀬戸美濃陶器301点/19.90個体(播鉢58/1.50、天目茶碗41/4.05、小皿類85/12.80、その他105/1.55)、常滑陶器58点/0.50個体(壺・甕55/0.40、鉢3/0.10)、尾張系山茶碗59点/1.30個体(碗46/0.70、小皿5/0.60、その他8/0)、東濃系山茶碗29点/0.60個体(碗25/0.45、小皿3/0.15、陶丸1)、青磁1点/0個体(碗)、青花磁器7点/0.30個体(碗5/0.15、皿2/0.15)土師器皿226点/34.10個体(大皿II a 0.05、大皿II c 2.30、大皿II d 0.70、中皿I a 0.05、中皿I b 0.15、中皿II c 0.70、小皿I a 27.80、小皿I b 2.20、小皿I c 0.50)、土師器鍋1,758点/22.85個体(鍋B・C 16.60、羽釜B 3.10、茶釜A・B 3.15)、瓦器1点/0.05個体(風炉もしくは火鉢)、いぶし瓦46点、鉄釘4点、銅銭1点(元祐通寶)、砥石1点、石硯3点、石臼5点(2個体)、火打石4点、スラグ1点である。

口縁部残存率法による瀬戸美濃陶器の時期別内訳(個体数)は、播鉢で大窯第1段階0.20、大窯第2段階0.65、大窯第3段階0.40、大窯第5段階0.05、天目茶碗で古瀬戸後4期0.05、大窯第1段階1.10、大窯第2段階1.25、大窯第3段階0.75、大窯第4段階0.35、大窯第5段階0.55である。全体にかなり時期的なばらつきがみられるが、大窯第3段階以降の遺物は2I・2Jグリッドに集中しており、SD01埋没後この部分に別の遺構が掘り込まれていた可能性も否定できない。但し、調査時の土層観察からは、特にそうした状況は看取されなかった。

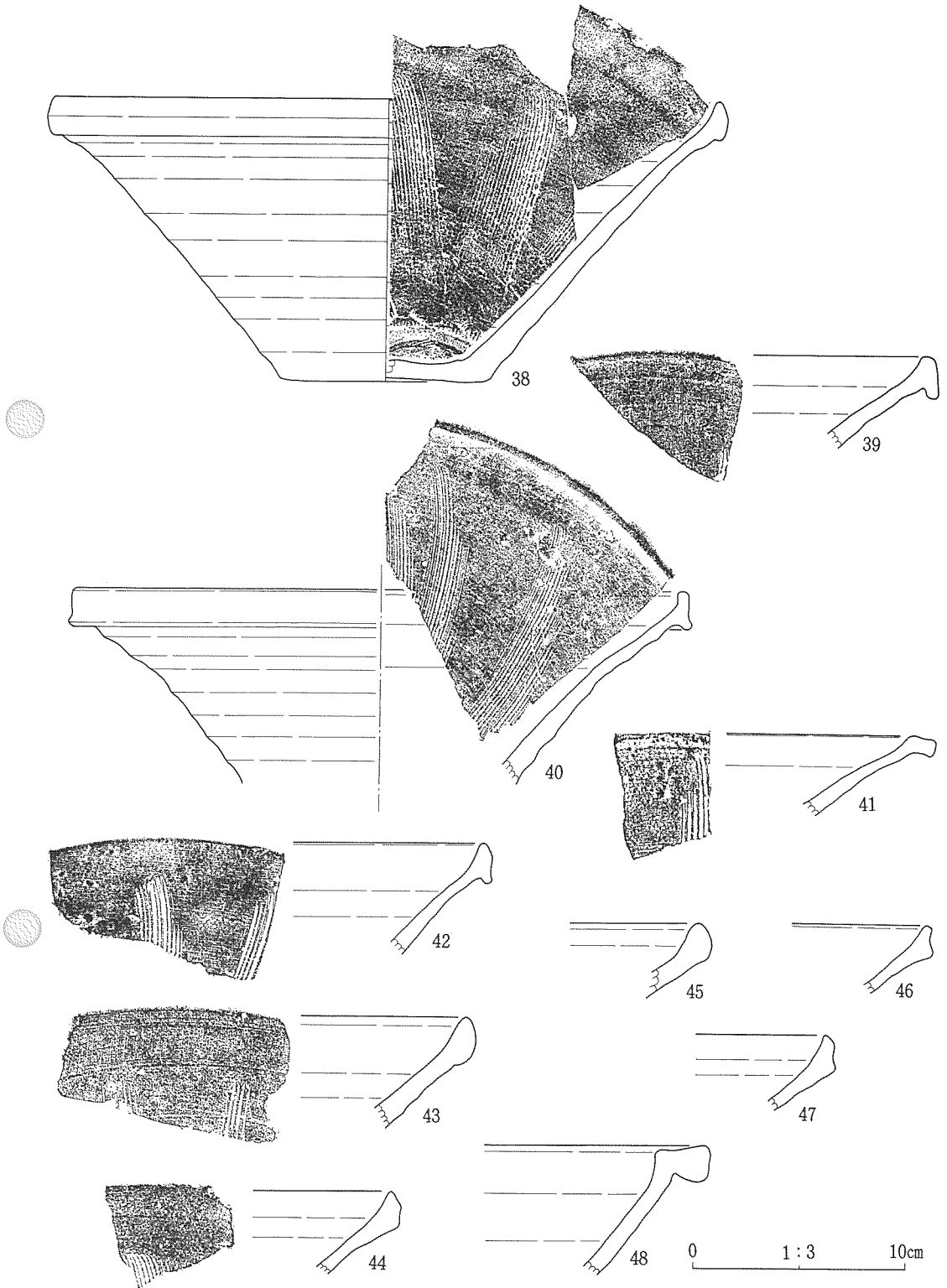


- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土層 | 15 黄褐色土層 (地山崩壊再堆積) |
| 2 黒褐色土層 | 16 明黄灰白色シルト層 (地山崩壊再堆積) |
| 3 褐色土・地山Br.・黒褐色土Br.の混成層 | 17 暗褐色粘質土層 |
| 4 黒褐色土層 | 18 灰褐色シルト層 |
| 5 褐色土・地山Br.・黒褐色土Br.の混成層 | |
| 6 黒褐色土Br.・地山Br.の混成層 | |
| 7 黒褐色土層 | |
| 8 褐色土・地山Br.・黒褐色土Br.の混成層 | |
| 9 黒褐色土Br.・地山Br.の混成層 | |
| 10 褐色土層 | |
| 11 黒褐色土層 | |
| 12 黄灰褐色砂質土層 | |
| 13 暗褐色土層 (地山Br.多混) | |
| 14 暗褐色粘質土層 | |

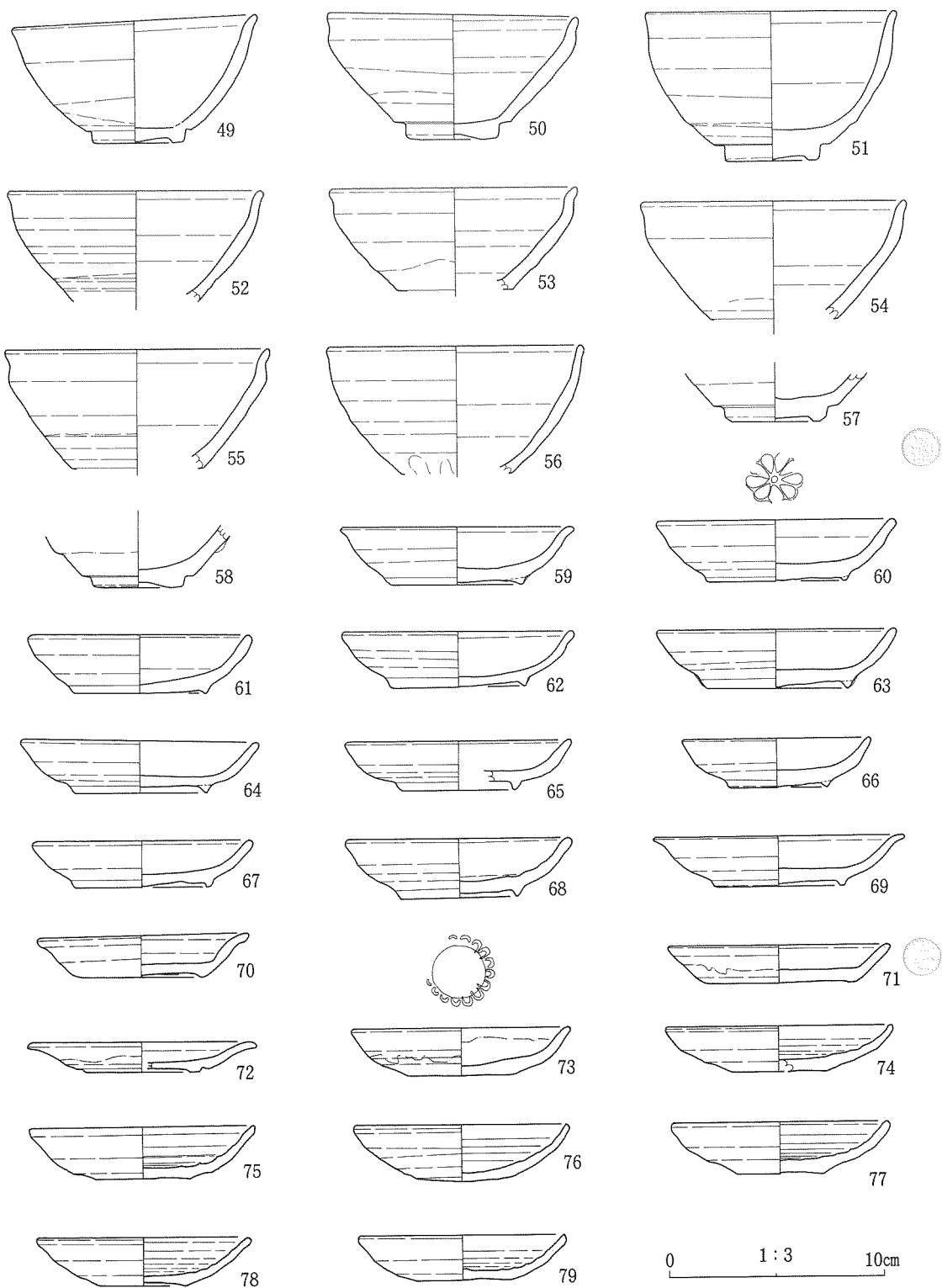


- | |
|--------------------------|
| 1 暗褐色土層 |
| 2 暗褐色土層 (地山粒子多混) |
| 3 黒褐色土層 |
| 4 暗褐色土・灰白色砂Br.・地山Br.の混成層 |
| 5 灰白色砂Br.・地山Br.の混成層 |
| 6 暗褐色粘質土層 |
| 7 暗褐色砂質土層 |
| 8 黄灰褐色砂質土層 |
| 9 地山崩壊再堆積 |
| 10 灰褐色砂質土層 |
| 11 暗褐色砂質土層 |

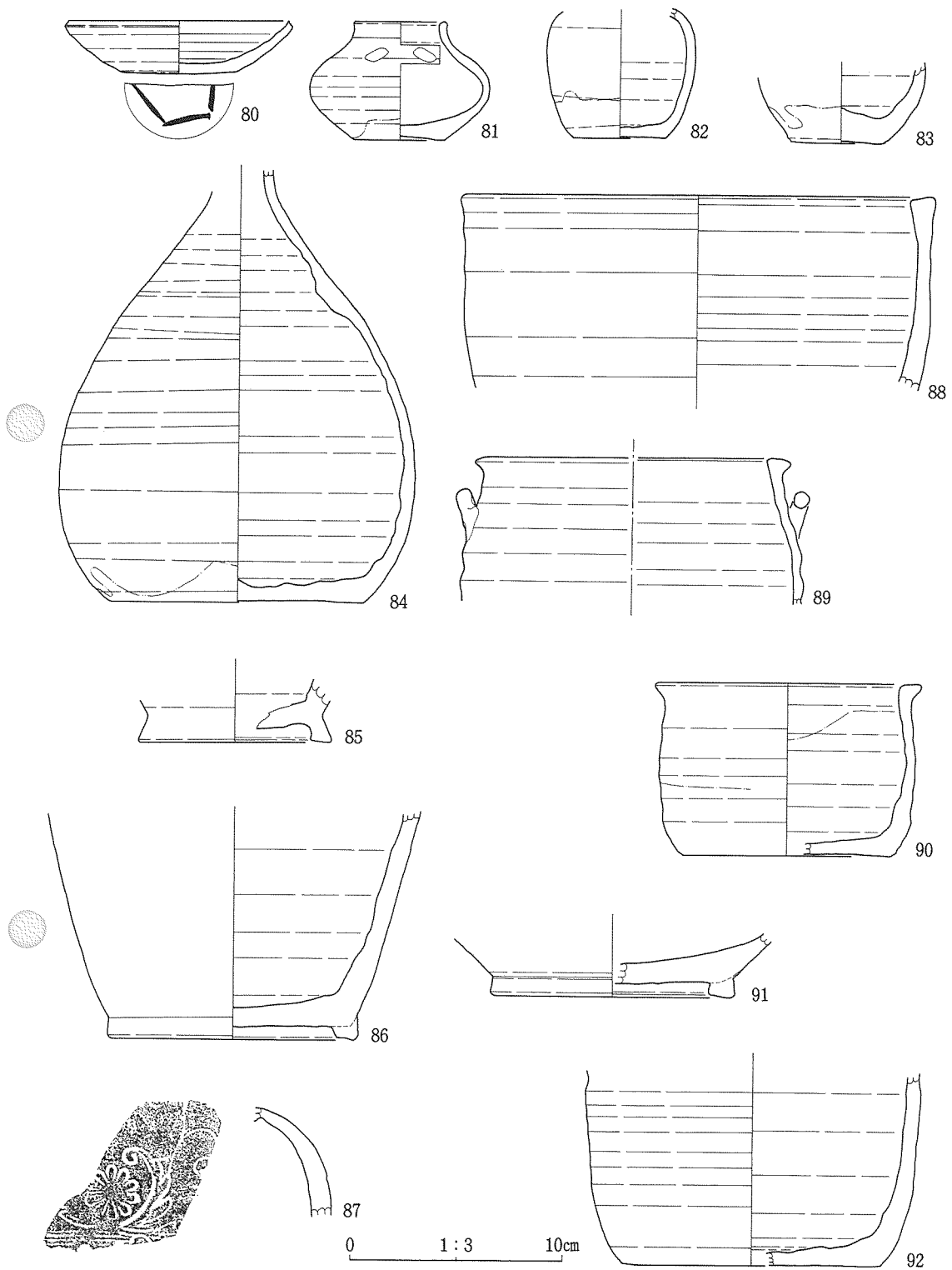
第13図 S D01土層断面図



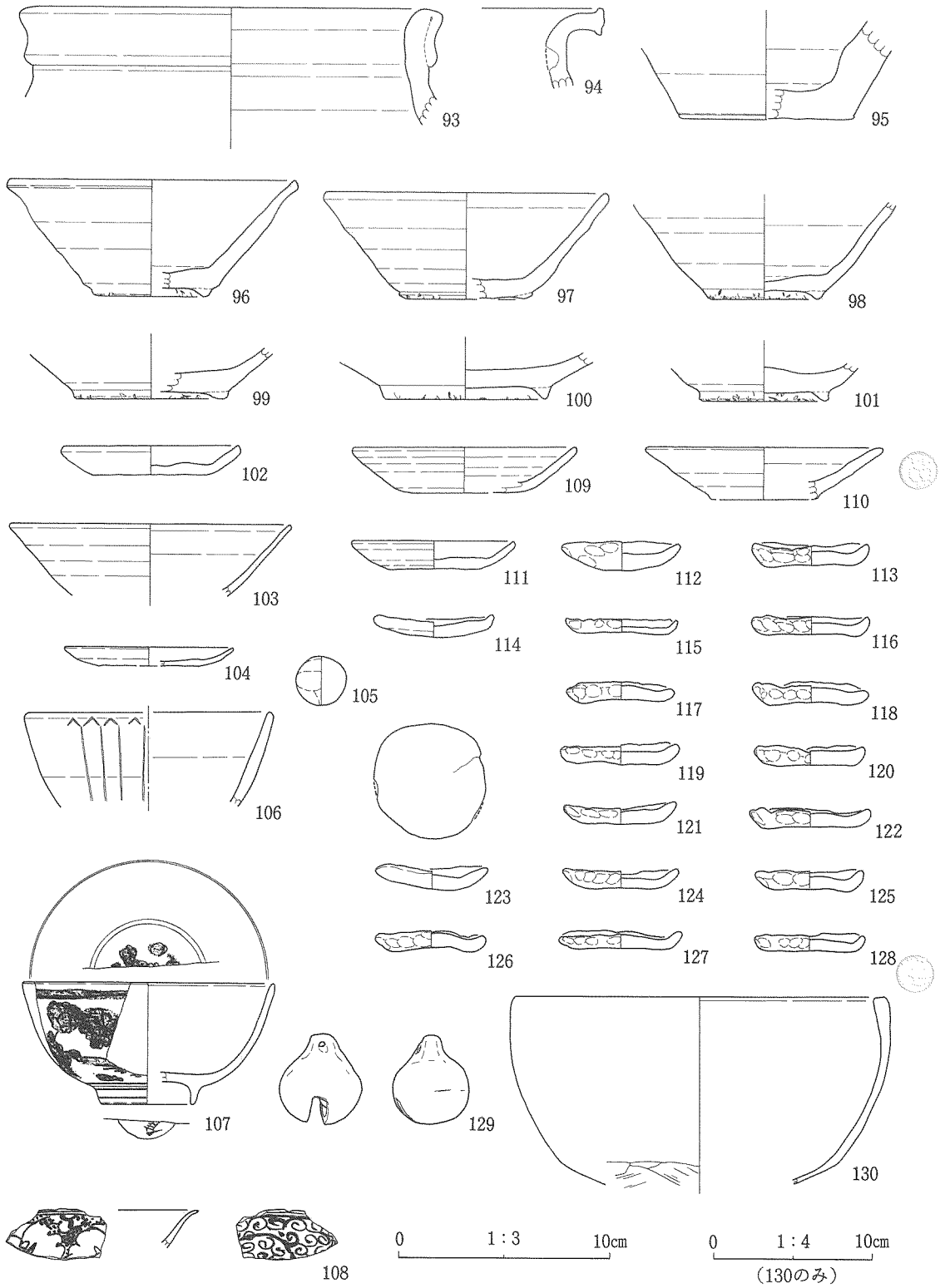
第14図 S D01出土遺物実測図(1)



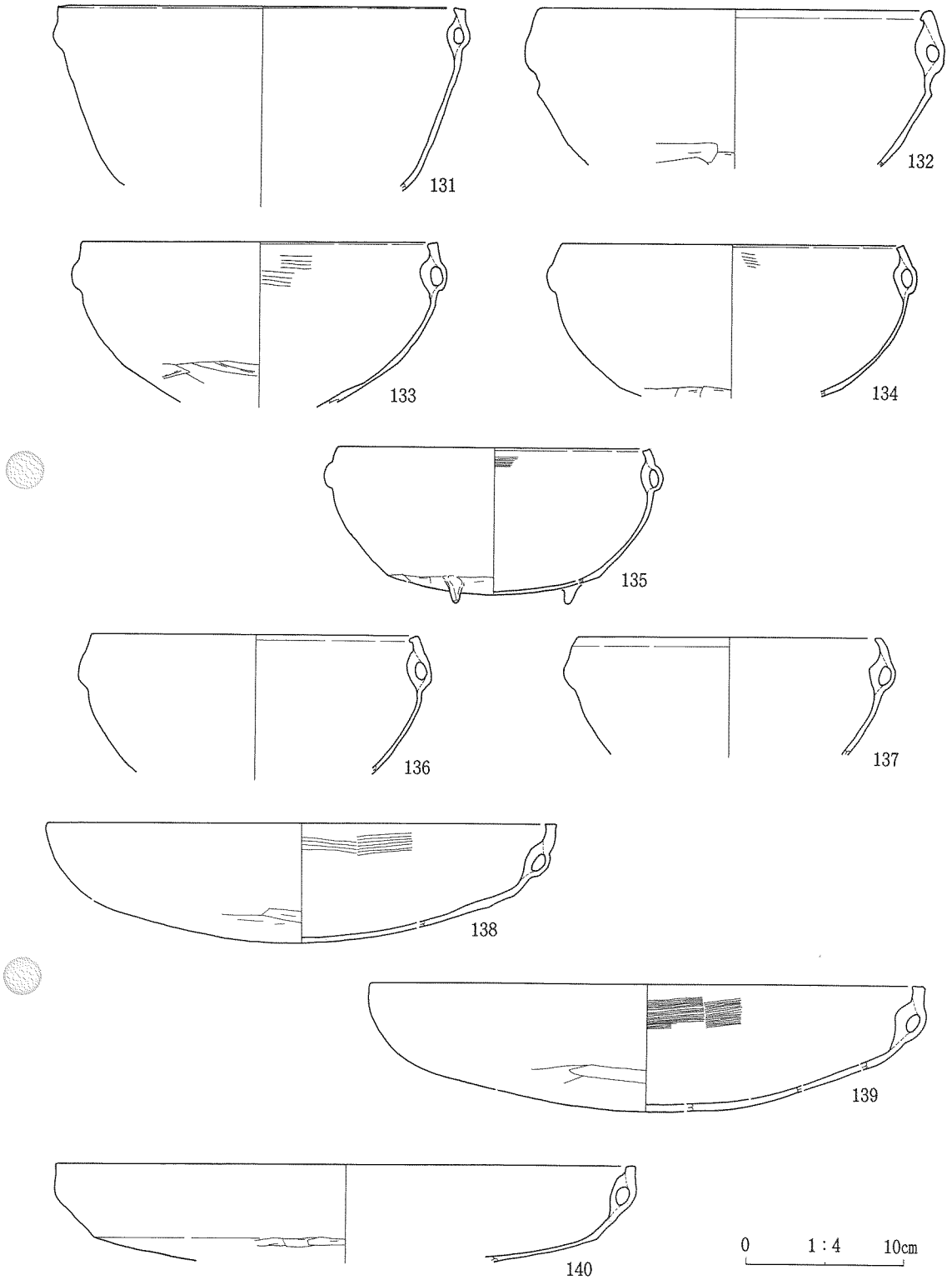
第15图 SD01出土遺物実測図(2)



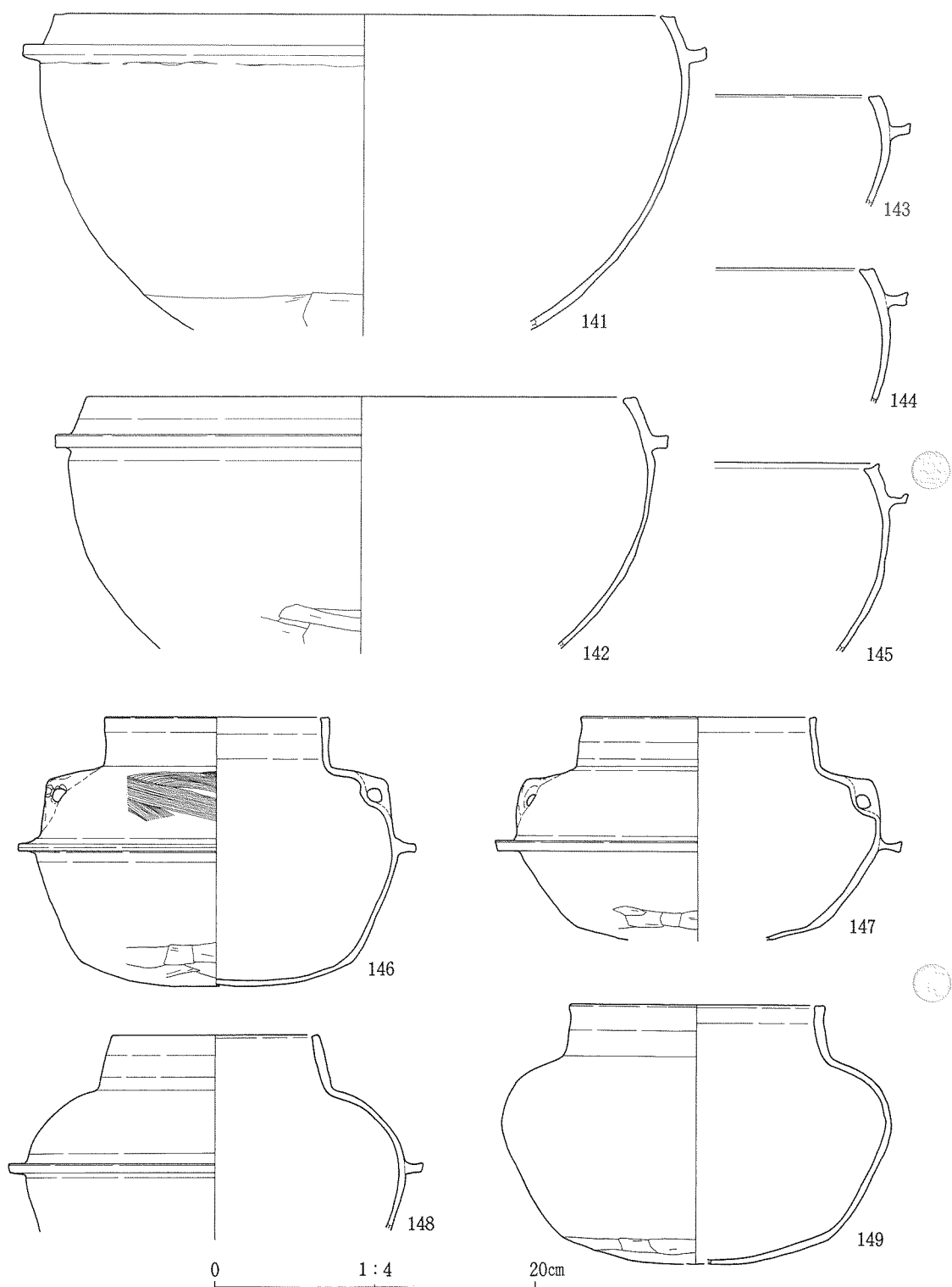
第16图 S D01出土遺物実測図(3)



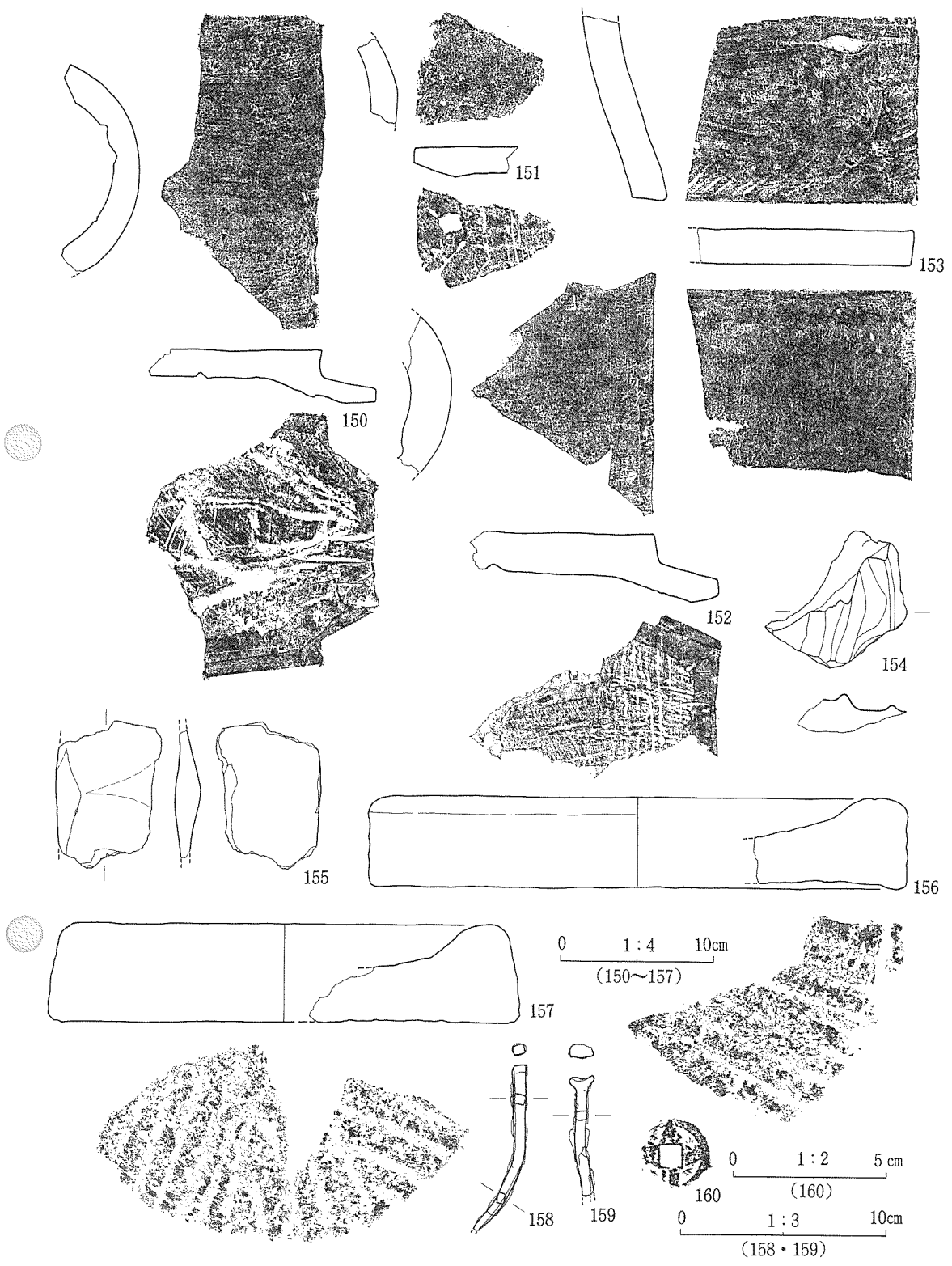
第17図 SD01出土遺物実測図(4)



第18图 S D01出土遺物実測図(5)



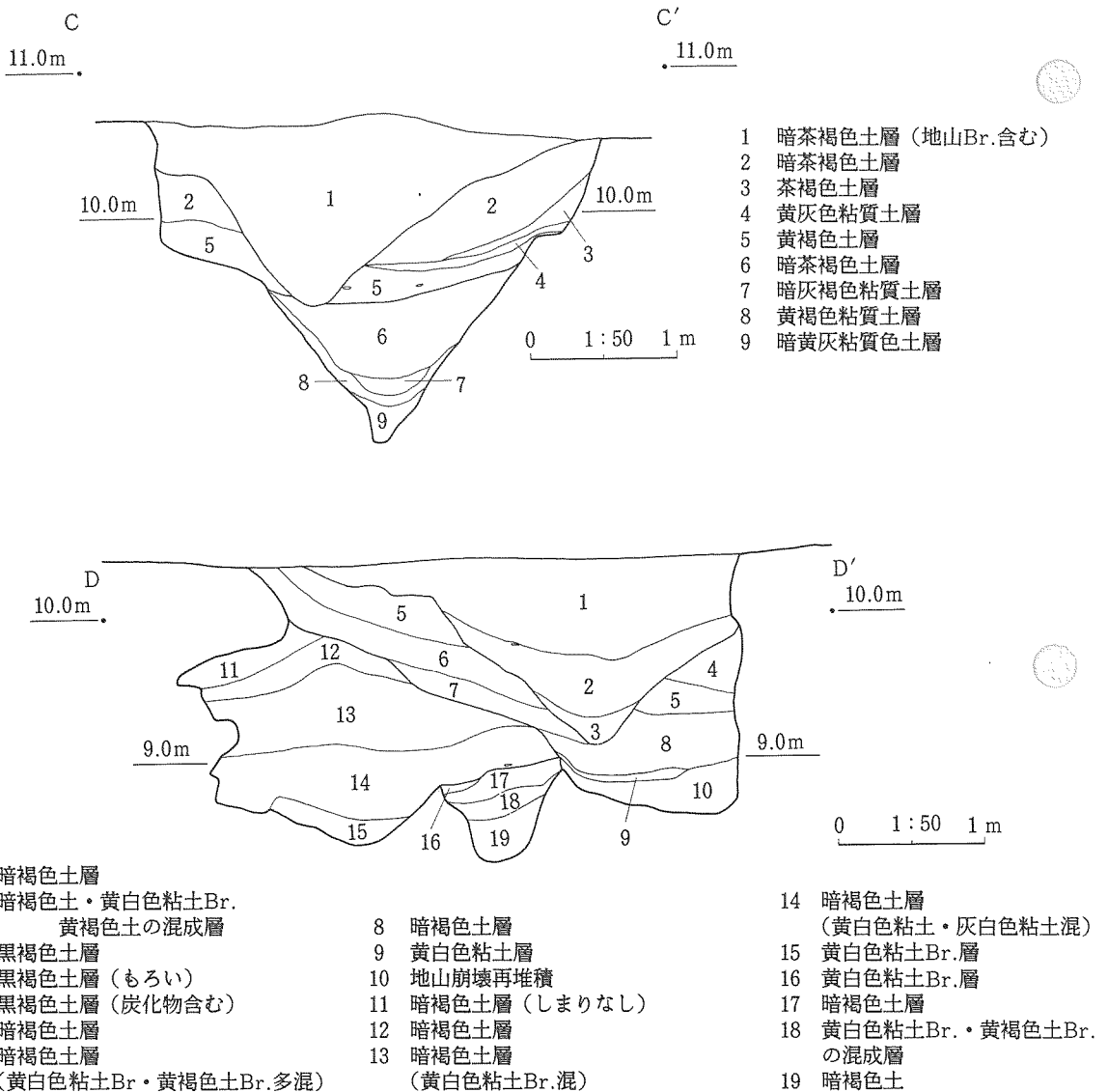
第19図 S D01出土遺物実測図(6)



第20図 S D01出土遺物実測図 (7)

S D 02

S D 02は幅約3 m、深さ約2.5mの断面V字形を呈する薬研堀。溝の主軸方位はN-65°-Wで、S D 01とはほぼ直交する。掘り返しの形跡が認められ、土層断面の観察結果から、①幅約3 m、深さ約2.5mの断面V字形の溝が掘削されるが、S D 01とは接続せず、両者の間に幅8 mほどの土橋が存在した段階（S D 02古：C-C'断面の6～9層、D-D'断面の16～19層）→②S D 02古の埋没後、S K 14・18・19・20が相次いで掘削された段階（C-C'断面の2～5層、D-D'断面の4～15層）→③幅約3 m、深さ約1.3mの断面V字形の溝が再掘削され、S D 01と接続した段階（S D 02新：C-C'断面の1層、D-D'断面の1～3層）という3段階の変遷をたどったと考えられる。



第21図 S D 02土層断面図

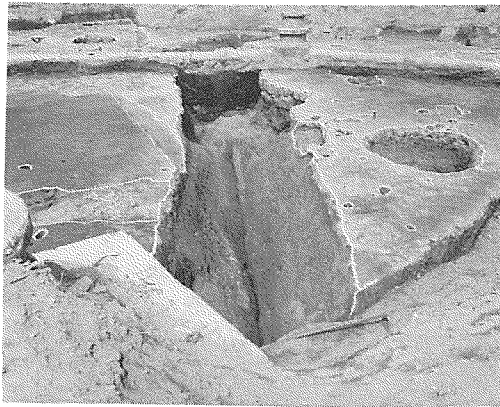


写真6 SD02

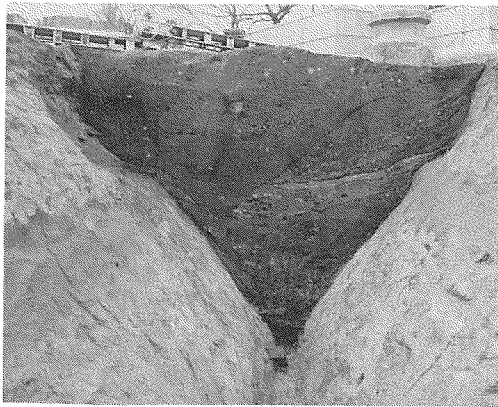
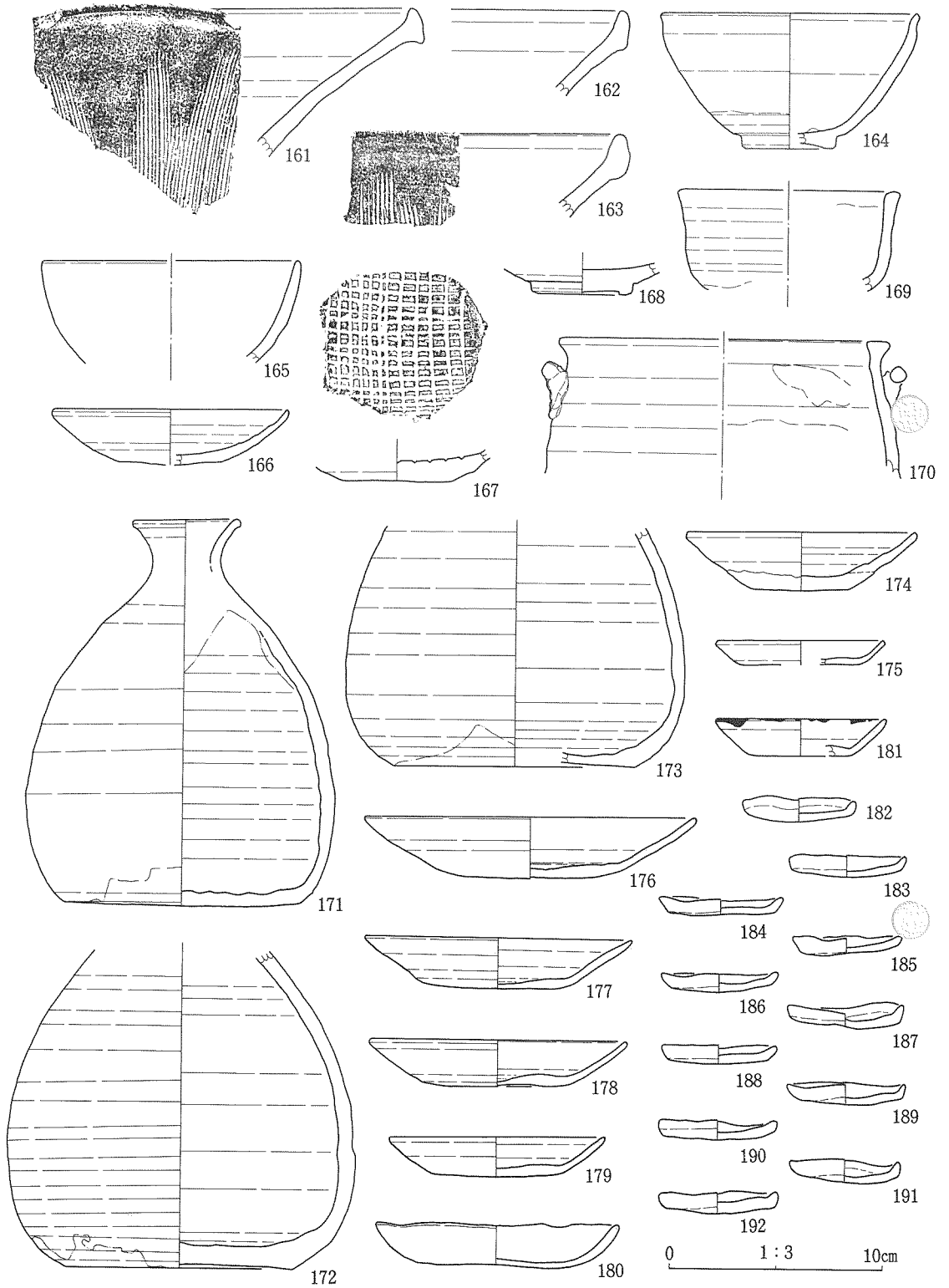


写真7 SD02

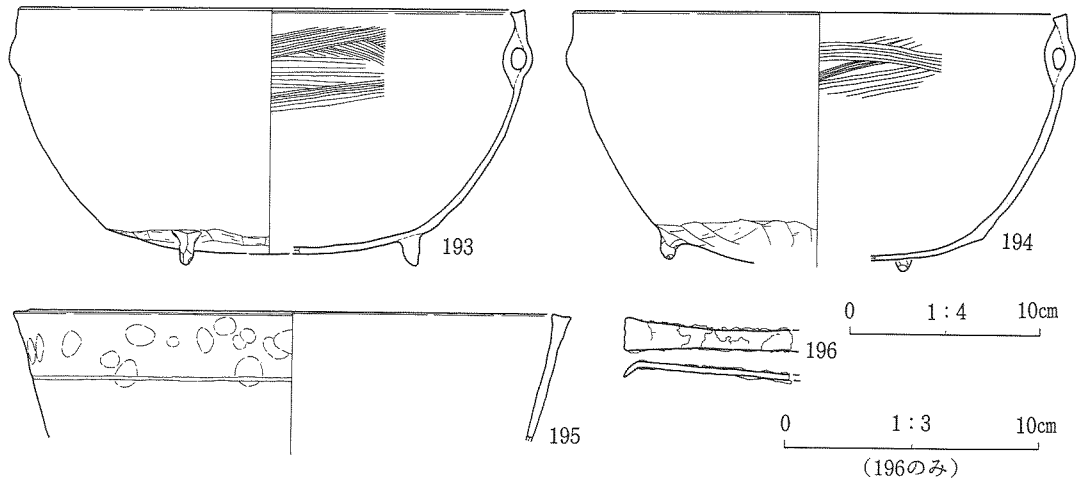
SD02出土遺物

926点／37.50個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器86点／2.75個体（搦鉢12／0.25、天目茶碗9／0.30、小皿類15／0.90、その他51／1.45）、常滑陶器8点／0.05個体（壺・甕7／0、鉢1／0.05）、尾張系山茶碗33点／0.70個体（碗28／0.45、小皿3／0.25、鉢2／0）、東濃系山茶碗9点／0.65個体（碗7／0.35、小皿2／0.30）、土師器皿492点／27.40個体（特大皿Ⅱ0.40、大皿Ⅰd0.65、大皿Ⅱa0.15、大皿Ⅱc3.15、中皿Ⅱc0.30、小皿Ⅰa22.45、小皿Ⅰb0.30）、土師器鍋293点／5.95個体（鍋B・C5.95個体）、産地不明陶器1点／0個体、いぶし瓦1点、鉄釘1点、鉄製毛抜1点、銅銭1点（銭種不明）である。

口縁部残存率法による時期別内訳（個体数）は、瀬戸美濃陶器の搦鉢で古瀬戸後4期0.05、大窯第2段階0.25、天目茶碗で古瀬戸後4期0.15、大窯第1段階0.10である。出土遺物のすべてを層位対応で取り上げていないが、判明分のみでみる限り、SD02古・新の両者に大窯第2段階の遺物が含まれており、目立った型式差は認められない。したがって、①段階から③段階へは短時間（大窯第2段階）のうちに推移していた可能性が高い。



第22図 S D02出土遺物実測図(1)



第23図 S D02出土遺物実測図（2）

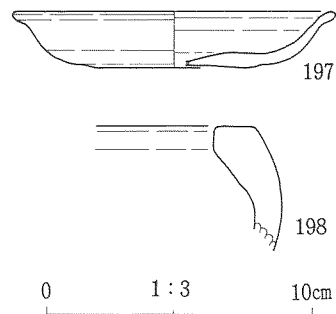
S D03・06

幅、深さとも約0.4mの断面U字形の溝。埋土はいずれも暗褐色土を主体としている。溝の主軸方向はS D03がN-69°-W、S D06がN-21°-Eで、直角の位置関係にあり、交点付近を大溝S D01に切られている。このためS D03とS D06の時期的な前後関係については断定できないが、規模・位置関係からみて同時期のものである可能性が高い。

S D03・06出土遺物

両遺構合わせて37点/0.60個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器3点/0.05個体（播鉢1/0、その他2/0.05）、常滑陶器4点/0個体（壺・甕）、尾張系山茶碗5点/0個体（碗4/0、小皿1/0）、東濃系山茶碗2点/0.05個体（碗1/0.05、小皿1/0）、土師器皿16点/0.40個体（大皿Ⅱa 0.35、大皿Ⅱc 0.05）、土師器鍋6点/0.05（鍋B・C 0.05）、瓦器1点/0.05個体（風炉・火鉢）である。

出土遺物量は少ないが、瀬戸美濃陶器はすべて古瀬戸後期のもので、大窯製品はまったく含まれていない。これは遺構の切りあい関係からみたS D03・06→S D01という遺構の変遷とも矛盾しない。



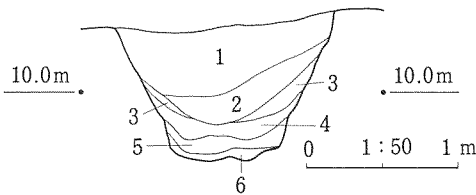
第24図 S D03出土遺物実測図

S D 19

幅約1.5m、深さ約0.9m、の断面逆台形の溝。溝の主軸方位は、他の中世遺構が東西あるいは南北方向から20°前後傾いた方向性を示している中で、唯一東西方向に掘削されている。また、弥生時代の溝S D 18（方形周溝墓S X 01の東溝）、江戸時代の井戸S E 07と切り合い関係にあり、埋土の状態から時間的な前後関係は、S D 18→S D 19→S E 07の順と判断された。



写真8 S D 19



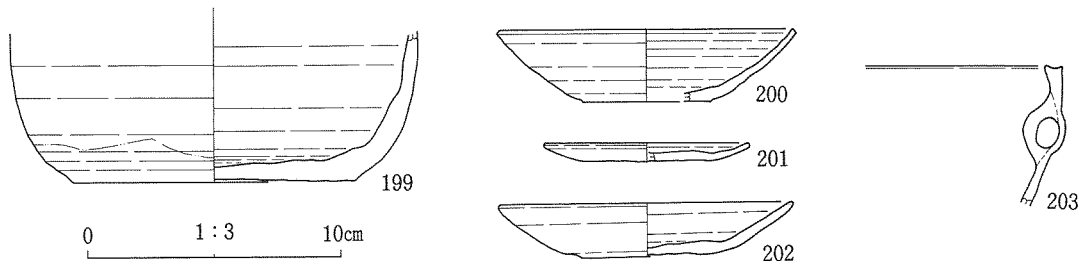
- 1 暗褐色土層（灰茶色土Br.混）
- 2 暗茶褐色土層
- 3 明茶褐色土層（地山Br.混）
- 4 灰茶褐色粘土層
- 5 暗黄褐色土層
- 6 黄褐色粘質土層

第25図 S D 19土層断面図

S D 19出土遺物

40点／1.15個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器13点／0個体（播鉢1、小皿類2、その他10）、常滑陶器1点／0個体（壺・甕）、尾張系山茶碗2点／0.10個体（碗1／0、小皿1／0.10、東濃系山茶碗7点／0.65個体（碗6／0.50、小皿1／0.15）、土師器皿16点／0.35個体（大皿Ⅱb 3.15）、土師器鍋1点／0.05個体（鍋B・C 0.05）である。

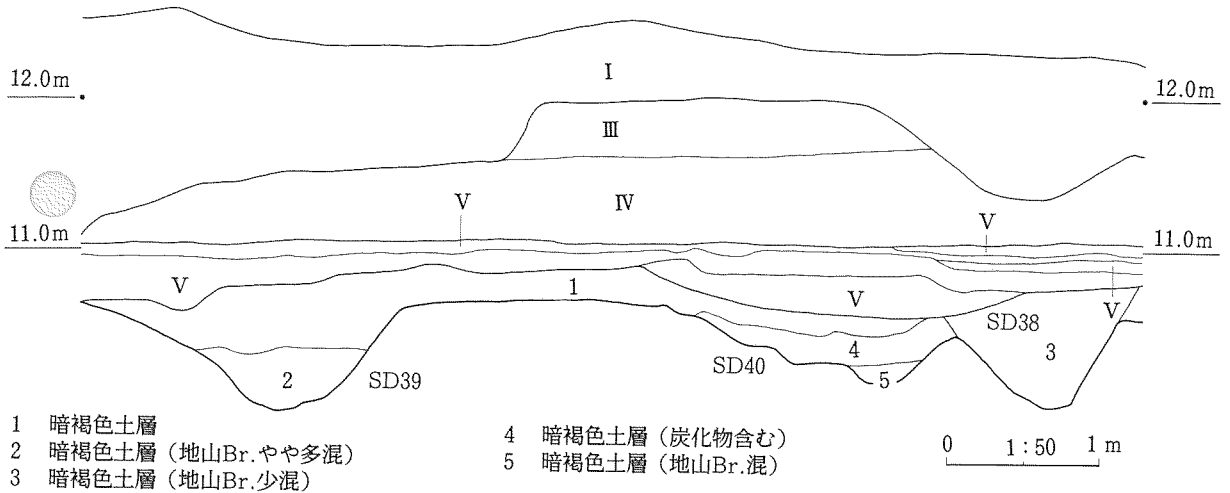
瀬戸美濃陶器には、確実に古瀬戸後期に属するもの（折縁深皿・直縁大皿）があるが、明確な大窯製品はない。土師器皿の型式（大皿Ⅱb）が共通することから考えて、後述するS K 10とほぼ同時期かと推定される。



第26図 S D 19出土遺物実測図

S D39・40

調査区域内ではごく僅かな部分を検出したに過ぎないため、遺構の全体像を掴みきれないが、S D39は幅約1m、深さ0.7m、S D40は幅約1.5m、深さ0.5mほどの溝で、共にN-21°-Eの方向性を有する。遺構埋土が共通していることから、同時期の遺構である可能性が高い。



第27図 S D38・39・40土層断面図

S D39・40出土遺物

S D39からは、東濃系山茶碗1点/0.15個体(碗)が出土しているに過ぎない。S D40も出土遺物は少なく、瀬戸美濃陶器3点/0.05個体(小皿類1/0.05、その他2/0)、尾張系山茶碗6点/0.10個体(碗のみ)、東濃系山茶碗1点/0.20個体(碗)、土師器鍋1点/0個体、砥石1点の合計13点で、いずれも小片である。

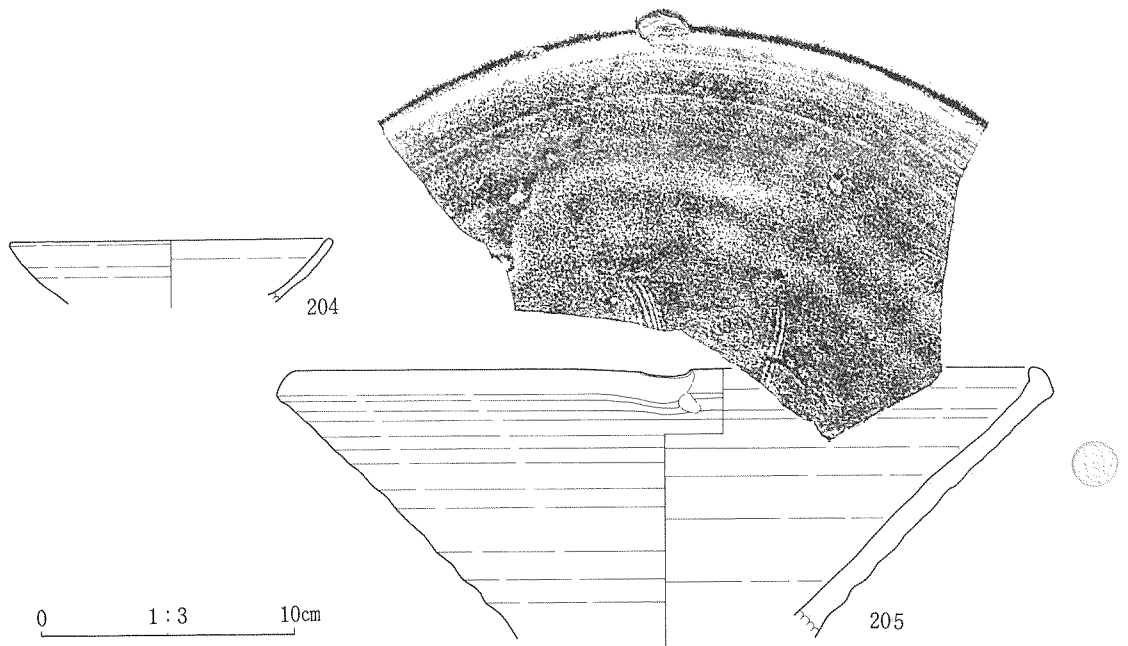
数少ない遺物から遺構の時期を特定することは困難であるが、瀬戸美濃陶器の中には大窯製品(大窯第1段階)の端反皿が含まれている。

S D43

長さ2.2m、幅0.7m、深さ0.25mの溝。後述のS D44にほぼ平行する。埋土は黒褐色土で、溝底面は凹凸が激しい。

S D43出土遺物

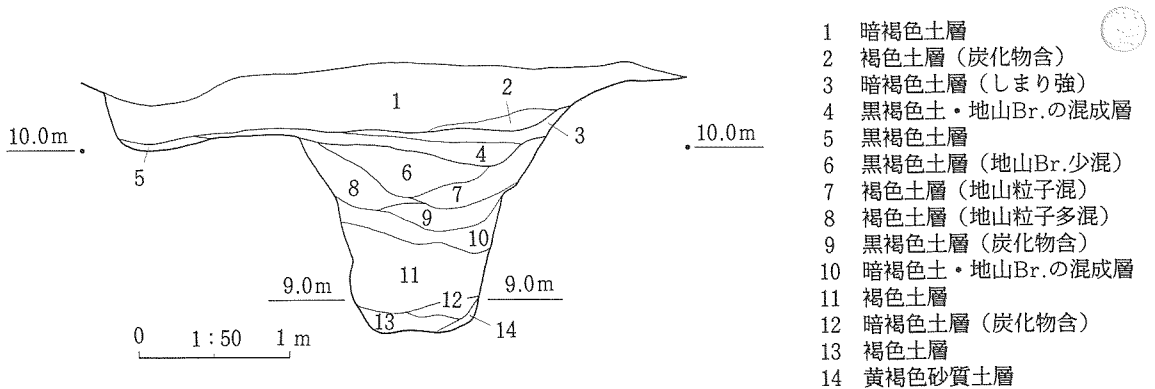
瀬戸美濃陶器の播鉢1点/0.25個体と大皿1点/0個体が出土しているに過ぎない。2点とも古瀬戸後期(播鉢は後4期)のものである。



第28図 S D39・43出土遺物実測図

S D44

当初、幅・深さ共に約1.6mの断面逆台形の溝（S D44A：6～14層）であったが、改削されて、幅約3m、深さ0.5mほどの溝（S D44B：1～5層）に造り替えられている。溝の主軸方位はN-67°-Wで、改削前後で変化はない。S D44Bは、溝底に突き固められた形跡のある薄い硬化層（3層）が認められることから、道路的な性格の遺構と推定される。近世の溝S D25・27・42・61と切り合い関係を有し、時間的前後関係はS D44A→S D44B→S D25・27・42・61である。



第29図 S D44土層断面図



写真9 SD44



写真10 SD44

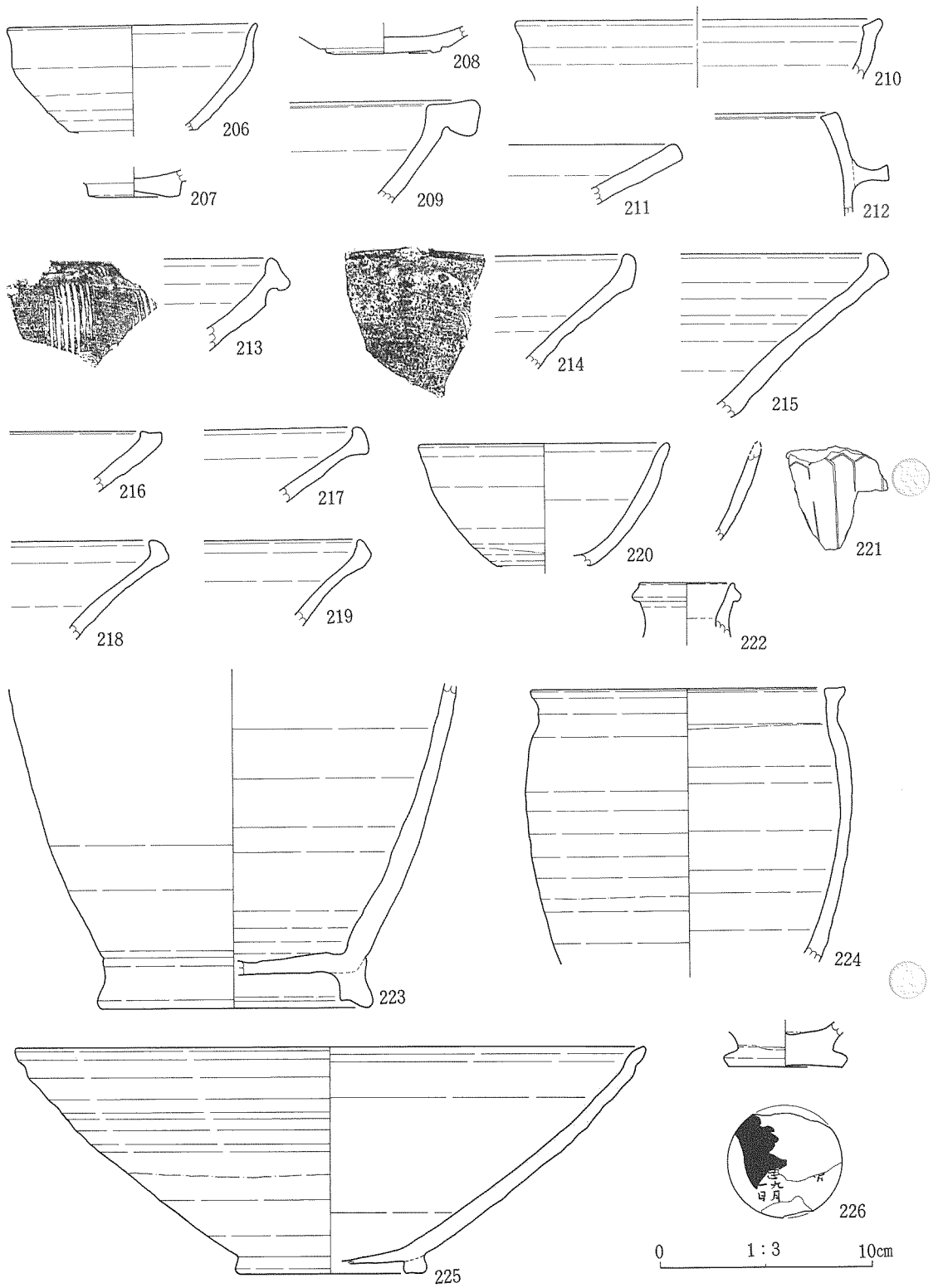
S D44出土遺物

総数608点／21.50個体で、内訳は、瀬戸美濃陶器196点／4.60個体（播鉢27／0.60、天目茶碗12／0.90、小皿類21／0.65、その他135／2.45）、常滑陶器46点／0.15個体（壺・甕41／0.10、鉢5／0.05）、尾張系山茶碗24点／0.40個体（碗19／0.30、小皿2／0.05、鉢2／0.05、陶丸1）、東濃系山茶碗47点／1.15個体（碗38／1.10、小皿9／0.05）、青磁2点／0個体（碗1、皿1）、青花磁器1点／0.10個体（碗）、土師器皿100点／12.55個体（大皿Ⅱ a 0.55、大皿Ⅱ c 0.60、中皿Ⅱ a 0.70、小皿Ⅰ a 10.60）、土師器鍋188点／2.50個体（鍋B・C 2.10、羽釜A 0.05、羽釜B 0.15、茶釜A・B 0.20）、土鈴1点、いぶし瓦1点、石製五輪塔2点（空・風輪1、火輪1）である。このうち、118点／2.05個体がS D44Aから、246点／5.15個体がS D44Bから出土しており、残り244点／14.30個体については帰属層位が明確でなく、S D44A・Bのいずれに伴うものか判らない。

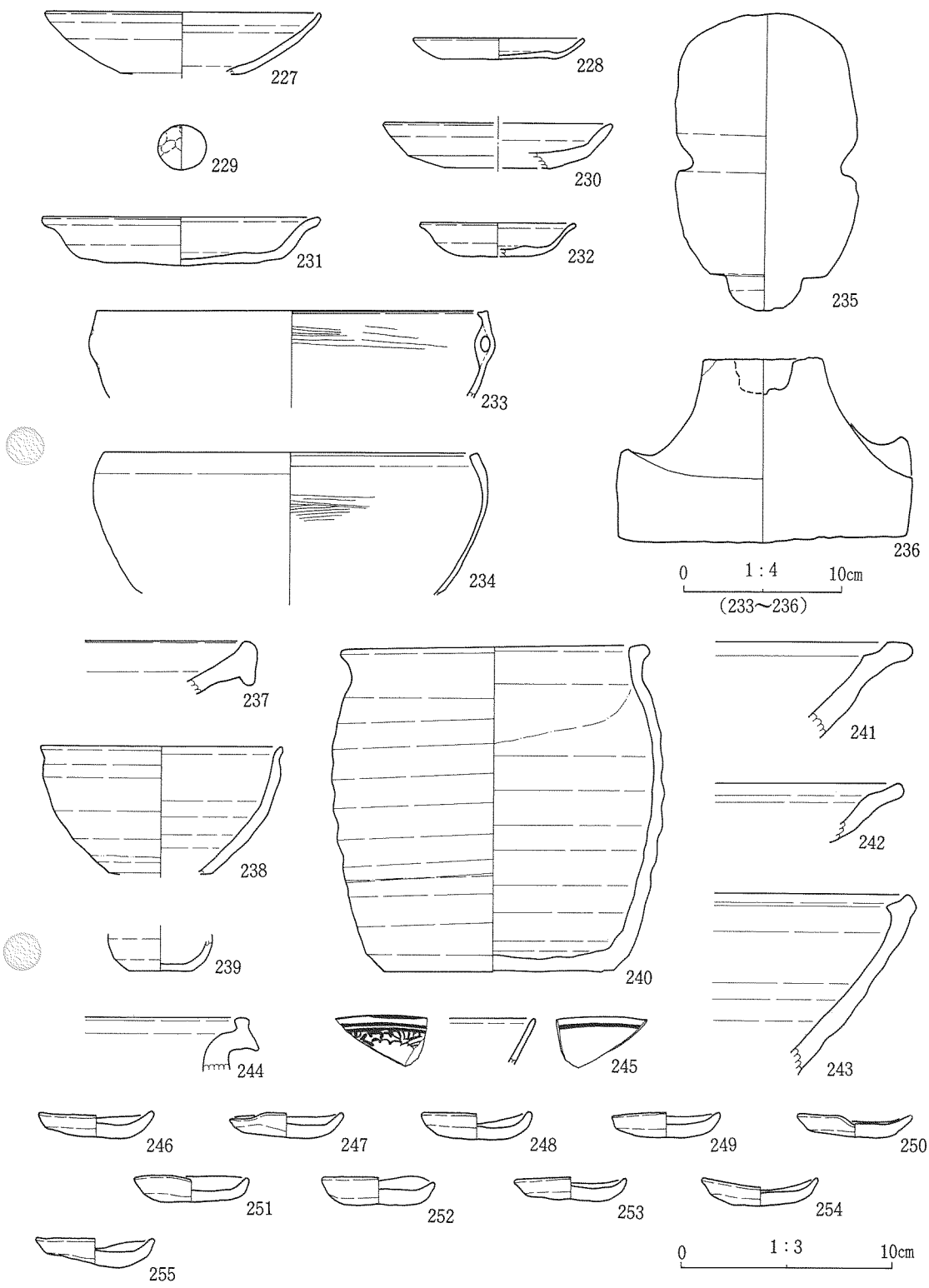
S D44A出土の118点の内訳は、瀬戸美濃陶器47点／1.10個体（播鉢5／0.05、天目茶碗5／0.25、小皿類14／0.45、その他23／0.35）、常滑陶器6点／0個体（壺・甕5、鉢1）、尾張系山茶碗5点／0.10個体（碗3／0.10、小皿1／0、鉢1／0）、東濃系山茶碗16点／0.20個体（碗12／0.15、小皿4／0.05）、青磁1点／0個体（碗）、土師器皿12点／0個体（大皿Ⅱ c 0.025未満）、土師器鍋31点／0.65個体（鍋B・C 0.40、羽釜B 0.15、茶釜A・B 0.10）である。

S D44B出土の246点の内訳は、瀬戸美濃陶器67点／1.55個体（播鉢9／0.45、天目茶碗2／0.25、小皿類2／0.05、その他54／0.80）、常滑陶器18点／0.05個体（壺・甕11／0.05、鉢1／0）、尾張系山茶碗7点／0個体（碗6、陶丸1）、東濃系山茶碗12点／0.65個体（碗11／0.60、小皿1／0.05）、青磁1点／0.05個体（皿）、土師器皿19点／1.50個体（大皿Ⅱ a 0.55、大皿Ⅱ c 0.05、中皿Ⅱ a 0.70、小皿Ⅰ a 0.20）、土師器鍋120点／1.35個体（鍋B・C 1.35）である。

S D44Aでは、出土瀬戸美濃陶器のうち31.9%（15点）が確実な大窯製品で、大窯第2段階までのものがみられるのに対して、S D44Bでは大窯製品は7.5%（5点）と少なく、时期的にも大窯第1段階までのものしか認められない。したがって、S D44AからS D44Bへの改削が行なわれたのは大窯第1段階のことと考えられる。



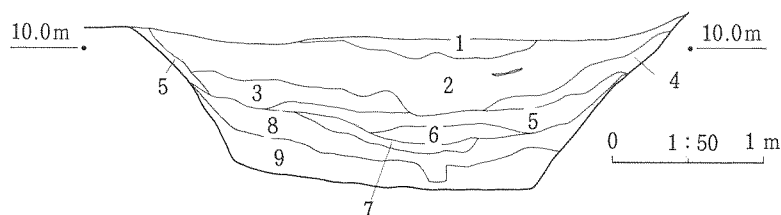
第30图 SD44出土遺物実測図(1)



第31图 SD44出土遺物実測図(2)

SD46

幅3.5m、深さ約1mの断面逆台形の溝。主軸方位はN-26°-Eで、SD44とほぼ直交する。SD44との切り合いについては明確でないが、平面プランで観察した限り、SD44Aとの間に時間的前後関係は認められず、ほぼ同時期の遺構である可能性が高い。また、溝底に滞水していた形跡は認められない。



- | | | |
|-----------------|-------------------|---------------------|
| 1 暗褐色土層 | 4 黒褐色土層（褐色砂質土混） | 7 黒褐色土層 |
| 2 暗褐色土層（しまりやや弱） | 5 褐色土層 | 8 褐色砂質土層 |
| 3 黒褐色土層 | 6 褐色砂質土・地山Br.の混成層 | 9 暗黄褐色砂質土層（地山崩壊再堆積） |

第32図 SD46土層断面図



写真11 SD46

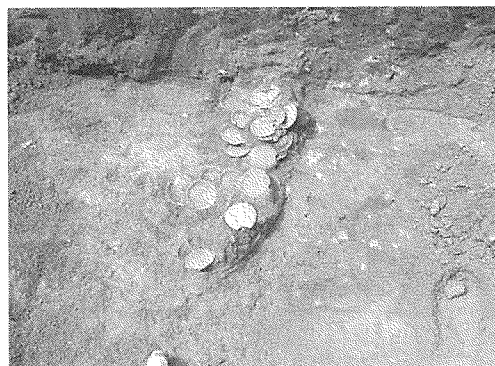
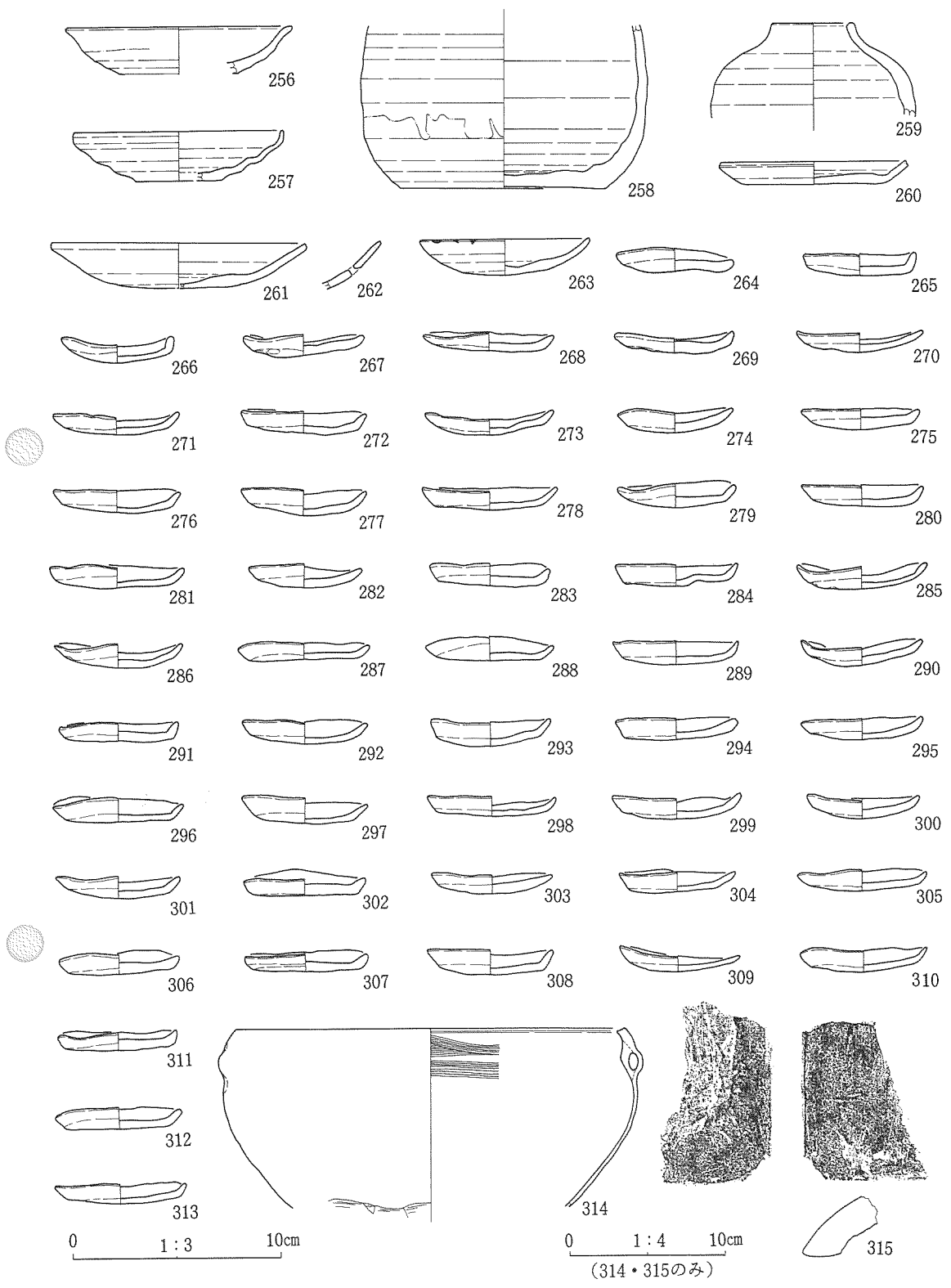


写真12 SD46土師器皿出土状況

SD46出土遺物

449点/96.50個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器13点/0.60個体（搦鉢5/0、小皿類3/0.35、その他5/0.25）、常滑陶器4点/0個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗7点/0.15個体（碗4/0.10、鉢3/0.05）、東濃系山茶碗8点/0.45個体（碗6/0.20、小皿2/0.25）、土師器皿357点/94.35個体（大皿Ⅱc0.55、中皿Ⅱc0.95、小皿Ⅰa92.85）、土師器鍋59点/0.95個体（鍋B・C0.85、羽釜A0.10）、いぶし瓦1点である。

SD46出土遺物は、土師器皿の多さに特徴があり、357点のうち96.1%にあたる343点が120・12Pグリッドから集中的に出土している。土師器皿の中には瀬戸美濃陶器の徳利の中に入れていたものもあり、大皿・中皿・小皿がそれぞれ単一の型式のもののみで構成されていることからみて、一括して入手・使用・廃棄されたものである可能性が高い。



第33図 S D46出土遺物実測図

S D47・50・52・54

幅1～2.2m、深さ約0.2mの溝。主軸方位はS D47がN-69°-W、S D50がN-64°-W、S D52がN-15°-E、S D54がN-33°-Eで、相互にはほぼ平行ないし直交する関係にある。埋土は、いずれも地山の小ブロック（φ5～10mm）を僅かに含む暗褐色土の単一層。切り合い関係は確認できず、近接した時期の遺構と考えられる。なお、S D50は7Kグリッド以東では、S D48が重複して掘り込まれており、S D50→S D48の新旧関係にある。

S D47・50・52・54出土遺物

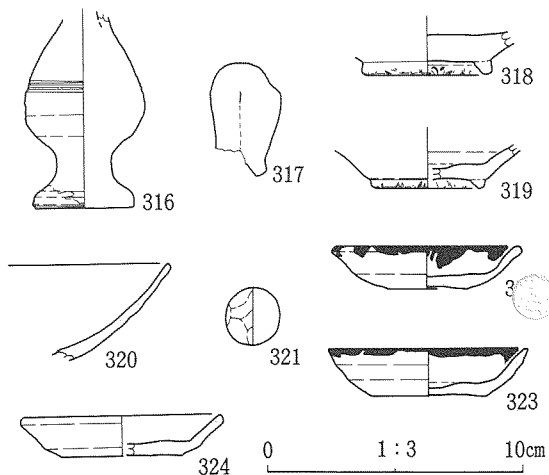
S D47からは、45点/0.80個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器5点/0個体（花瓶1、その他4）、常滑陶器2点/0.05個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗20点/0.25個体（碗19/0.25、小碗1/0）、東濃系山茶碗15点/0.50個体（碗11/0.35、小皿4/0.15）、土師器鍋1点/0個体（胴部片のみ）である。

S D50からは、75点/2.15個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器4点/0個体（天目茶碗1、その他3）、常滑陶器2点/0個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗18点/0.40個体（碗16/0.40、鉢2/0）、東濃系山茶碗26点/0.45個体（碗16/0.20、小皿9/0.25、陶丸1）、土師器皿21点/1.25個体（大皿I a 0.05、中皿II a 1.20）、土師器鍋3点/0.05個体（鍋A 0.05）、いぶし瓦1点である。

S D52からは、11点/0.05個体の遺物が出土している。内訳は、常滑陶器1点/0個体（壺・甕）、尾張系山茶碗4点/0個体（碗のみ）、東濃系山茶碗6点/0.05個体（碗3/0.05、小皿3/0）である。

S D54からは、40点、0.70個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器2点/0.05個体（天目茶碗1/0.05、その他1/0）、常滑陶器2点/0個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗18点/0.25個体（碗15/0.05、小皿3/0.20）、東濃系山茶碗10点/0.40個体（碗8/0.15、小皿2/0.25）、土師器鍋5点/0個体（鍋A 0.025未満）である。

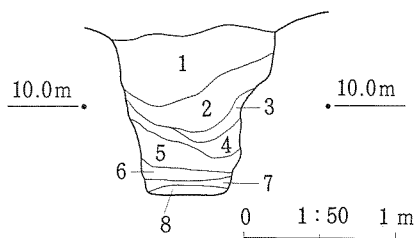
瀬戸美濃陶器は、S D47出土遺物の中に近世の本業焼片が1点あるが、調査時に混入したものである可能性が高く、これを除くと4遺構とも古瀬戸中期ないし後期以前のものに限られ、明確な大窯製品は認められない。



第34図 S D47・50・54出土遺物実測図

S D48

幅約1m、深さ約1.2mの断面逆台形の溝。主軸方位はN-73°-Wで、S D44・47とほぼ平行する。東端ではほぼ直交する溝S D49の南端に接続し、両者の間に切り合い関係は認められない。埋土中位から、蔵骨器が転落した状態で出土している。



- 1 暗褐色土層（地山Br.混）
- 2 暗褐色土層（褐色土混）
- 3 黄褐色土層（地山崩壊再堆積）
- 4 褐色土層
- 5 褐色土層（地山Br.混）
- 6 暗褐色土層
- 7 褐色土層
- 8 黄褐色砂質土層（地山崩壊再堆積）

第35図 S D48土層断面図



写真13 SD48

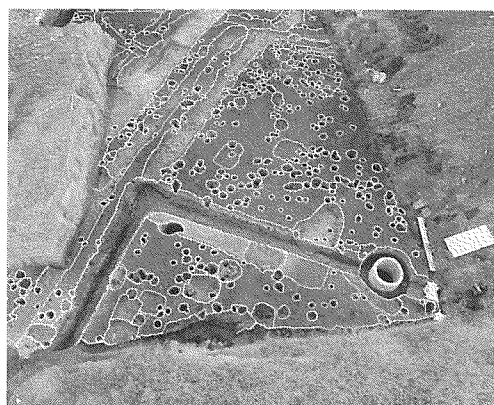
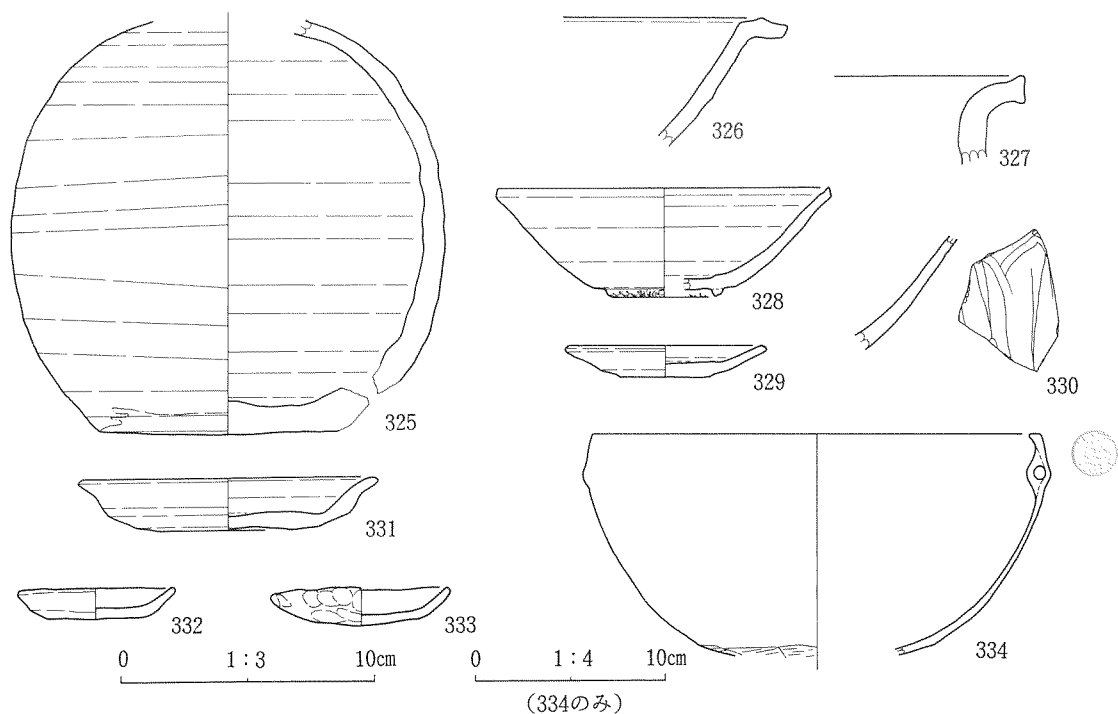


写真14 SD48・49

S D48出土遺物

144点/4.65個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器20点/0.10個体（播鉢3/0、その他17/0.10）、常滑陶器2点/0.05個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗8点/0.10個体（碗7/0.05、小皿1/0.05）、東濃系山茶碗20点/0.70個体（碗のみ）、青磁1点/0個体（碗）、土師器皿35点/2.85個体（大皿Ⅱa 0.75、中皿Ⅰa 0.90、中皿Ⅰb 1.15）、土師器鍋58点/0.85個体（鍋B・C 0.85）である。

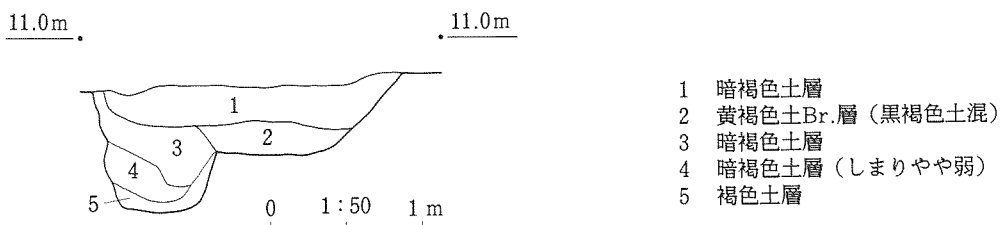
瀬戸美濃陶器には、折縁深皿など古瀬戸後期のものは確認できるが、大窯製品は認められない。また、瀬戸美濃陶器の壺には、頸部が打ち欠かれ、底部脇に焼成後穿孔された蔵骨器（325）があり、被熱した頭蓋骨片が入れられていた。



第36図 S D48出土遺物実測図

S D49

主軸方位をN-21°-Eにとる幅約2m、深さ0.1~0.6mほどの溝。溝の西側は0.70mほどの幅でさらに0.4mほど掘り下げられている。溝底は、S D48と接続する南端で最も深く、北側へ進むにしたがって浅くなり、検出範囲だけでも0.5mの比高差がみられた。



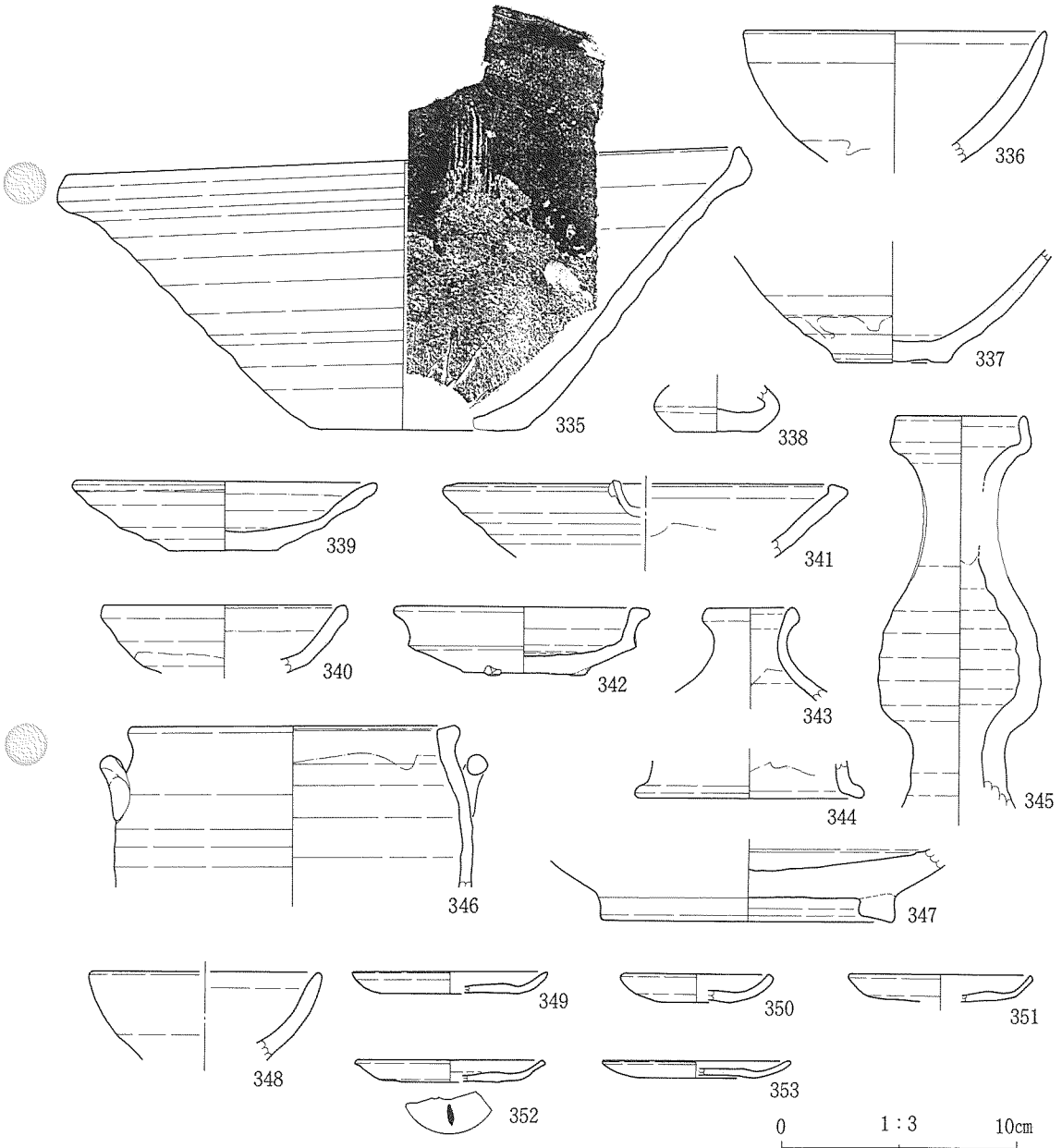
第37図 S D49土層断面図

S D49出土遺物

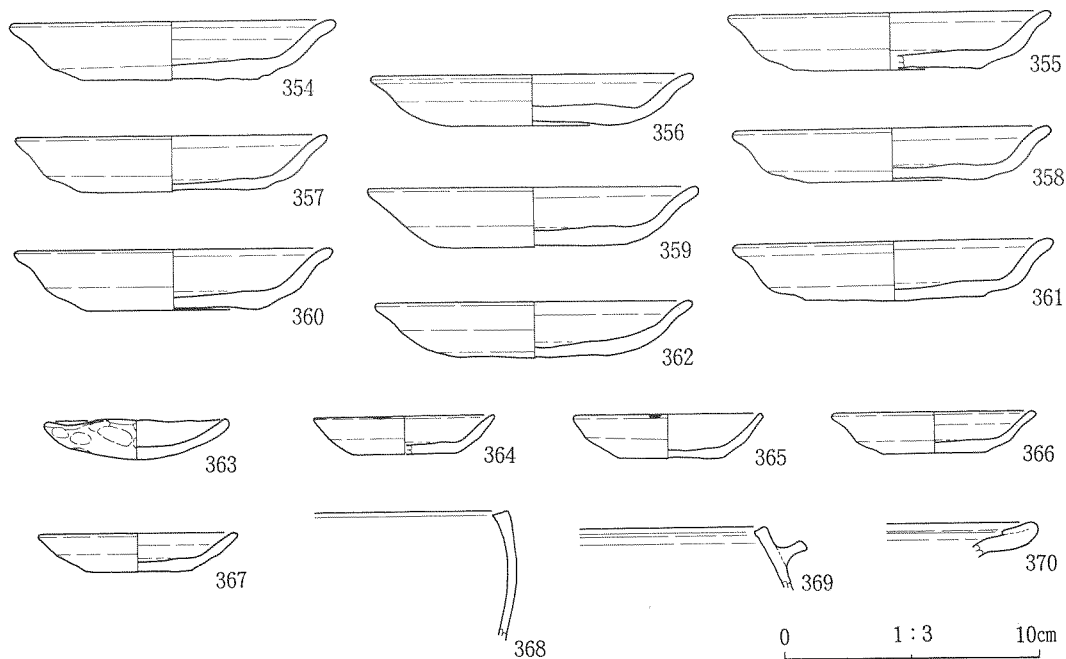
80点/4.65個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器24点/1.95個体(播鉢6/0.30、天目茶碗2/0.30、小皿類3/0.15、その他13/1.20)、常滑陶器3点/0個体(壺・甕3、鉢1)、尾張系山茶碗1点/0個体(碗)、東濃系山茶碗9点/0.60個体(碗7/0.35、小皿2/0.25)、土師器皿39点/1.95個体(大皿Ⅱa 0.45、大皿Ⅱc 0.15、

中皿Ⅰ b 0.70、中皿Ⅱ a 0.55)、土師器鍋 2 点/0.15 個体 (鍋 B・C 0.05、羽釜 A 0.10)、いぶし瓦 2 点である。

口縁部残存率法による時期別内訳 (個体数) は、瀬戸美濃陶器の播鉢で古瀬戸後 4 期のみ 0.30、天目茶碗で古瀬戸後 1 期 0.15、古瀬戸後 4 期 0.15 である。このように瀬戸美濃陶器はその殆んどが古瀬戸後期のもので占められているが、僅かに 2 点大窯製品の小皿類も認められる。但し大窯第 2 段階以降については確認できない。



第38図 S D 49出土遺物実測図 (1)



第39図 S D49出土遺物実測図(2)

第2節 土坑

SK09

西側に入口部分である豎坑をもつ地下式土坑。主体部となる地下坑部分は、床面で、南北2.7m、東西2.1mあり、検出面からの深さは1.8m。埋土は、地下坑部分の天井崩落以前に豎坑から流入して堆積したI層（3～13層）と、地山掘り残し天井の落下したII層（1・2層）に大別できるが、I層中には地山ブロックが多く含まれており、人為的に埋め戻されたものである可能性が高い。

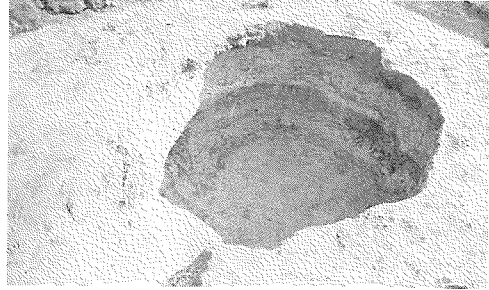
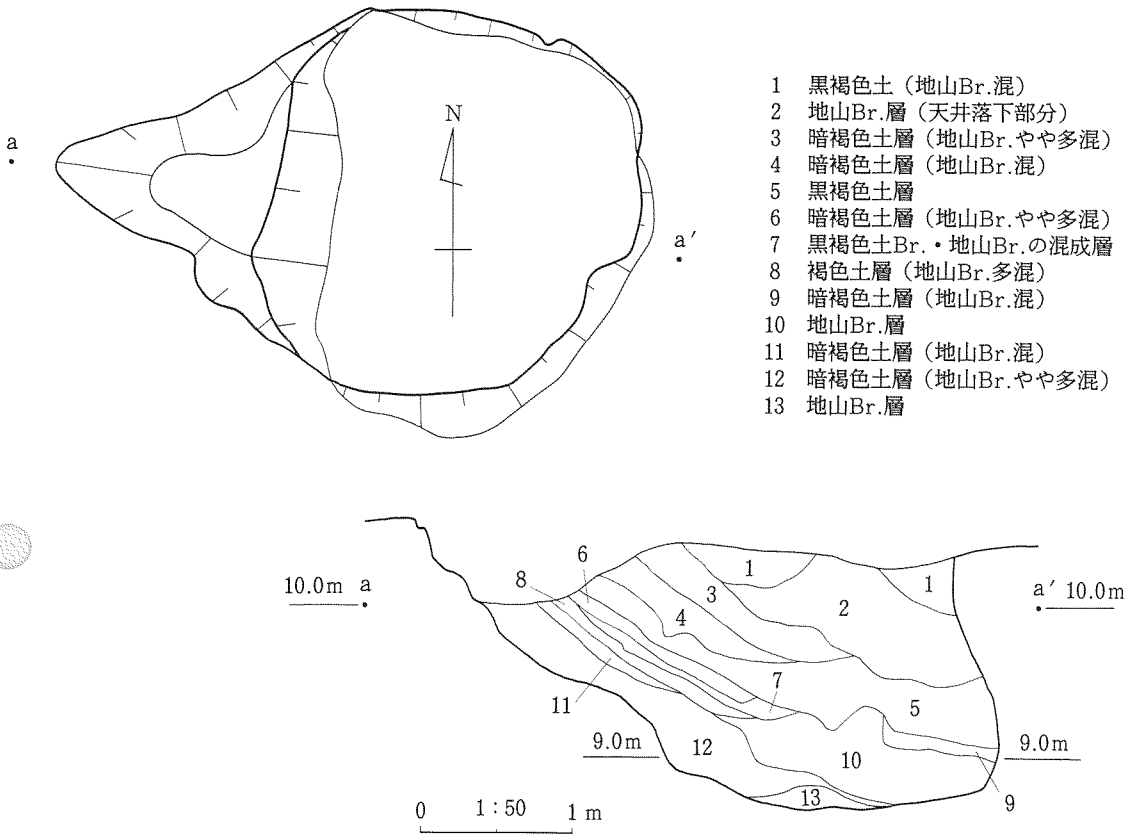


写真15 SK09



第40図 SK09平面・土層断面図

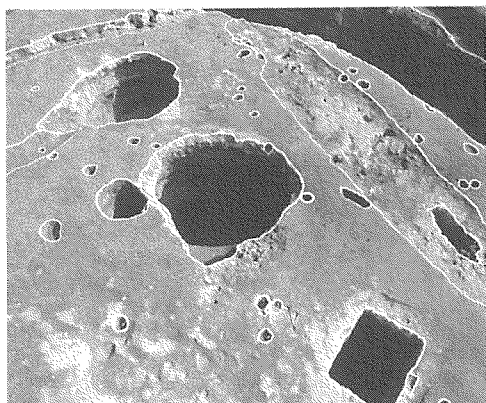


写真16 SK09 (左)

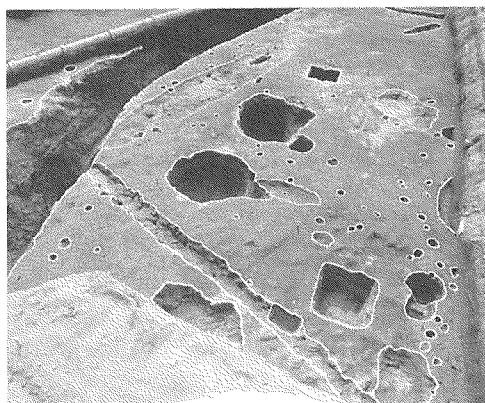


写真17 SK09 (手前)

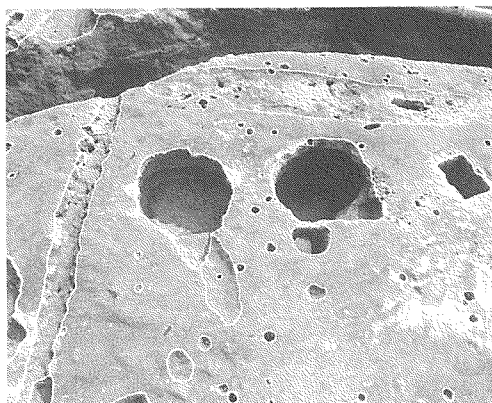
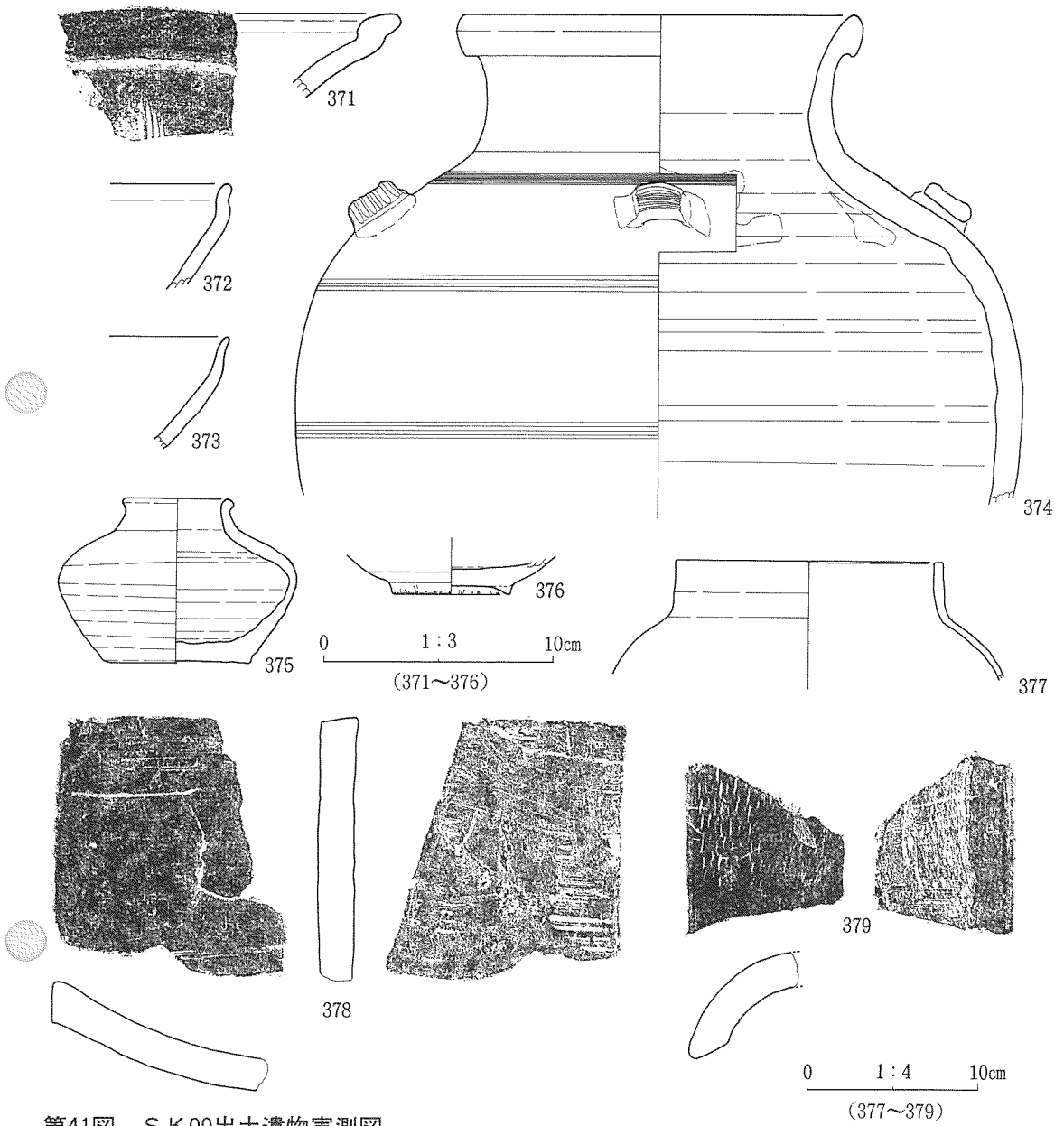


写真18 SK09 (左) ・SK11 (右)

S K09出土遺物

68点／2.80個体の遺物が出土している。すべてI層中からの出土であるが、床面から遊離した状態であり、S K09廃絶時もしくは廃絶後に投棄されたものと考えられる。出土物の内訳は、瀬戸美濃陶器16点／1.55個体（搦鉢2／0.10、天目茶碗2／0.15、小皿類1／0.05、その他11／1.25）、尾張系山茶碗6点／0.05個体（碗のみ）、東濃系山茶碗3点／0.05個体（碗のみ）、土師器皿26点／0.85個体（大皿Ⅱc 0.20、小皿Ⅰb 0.65）、土師器鍋15点／0.30個体（鍋B・C 0.10、羽釜B 0.05、茶釜A・B 0.15）、いぶし瓦2点である。

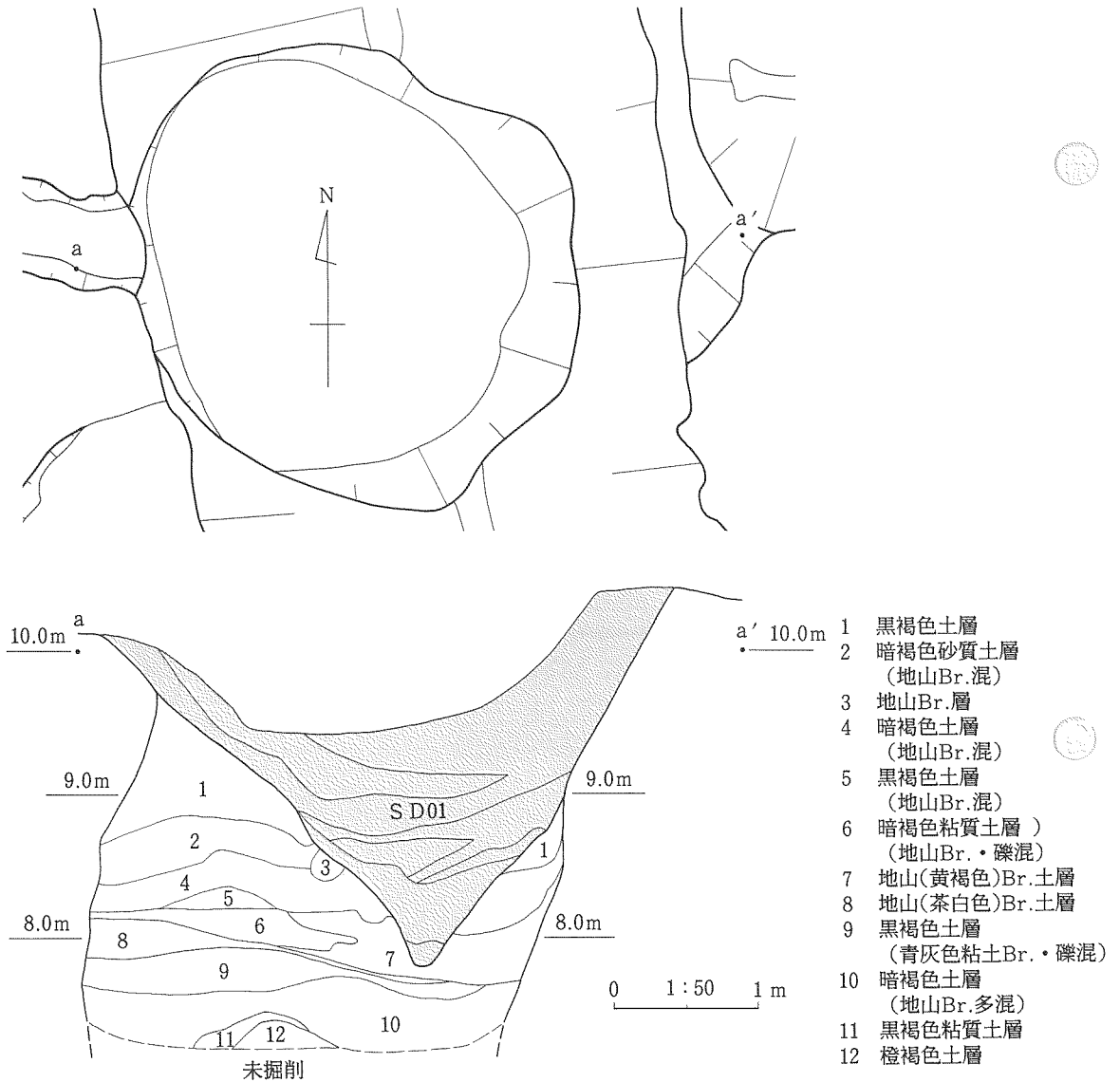
口縁部残存率法による時期別内訳（個体数）は、瀬戸美濃陶器の搦鉢で大窯第3段階0.10、天目茶碗で大窯第2段階0.10、大窯第3段階0.05である。



第41图 SK09出土遺物実測図

S K 10

直径約 3 m、平面略円形を呈する大形土坑。検出面から 3 m 以上の深さがあり、掘削に危険を伴ったため完掘できなかった。部分的に掘り下げた結果、4.5 m 前後の深さで底面を確認した。埋土は地山ブロックを多量に含んでおり、地山を掘り残した天井部分が落下している可能性がある。しかし、遺構上部を大溝 S D 01 に切られていることもあり、豎坑の有無については不明であり、この遺構が地下式土坑であるかどうかは断定できない。



第42図 S K 10平面・土層断面図



写真19 SK10



写真20 SK10

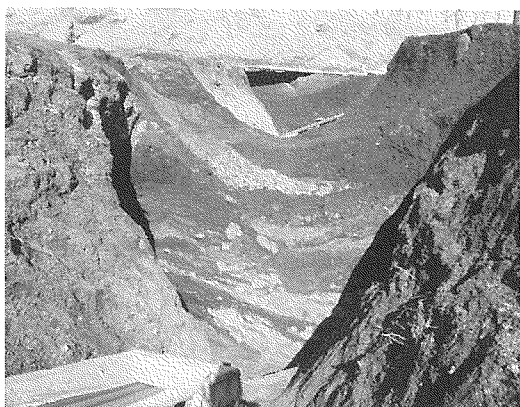


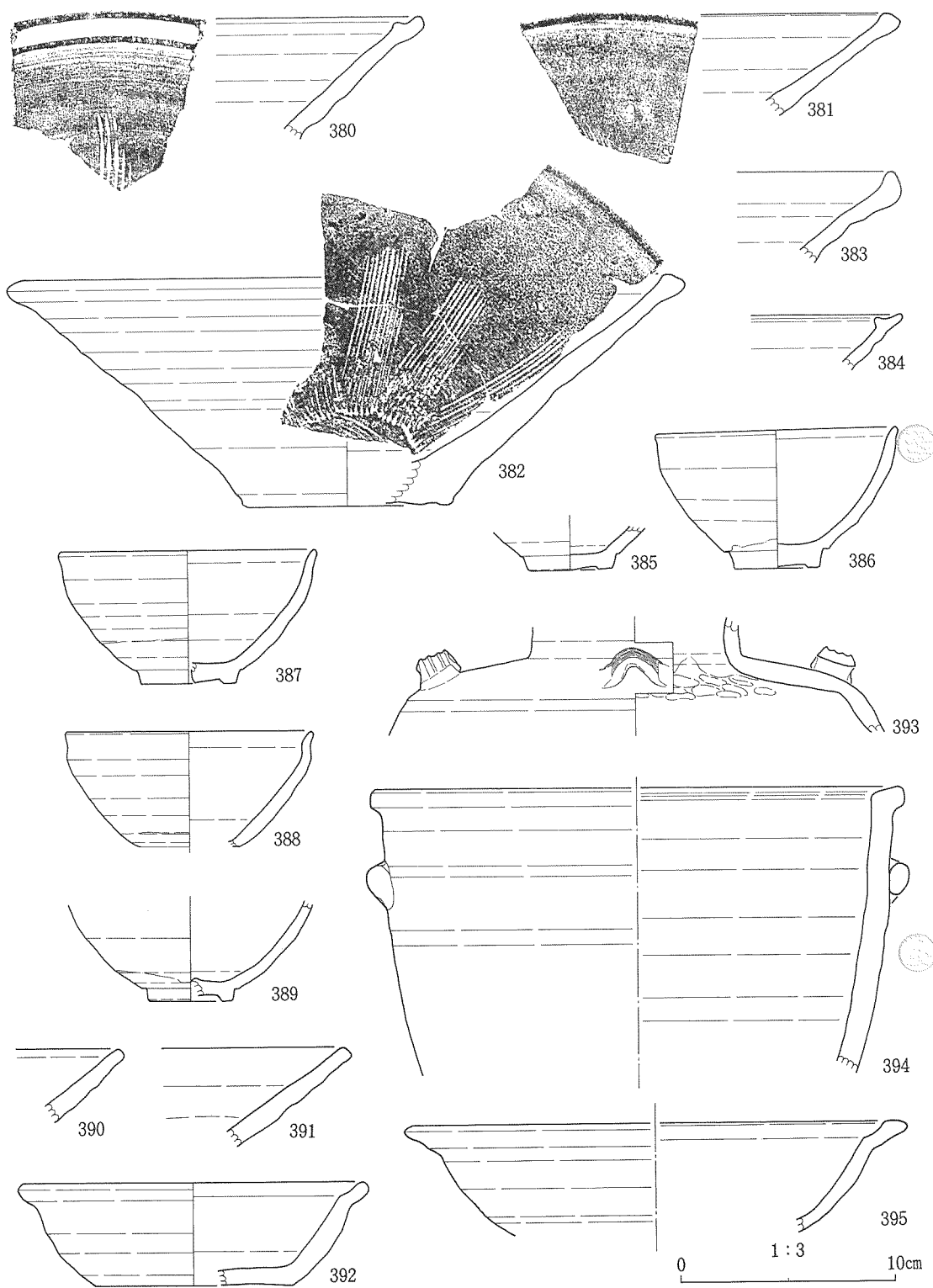
写真21 SK10

S K 10出土遺物

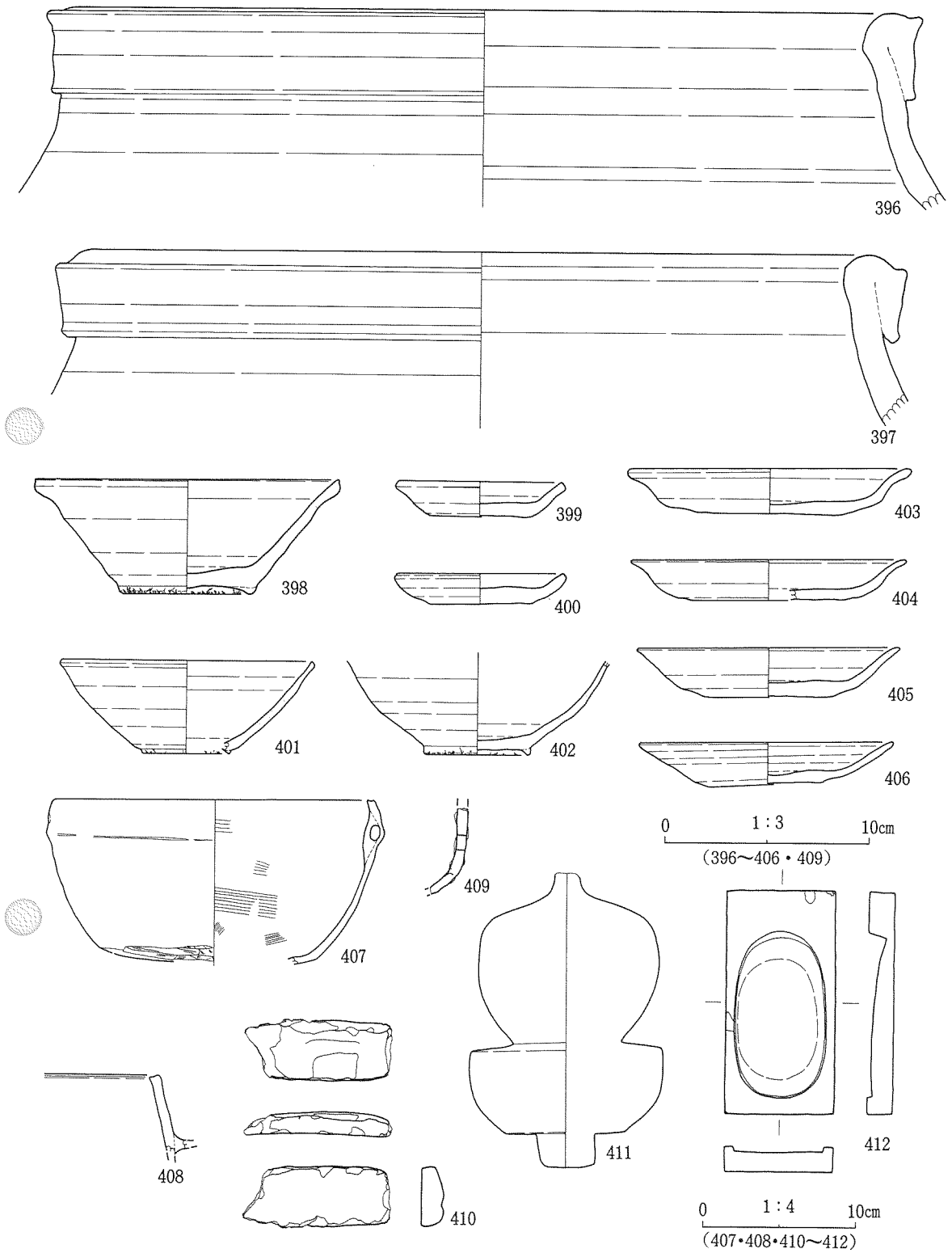
296点／7.45個体の遺物が出土している。すべて床面から遊離した状態で出土しており、本来S K 10に伴うものではなく、遺構廃絶時もしくは廃絶後に投棄されたものと推定される。出土遺物の内訳は、瀬戸美濃陶器64点／2.40個体（播鉢12／0.45、天目茶碗6／1.35、小皿類4／0.10、その他42／0.50）、常滑陶器105点／0.55個体（壺・甕104／0.55、鉢1／0）、尾張系山茶碗31点／1.50個体（碗21／0.35、小皿3／1.05、鉢7／0.10）、東濃系山茶碗13点／0.60個体（碗12／0.60、小皿1／0）、青磁1点／0個体（碗）、土師器皿60点／1.80個体（大皿Ⅱ a 0.65、大皿Ⅱ b 0.80、中皿Ⅰ a 0.25、中皿Ⅰ b 0.10）、土師器鍋18点／0.60個体（鍋A 0.05、鍋B・C 0.50、羽釜B 0.05）、鉄釘2点、石製五輪塔1点（空・風輪）、石硯1点である。

口縁部残存率法による時期別内訳（個体数）は、瀬戸美濃陶器の播鉢で古瀬戸後4期0.45、天目茶碗で古瀬戸後2期0.10、古瀬戸後4期0.35、大窯第1段階0.90である。但し、明らかな大窯製品は、瀬戸美濃陶器64点中に天目茶碗1点しかない。

なお、土坑内には拳大から人頭大の自然礫が上記遺物と共に大量に投棄されていた。



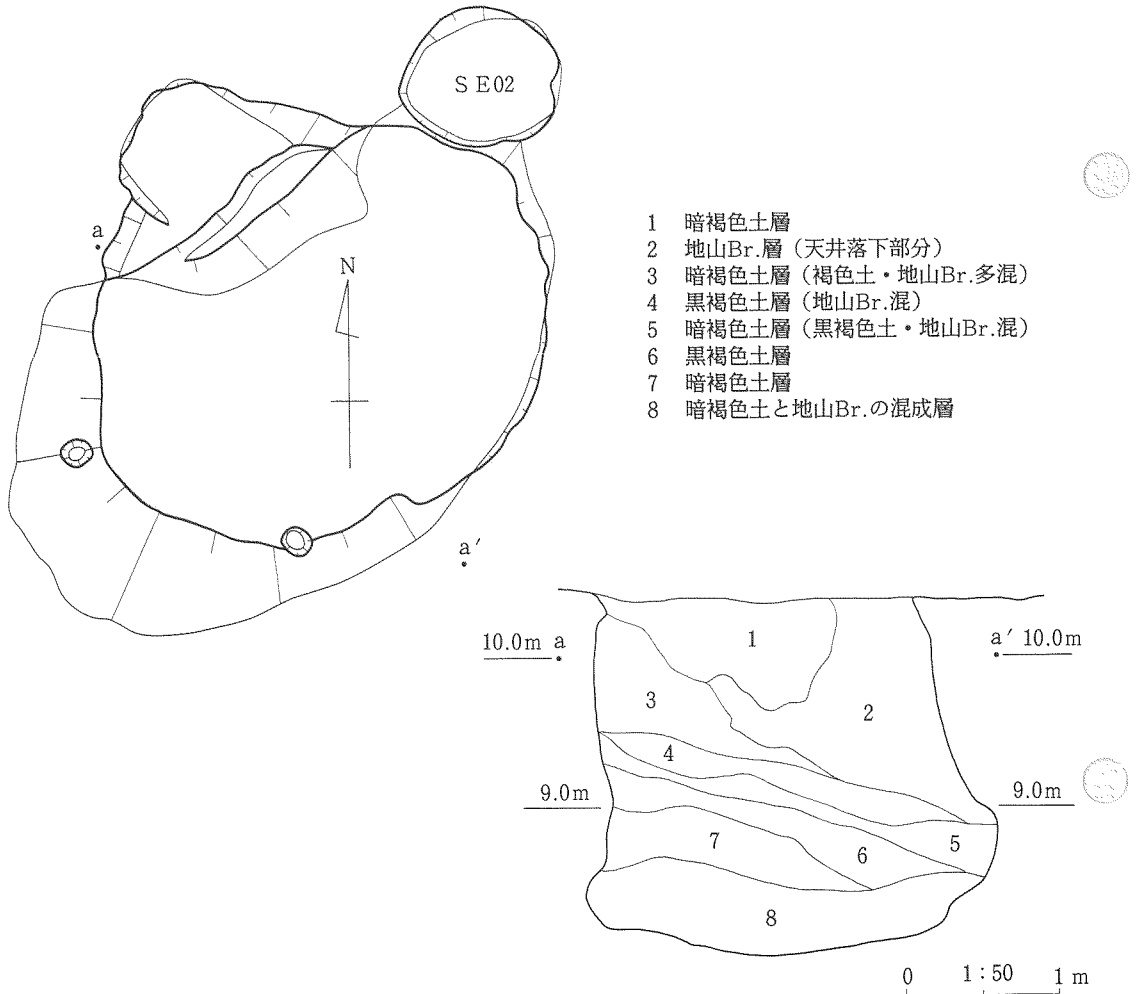
第43图 SK10出土遺物実測図(1)



第44图 SK10出土遺物実測図(2)

SK11

南西側に竪坑をもつ地下式土坑。地下坑部分は、床面で4.2m×2.5mあり、平面不整形を呈する。竪坑に対して地下坑の南西部分が異様に張り出しており、この部分は2次的に拡張されている可能性がある。地下坑の検出面からの深さは2.3m、埋土は、SK09同様に、竪坑から流入して堆積したI層（3～8層）と、地山掘り残し天井の落下したII層（1・2層）に大別できる。近世の井戸SE02と切り合い関係にあり、時期的な前後関係はSK11→SE02である。



第45図 SK11平面・土層断面図

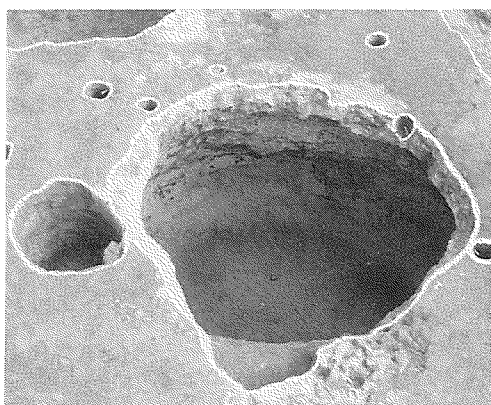


写真22 SK11

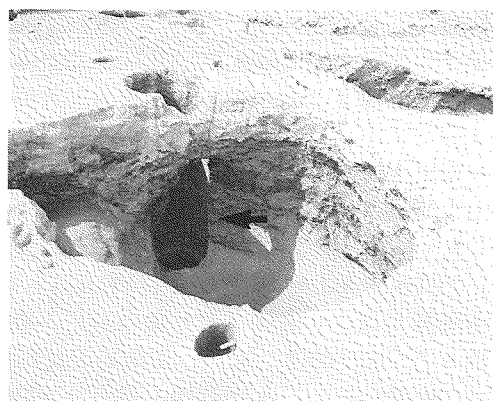


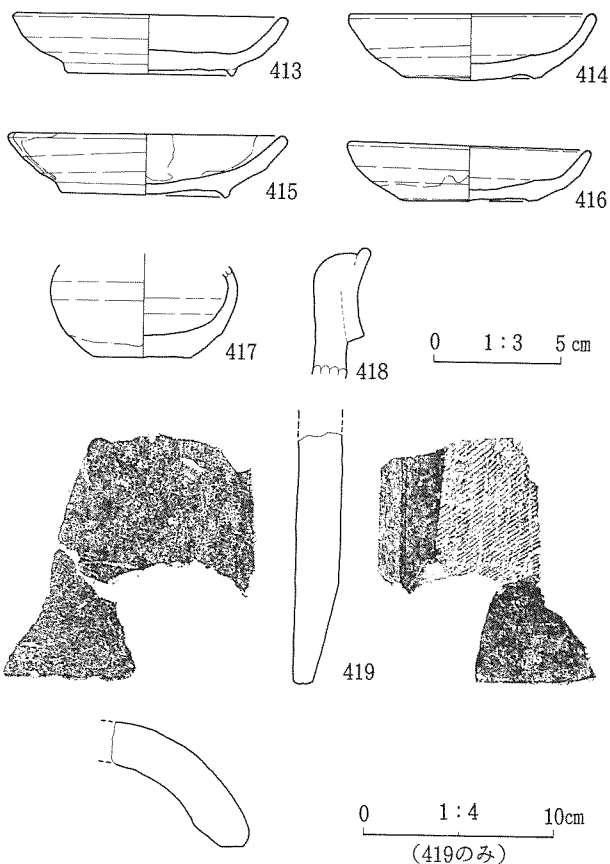
写真23 SK11

SK11出土遺物

101点／3.75個体の遺物が出土している。すべて床面から遊離しており、床面に密着した状態での出土はない。内訳は、瀬戸美濃陶器32点／3.25個体（播鉢5／0、天目茶碗1／0、小皿類17／3.10、その他9／0.15）、常滑陶器2点／0.05個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗2点／0.10個体（碗のみ）、東濃系山茶碗4点／0.25個体（碗2／0.05、小皿2／0.20）、青花磁器1点／0個体（碗）、土師器皿13点／0個体（口縁部なし）、土師器鍋15点／0.10個体（鍋B・C0.10）、いぶし瓦32点である。

瀬戸美濃陶器の播鉢・天目茶碗には時期を細かく特定できるものがないが、丸皿に見込の釉を拭き取った内禿皿（414・416）があることから、大窯第3段階までのものが含まれていることが判る。

また、遺物の中にSK09出土の破片と接合できるものがあり、遺構の埋没時期が近接していることが推測される。



第46図 SK11出土遺物実測図

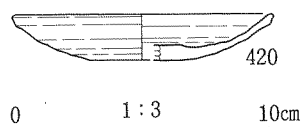
S K 12

深さ 3 m 以上の大型土坑。完掘していない。調査区域内では一部を検出したに過ぎないが、形状・埋土のあり方とも S K 10 と共通している。

S K 12 出土遺物

出土遺物量はごく少なく、10点/0.10個体が出土しているに過ぎない。内訳は、瀬戸美濃陶器 2点/0.05個体（平碗 1/0、筒型容器 1/0.05）、常滑陶器 2点/0個体（壺・甕のみ）、東濃系山茶碗 1点/0.05個体（碗）、土師器皿 4点/0個体（口縁部なし）、土師器鍋 1点/0個体（胴部片のみ）である。

少ない出土遺物から時期を決定することには危険が伴うが、瀬戸美濃陶器に大窯製品がないことは S K 10 と共通しており、同時期の遺構である可能性が高いと思われる。



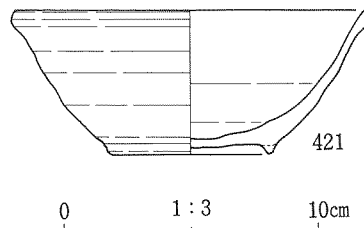
第47図 S K 12 出土遺物実測図

S K 13

直径約 2 m、深さ 0.3 m の不整円形土坑。埋土は地山の小ブロック（ ϕ 10 mm 以下）を含む下層と、黒褐色土の上層に分けられる。弥生時代の方形周溝墓 S X 02（S D 11・12）と切り合い関係にあり、時期的な前後関係は S X 02 → S K 13 である。

S K 13 出土遺物

4点/0.10個体の遺物が出土している。内訳は、尾張系山茶碗 1点/0個体（碗）、東濃系山茶碗 1点/0.05個体（碗）、土師器皿 1点/0個体（口縁部なし）、瓦器 1点/0.05個体（風炉・火鉢）である。



第48図 S K 13 出土遺物実測図

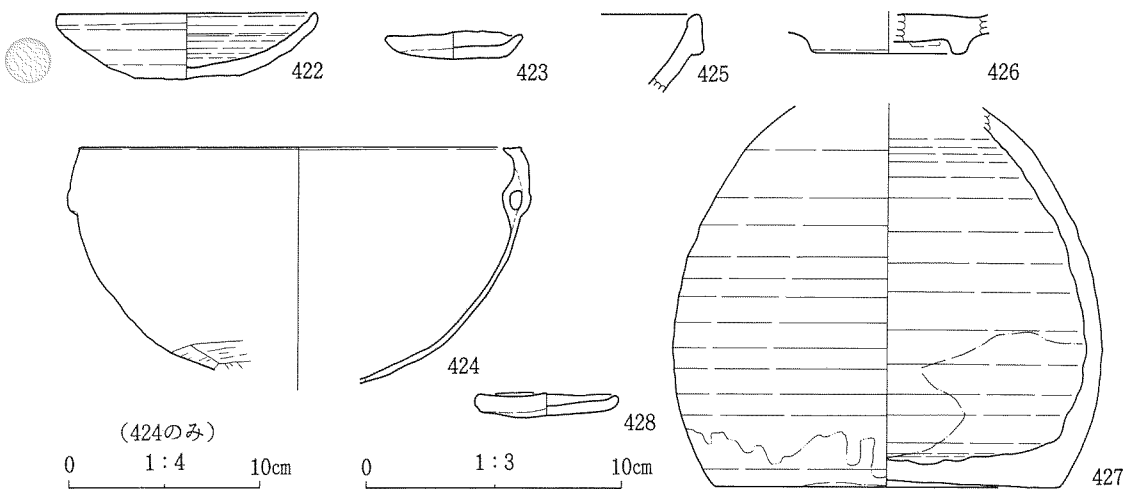
S K 14・18・19・20

S D 02 古が埋没した後、S D 02 新が掘削される以前に掘削された不整形の土坑群。いずれの遺構もオーバーハングした袋状の断面形態を呈する。埋土は、地山ブロックを多く含む斑土であることで共通しており、人為的に埋め戻されている可能性が高い。土層断面をみる限りでは、時間的前後関係があるようにも見受けられるが（S K 19 → S K 18）、単に埋め戻しの際の手順を示している可能性もあり、断定はできない。前述のように、S D 02 古から S D 02 新への推移が短期間であったと推定されることから、これらの土坑群についても掘削から埋没に至る過程は短い時間であったと考えられる。

S K 14・18・19・20出土遺物

ほぼ同時期の遺構群と考えられることから、4遺構分を合算して記す。合計160点/5.40個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器24点/1.05個体（播鉢6/0.05、天目茶碗1/0、小皿類1/1.00、その他16/0）、常滑陶器3点/0個体（壺・甕2、鉢1）、尾張系山茶碗5点/0個体（碗2、小皿1、鉢2）、東濃系山茶碗1点/0個体（小皿）、青磁1点/0個体（稜花皿）、土師器皿62点/3.95個体（大皿Ⅱ a 0.15、大皿Ⅱ c 0.45、小皿Ⅰ a 3.35）、土師器鍋63点/0.40個体（鍋B・C 0.40）、火打石1点である。

遺物の中には、S D 02出土遺物と接合できるものが少なくなく、本来S D 02埋土中に含まれていたものである可能性がある。



第49図 S K 14・18・19出土遺物実測図

S K 15

南北3m、東西1.6m以上の楕円形土坑で、東側を攪乱により壊されている。検出面からの深さは0.3m。埋土は茶褐色土混じりの黒褐色土で、焼土粒を多く含む。

S K 15出土遺物

僅かに、7点/0.05個体の遺物が出土しているに過ぎない。内訳は、瀬戸美濃陶器2点/0個体（播鉢1、天目茶碗1）、尾張系山茶碗2点/0個体（碗のみ）、土師器皿1点/0個体（口縁部なし）、土師器鍋2点/0.05個体（鍋B・C 0.05）である。

S K 22

長辺2.3m、短辺1.6mの平面隅丸長方形を呈する土坑。検出面からの深さは0.9m。埋土は黒褐色土を主体とする。近世の土坑S K 21・24・25と切り合い関係にあり、時間的な前後関係はS K 22→S K 21・24・25である。



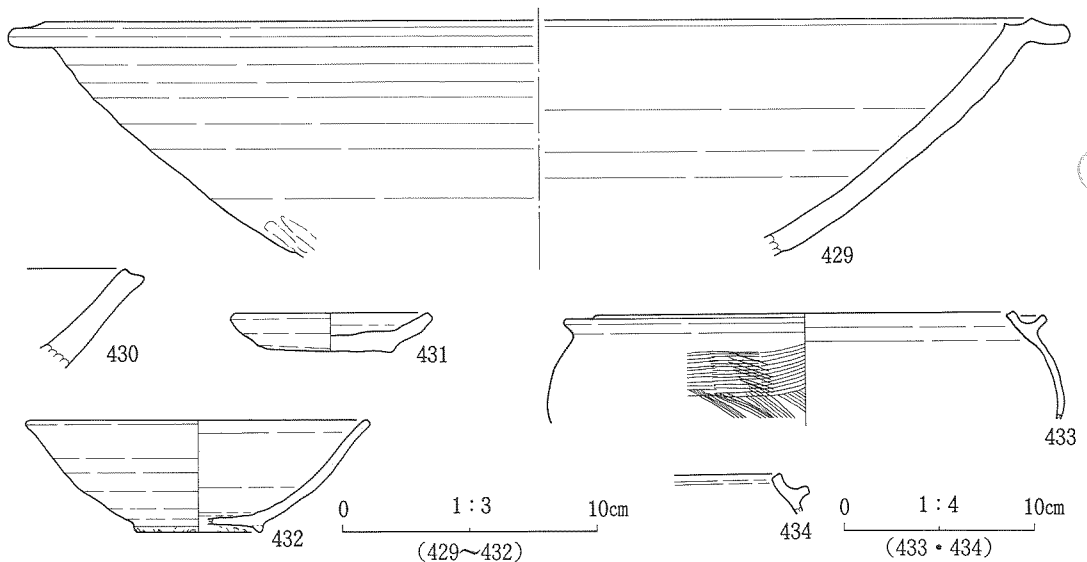
写真24 SK22

SK22 (SK25) 出土遺物

SK25出土遺物には、SK22出土遺物と接合できるものがあり、SK25掘削時に、SK22出土遺物が掘り出されたものと考えられるため、ここでは両遺構出土分を合算して記すこととする。

合計18点/1.75個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器2点/0.10個体（折縁深皿1/0.10、大皿1/0）、常滑陶器3点/0.05個体（壺・甕2/0、鉢1/0.05）、尾張系山茶碗3点/1.00個体（碗2/0、小皿1/1.00）、東濃系山茶碗4点/0.25個体（碗のみ）、土師器皿2点/0.10個体（大皿I a 0.10）、土師器鍋4点/0.25個体（羽釜A 0.25）である。

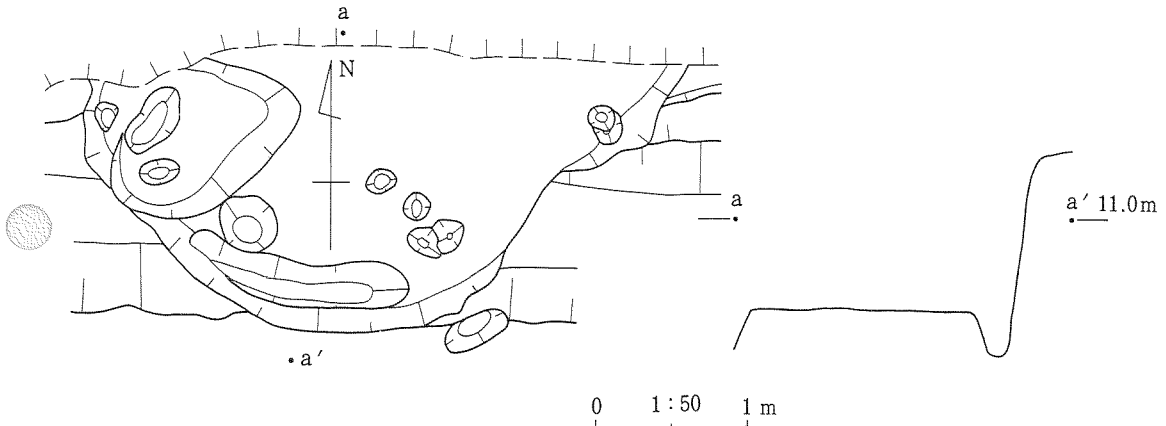
出土遺物量は少ないが、瀬戸美濃陶器は2点とも古瀬戸後期のものである。



第50図 SK22・25出土遺物実測図

SK70

2.8m×3.1m以上の規模をもつ平面隅丸方形の竪穴状遺構。北側を攪乱によって破壊され、南側を近世の溝SD27に切られている。検出面からの深さは1mで、底面にはさらに小土坑の掘り込みが認められる。建物跡である可能性もあるが、遺存状態が極めて悪いため断定はできない。



第51図 SK70平面・断面図

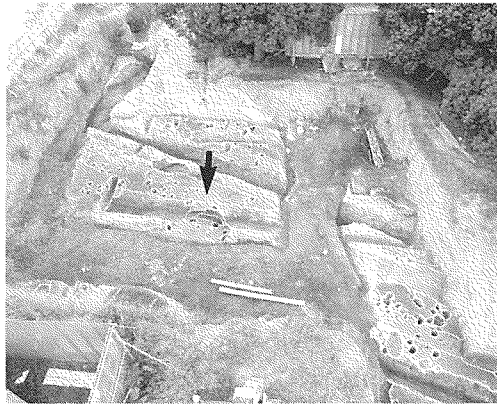
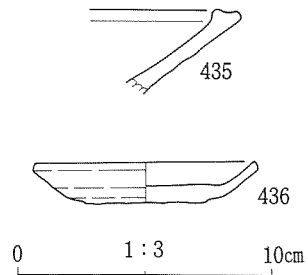


写真25 SK70

SK70出土遺物

15点／0.55個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器 5点／0.10個体(折縁深皿1／0.10、その他4／0)、常滑陶器 1点／0個体(壺・甕)、尾張系山茶碗 5点／0.25個体(碗3／0.10、小皿1／0.15)、東濃系山茶碗 2点／0.20個体(碗のみ)、土師器皿 2点／0個体(口縁部なし)である。

瀬戸美濃陶器はすべて古瀬戸後期のもので、大窯製品は全く含まれていない。



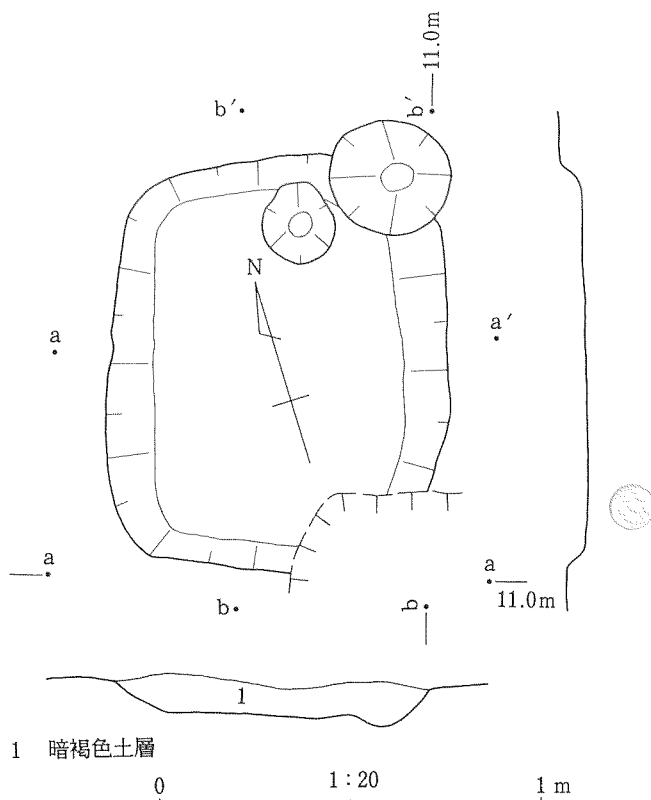
第52図 SK70出土遺物実測図

S K 78

長辺1.1m、短辺0.9mの平面隅丸長方形の土坑墓。検出面からの深さは0.1m。埋土は暗褐色土の単一層で、微細な骨片を含む。南東隅を後述の土坑墓S K 104に切られている。遺構の長軸方位はN-191°-Eで、S D 49などとほぼ同じ方向性を有する。

S K 78出土遺物

土師器皿 2点 / 0.05個体（大皿 II a 0.05）が出土しているが、小片であり副葬されたものとは考えられない。おそらく埋葬時に混入したものであろう。



第53図 S K 78平面・断面図

S K 79

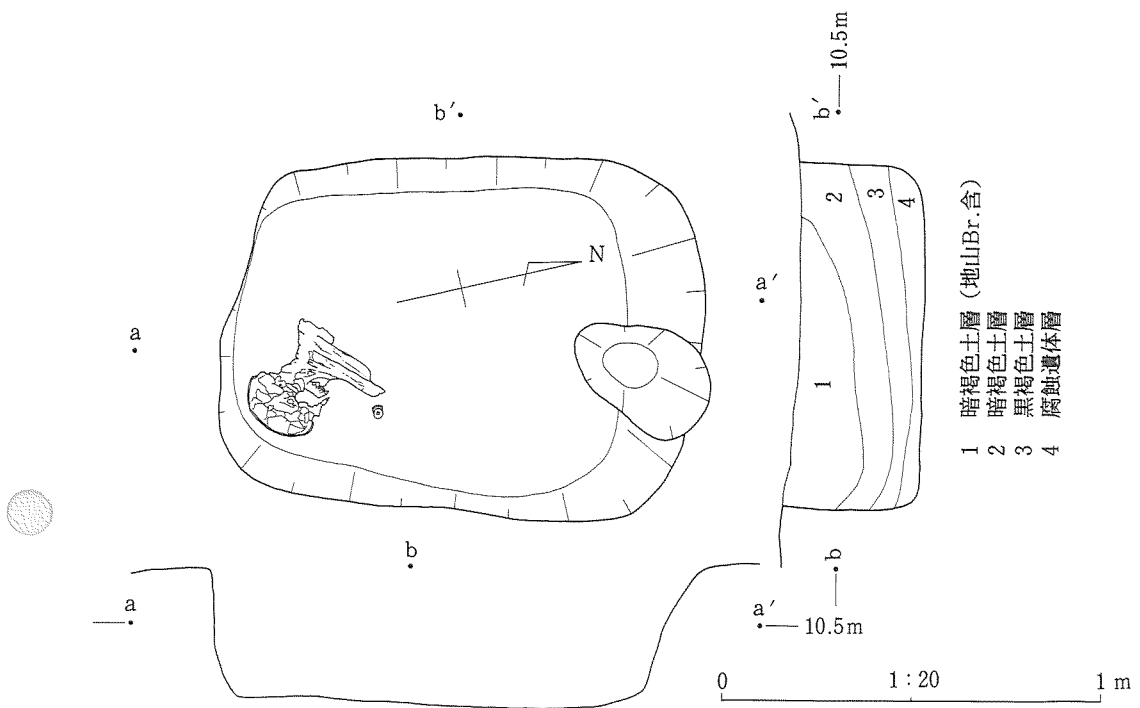
長辺1.3m、短辺0.9m強の平面隅丸長方形の土坑墓。検出面からの深さは0.35m。埋土は4層に細分できるが、最下層には腐食した遺体の脂肪分が5cmほどの厚さで堆積しており、頭蓋などの人骨も一部遺存していた。遺構の長軸方位はN-14°-Eで、上記S K 78とほぼ同じ方向性を有する。



写真26 SK79



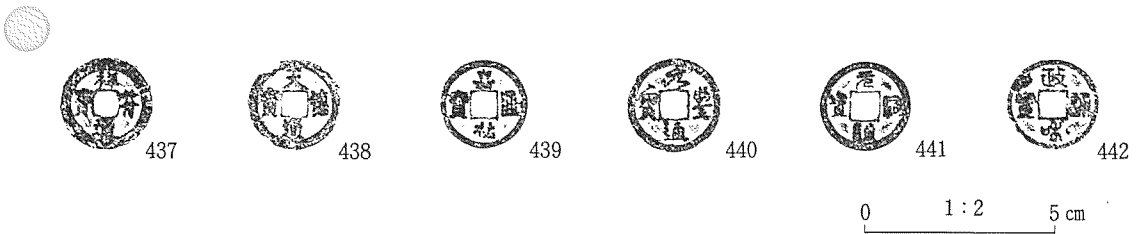
写真27 SK79



第54図 SK79平面・断面図

SK79出土遺物

副葬品（六道銭）として、銅銭6点が重なった状態で出土している。すべて北宋銭で、最も新しい政和通寶は1111年の初鑄である。このほか、埋葬時に混入したと考えられる土器・陶磁器の小片が11点／0.30個体分出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器2点／0.05個体（小皿類のみ）、常滑陶器1点／0個体（壺・甕）、尾張系山茶碗2点／0.05個体（碗のみ）、東濃系山茶碗3点／0.10個体（碗のみ）、土師器皿1点／0.10個体（中皿Ⅱ a0.10）、土師器鍋2点／0個体（鍋A0.025未満）である。



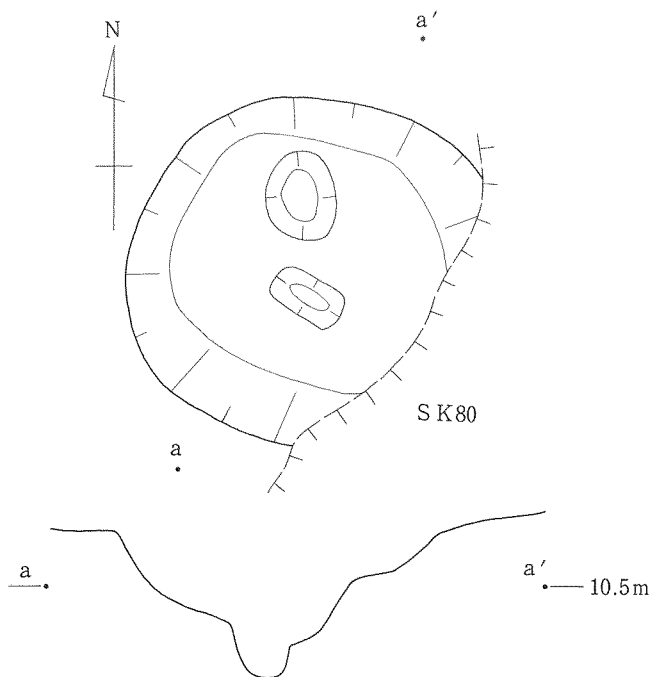
第55図 SK79出土遺物拓影

S K 80

直径約1mの平面丸形の土坑墓。検出面からの深さは0.2m。埋土は暗褐色土の単一層で、少量の骨片を含む。

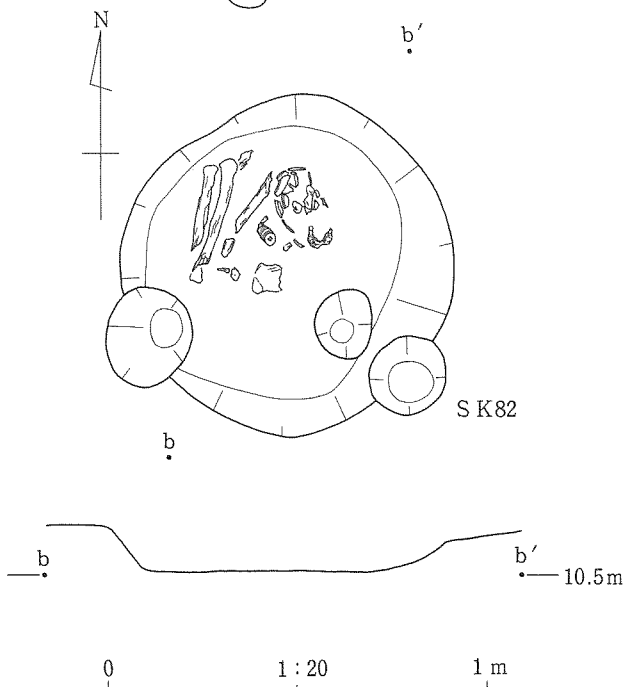
S K 80出土遺物

東濃系山茶碗1点／0個体(碗)が出土しているが、小片であり、埋葬時の混入と考えられる。また、副葬品は認められなかった。



S K 82

直径0.9mの平面丸形の土坑墓。検出面からの深さは0.1m。埋土は暗褐色土の単一層で、頭蓋・四肢などの人骨が遺存していた。遺体が座葬であったと推定されていることから(付章1参照)、本来の遺構の深さは1mを超えていたはずであり、上部を大きく削り取られていることが知られる。土層観察の限りでは、木棺の存在は確認されなかったが、土坑底面から板状の木片(樹種不明)が出土しており、遺体は木棺に収められていた可能性がある。



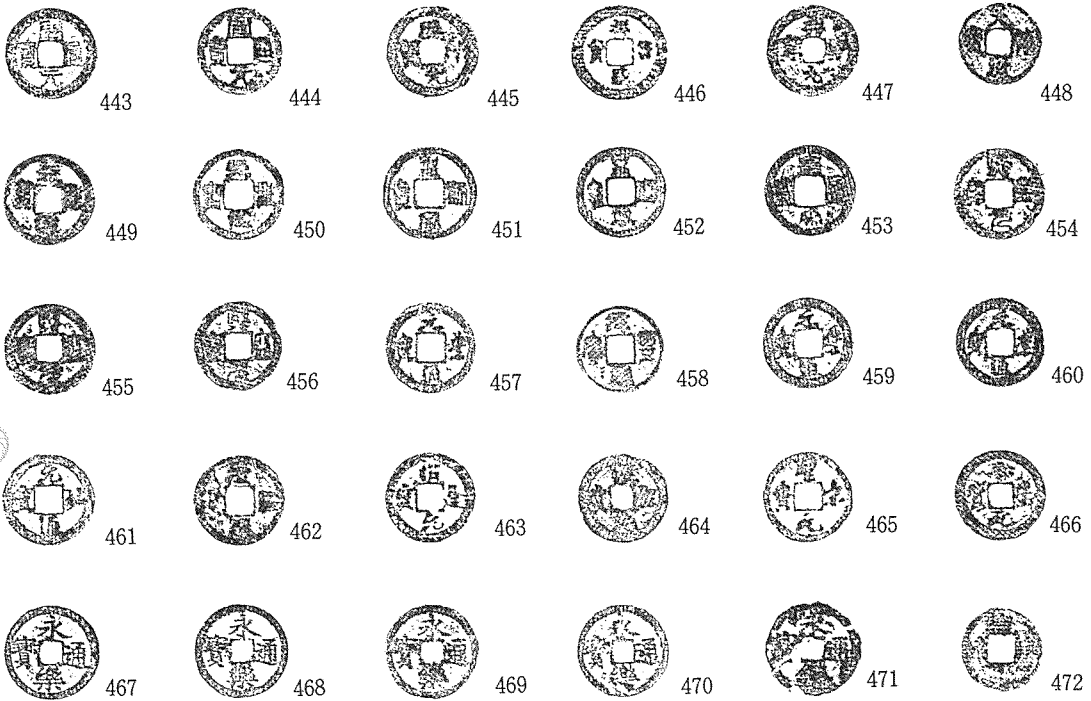
第56図 S K 80・82平面・断面図



写真28 SK82

S K82出土遺物

上記木片のほか、土坑中央から副葬された銅銭30点がサシの状態出土している。内訳は、唐銭1、北宋銭23、明銭5、鋌銭1で、明銭はすべて永楽通寶である。



0 1:2 5 cm

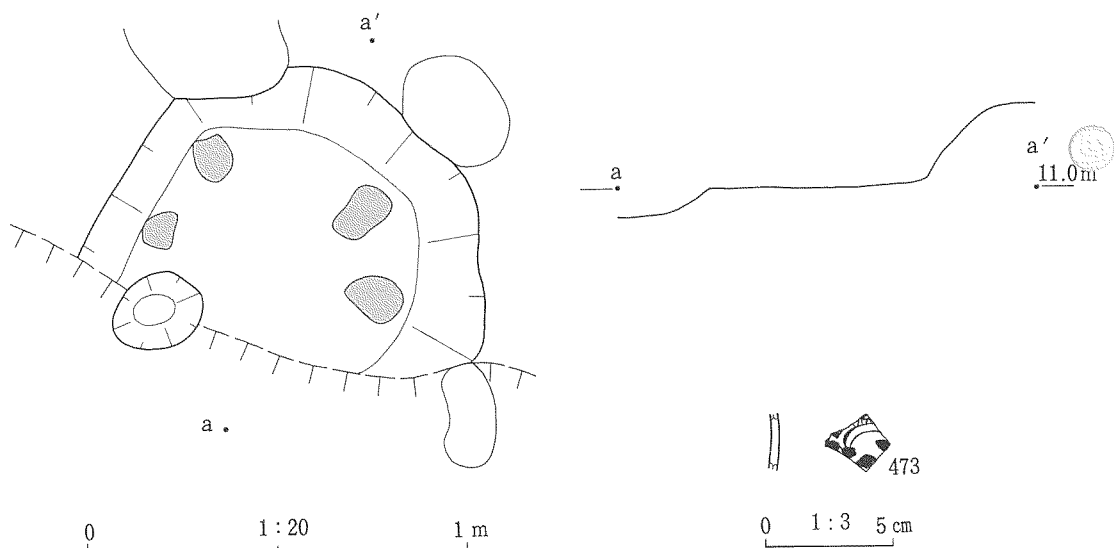
第57図 S K82出土遺物拓影

S K 88

直径1 m強、深さ0.2mの不整形土坑。南側を攪乱により破壊されている。埋土は黒褐色土の上層と暗褐色砂の下層に分けられ、土坑底面には拳大の礫4個が配置されている。遺構の性格については詳らかでない。

S K 88出土遺物

青花磁器（碗）の小片が1点出土しているに過ぎない。



第58図 S K 88平面・断面・出土遺物実測図

S K 92

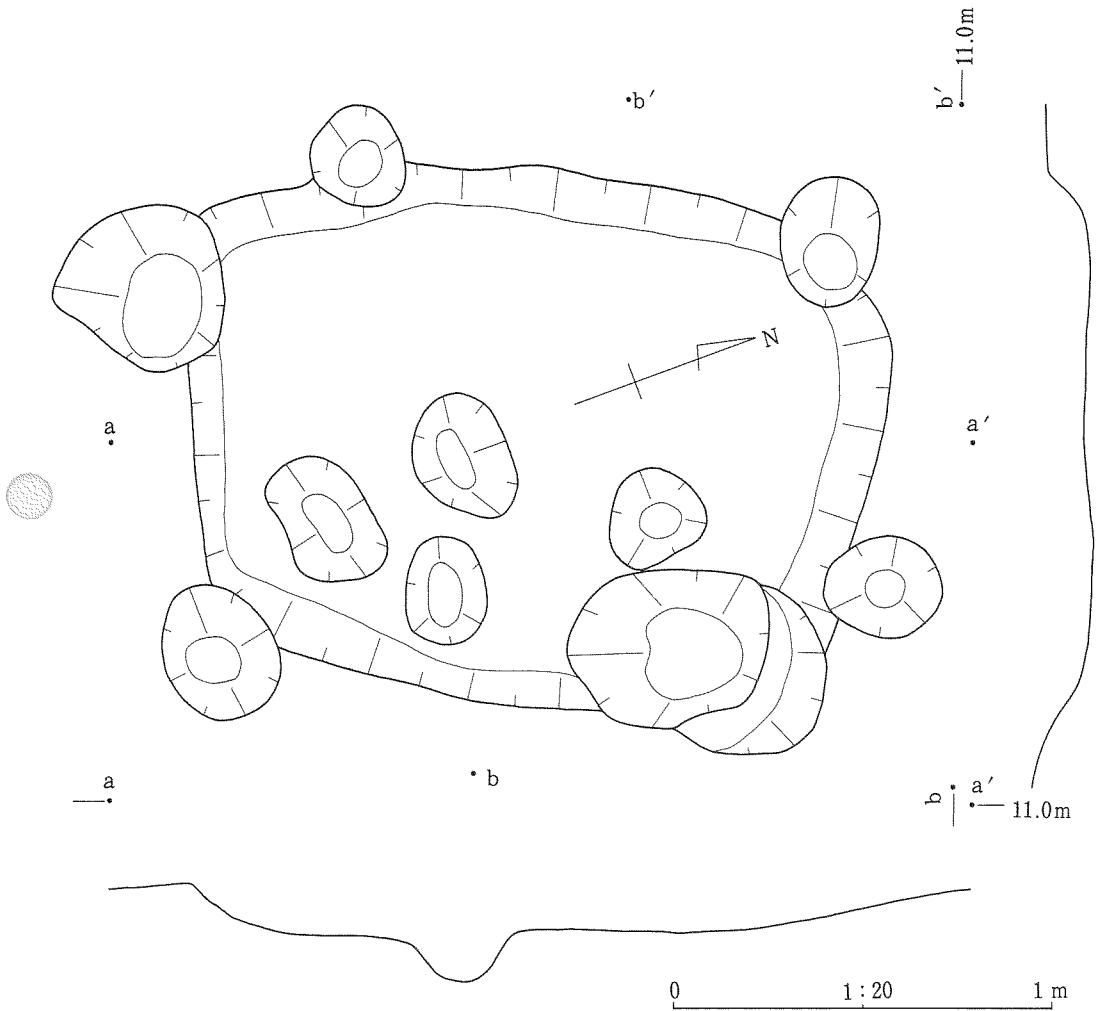
1.8m×1.4mの平面規模をもつ土坑。隅丸長方形に近い平面形状を呈し、長軸方位をN-29°-Eにとる。検出面からの深さは0.15 mで、埋土は明褐色土。形状からみて、土坑墓の可能性はあるが、人骨や副葬品を確認できないため、断定できない。

S K 92出土遺物

13点/0.40個体の遺物の出土があるが、小片ばかりであり、意図的に埋納されたものとは考えにくい。内訳は、尾張系山茶碗6点/0.15個体（碗のみ）、東濃系山茶碗6点/0.15個体（碗のみ）、土師器皿1点/0個体（口縁部なし）である。



写真29 SK92



第59図 SK92平面・断面図

● SK104

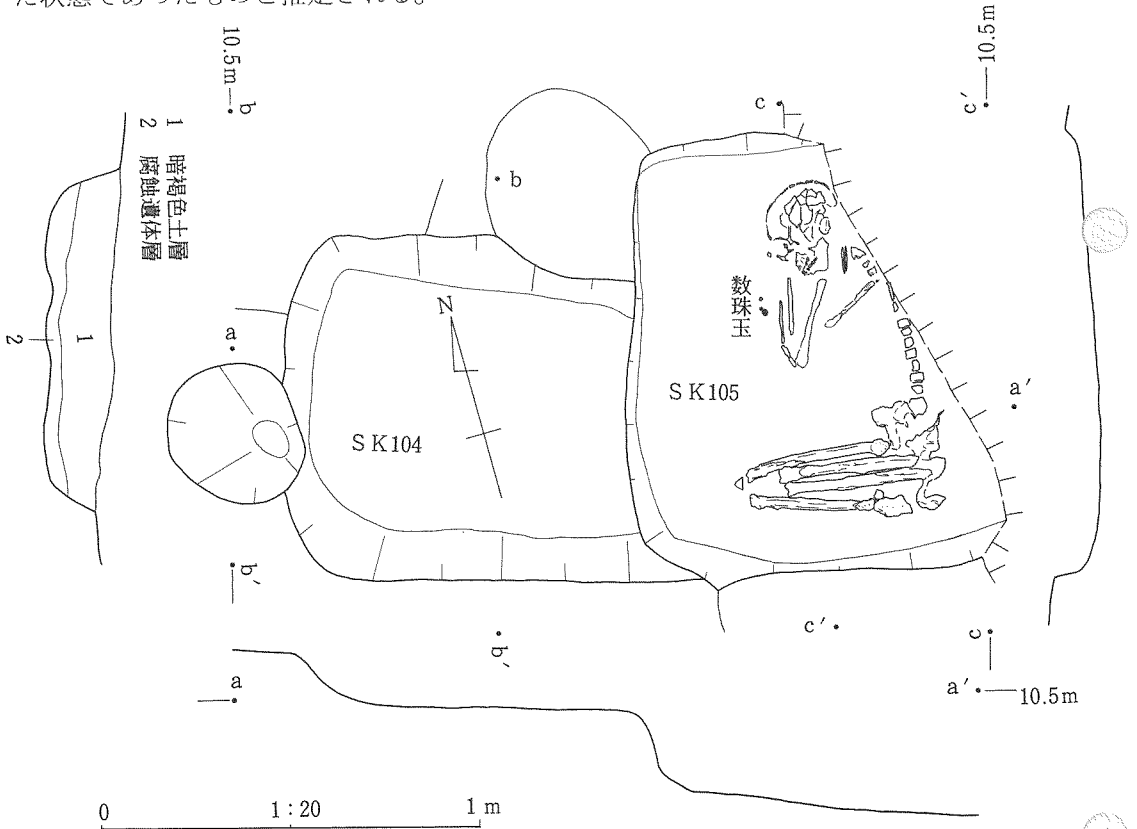
長辺1.1m以上、短辺0.9m、深さ0.15mの平面隅丸長方形土坑。遺構の長軸方位はN-70°-Wで、埋土は暗褐色土。副葬品は確認できなかったが、土坑底面に腐食した遺体の脂肪分が5cmほどの厚さで堆積し、骨片を含んでいることから考えて土坑墓とみて間違いない。遺構の北西端でSK78、東側でSK105と切り合う関係にあり、埋土の観察から時間的な前後関係はSK78→SK104→SK105と考えられた。

SK104出土遺物

東濃系山茶碗2点/0.15個体（碗のみ）、土師器鍋1点/0個体（胴部片のみ）が出土しているが、いずれも小片であり、埋葬時の混入であろう。

S K 105

長辺1.2m、短辺1 m以上の平面隅丸長方形を呈する土坑墓。遺構の長軸方位をN-17°-Eにとる。検出面からの深さは0.35m。埋土は暗褐色土で、土坑底面に脂肪分に覆われたほぼ全身の骨格が遺存していた。遺体は膝を折り、両手を顔の前で合わせた状態で、横臥させられており、腕の骨の脇からは数珠玉が出土している。おそらく、数珠を持って合掌した状態であったものと推定される。



第60図 S K 104・105平面・断面図



写真30 SK105

S K 105出土遺物

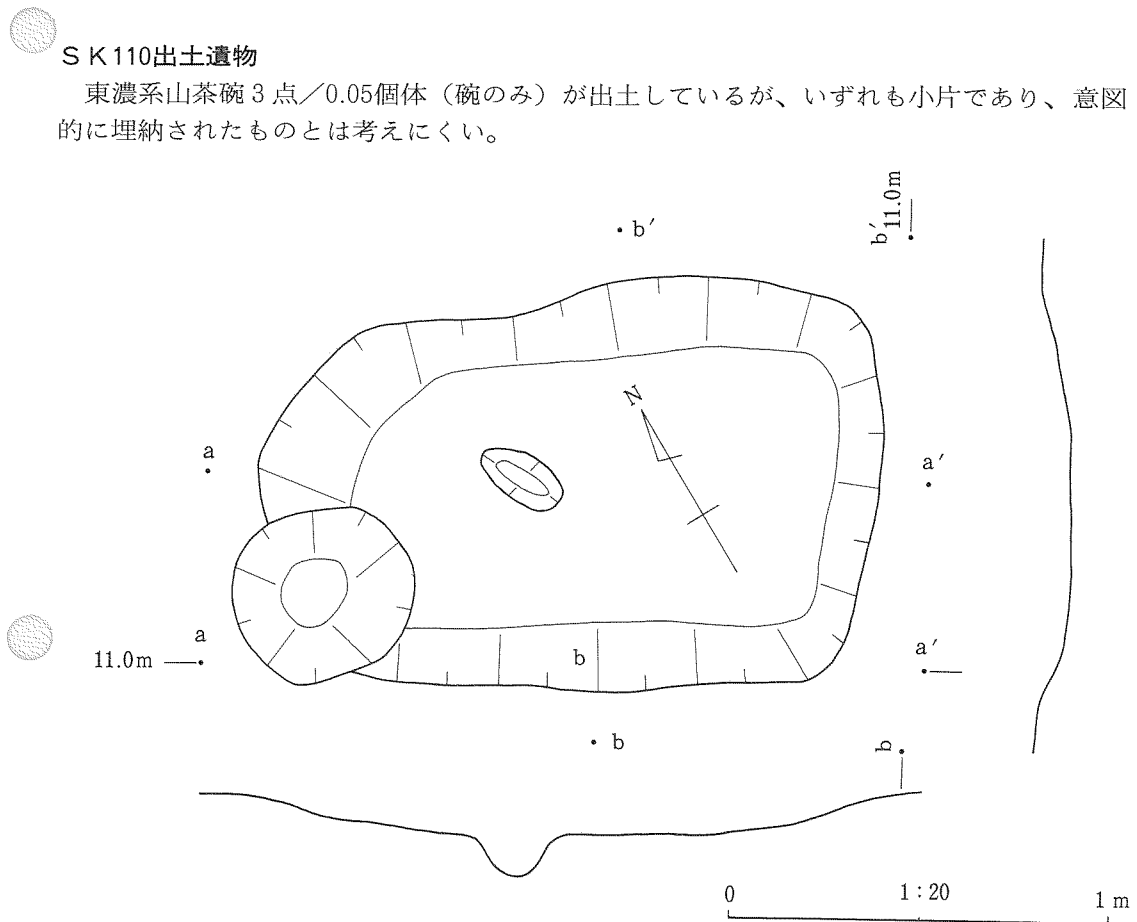
副葬品として、水晶製数珠玉1点と木製数珠玉2点が出土している。1組の数珠としては玉の数が少な過ぎるが、木製の玉は遺存状態が悪く、大半が腐食してしまったものと考えられる。このほか、土器・陶磁器類として東濃系山茶碗1点/0.05個体(碗)、土師器皿2点/0個体(大皿Ⅱ a 0.025未満)、土師器鍋1点/0.05個体(羽釜A 0.05)の都合4点/0.10個体が出土しているが、いずれも小片であり、埋葬時の混入と考えられる。

S K 110

1.6m×1.1mの隅丸長方形に近い平面形状の土坑。遺構の長軸方位はN-60°-W、検出面からの深さは0.1m。形状からみて、土坑墓の可能性はあるが、人骨や副葬品を確認できないため、断定できない。

S K 110出土遺物

東濃系山茶碗3点/0.05個体(碗のみ)が出土しているが、いずれも小片であり、意図的に埋納されたものとは考えにくい。



第61図 S K 110平面・断面図

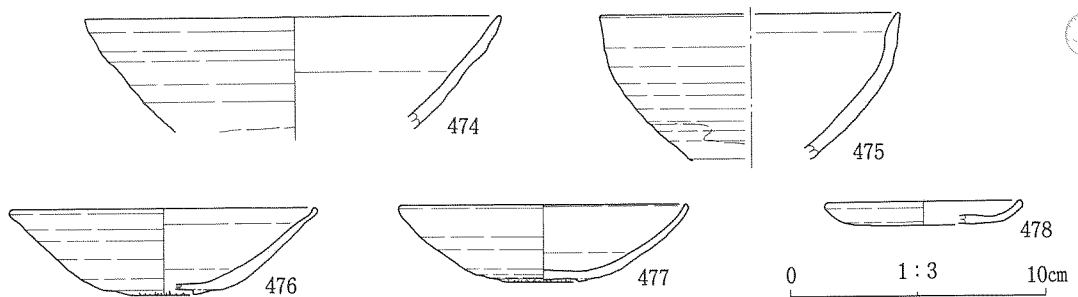
S K 111

長辺2.6m以上、短辺0.9mの平面隅丸長方形を呈する土坑。検出面からの深さは0.2m。遺構の長軸方位はN-48°-Eで、西南端をS D 49に切られる。

S K 111出土遺物

17点／1.40個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器 5点／0.45個体（天目茶碗 2／0.15、平碗 3／0.30）、東濃系山茶碗 11点／0.95個体（碗 9／0.60、小皿 2／0.35）、青磁 1点／0個体（碗）である。

瀬戸美濃陶器は天目茶碗・平碗とも後1・2期に属するもので、古瀬戸後期の中でも比較的早い時期に位置付けられる。



第62図 S K 111出土遺物実測図

第3節 その他の遺構・包含層

SX01

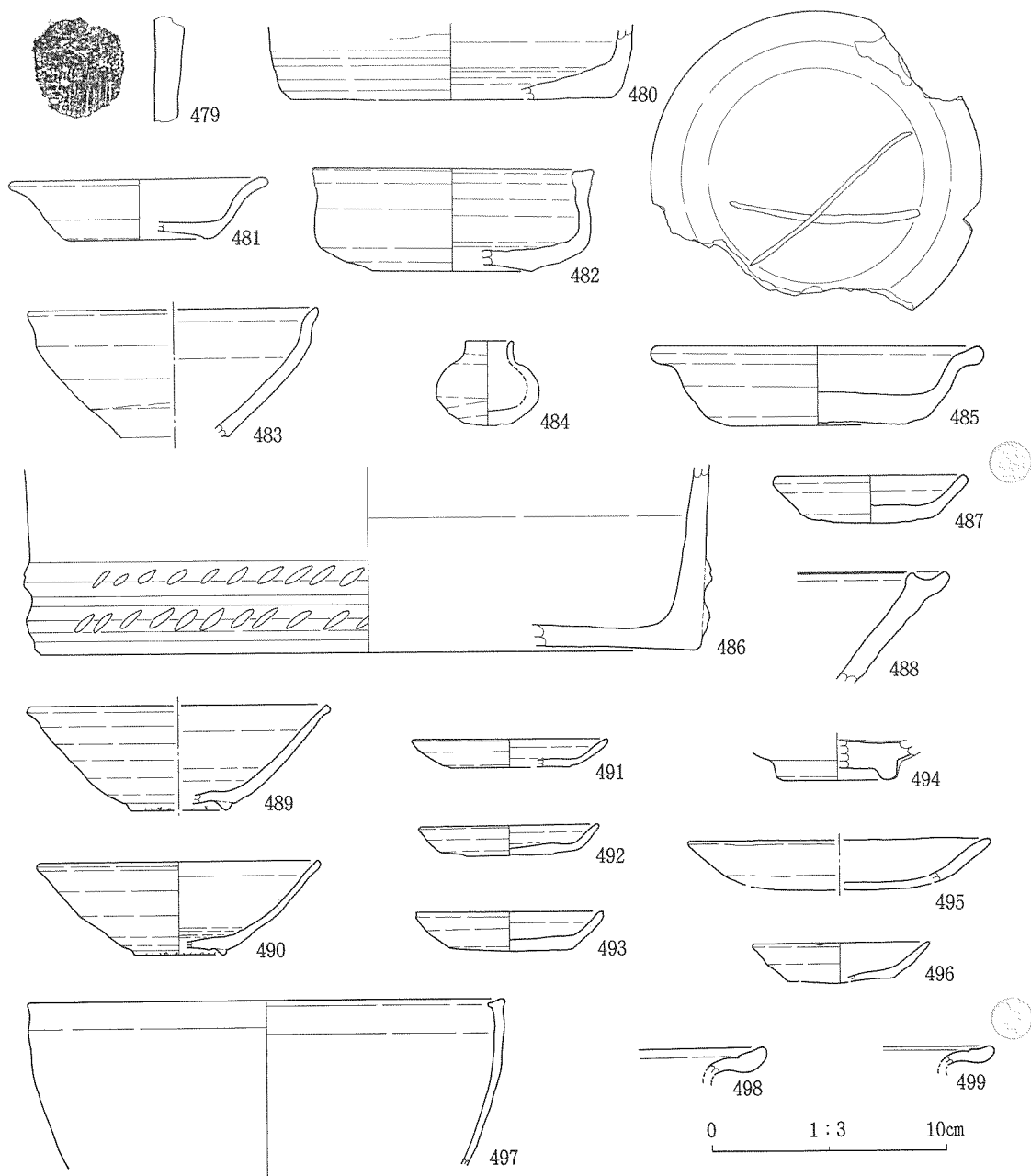
11Mグリッドに形成されていた小貝層。1m×1mほどの広がりをもつが、明確な掘り込みは認められなかった。ブロックサンプル（非定量）を水洗選別した結果、オオタニシ320個体、アカニシ2個体、カワシンジュガイの小片、魚骨（脊椎骨）、魚鱗、小動物骨（下顎骨ほか）などが確認された。

小土坑（P i t）

VII層上面で、柱穴状の小土坑を多数検出しているが、時期を確定できない。建物・柵列を構成している可能性もあるが、配置に規則性を見い出すことができなかった。

その他の遺構・包含層出土遺物

瀬戸美濃陶器・尾張系山茶碗・東濃系山茶碗・青磁・土師器皿・土師器鍋などがある。



第63図 その他の遺構・包含層出土遺物実測図

第2表 中世遺物一覽表(1)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高台	釉薬	備考
38	SD01	3E4E	瀬戸美濃陶器	播鉢	31.1	13.3	9.8	錆	櫛目磨耗
39	SD01	2J	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
40	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
41	SD01	2I	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
42	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
43	SD01		瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
44	SD01		瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
45	SD01		瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
46	SD01		瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
47	SD01	3D4D	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
48	SD01		瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
49	SD01		瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.4	5.7	4.1	鉄+錆	化粧掛有
50	SD01	3F3G	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.5	5.9	4.1	鉄+錆	化粧掛有
51	SD01	2J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.5	7	4.2	鉄	化粧掛無
52	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.7			鉄	化粧掛無
53	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.3			鉄	化粧掛無
54	SD01	3F	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	12.1			鉄	化粧掛無
55	SD01	3G	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	12.2			鉄+錆	化粧掛有
56	SD01	2J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.8			鉄+錆	化粧掛有
57	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			4	鉄	化粧掛無
58	SD01	2J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			4.1	鉄+錆	化粧掛有
59	SD01	3E	瀬戸美濃陶器	端反皿	10.6	2.7	6	灰	見込みに印花
60	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.8	2.9	6	灰	外底に輪トチ痕
61	SD01	3M	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.1	2.7	6.1	灰	
62	SD01	3F3G	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.6	2.6	6.1	灰	外底に窯道具融着
63	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.9	2.8	6.5	灰	外底に輪トチ痕
64	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.8	2.5	6.1	灰	外底に輪トチ痕
65	SD01	3G	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.3	2.3	5.3	灰	
66	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	丸皿	8.6	2.3	4.5	灰	
67	SD01	3H	瀬戸美濃陶器	丸皿	9.9	2.2	6.1	灰	
68	SD01	3H	瀬戸美濃陶器	丸皿	10.3	2.8	5.4	灰	内禿皿
69	SD01	3C3D	瀬戸美濃陶器	端反皿	11.3	2.4	5.9	鉄	
70	SD01	3E	瀬戸美濃陶器	稜皿	9.7	2	5.6	鉄	
71	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	小皿	10	1.8	6.8	鉄	見込みにピン?痕
72	SD01	3E4E	瀬戸美濃陶器	稜皿	10.2	1.4	5.4	鉄	
73	SD01		瀬戸美濃陶器	縁釉皿	10.1	2.3	5.1	鉄+錆	化粧掛有, 見込みに印花
74	SD01		瀬戸美濃陶器	重圈皿	10.4	2.2	4.3		
75	SD01	2K	瀬戸美濃陶器	重圈皿	10.3	2.4	4.4		
76	SD01	2K	瀬戸美濃陶器	重圈皿	9.9	2.7	4.6		
77	SD01	3E	瀬戸美濃陶器	重圈皿	10	2.5	4		
78	SD01	3F	瀬戸美濃陶器	重圈皿	9.8	2.3	3.9		
79	SD01	3E	瀬戸美濃陶器	重圈皿	9.5	2.1	4.4		
80	SD01		瀬戸美濃陶器	重圈皿	10.4	2.5	5.2		外底に墨書
81	SD01	2J	瀬戸美濃陶器	茶入	4.1	6.6	4.3	鉄	2次被熱
82	SD01	3C3D	瀬戸美濃陶器	茶入			4.4	鉄	
83	SD01	2I2J	瀬戸美濃陶器	茶入			4.4	鉄	
84	SD01	2J	瀬戸美濃陶器	徳利			11.8	鉄+錆	化粧掛有
85	SD01		瀬戸美濃陶器	四耳壺			8.9	灰	
86	SD01	3G	瀬戸美濃陶器	四耳壺			11.3	灰	
87	SD01		瀬戸美濃陶器	瓶子				灰	外面に画花文

第3表 中世遺物一覽表(2)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高台	釉薬	備考
88	SD01		瀬戸美濃陶器	桶?	21.9			鉄	
89	SD01		瀬戸美濃陶器	口広耳付壺				鉄	
90	SD01	3H	瀬戸美濃陶器	片口?	12.2	8.2	9.8	鉄	
91	SD01	2K	瀬戸美濃陶器	鉢?			11.1	鉄	内面に降灰
92	SD01		瀬戸美濃陶器	サヤ			12.1	錆	外底にスス附着
93	SD01	2I2J	常滑陶器	甕			18.3		
94	SD01	3D4D	常滑陶器	甕					
95	SD01		常滑陶器	壺			8		
96	SD01	3E	尾張系山茶碗	碗	13.4	5.5	5		高台に粉殻痕
97	SD01		尾張系山茶碗	碗	13.3	5.1	5.6		高台に粉殻痕
98	SD01	2I2J	尾張系山茶碗	碗			5		高台に粉殻痕
99	SD01	3E	尾張系山茶碗	碗			7		高台に粉殻痕
100	SD01		尾張系山茶碗	碗			7.4		高台に粉殻痕
101	SD01	3E4E	尾張系山茶碗	碗			5.8		高台に粉殻痕
102	SD01	3F	尾張系山茶碗	小皿	8.2	1.5	5.4		口縁部に降灰
103	SD01	2K	東濃系山茶碗	碗	13.2				
104	SD01	3E4E	東濃系山茶碗	小皿	7.8	0.9	4.7		
105	SD01	2J	東濃系山茶碗	陶丸					直径2.3cm
106	SD01		青磁	碗				青磁	細連弁文
107	SD01	3F	青花磁器	碗	11.8	5.8	4.3	染付	
108	SD01	2K	青花磁器	端反皿				染付	
109	SD01	2K	土師器	大皿Ⅱc	10.6	2.2			
110	SD01	2J	土師器	大皿Ⅱd	10.7	2.5	4.8		
111	SD01	3H	土師器	中皿Ⅱc	7.8	1.4	4.5		
112	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5.4				
113	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5.3				外底に板状圧痕
114	SD01		土師器	小皿Ⅰb	5.3				
115	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5.1				
116	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5.2				
117	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	4.7				
118	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5				
119	SD01	2J	土師器	小皿Ⅰb	5.2				
120	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	4.9				
121	SD01	3E	土師器	小皿Ⅰb	5				
122	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5.3				
123	SD01	3F	土師器	小皿Ⅰb	4.9				
124	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5.2				
125	SD01	3G	土師器	小皿Ⅰb	4.7				
126	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	4.9				
127	SD01	3G	土師器	小皿Ⅰb	5.5				
128	SD01	2I2J	土師器	小皿Ⅰb	5				
129	SD01	2J	土師器	土鈴					
130	SD01	3H	土師器	鍋B	23.3				
131	SD01	3E4E	土師器	鍋B	24.4				
132	SD01	2I2J	土師器	鍋B	24.6				
133	SD01	2J	土師器	鍋B	22.4				
134	SD01	2I2J	土師器	鍋B	21.6				
135	SD01	2I2J	土師器	鍋B	19.8	9.9			
136	SD01	2I2J	土師器	鍋B	20.7				
137	SD01	2I2J	土師器	鍋B	19.4				

第4表 中世遺物一覽表(3)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高台	釉薬	備考
138	SD01	2I2J	土師器	鍋C	32.1				
139	SD01	2J	土師器	鍋C	33.5				
140	SD01	2I2J	土師器	鍋C	36.3				
141	SD01	2J	土師器	羽釜B	37				
142	SD01	2I2J	土師器	羽釜B	33.9				
143	SD01	3E	土師器	羽釜B					
144	SD01	2E3E	土師器	羽釜B	39.5				
145	SD01	2J	土師器	羽釜B	37.8				
146	SD01	2J	土師器	茶釜A	13.8	16.8			
147	SD01	2I2J	土師器	茶釜A	14.4				
148	SD01	2I2J	土師器	茶釜A	12.7				
149	SD01	2J	土師器	茶釜B	15.6	16.2			
150	SD01	3G	いぶし瓦	丸瓦					コビキA, 吊紐痕, 縄タタキ後ナデ
151	SD01	3E	いぶし瓦	丸瓦					コビキB
152	SD01		いぶし瓦	丸瓦					コビキA, 刺子痕
153	SD01	3H	いぶし瓦	平瓦					コビキA
154	SD01	3G	いぶし瓦	鬼瓦					
155	SD01	3G	石製品	砥石					
156	SD01	2I2J	石製品	石臼					上白
157	SD01	2E3E	石製品	石臼					上白
158	SD01	3H	鉄製品	鉄釘					
159	SD01	3H	鉄製品	鉄釘					
160	SD01		銅製品	銅銭					元祐通寶(1086年初鑄)
161	SD02	5D5E	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
162	SD02	5E	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
163	SD02	6E	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
164	SD02	7E	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.9	4.1		鉄+錆	化粧掛有
165	SD02	5D5E	瀬戸美濃陶器	丸碗	11.8			灰	
166	SD02	6E	瀬戸美濃陶器	重圈皿	10.9				
167	SD02	5D5E	瀬戸美濃陶器	卸皿				灰	
168	SD02	5E	瀬戸美濃陶器	皿				鉄+錆	化粧掛有
169	SD02		瀬戸美濃陶器	筒形容器	9.7			鉄	
170	SD02	6E	瀬戸美濃陶器	口広耳付壺				鉄	
171	SD02	5D6E	瀬戸美濃陶器	德利	4.8	18.2		鉄+錆	化粧掛有
172	SD02	6E	瀬戸美濃陶器	德利				鉄+錆	化粧掛有
173	SD02	6E7F	瀬戸美濃陶器	德利				鉄+錆	化粧掛有
174	SD02	6E	東濃系山茶碗	碗	10.6	2.8			
175	SD02	6E	東濃系山茶碗	小皿	7.8	1.2			
176	SD02	5E6E	土師器	特大皿Ⅱc	15.5	2.9			
177	SD02	6E	土師器	大皿Ⅱc	12.5	2.4			
178	SD02	5E6E	土師器	大皿Ⅱc	12	2.2			内面にスス
179	SD02	5E6E	土師器	大皿Ⅱc	10	1.9			
180	SD02	5E6E	土師器	大皿Ⅰd	11.3	2			
181	SD02	7E	土師器	中皿Ⅱc	7.8	1.8	4.4		油煙付着
182	SD02	5E6E	土師器	小皿Ⅰa	5.1				
183	SD02	6E	土師器	小皿Ⅰa	5.4				
184	SD02	6E	土師器	小皿Ⅰa	5.7				
185	SD02	6E	土師器	小皿Ⅰa	4.9				外底に板状圧痕
186	SD02	5E6E	土師器	小皿Ⅰa	5.3				
187	SD02	6E	土師器	小皿Ⅰa	5.3				

第5表 中世遺物一覽表(4)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
188	SD02	5E6E	土師器	小皿 I a	5.2				
189	SD02	6E	土師器	小皿 I a	5.4				
190	SD02	5E6E	土師器	小皿 I a	5.3				
191	SD02	6E	土師器	小皿 I a	5.1				外底に板状圧痕
192	SD02	7E	土師器	小皿 I a	5.5				
193	SD02	7E	土師器	鍋B	26.4	13.5			
194	SD02	6E	土師器	鍋B	25.7				
195	SD02	6E	土師器	鍋B	27.5				
196	SD02	5D	鉄製品	毛抜き					
197	SD03	3D3E	土師器	大皿 II a	12.4	2.2			
198	SD03	1D	瓦器	火鉢?					
199	SD19	6G	瀬戸美濃陶器	徳利			11	鉄+錆	
200	SD19	5G	東濃系山茶碗	碗	11.5		5		
201	SD19	6G	東濃系山茶碗	小皿	8	0.7	5.1		内面磨耗
202	SD19	5G	土師器	大皿 II a	11.4	2.1	5.2		
203	SD19	7G	土師器	鍋B					
204	SD39	10L	東濃系山茶碗	碗	12.7				
205	SD43	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢	29			錆	
206	SD44A	11N	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.7			鉄+錆	化粧掛有
207	SD44A	11N	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			4.3	鉄+錆	化粧掛有
208	SD44A	10N	瀬戸美濃陶器	皿			4.6	灰	
209	SD44A	11N	瀬戸美濃陶器	鉢				錆	
210	SD44A	11N	瀬戸美濃陶器	内耳鍋				錆	
211	SD44A	11N	瀬戸美濃陶器	直縁大皿				鉄	
212	SD44A	10N	土師器	羽釜B					
213	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
214	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
215	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
216	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
217	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
218	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
219	SD44B	10N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
220	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.7			鉄+錆	化粧掛有
221	SD44B	9N	瀬戸美濃陶器	丸碗				灰	細蓮弁文
222	SD44B	10N	瀬戸美濃陶器	瓶子	4.2			灰	
223	SD44B	11N	瀬戸美濃陶器	四耳壺			12.6	灰	
224	SD44B	10N	瀬戸美濃陶器	口広耳付壺	14.7			鉄	スス付着
225	SD44B	10N	瀬戸美濃陶器	碗形鉢	29.7	10.8	8.6	灰	
226	SD44B	12N	瀬戸美濃陶器	仏供			5.4	鉄	外底に墨書
227	SD44B	11N	東濃系山茶碗	碗	12.8				
228	SD44B	11N	東濃系山茶碗	小皿	7.9	1	5.4		
229	SD44B	11N	東濃系山茶碗	陶丸					直径2.2cm
230	SD44B	11N	青磁	皿				青磁	龍泉窯系青磁皿I類
231	SD44B	12N	土師器	大皿 II a	13	2.3	7.4		
232	SD44B	11N	土師器	小皿 II a	7.2	1.6	3.4		
233	SD44B	11N	土師器	鍋B	24.4				スス付着
234	SD44B	11N	土師器	鍋B	23.5				
235	SD44B	11N	石製品	五輪塔					空風輪
236	SD44B	12D	石製品	五輪塔					火輪
237	SD44	11N	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	

第6表 中世遺物一覽表(5)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高台	釉薬	備考
238	SD44	8M	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.2			鉄+錆	外面スス付着
239	SD44	8M	瀬戸美濃陶器	茶入			3	鉄	
240	SD44	8M	瀬戸美濃陶器	口広耳付壺	14.2	15.4	10.9	鉄	
241	SD44	8M	瀬戸美濃陶器	折縁深皿				灰	
242	SD44	8M	瀬戸美濃陶器	折縁中皿				灰	
243	SD44		瀬戸美濃陶器	内耳鍋				錆	
244	SD44	11N	常滑陶器	甕					
245	SD44	11N	青花磁器	碗				染付	
246	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.2				
247	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.2				
248	SD44	8M	土師器	小皿I a	5				
249	SD44	8M	土師器	小皿I a	4.9				
250	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.2				
251	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.1				
252	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.1				
253	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.1				
254	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.3				
255	SD44	8M	土師器	小皿I a	5.3				
256	SD46	12P	瀬戸美濃陶器	端反碗	10.6			灰	内外面にタール付着
257	SD46	12O	瀬戸美濃陶器	重圈皿	9.9	2.4	4.1		
258	SD46	12O	瀬戸美濃陶器	徳利			9.9	鉄+錆	土師器皿入り
259	SD46	12O	瀬戸美濃陶器	壺	3.7			鉄	
260	SD46	12O	東濃系山茶碗	小皿	8.8	1.1	5.5		
261	SD46	12O	土師器	大皿II c	12	2.2	5.8		
262	SD46	12P	土師器	大皿II c					体部に穿孔
263	SD46	12O	土師器	中皿II c	8	2.2	4.2		口広耳付壺入り
264	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.4				口広耳付壺入り
265	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.2				口広耳付壺入り
266	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.2				口広耳付壺入り
267	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.5				口広耳付壺入り
268	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.1				
269	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.6				
270	SD46	12P	土師器	小皿I a	6				
271	SD46	12P	土師器	小皿I a	5.9				
272	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.7				
273	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.1				
274	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.4				
275	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.5				
276	SD46	12P	土師器	小皿I a	5.9				
277	SD46	11O	土師器	小皿I a	5.8				
278	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.3				
279	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.5				
280	SD46	12P	土師器	小皿I a	5.8				
281	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.3				
282	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.2				
283	SD46	12O	土師器	小皿I a	5.5				
284	SD46	12P	土師器	小皿I a	5.8				
285	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.1				
286	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.1				
287	SD46	12P	土師器	小皿I a	6.1				

第7表 中世遺物一覽表(6)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
288	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6				
289	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.9				
290	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.7				
291	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.5				
292	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.8				
293	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.6				
294	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.7				
295	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.7				
296	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6.1				
297	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.9				
298	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6				
299	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6				
300	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.3				
301	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.8				
302	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.7				
303	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.7				
304	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.5				
305	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6.1				
306	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.6				
307	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.7				
308	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.9				
309	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.8				
310	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6				
311	SD46	12O	土師器	小皿 I a	5.5				
312	SD46	12P	土師器	小皿 I a	5.9				
313	SD46	12P	土師器	小皿 I a	6.2				
314	SD46	12O	土師器	鍋B	24.9				
315	SD46	12O	いぶし瓦	丸瓦					
316	SD47	6K	瀬戸美濃陶器	花瓶			1.8	灰	
317	SD47	6K	常滑陶器	甕					
318	SD47	5K	東濃系山茶碗	小碗			4.7		高台に粉殻痕, 外底に板状圧痕, 内面磨耗
319	SD47	5J	尾張系山茶碗	碗			4		高台に粉殻痕, 内面磨耗
320	SD47	6K	東濃系山茶碗	碗					
321	SD50	5J	東濃系山茶碗	陶丸					直径2.2cm, 表面磨耗
322	SD50	6K	土師器	小皿 II a	7.1	1.7	3.1		口縁部にタール附着
323	SD50	6K	土師器	小皿 II a	7.6	1.9	4.4		口縁部にタール附着
324	SD54	5J	尾張系山茶碗	小皿	7.7	1.6	4.7		底部に板状圧痕, 瀬戸窯
325	SD48	7K	瀬戸美濃陶器	壺			10	鉄灰	体部下方に焼成後穿孔, 頸部欠損
326	SD48	7K	瀬戸美濃陶器	折縁深皿					
327	SD48		常滑陶器	甕					
328	SD48	8K	東濃系山茶碗	碗	13	4.3	4		高台に粉殻痕
329	SD48	8K	東濃系山茶碗	小皿	7.6	1.3	3.6		
330	SD48	8K	青磁	碗				青磁	鍋蓮弁文, 龍泉窯系青磁碗 I 5類
331	SD48	7K	土師器	大皿 II a	11.5	2.1	4.9		
332	SD48	8K	土師器	中皿 I a	6	1.2			
333	SD48	8K	土師器	中皿 I b	6.8	1.5			
334	SD48	7K	土師器	鍋B	23.6				
335	SD49	8I	瀬戸美濃陶器	擂鉢	28.6	12.2	9.2	錆	内面著しく磨耗
336	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	12.7			鉄+錆	化粧掛有
337	SD49	8I	瀬戸美濃陶器	平碗			4.7	灰	

第8表 中世遺物一覽表(7)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高台	釉薬	備考
338	SD49		瀬戸美濃陶器	茶入			3.6	灰	
339	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	縁釉皿	12.5	3	4.7	鉄	
340	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	縁釉小皿	11.2			灰	
341	SD49	7I	瀬戸美濃陶器	卸皿				灰	
342	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	香炉	9.7	2.9	4.8	鉄	
343	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	瓶子	3.7			鉄	
344	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	瓶子			9.4	鉄	
345	SD49	7J8K	瀬戸美濃陶器	花瓶	5.3			鉄	
346	SD49	7K	瀬戸美濃陶器	口広耳付壺	13.6			鉄	
347	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	鉢?	12.2			鉄	
348	SD49	7J	瀬戸美濃陶器	仏餉具?				鉄	
349	SD49		東濃系山茶碗	小皿	7.6	1.5	4		
350	SD49	7J	東濃系山茶碗	小皿	6.1	1.2	3.1		
351	SD49	7I	東濃系山茶碗	小皿	7.7	1.2	5		外底に板状圧痕
352	SD49	7J	東濃系山茶碗	小皿	7.9	1	4.2		内面に墨
353	SD49	7K	東濃系山茶碗	小皿	7.9	0.7	4.9		
354	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	8.2	0.9	5.7		
355	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	12.5	2.3	7		
356	SD49		土師器	大皿Ⅱa	12.3	2.3	7.4		
357	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	12.4	2	6.7		
358	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	12	2.2	7.3		
359	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	12.2	2.1	7.2		
360	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	12.8	2.3	7.5		
361	SD49	7J7I	土師器	大皿Ⅱa	12.2	2.4	7.1		
362	SD49	7J	土師器	大皿Ⅱa	12.2	2.2	6		
363	SD49	7J	土師器	中皿Ⅰa	6.9	1.6			
364	SD49	7J	土師器	中皿Ⅱa	7	1.5	4		油煙付着
365	SD49	7I	土師器	中皿Ⅱa	7.2	1.7	4.2		油煙付着
366	SD49	7J	土師器	中皿Ⅱa	7.7	1.6	4		油煙付着
367	SD49	7J	土師器	中皿Ⅱa	7.6	1.5	4		
368	SD49	7J	土師器	鍋B					
369	SD49	7J	土師器	羽釜					
370	SD49	7I	土師器	鍋A					
371	SK09	2E	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
372	SK09	2E	瀬戸美濃陶器	天目茶碗				鉄	
373	SK09	2E	瀬戸美濃陶器	天目茶碗				鉄	化粧掛無
374	SK09	2E	瀬戸美濃陶器	四耳壺	17			灰	
375	SK09	2E	瀬戸美濃陶器	茶入	4.4	7.2	6	錆?	2次被熱
376	SK09	2E	東濃系山茶碗	小碗			5		高台に粉殻痕
377	SK09	2E	土師器	茶釜	15.5				
378	SK09	2E	いぶし瓦	平瓦					コビキA
379	SK09	2E	いぶし瓦	丸瓦					コビキA, 縄タキ後ナデ
380	SK10	3D3E	瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
381	SK10		瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	内面摩耗
382	SK10		瀬戸美濃陶器	搦鉢	30.1	10.8	9.4	錆	内面摩耗
383	SK10		瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
384	SK10		瀬戸美濃陶器	搦鉢				錆	
385	SK10	3D4D	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			3.9	鉄	化粧掛無
386	SK10	3D3E	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11	6.4	3.9	鉄+錆	化粧掛有
387	SK10		瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.8	6.2	4.5	鉄	化粧掛無

第9表 中世遺物一覽表(8)

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
388	SK10		瀬戸美濃陶器	天目茶碗	11.4			鉄+錆	化粧掛有
389	SK10	3D4D	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			4	鉄+錆	化粧掛有
390	SK10	3D3E	瀬戸美濃陶器	直縁大皿				灰	
391	SK10	3D4D	瀬戸美濃陶器	直縁大皿				灰	
392	SK10		瀬戸美濃陶器	折縁中皿	15.9	4.8	9.2	灰	
393	SK10		瀬戸美濃陶器	四耳壺				灰	
394	SK10		瀬戸美濃陶器	桶				鉄	
395	SK10	3D4D	瀬戸美濃陶器	折縁深皿				灰	
396	SK10	3E4E	常滑陶器	大壺	39.4				真焼の焼成
		3D3E							
397	SK10	3D4D	常滑陶器	大壺	38				赤物の焼成
398	SK10	3D4D	尾張系山茶碗		14.5	5.5	6.05		高台に粉殻痕
399	SK10	3D4D	尾張系山茶碗	小皿	7.9	1.7			
400	SK10		尾張系山茶碗	小皿	8	1.5			
401	SK10		東濃系山茶碗	碗	12	4.5	4.1		高台に粉殻痕
402	SK10	3D4D	東濃系山茶碗	碗			4.8		高台に粉殻痕
403	SK10	3D4D	土師器	大皿Ⅱ a	13.4	2.2	7.1		
404	SK10		土師器	大皿Ⅱ a	13.2	2	7.1		
405	SK10		土師器	大皿Ⅱ b	12.6	2.4	6.5		
406	SK10		土師器	大皿Ⅱ b	12.2	2.1	5.6		
407	SK10		土師器	鍋B	19.5				
408	SK10		土師器	羽釜					
409	SK10		鉄製品	鉄釘					
410	SK10		石製品	砥石					
411	SK10		石製品	五輪塔					
412	SK10		石製品	石硯					
413	SK11		瀬戸美濃陶器	丸皿	10.4	2.4	6.4	灰	空風輪 頁岩, 縦14.6cm, 横7.2cm, 厚さ1.7cm
414	SK11		瀬戸美濃陶器	丸皿	9.4	2.6	5	灰	内禿皿, S K09と接合
415	SK11		瀬戸美濃陶器	丸皿	10.5	2.4	6.4	鉄+灰	内禿皿
416	SK11		瀬戸美濃陶器	丸皿	9.3	2.2	5.8	鉄	灰釉流し, 見込みと外底に輪トチ痕
417	SK11		瀬戸美濃陶器	茶入			3.9	鉄	大窯, 見込みにトチ痕
418	SK11		常滑陶器	壺					
419	SK11		いぶし瓦	丸瓦					
420	SK12	5E	東濃系山茶碗	碗	9.9	1.8	3		
421	SK13	6C	東濃系山茶碗	碗	13.6	5.7	6		外底に板状圧痕
422	SK14		瀬戸美濃陶器	重圈皿	10	2.6	4.1		
423	SK14		土師器	小皿Ⅰ a	5.2				
424	SK14	6E	土師器	鍋B	22.9				
425	SK18		瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
426	SK18		青磁	稜花皿			5.6	青磁	内面に文様
427	SK19	5D6E	瀬戸美濃陶器	徳利			13.5	鉄+錆	化粧掛有
428	SK19	6E	土師器	小皿Ⅰ a	5.3				
429	SK22	6G	瀬戸美濃陶器	折縁深皿				灰	
430	SK22	6G	常滑陶器	こね鉢					
431	SK22		尾張系山茶碗	小皿	7.6	1.5	4.7		瀬戸産
432	SK22	6G	東濃系山茶碗	碗	13.2	4.4	4.8		高台に粉殻痕, SK25と接合
433	SK25		土師器	羽釜A	21.8				
434	SK22		土師器	羽釜A					
435	SK70	10M	瀬戸美濃陶器	折縁深皿				灰	
436	SK70	10M	尾張系山茶碗	小皿	8.6	1.6	4.8		

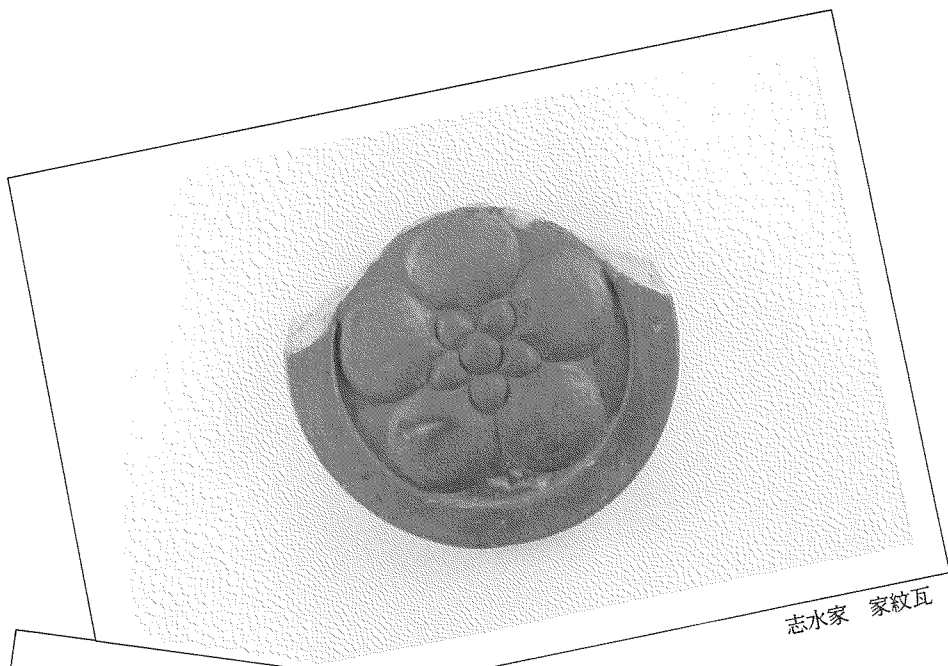
第10表 中世遺物一覽表（9）

No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高胎	釉薬	備考
437	SK79	8J	銅製品	銅錢					祥符通寶 (1009年初鑄)
438	SK79	8J	銅製品	銅錢					天禧通寶 (1017年初鑄)
439	SK79	8J	銅製品	銅錢					嘉祐通寶 (1056年初鑄)
440	SK79	8J	銅製品	銅錢					元豐通寶 (1078年初鑄)
441	SK79	8J	銅製品	銅錢					元祐通寶 (1086年初鑄)
442	SK79	8J	銅製品	銅錢					政和通寶 (1111年初鑄)
443	SK82	8J	銅製品	銅錢					開元通寶 (621年初鑄)
444	SK82	8J	銅製品	銅錢					開元通寶 (621年初鑄)
445	SK82	8J	銅製品	銅錢					咸平元寶 (998年初鑄)
446	SK82	8J	銅製品	銅錢					祥符通寶 (1009年初鑄)
447	SK82	8J	銅製品	銅錢					祥符通寶 (1009年初鑄)
448	SK82	8J	銅製品	銅錢					天禧通寶 (1017年初鑄)
449	SK82	8J	銅製品	銅錢					天聖元寶 (1023年初鑄)
450	SK82	8J	銅製品	銅錢					天聖元寶 (1023年初鑄)
451	SK82	8J	銅製品	銅錢					皇宋通寶 (1038年初鑄)
452	SK82	8J	銅製品	銅錢					皇宋通寶 (1038年初鑄)
453	SK82	8J	銅製品	銅錢					皇宋通寶 (1038年初鑄)
454	SK82	8J	銅製品	銅錢					熙寧元寶 (1068年初鑄)
455	SK82	8J	銅製品	銅錢					熙寧元寶 (1068年初鑄)
456	SK82	8J	銅製品	銅錢					熙寧元寶 (1068年初鑄)
457	SK82	8J	銅製品	銅錢					元豐通寶 (1078年初鑄)
458	SK82	8J	銅製品	銅錢					元豐通寶 (1078年初鑄)
459	SK82	8J	銅製品	銅錢					元豐通寶 (1078年初鑄)
460	SK82	8J	銅製品	銅錢					元豐通寶 (1078年初鑄)
461	SK82	8J	銅製品	銅錢					元祐通寶 (1086年初鑄)
462	SK82	8J	銅製品	銅錢					元祐通寶 (1086年初鑄)
463	SK82	8J	銅製品	銅錢					紹聖元寶 (1092年初鑄)
464	SK82	8J	銅製品	銅錢					紹聖元寶 (1092年初鑄)
465	SK82	8J	銅製品	銅錢					聖宋元寶 (1101年初鑄)
466	SK82	8J	銅製品	銅錢					聖宋元寶 (1101年初鑄)
467	SK82	8J	銅製品	銅錢					永樂通寶 (1408年初鑄)
468	SK82	8J	銅製品	銅錢					永樂通寶 (1408年初鑄)
469	SK82	8J	銅製品	銅錢					永樂通寶 (1408年初鑄)
470	SK82	8J	銅製品	銅錢					永樂通寶 (1408年初鑄)
471	SK82	8J	銅製品	銅錢					永樂通寶 (1408年初鑄)
472	SK82	8J	銅製品	銅錢					鏹錢
473	SK88	6K	青花磁器	碗				染付	
474	SK111	8I	瀬戸美濃陶器	平碗	16.4			灰	
475	SK111	8I	瀬戸美濃陶器	天目茶碗				鉄	化粧掛無
476	SK111	8I	東濃系山茶碗	碗	11.9	3.4	3.6		高台に粗殻痕
477	SK111	8I	東濃系山茶碗	碗	11.2	3.1	3.4		高台に粗殻痕
478	SK111	8I	東濃系山茶碗	小皿	7.6	0.9	4.1		
479	包含層	4L	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	加工円盤
480	SK71		瀬戸美濃陶器	德利?			13.9	鉄+錆	
481	包含層	6J	瀬戸美濃陶器	稜皿	10.7	2.6	6	鉄	輪トチ痕
482	包含層	5J	瀬戸美濃陶器	サヤ	12	4.4	6.8		
483	SK69	11L	瀬戸美濃陶器	天目茶碗				鉄+錆	
484	包含層	5I	瀬戸美濃陶器	茶入	1.9	3.6		鉄+錆	
485	包含層	7K	瀬戸美濃陶器	サヤ(蓋)	13.7	3.5	7.8		
486	包含層	10M	瀬戸美濃陶器	桶			28	鉄	

第11表 中世遺物一覽表 (10)

No.	遺構	Gr.	種別 (産地・材質等)	器種	口径	器高	底/高	釉薬	備考
487	包含層	4I	尾張系山茶碗	鉢	8.1	2	5.1		
488	包含層	3K	尾張系山茶碗	こね鉢					
489	SK90	7I	東濃系山茶碗	碗					高台に粉殻痕
490	SK92	5I	東濃系山茶碗	碗	11.9	4	3.8		高台に粉殻痕
491	SK100	2L	東濃系山茶碗	小皿	8.3	1.2	5.1		
492	SK100	2L	東濃系山茶碗	小皿	7.6	1.3	4		
493	SD18	7F	東濃系山茶碗	小皿					
494	包含層	5I6J	青磁	碗			4.5	青磁	龍泉窯系青磁碗 I 類
495	包含層	5I	土師器	大皿 I a					
496	SK91	8J	土師器	小皿 II a	7.4	1.8	4.5		
497	SK96	4K	土師器	鍋B	20.2				
498	包含層	4L	土師器	鍋A					
499	包含層	11N	土師器	鍋A					

第6章 近世の遺構と遺物



志水家 家紋瓦



將軍家 靈屋瓦

第6章 近世の遺構と遺物

近世の遺構には、IV層上面から掘り込まれているものと、VI層上面から掘り込まれ、V層に覆われているものがある。したがって、これを以って近世1期（VI層上面）・2期（IV層上面）と時期区分することができる。但し、個々の遺構のすべてについて掘り込み面を確認してはいないので、遺構の時期決定については、出土遺物も参考にする必要がある。この場合、遺構の時期の判定は、出土量が相対的に多く、最も普遍的に出土する瀬戸美濃陶器の編年（藤澤1986～1989）によっている。

また、VI層上面から掘り込まれている近世遺構については、層位論的な所見からのみでは中世遺構との判別が困難であるため、遺構の平面的な切り合い関係と出土遺物によって区別することとし、瀬戸美濃陶器の志野の出現（大窯第4段階）を一つの目安とした。

なお、遺物の分類・計測・記述方法については基本的に前章に準拠している。



写真31 後半調査区上面全景

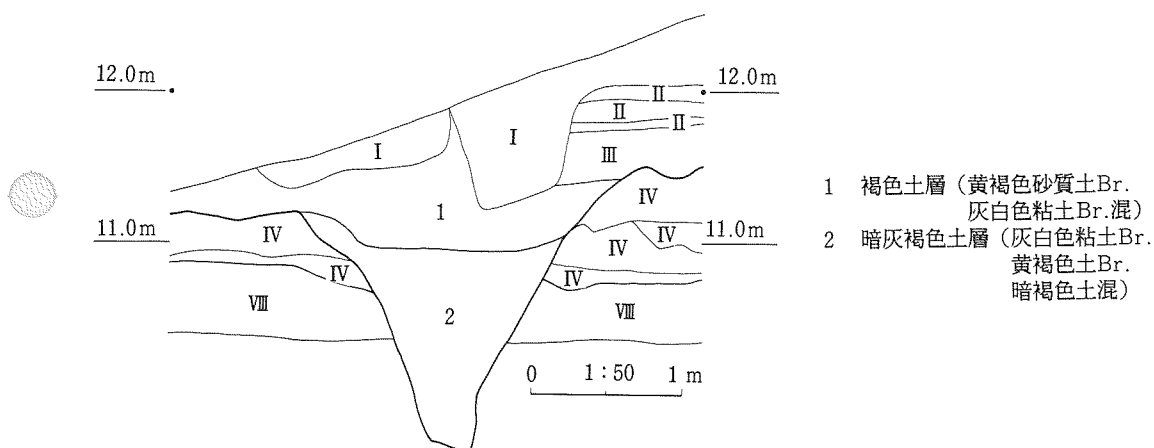


第64図 近世遺構配置図 (1:400)

第1節 溝

S D 15

幅2m、深さ1.8mで、主軸方位をほぼ東西方向にとる溝。断面は逆台形であるが、溝底幅は0.3mとごく狭く、葉研堀に近い形状を呈する。遺構の掘り込み面はIV層上面で、近世2期に属することが明らかである。



第65図 S D 15土層断面図

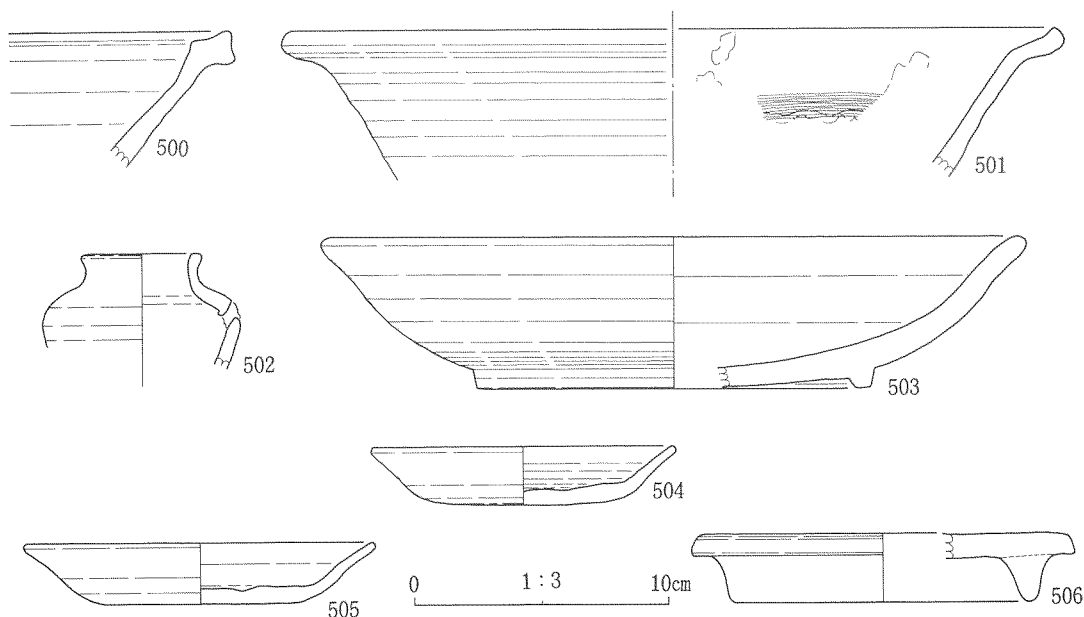


写真32 SD15

S D 15出土遺物

43点/1.10個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器10点/0.35個体（播鉢5/0.10、小皿類2/0、その他3/0.25）、常滑陶器2点/0.10個体（鉢のみ）、産地不明陶器2点/0.10個体（大皿のみ）、土師器皿21点/0.30個体（大皿Ⅱ0.30）、土師器鍋2点/0個体（胴部片のみ）、瓦器8点/0.35個体（風炉・火鉢6/0、蓋2/0.35）である。

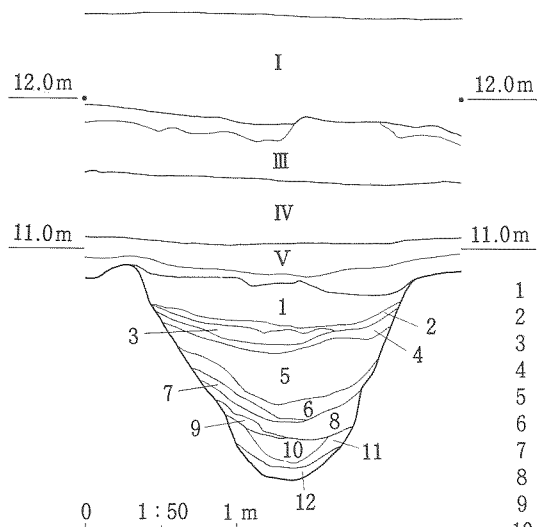
瀬戸美濃陶器は、播鉢・黄瀬戸鉢が本業焼第3小期頃に位置付けられる。



第66図 S D 15出土遺物実測図

S D 21・25・27・38・42・61

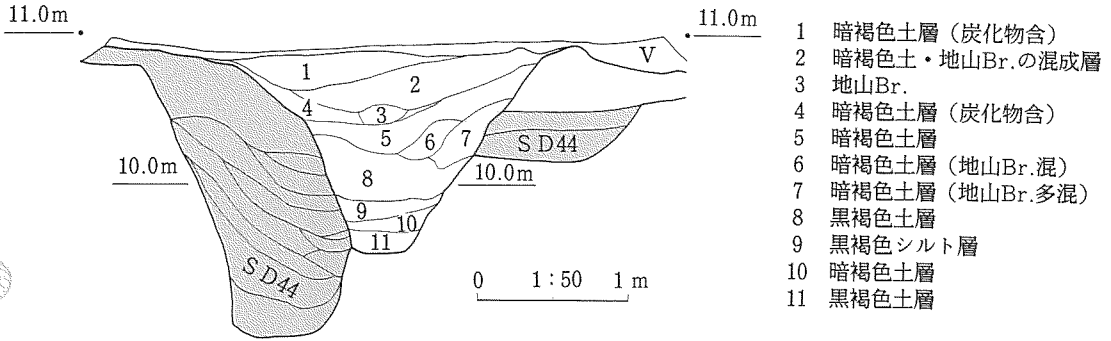
幅1.3～2 m、深さ0.8～1.3mの断面逆台形の溝。いずれもIV層上面から掘り込まれた近世1期の遺構群である。遺構の主軸方位はS D 21・38・61がほぼ南北、S D 25・27・42が東西方向で、相互の切り合い関係については不明。規模・形状が類似し、遺構の方向性が共通することから考えて、同時期の遺構群である可能性が高い。



第67図 S D 25土層断面図

- 1 黄褐色砂質土層 (褐色粘質土Br.・黄褐色土Br.多混)
- 2 暗褐色土層 (黄褐色粘質土Br.含)
- 3 黄褐色砂質土層 (黒褐色粘質土Br.含)
- 4 暗褐色土層 (黄褐色粘質土Br.含)
- 5 黄褐色砂質土層 (黄白色砂質土Br.・黒褐色粘質土Br.多混)
- 6 褐色土層
- 7 暗褐色土層 (褐色土混)
- 8 褐色粘質土層
- 9 暗褐色土層 (黄褐色粘質土混)
- 10 褐色砂質土層
- 11 暗褐色土層 (黄褐色粘質土混)
- 12 褐色粘質土層

また、弥生時代の方形周溝墓S X01（S D22）、古墳S X03、中世の遺構S D40・44などと切り合う関係にあり、時間的前後関係は、S X01・03、S D40・44→S D21・25・27・38・42・61である。



第68図 S D27土層断面図

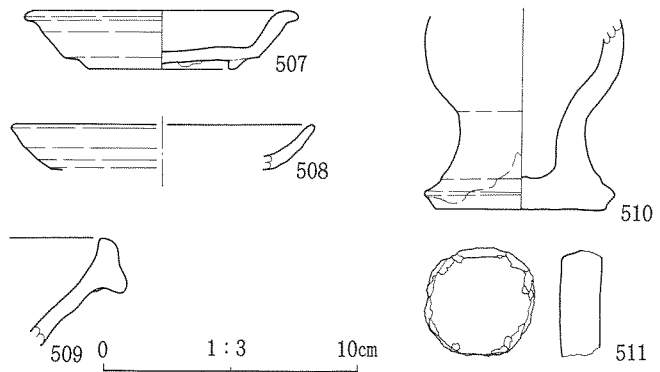
S D21・25・27・38・42・61出土遺物

6遺構分を合わせて、60点／1.40個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器26点／0.90個体（播鉢5／0.15、天目茶碗2／0.10、小皿類10／0.55、その他9／0.10）、常滑陶器1点／0個体（壺・甕）、尾張系山茶碗5点／0.05個体（碗4／0.05、鉢1／0）、東濃系山茶碗9点／0.15個体（碗のみ）、土師器皿4点／0.30個体（大皿Ⅱc 0.15、小皿Ⅰb 0.15）、土師器鍋4点／0個体（胴部片のみ）、いぶし瓦11点である。

瀬戸美濃陶器の中には、古瀬戸後期の花瓶や大窯第2段階の播鉢など古相を示すものも少なくないが、志野丸皿が出土しており、大窯第4段階か第5段階の早い時期（大窯第9小期）に比定できる。



写真33 SD25



第69図 S D21・25出土遺物実測図

S D55

長さ3.2m、幅0.9m、深さ0.4mの溝。遺構の長軸方位はN-77°-W。埋土は、黄褐色土ブロックと暗褐色土の混成層で、炭化物粒子を多く含む。V層除去後に検出された遺構であるので、近世1期に属すると考えられる。

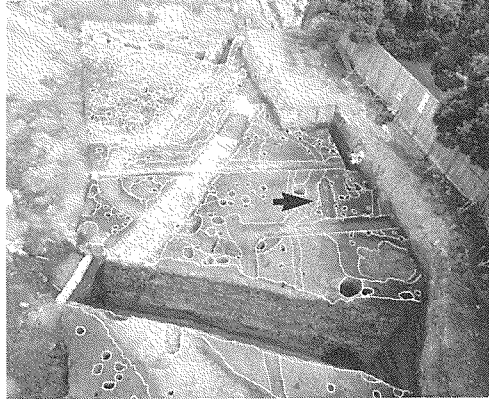


写真34 SD55

S D55出土遺物

瀬戸美濃陶器 3点/1.15個体（志野丸皿のみ）、土師器皿 3点/0.05個体（大皿Ⅱ0.05）、いぶし瓦 1点の都合 7点/1.20個体が出土している。

出土の志野丸皿は、大窯第4段階か第5段階の早い時期（大窯第9小期）のものである。



第70図 S D55出土遺物実測図

第2節 土坑

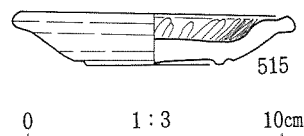
S K 05

直径2.7m以上、深さ0.2mの平面円形を呈すると考えられる土坑。VI層上面を掘り込み面とする近世1期の遺構。埋土は地山・青灰色粘土の小ブロックを含む黒褐色土。

S K 05出土遺物

出土遺物のごく少なく、瀬戸美濃陶器の播鉢1点／0個体、折縁菊ソギ皿1点／0.55個体が出土しているのみである。

志野釉の製品はないが、折縁菊ソギ皿は大窯第4段階の操業である高根窯沢窯（伊藤他1984）の製品に類似している。



第71図 S K 05出土遺物実測図

S K 21

長径（東西）3.1m、短径（南北）2 mの平面楕円形土坑。埋土は灰白色粘質土を主体とする斑土で、人為的に埋め戻されている可能性が高い。深さは2 m以上あるが、掘削作業の危険性を考慮したため、完掘していない。遺構の掘り込み面は不明。

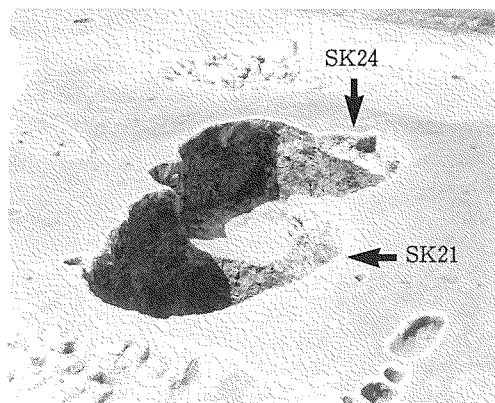
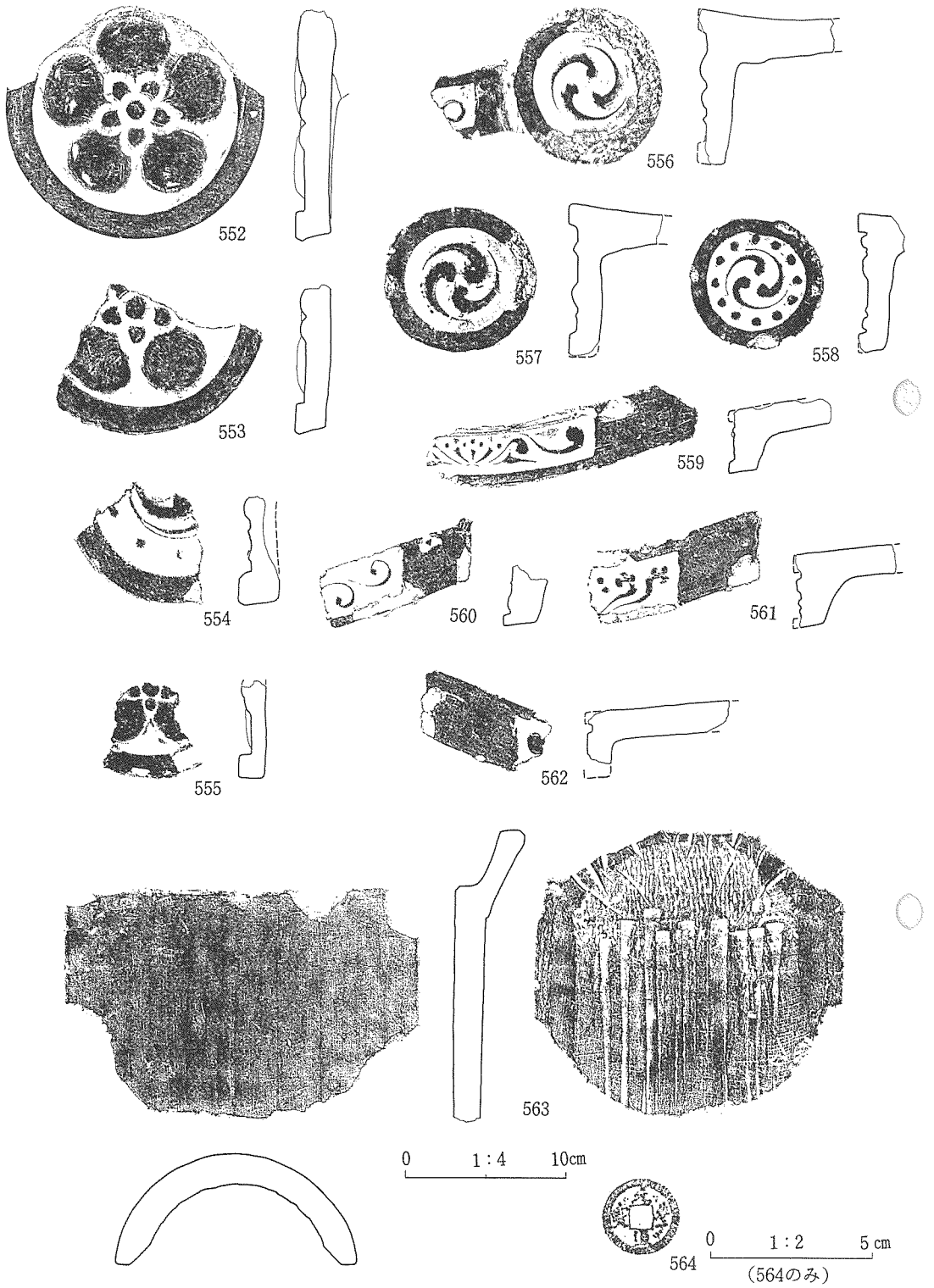


写真35 SK21・24

S K 21出土遺物

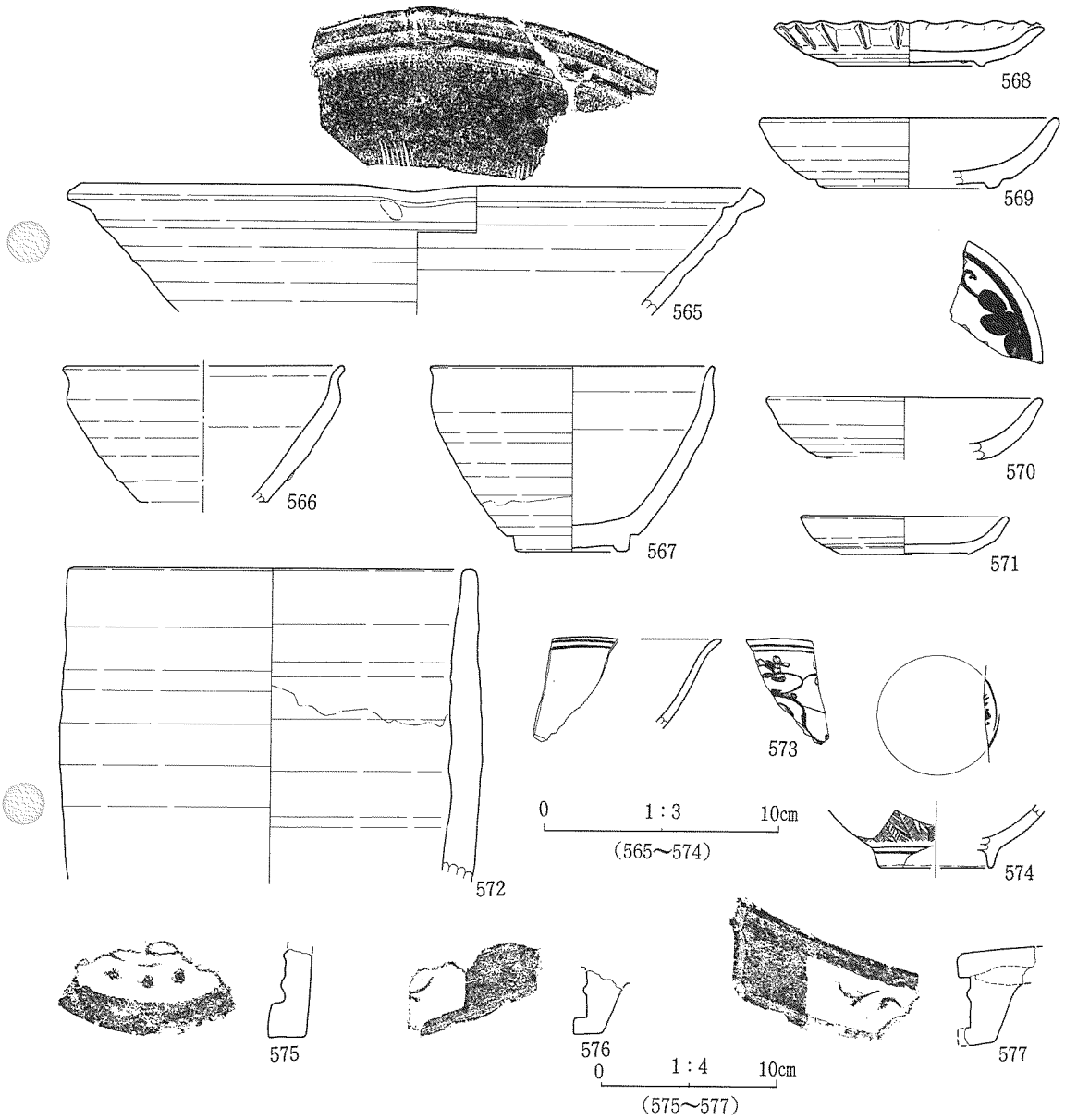
376点／5.00個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器75点／3.30個体（播鉢13／0.10、碗類35／1.20、皿類10／0.25、その他17／1.75）、常滑陶器2点／0個体（壺・甕1、鉢1）、尾張系山茶碗2点／0.05個体（碗のみ）、青磁4点／0.20個体（碗3／0.90、小碗1／0）、肥前磁器25点／1.15個体（碗類16／0.45、小皿類2／0.15、小杯2／0.20、猪口3／0.35、大皿2／0）、産地不明磁器2点／0.25個体（片口のみ）、土師器皿20点／0.05個体（中皿Ⅱ0.05）、焼塩壺2点／0個体、いぶし瓦242点、土人形1点、鉄釘1点である。



第78図 S K27出土遺物実測図(2)

S K 108

戦国時代の大溝S D01を切る大型土坑。平面形状は長径2.2m、短径1.8mの略楕円形を呈する。深さは3.6m以上あり、掘削作業の危険性を考慮し完掘していない。埋土は焼土の小ブロックを多く含む暗褐色土。VI層上面から掘り込まれた近世1期の遺構である。



第79図 S K 108出土遺物実測図

S K 108出土遺物

423点／3.20個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器45点／3.00個体（搦鉢8／0.20、天目茶碗9／0.15、小皿類16／2.30、その他12／0.35）、常滑陶器5点／0個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗1点／0個体（碗）、東濃系山茶碗1点／0個体（碗）、青花磁器2点／0.05個体（碗のみ）、土師器皿6点／0個体（口縁部なし）、土師器鍋11点／0.15個体（鍋B・C0.10、羽釜B0.05）、瓦器2点／0個体（風炉・火鉢のみ）、いぶし瓦350点である。

口縁部残存率法による時期別内訳（個体数）は、瀬戸美濃陶器の搦鉢で大窯第4段階0.05、大窯第5段階0.15、天目茶碗で大窯第3段階0.05、大窯第5段階0.10である。但し、大窯第5段階のものは、第5段階を3小期（大窯第9～11小期）に区分した内の、早い時期（第9小期）に位置付けられる。



第3節 井戸

SE01

直径1mの平面円形素掘り井戸。埋土は地山ブロックが混じる灰褐色土で、検出面から1.5m下（標高9.7m）まで掘り下げたが、構造物は確認されていない。ボーリング調査の結果、標高0.99mに井戸底があり、現在の地下水位もほぼ同じ高さで確認された。掘り込み面はVI層上面で、近世1期に属する遺構である。

SE01出土遺物

23点／0.65個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器3点／0.05個体（天目茶碗1／0、小皿類1／0、その他1／0.05）、常滑陶器1点／0個体（壺・甕）、尾張系山茶碗4点／0.05個体（碗3／0.05、小皿1／0）、産地不明陶器1点／0.45個体（小杯）、土師器皿4点／0.10個体（大皿Ⅱa 0.10）、土師器鍋1点／0個体（胴部片のみ）、いぶし瓦9点である。

出土遺物は小片ばかりであるが、瀬戸美濃陶器の中には志野丸皿が含まれている。

SE02

地下式土坑SK11を切る素掘り井戸で、平面形状は直径1mの円形を呈する。埋土は地山ブロックが混じる灰褐色土。検出面から3.7m下（標高6.8m）まで掘り下げたが、構造物は確認されていない。遺構の掘り込み面は不明。

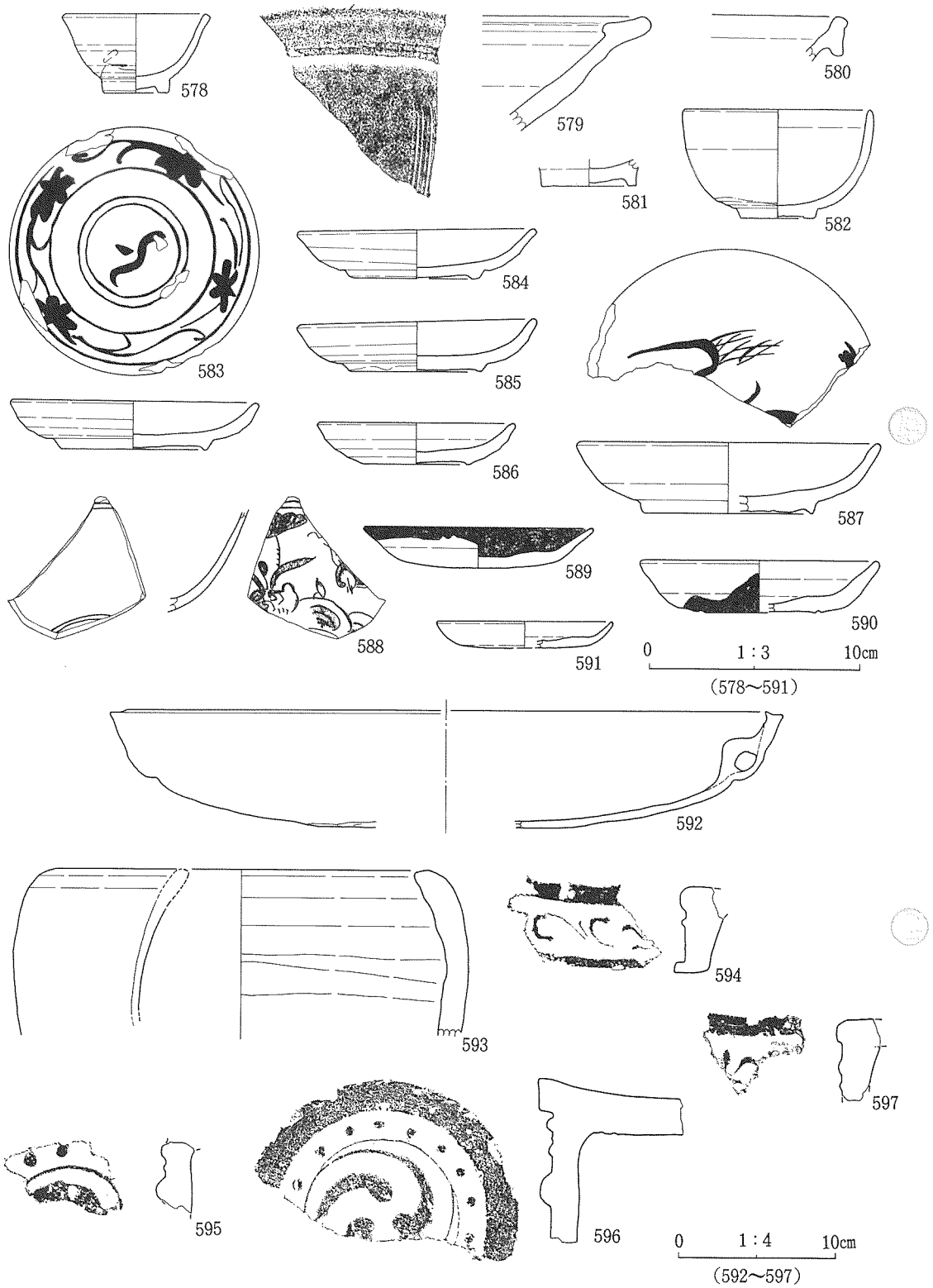


写真38 SE02

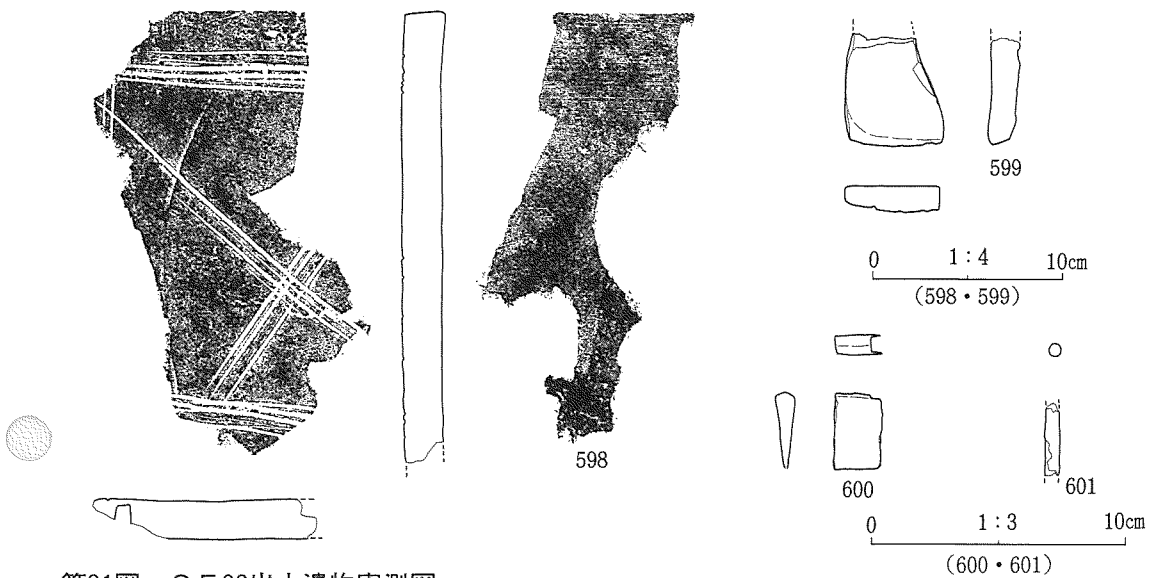
SE02出土遺物

312点／6.70個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器36点／5.20個体（搦鉢4／0.15、天目茶碗5／0.20、小皿類16／3.50、その他11／1.35）、尾張系山茶碗1点／0.10個体（碗）、青花磁器1点／0個体（碗）、土師器皿20点／0.90個体（大皿Ⅱ0.65、中皿Ⅱ0.25）、土師器鍋13点／0.35個体（鍋B・C 0.35）、瓦器（？）2点／0.15個体（風炉・火鉢のみ）、いぶし瓦231点、砥石1点、鉄釘5点、不明銅製品2点である。

口縁部残存率法による時期別内訳（個体数）は、瀬戸美濃陶器の搦鉢で大窯第4段階0.15、天目茶碗で大窯第4段階0.05、大窯第5段階0.15である。



第80图 SE01・02出土遺物実測図



第81図 S E 02出土遺物実測図

S E 04

直径0.9mの平面円形素掘り井戸。埋土は灰褐色土で、検出面から1.2m下（標高9.2m）まで掘り下げたが、構造物は確認されていない。遺構の掘り込み面は不明。

S E 04出土遺物

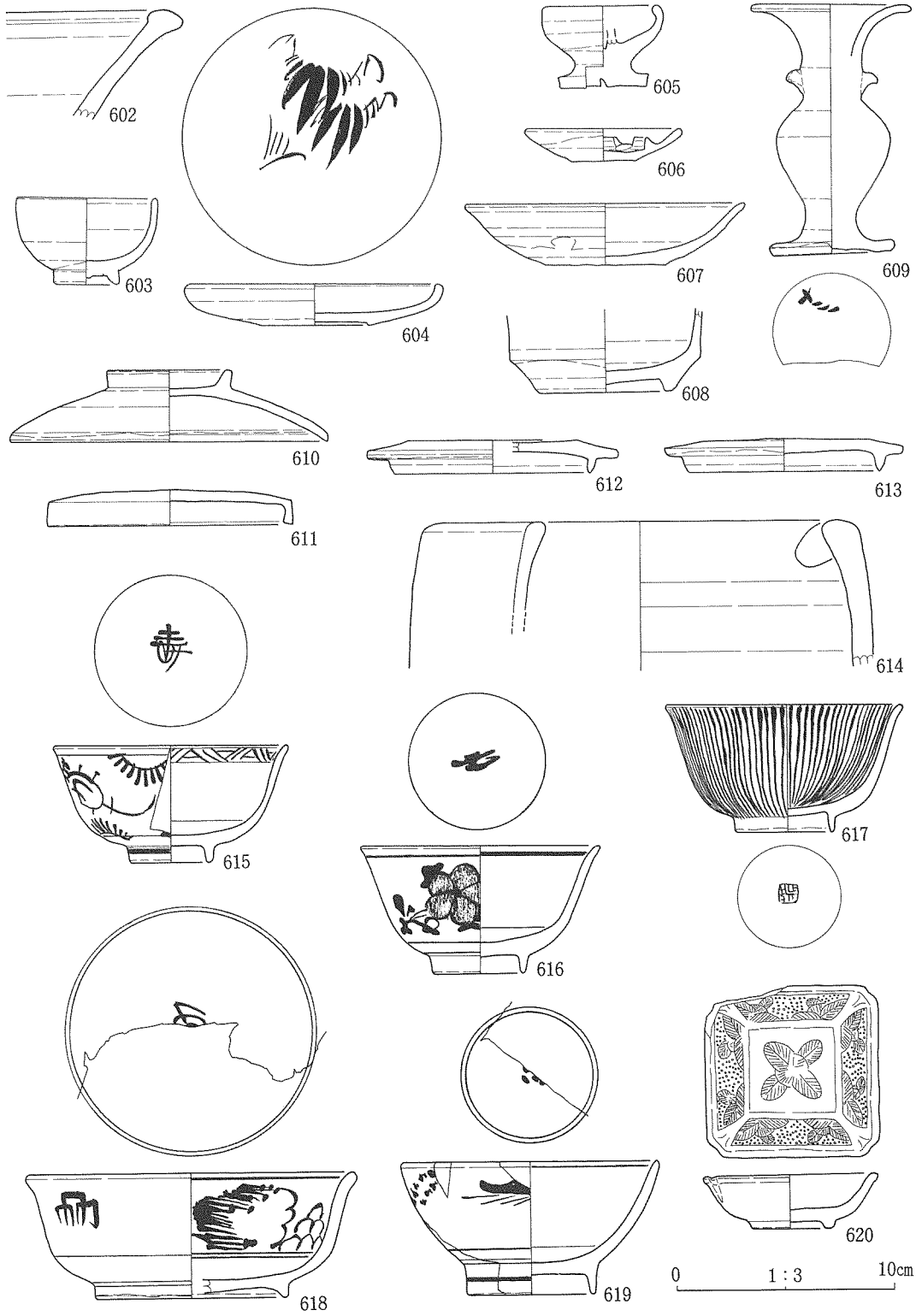
瀬戸美濃陶器 2点 / 0 個体（搦鉢 1、大皿 1）、いぶし瓦 25点が出土している。瀬戸美濃陶器の大皿には志野釉が施されている。

S E 05

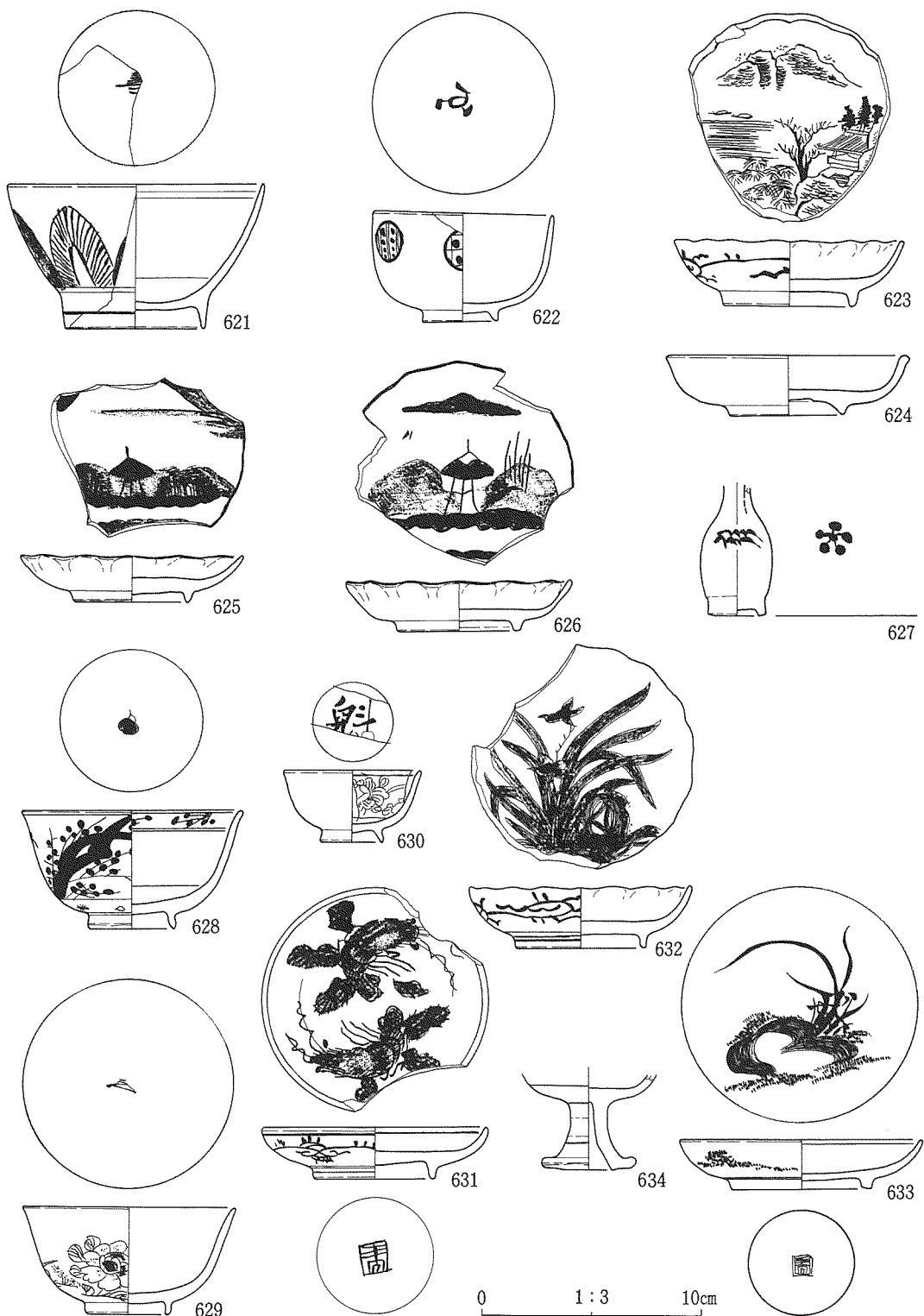
直径1.2mの平面円形素掘り井戸。埋土は灰褐色土が混じる暗褐色土で、検出面から1.5m下（標高9.0m）まで掘り下げたが、構造物は確認されていない。遺構の掘り込み面は不明。

S E 05出土遺物

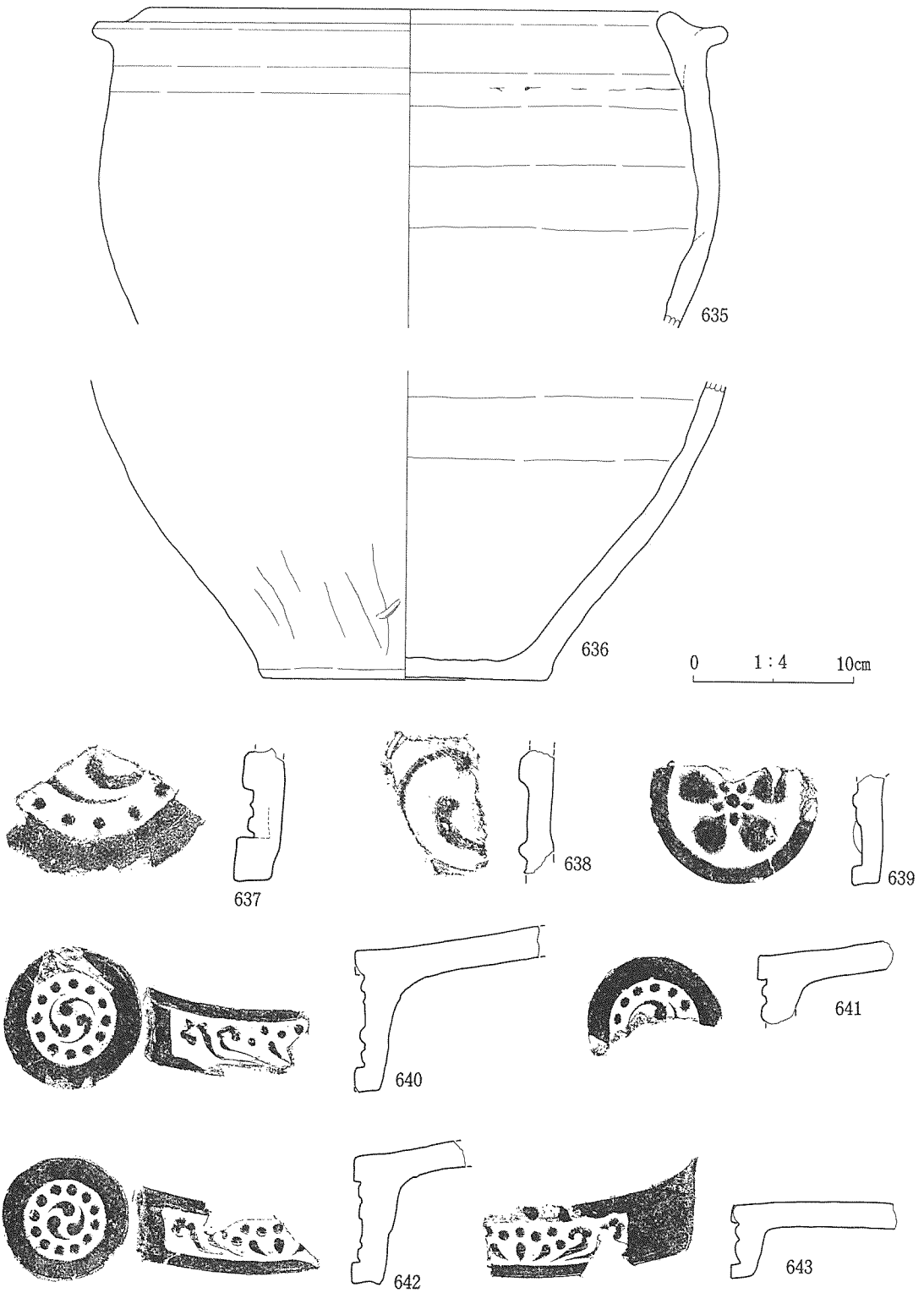
975点 / 18.10個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器 41点 / 6.80個体（搦鉢 1 / 0.10、碗類 6 / 0.15、皿類 19 / 2.90、その他 15 / 3.65）、常滑陶器 27点 / 0.50個体（壺・甕のみ）、尾張系山茶碗 3点 / 0.10個体（碗のみ）、瀬戸美濃磁器 38点 / 4.65個体（碗類 29 / 3.30、皿類 9 / 1.35）、肥前磁器 23点 / 3.05個体（碗類 6 / 0.70、皿類 15 / 2.30、その他 2 / 0.05）、産地不明（関西系？）磁器 24点 / 2.95個体（碗類 14 / 1.05、皿類 4 / 1.65、その他 6 / 0.25）、土師器皿 4点 / 0 個体（口縁部なし）、土師器鍋 2点 / 0.05個体（鍋 B・C 0.05）、いぶし瓦 812点、陶器（鉄釉）瓦 1点である。



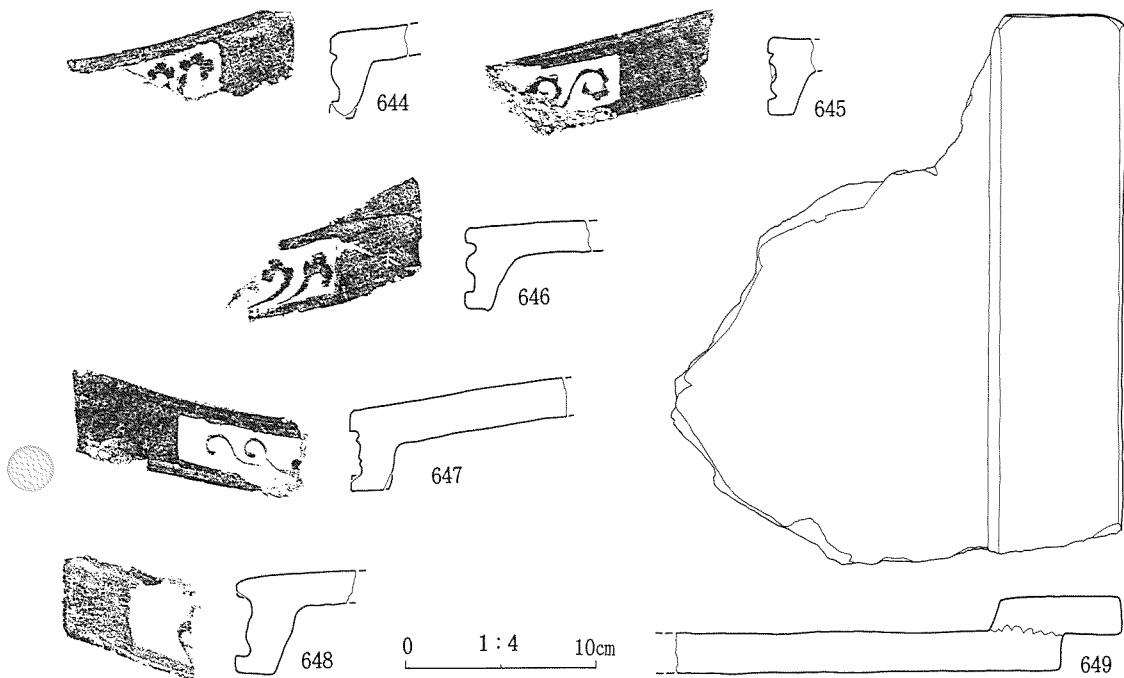
第82图 SE 05出土遺物実測図(1)



第83图 SE05出土遺物実測図(2)



第84图 SE 05出土遺物実測図(3)



第85図 S E 05出土遺物実測図（4）

瀬戸美濃磁器の存在から、幕末～明治期の遺物群であることが明らかである。大量に出土しているいぶし瓦の中に志水甲斐守家の家紋瓦があること、1点のみ出土している陶器瓦が隣接する將軍家御霊屋のものと推定されることなどから、明治時代初期に陸軍用地となり、志水甲斐守屋敷・將軍家御霊屋が破却された際にまとめて廃棄されたものと考えられる。

S E 07

中世の溝SD19を切る素掘り井戸で、平面形状は直径1mの円形を呈する。埋土は灰褐色土で、検出面から3.7m下（標高6.8m）まで掘り下げたが、構造物は確認されていない。遺構の掘り込み面は不明。

S E 07出土遺物

僅かに、いぶし瓦8点が出土しているのみである。

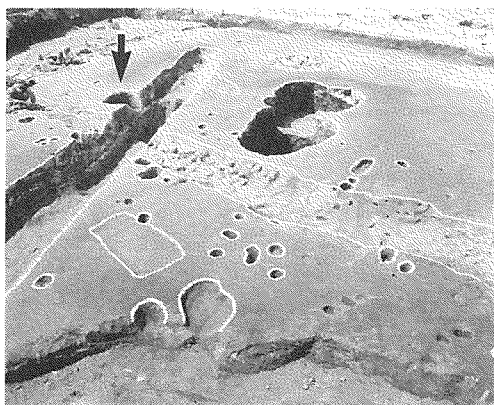


写真39 SE07

SE08

弥生時代の方形周溝墓SX02（SD12）を切る直径2mの平面円形素掘り井戸。検出面から1.5m下（標高8.9m）まで掘り下げたが、構造物は確認されていない。遺構の掘り込み面は不明。

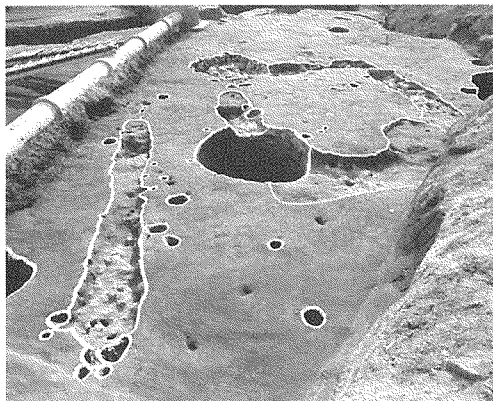
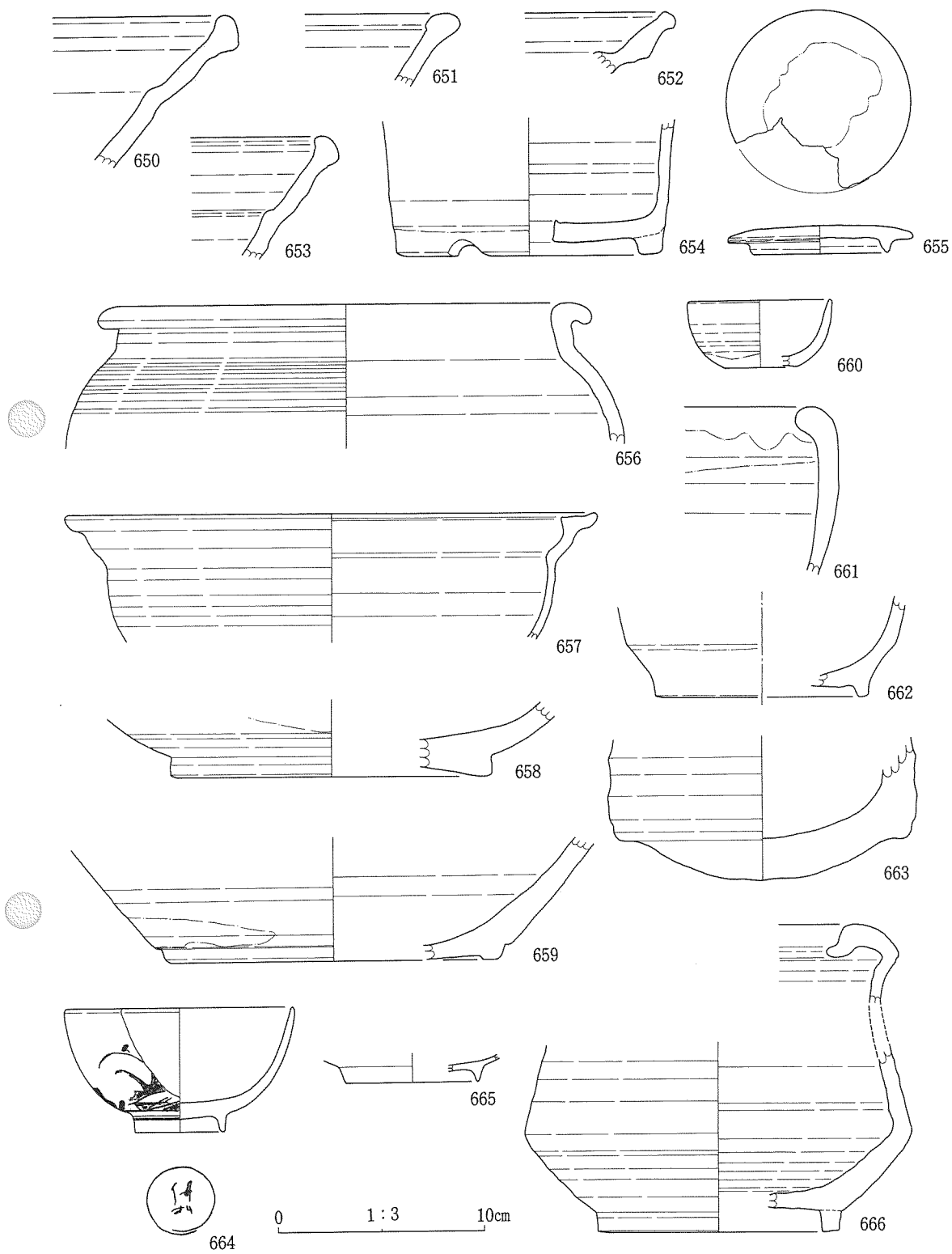


写真40 SE08

SE08出土遺物

506点／4.95個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器98点／3.85個体（播鉢18／0.35、碗類7／0.40、皿類8／0.15、その他65／2.95）、常滑陶器25点／0.15個体（壺・甕22／0.05、土管2／0.10、不明1／0）、東濃系山茶碗1点／0個体（小皿）、信楽陶器2点／0.15個体（火鉢のみ）、産地不明陶器3点／0個体（大型袋物）、瀬戸美濃磁器6点／0.15個体（碗類のみ）、肥前磁器25点／0.50個体（碗類14／0.40、皿類9／0.10、徳利2／0）、土師器皿9点／0.10個体（大皿Ⅱ0.10）、土師器鍋7点／0.05個体（ほうろく鍋0.05）、土人形1点、鉄釘1点、いぶし瓦327点、陶器（鉄釉）瓦1点である。

口縁部残存率法による時期別内訳（個体数）は、瀬戸美濃陶器の播鉢で本業焼第8小期0.10、本業焼第9小期0.10、本業焼第10小期0.10、本業焼第11小期0.05である。本業焼第11小期は、幕末～明治初期にあたり、SE05と同様に志水甲斐守屋敷・将軍家御霊屋破却の際の廃棄物と考えられる。



第86图 S E 08出土遺物実測図

SE11

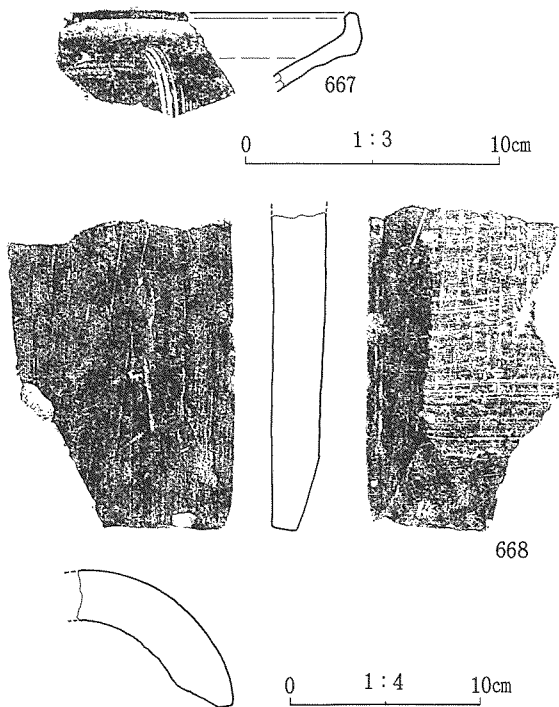
中世の溝SD49を切る井戸で、平面形状は直径1mの円形を呈する。埋土は褐色砂質土と黒褐色粘質土ブロックの混成層で、検出面から1.4m下（標高9.2m）まで人力で掘り下げた後、さらに2.2m下（標高7.0m）まで重機で半裁した。この結果、検出面下2.7m以下には木製の井戸側が遺存していることが判明した。但し、腐食して完全に粘土化していた。木製井戸側は内法95cmの円筒形で、厚さは約1cmであった。遺構掘り込み面は明確でないが、V層より上位であることは確認しているため、近世2期に属する可能性が高い。



写真41 SE11

SE11出土遺物

39点/0.05個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器6点/0.05個体（播鉢2/0.05、その他4/0）、常滑陶器1点/0個体（鉢）、尾張系山茶碗1点/0個体（小皿）、土師器鍋1点/0個体（胴部片のみ）、いぶし瓦30点である。



第87図 SE11出土遺物実測図

SE12

漆喰製の円筒形井筒をもつ井戸。井筒は直径1.25mで、内法は約1m。周囲に井筒設置のための掘方（SK61）が認められ、直径2.2mの平面円形を呈する。井筒内は標高9.45m、掘方は標高9.9mまで掘り下げ、以下の部分については掘削を断念した。埋土は、井筒内が黄褐色土、掘方が白色粘土ブロックの混じる灰褐色土である。掘り込み面は確認していないが、V層より上位であることは確実に、後述する出土遺物の年代観とも矛盾しないことから、近世2期の遺構と考えられる。

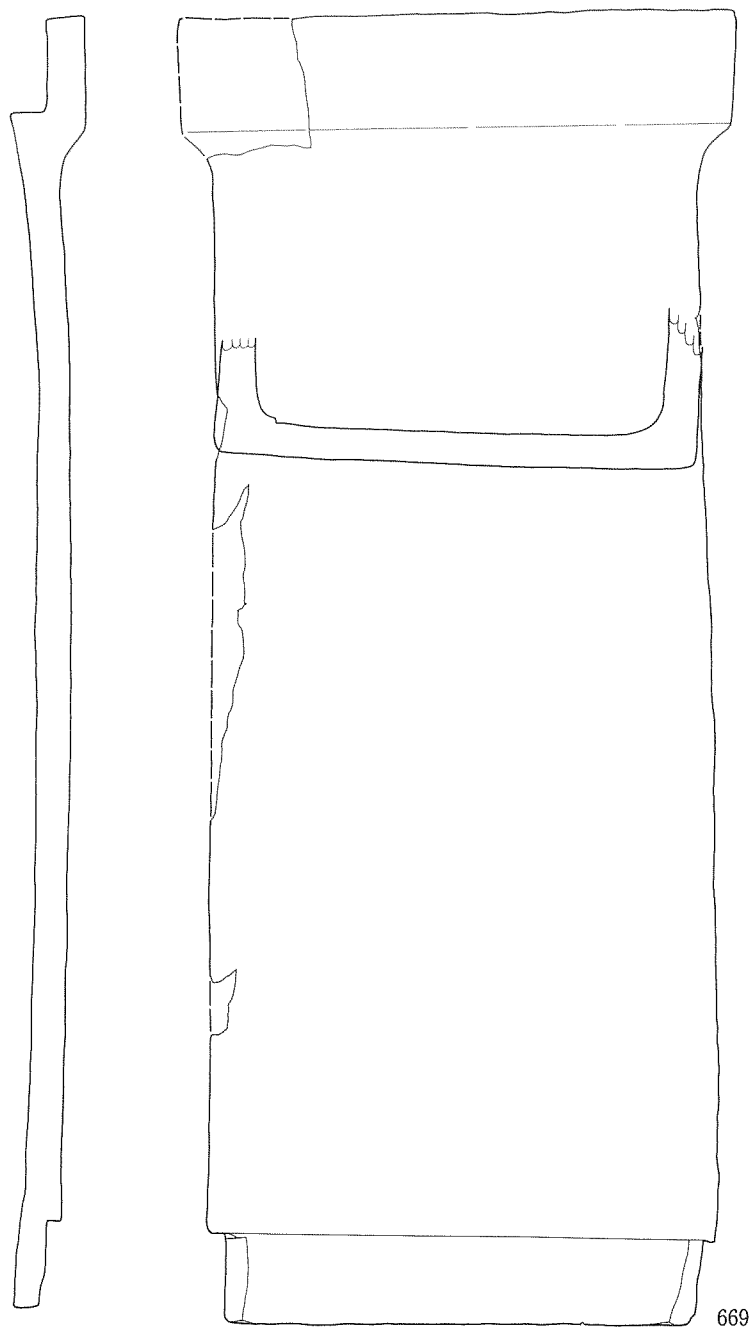


写真42 SE12

SE12出土遺物

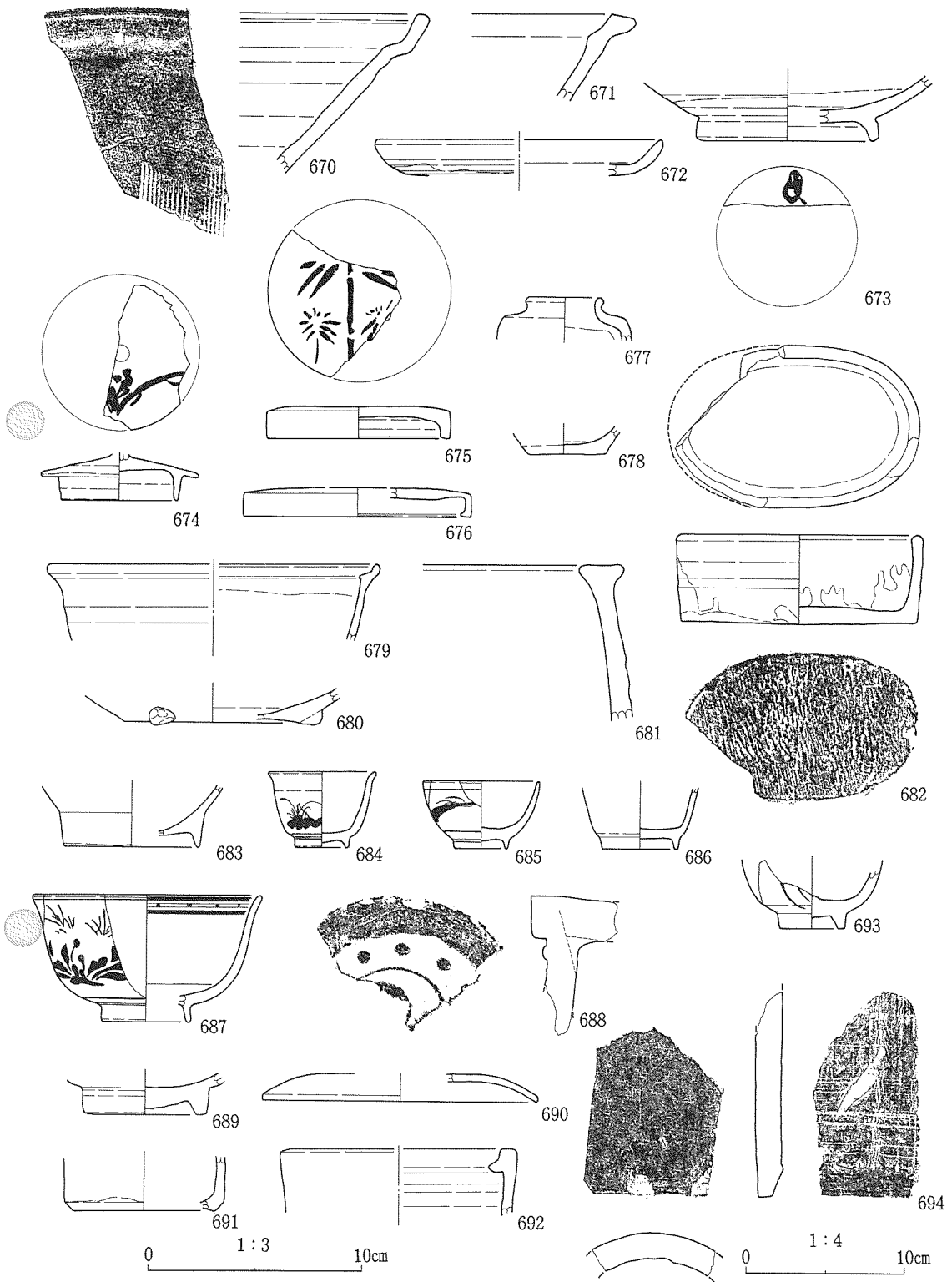
井筒内からは、301点/6.35個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器97点/4.50個体（播鉢6/0.15、碗類27/1.10、皿類14/0.85、その他50/2.40）、常滑陶器1点/0個体（土瓶）、東濃系山茶碗1点/0個体（碗）、産地不明陶器1点/0個体（皿）、瀬戸美濃磁器1点/0.05個体（碗類0.05）、肥前磁器16点/1.35個体（碗類5/0.05、皿類1/0.10、徳利1/0、猪口4/0.85、小杯4/0.25、香炉1/0.10）、産地不明磁器2点/0.10個体（端反碗0.10）、土師器皿8点/0.35個体（大皿Ⅱ0.25、中皿Ⅱ0.10）、鉄釘1点、いぶし瓦131点である。

掘方（SK61）からは、36点/0.35個体の遺物が出土している。内訳は、瀬戸美濃陶器13点/0.35個体（碗類5/0.05、皿類1/0、その他7/0.30）、東濃系山茶碗1点/0個体（碗）、産地不明陶器1点/0個体（蓋）、肥前磁器3点/0個体（碗類1/0、小杯1/0、徳利1/0）、土師器皿1点/0個体（口縁部なし）、いぶし瓦17点である。



0 1 : 4 10cm

第88図 S E 12出土遺物実測図



第89図 SE12・SK61出土遺物実測図

SE13

直径1 m強の平面円形素掘り井戸。検出面から1 m下（標高9.6m）まで人力で掘り下げた後、さらに2 mほど下まで重機で半裁したが、構造物は確認されていない。掘り込み面はVI層上面で、近世1期に属する遺構である。

SE13出土遺物

瀬戸美濃陶器の袋物片1点／0個体と土師器鍋1点／0.05個体（鍋B・C 0.05）が出土しているのみである。



写真43 SE13

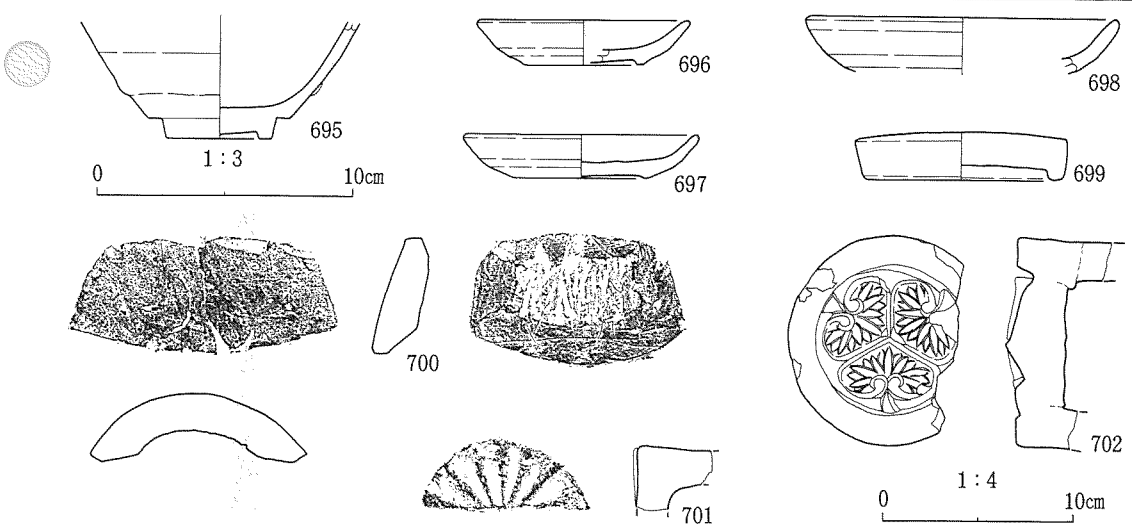
第4節 その他の遺構・包含層

小土坑 (Pit)

上面 (V層上面) と下面 (VII層上面) で柱穴状の小土坑を多数検出しているが、下面検出のものは中世遺構との識別が困難である。上層検出のものには、内部に礎石状の石が据えられているものもあったが、建物の間取り等を復元するには至らなかった。

その他の遺構・包含層出土遺物

瀬戸美濃陶器・焼塩壺・いぶし瓦・陶器瓦などがある。



第90図 その他の遺構・包含層出土遺物実測図

第12表 近世遺物一覽表（1）

No.	遺構	Gr.	種別（産地・材質等）	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
500	SD15	1H	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
501	SD15	1H	瀬戸美濃陶器	黄瀬戸鉢				黄+銅	
502	SD15	1H	瀬戸美濃陶器	水注	4			鉄	
503	SD15	1H	不明陶器	鉢	27	6	14.2	無	瀬戸美濃？ 無釉
504	SD15	1H	土師器	大皿Ⅱ	11.7	2.3	6.4		
505	SD15	1H	土師器	大皿Ⅱ	13.6	1.4	7.3		
506	SD15		瓦器	蓋	11.5				
507	SD21	4L	瀬戸美濃陶器	折縁皿	10	2.3	5.8	灰	
508	SD21	4K	瀬戸美濃陶器	丸皿				志野	
509	SD21	4L	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
510	SD25	11N 11O	瀬戸美濃陶器	花瓶			6.7	灰	
511	SD25		いぶし瓦	平瓦					加工円盤
512	SD55	3L	瀬戸美濃陶器	丸皿	12.2	3.1	5.9	志野	
513	SD55	3L	瀬戸美濃陶器	丸皿	11.5	2.7	6.3	志野	
514	SD55	3L	土師器	大皿Ⅱ	11.8	2	5.7		
515	SK05	1E	瀬戸美濃陶器	折縁菊ソギ皿	10.4	2	5.1	灰	
516	SK21	5G6G	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
517	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	白天目	11.6			灰	
518	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	丸碗	9.9			鉄	
519	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	丸碗			4.6	灰	尾呂茶碗
520	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	丸皿				志野	鉄絵
521	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	大皿				灰+緑	
522	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	花瓶	2.9			鉄	
523	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	小杯	6.5			灰	
524	SK21	6G	瀬戸美濃陶器	狛犬台座				灰	
525	SK21	6G	肥前磁器	碗	10.1			染付	
526	SK21	6G	肥前磁器	碗			4	染付	
527	SK21		肥前磁器	猪口	4.7			染付	
528	SK21	6G	肥前磁器	猪口	4.4	1.8	2	染付	
529	SK21	6G	肥前磁器	大皿				染付	
530	SK21	6G	肥前磁器	皿				白磁	
531	SK21	6G	青花磁器	碗				染付	
532	SK21	5G	青花磁器	碗				染付	
533	SK21		青花磁器	碗				染付	
534	SK21	5G	青花磁器	碗				染付	
535	SK21	5G	青花磁器	小碗			2.2	染付	
536	SK21	6G	不明磁器	片口	9.4			黒+白	磁器, 外面黒釉
537	SK21	6G	焼塩壺	焼塩壺					
538	SK24	5F	常滑陶器	急須蓋	4.9	2			
539	SK24	5F	常滑陶器	急須	5.7	9.3	6.1		
540	SK24	5F	常滑陶器	不明					赤物
541	SK26	1D	瀬戸美濃陶器	丸皿			4.8	志野	
542	SK26	1D	瀬戸美濃陶器	輪禿皿				灰	
543	SK27	2F	瀬戸美濃陶器	甕				柿	
544	SK27	2F	瀬戸美濃陶器	柳茶碗			4.4	灰	
545	SK27	2F	瀬戸美濃陶器	梅文皿			5.6	灰	
546	SK27	2F	京焼	合子				灰	外底墨書
547	SK27	2F	肥前磁器	碗				染付	
548	SK27	2F	土師器	中皿Ⅱ	8.3	1.9	4.2		

第13表 近世遺物一覽表（2）

No.	遺構	Gr.	種別（産地・材質等）	器種	口径	器高	底/高台	釉薬	備考
549	SK27	2F	土師器	中皿Ⅱ	8.3	1.8	3.8		口縁タール付着
550	SK27	2F	土師器	中皿Ⅱ	8.2	1.9	4.2		口縁タール付着
551	SK27	2F	土師器	中皿Ⅱ	8.3	2	4		
552	SK27	2F	いぶし瓦	軒丸瓦					
553	SK27	2F	いぶし瓦	軒丸瓦					
554	SK27	2F	いぶし瓦	軒丸瓦					
555	SK27	2F	いぶし瓦	軒丸瓦？					
556	SK27	2F	いぶし瓦	軒棧瓦					
557	SK27	2F	いぶし瓦	軒棧瓦					
558	SK27	2F	いぶし瓦	軒棧瓦					
559	SK27	2F	いぶし瓦	軒瓦					
560	SK27	2F	いぶし瓦	軒瓦					
561	SK27	2F	いぶし瓦	軒瓦					
562	SK27	2F	いぶし瓦	軒瓦					
563	SK27	2F	いぶし瓦	丸瓦					内面タタキ
564	SK27	2F	銅製品	銅銭					元豊通寶（1078年初鑄）
565	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	播鉢	28.5			錆	
566	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	天目茶碗				鉄	
567	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	12	8	4.7	鉄	
568	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	ヒタ皿	11.5	1.9	6.2	志野	
569	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	丸皿	12.4	3	6.9	志野	
570	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	丸皿	11.5			志野	鉄絵
571	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器	丸皿	9.7	1.6	5.3	志野	
572	SK108	1L2L	瀬戸美濃陶器		16.6			鉄+錆	
573	SK108	1L2L	青花磁器	碗				染付	
574	SK108	1L2L	青花磁器	碗				染付	
575	SK108	1L2L	いぶし皿	軒丸瓦					
576	SK108	1L2L	いぶし皿	軒瓦					
577	SK108	1L2L	いぶし皿	軒瓦					
578	SE01	1F	不明陶器	小杯	6.6	3.8	3	灰	
579	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	播鉢錆					
580	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	播鉢錆					
581	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			4.5	鉄	
582	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	丸碗	8.7	5.2	3.4	志野	
583	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	丸皿	11.6	2.3	7.8	志野	鉄絵, 内底トチ痕
584	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	丸皿	11.1	2.4	5.7	志野	
585	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	丸皿	11	2.6	6.1	志野	
586	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	丸皿	9.2	2	4.8	志野	
587	SE02	2E	瀬戸美濃陶器	丸皿				志野	鉄絵, 外底トチ痕
588	SE02	2E	青花磁器	碗				染付	
589	SE02	2E	土師器	大皿Ⅱ	10.8	2	7		タール付着
590	SE02	2E	土師器	大皿Ⅱ	11	2.8	5.8		
591	SE02	2E	土師器	中皿Ⅱ	8.2	1.3	6.2		
592	SE02	2E	土師器	鍋C					
593	SE02	2E	瓦器？	風炉	23.8				
594	SE02	2E	いぶし瓦	軒平瓦					唐草文
595	SE02	2E	いぶし瓦	軒丸瓦					巴文
596	SE02	2E	いぶし瓦	軒丸瓦					巴文
597	SE02	2E	いぶし瓦	軒平瓦					唐草文
598	SE02	2E	いぶし瓦	不明					

第14表 近世遺物一覽表 (3)

No.	遺構	Gr.	種別 (産地・材質等)	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
599	SE02	2E	石製品	砥石					
600	SE02	2E	銅製品	不明					
601	SE02	2E	銅製品	不明					
602	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	插鉢				錆	
603	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	小碗	6.2	4	2.8	灰	
604	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	皿	10.4	1.9	4.9	灰	鉄絵
605	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	ひょうそく	5.1	3.8	3.9	鉄	
606	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	灯明皿	7	1.5	3	鉄	外底に重ね焼溶着痕
607	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	灯明皿	12.7	2.9	5.6	鉄	
608	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	香炉			6	灰	呉須絵
609	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	花瓶	6.8	11.5	5.3	黒	外底に墨書
610	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	鍋蓋	14.5	2.8		灰	
611	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	蓋	11.2	1.7		灰	
612	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	蓋	8.9	1.5		灰	
613	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	蓋	8.7	1.5		灰	上面トチ痕 (三ヶ所)
614	SE05	6D	瀬戸美濃陶器	風炉	18			灰	
615	SE05	6D	瀬戸美濃磁器	碗	10.5	5.4	3.5	染付	
616	SE05	6D	瀬戸美濃磁器	碗	10.8	5.9	4	染付	
617	SE05	6D	瀬戸美濃磁器	碗	10.7	5.9	4.3	染付	外底に朱書, 焼継有
618	SE05	6D	瀬戸美濃磁器	皿	14.8	5.8	8.3	染付	
619	SE05	6D	瀬戸美濃磁器	広東碗	11.6	6.1	5.6	染付	太白手
620	SE05	6D	瀬戸美濃磁器	型打皿	7.7	2.5	3.4	白磁	
621	SE05	6D	肥前磁器	広東碗	11.6	5.6	6.2	染付	外底に朱書, 焼継有
622	SE05	6D	肥前磁器	湯呑	8	5	3.2	染付	
623	SE05	6D	肥前磁器	ヒダ皿	10.2	3	5.8	染付	
624	SE05	6D	肥前磁器	皿	10.7	2.7	5.1	青磁	
625	SE05	6D	肥前磁器	ヒダ皿	10	2.1	5.1	染付	口錆
626	SE05	6D	肥前磁器	ヒダ皿	10.1	2.3	5.3	染付	口錆
627	SE05	6D	肥前磁器	小瓶			2.5	染付	畳付砂粒付着
628	SE05	6D	不明磁器	碗	9.8	5.4	3.8	染付	
629	SE05	6D	不明磁器	碗	9.6	4.9	3.4	白磁	上絵付
630	SE05	6D	不明磁器	小碗	6.2	3.3	2.7	白磁	上絵付
631	SE05	6D	不明磁器	皿	10.1	2.4	5.3	染付	
632	SE05	6D	不明磁器	皿	10	2.8	5.7	染付	
633	SE05	6D	不明磁器	皿	11	2.3	6.4	染付	
634	SE05	6D	不明磁器	仏供			3.9	白磁	上絵付
635	SE05	6D	常滑陶器	甕	32.4				赤物
636	SE05	6D	常滑陶器	甕			17.7		赤物
637	SE05	6D	いぶし瓦	軒丸瓦					
638	SE05	6D	いぶし瓦	軒丸瓦					
639	SE05	6D	いぶし瓦	軒丸瓦?					
640	SE05	6D	いぶし瓦	軒棧瓦					
641	SE05	6D	いぶし瓦	軒棧瓦					
642	SE05	6D	いぶし瓦	軒棧瓦					
643	SE05	6D	いぶし瓦	軒棧瓦					
644	SE05	6D	いぶし瓦	軒瓦					
645	SE05	6D	いぶし瓦	軒瓦					
646	SE05	6D	いぶし瓦	軒瓦					
647	SE05	6D	いぶし瓦	軒瓦					
648	SE05	6D	いぶし瓦	軒瓦					

第15表 近世遺物一覧表(4)

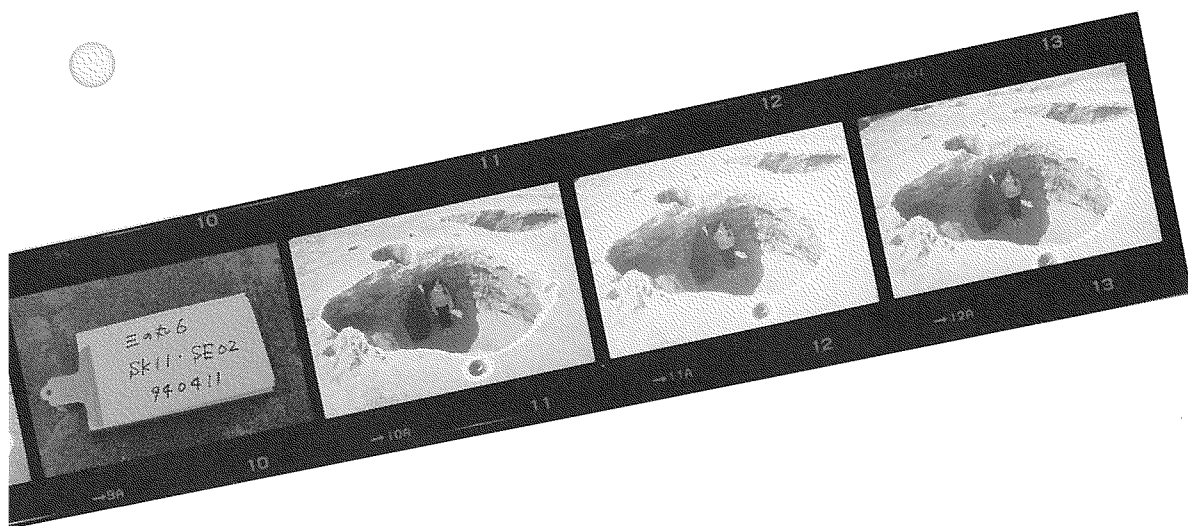
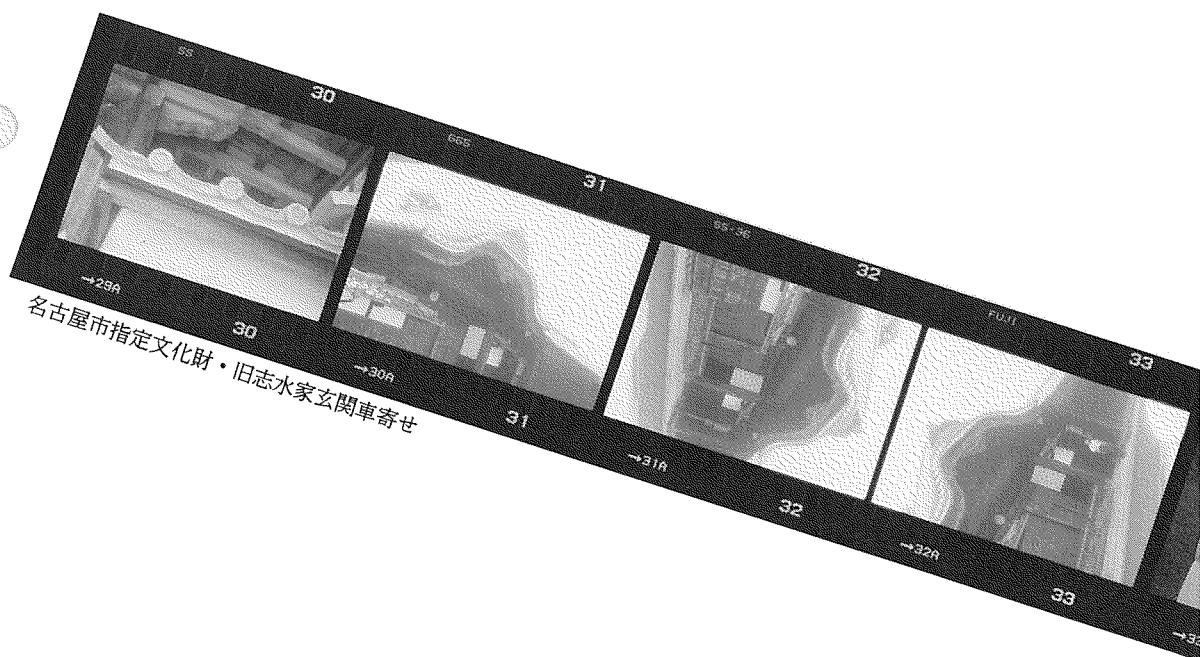
No.	遺構	Gr.	種別(産地・材質等)	器種	口径	器高	底/胎	釉薬	備考
649	SE05	6D	いぶし瓦	塀瓦					
650	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
651	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
652	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
653	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
654	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	植木鉢			11.1	灰	
655	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	蓋	6.4	1.4		緑+灰	
656	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	甕	21.7			柿	
657	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	鍋	25.4			鉄?	
658	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	練鉢			15	灰+銅	
659	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	鉢?					
660	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	不明	6.8	3.3	3.4	鉄+錆	
661	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	火鉢				鉄+錆	
662	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	半胴				鉄	
663	SE08	7B	瀬戸美濃陶器	サヤ					
664	SE08	7B	肥前磁器	碗	11	6.1	4.3	染付	畳付砂粒付着
665	SE08	7B	肥前磁器	皿			6.4	白磁	
666	SE08	7B	信楽陶器	火鉢?			10.8		
667	SE11	7K	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
668	SE11	7K	いぶし瓦	丸瓦					コビキA, 刺子痕
669	SE12	718I	常滑陶器	土管					赤物
670	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
671	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	播鉢				錆	
672	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	皿				灰	
673	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	輪禿皿			7.9	灰	外底に墨書
674	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	蓋				灰	呉須絵
675	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	蓋	8.6	1.6		灰	呉須絵
676	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	蓋	10.6	1.4		灰	
677	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	茶入	3.3			鉄	
678	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	茶入					残存部無釉
679	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	鍋				鉄	
680	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	鍋			8.2	鉄	外面は露胎+スス
681	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	半胴?				柿	
682	SE12	718I	瀬戸美濃陶器	びん水入				緑+灰	外底にゴザ目
683	SE12	718I	肥前磁器	広東碗			6.1	染付	
684	SE12	718I	肥前磁器	小杯	4.9	3.6	2.4	染付	
685	SE12	718I	肥前磁器	猪口	5.4	3.2	2.4	染付	畳付・見込み砂粒付着
686	SE12	718I	肥前磁器	小杯			3.5	白磁	
687	SE12	718I	不明磁器	碗	10.5	6	4	染付	
688	SE12	718I	いぶし瓦	軒丸瓦					
689	SK61	718I	瀬戸美濃陶器	丸碗			5.7	鉄	尾呂茶碗
690	SK61	718I	瀬戸美濃陶器	鍋蓋	12.8				素焼
691	SK61	718I	瀬戸美濃陶器	青炉				灰	
692	SK61	718I	瀬戸美濃陶器	火入				志野	
693	SK61	718I	肥前磁器	小碗			3.1	染付	
694	SK61	718I	いぶし瓦	丸瓦					コビキB
695	SK31	2K	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			4	鉄	化粧掛無
696	SK31	2K	瀬戸美濃陶器	丸皿	8.1	1.8	4.2	志野	
697	SK46	4K	瀬戸美濃陶器	丸皿	8.9	1.7	5	志野	
698	SK58	1L	瀬戸美濃陶器	丸皿	12			志野	

第16表 近世遺物一覧表（5）

No.	遺構	Gr.	種別（産地・材質等）	器種	口径	器高	底/高胎	釉薬	備考
699	表採		焼塩壺	焼塩壺					
700	包含層	11M	いぶし瓦	道具瓦					
701	SK47	5K	いぶし瓦	軒瓦					
702	攪乱	1D	陶器瓦					鉄	三葉葵文



第7章 考察



第7章 考察

第1節 中世遺構の時期区分

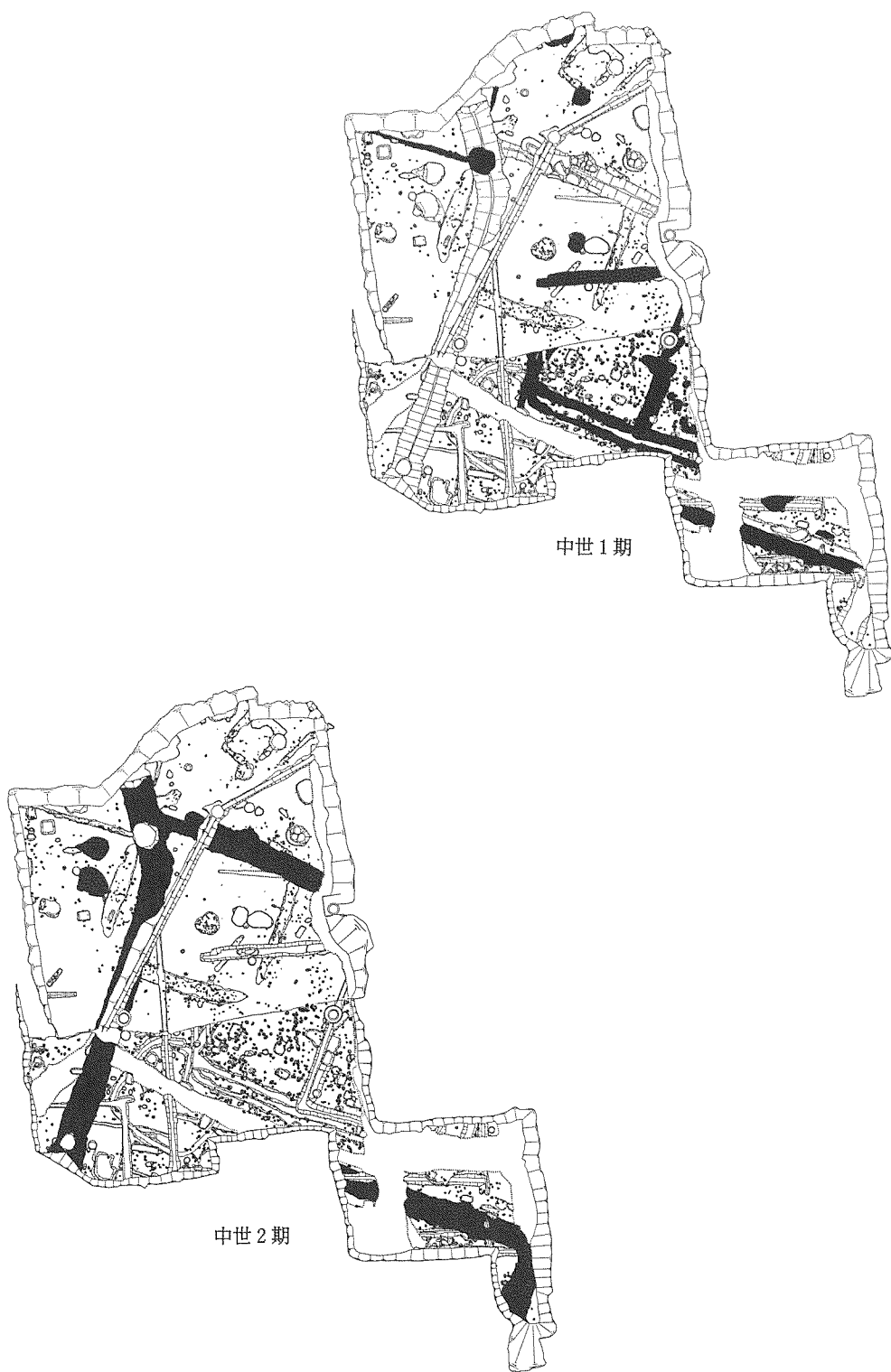
今回の調査で発見された中世の遺構群は、すべて同一面で検出されているため、遺構検出面の上下関係から遺構の時期区分を行なうことができない。このため時期的前後関係については、遺構相互の切り合い関係や、出土遺物の内容から判断せざるを得ない。

まず出土遺物についてみると、発見された中世遺構群は、①瀬戸美濃陶器のすべて、もしくは大半が古瀬戸後期以前のもので占められ、大窯製品は全く含まれないか、あっても大窯第1段階がごく僅かに認められるに過ぎないもの（SD03・06・19・43・44B・47・48・49・50・52・54、SK10・12・22・70・111）、②瀬戸美濃陶器の大窯製品が一定量以上認められ、大窯第2段階以降まで含まれるもの（SD01・02・44A、SK09・11・14・18・19・20）の2群に大別できる。したがって①遺構群を中世1期、②遺構群を中世2期として区分することができるが、この2群は、土師器皿についても顕著な違いを示している。即ち、①遺構群では大皿Ⅱa・Ⅱb、中皿Ⅰa・Ⅰb・Ⅱaが主体的であるのに対し、②遺構群では大皿Ⅱc、中皿Ⅱc、小皿Ⅰa・Ⅰbが圧倒的に多い。このことから、瀬戸美濃陶器の少ないSD46についても、②遺構群に属することが推定される。

さて、この時期区分により遺構のおおよその変遷を掴むことができたが、問題となるのはSK78・79・80・82・104・105などの土坑墓群の所属時期である。これらの土坑墓からは、年代決定の指標となる陶磁器の出土量が少なく、少量ではあるが土坑墓の中から出土している土師器皿が大皿Ⅱaで、中世1期の遺構群と共通していることを指摘し得るに過ぎない。しかも、この土師器皿は副葬されたものではなく、埋葬時に混入したものと推定されるため、これをもって遺構の時期とすることはできず、中世1期以降であることしか判らない。

そこで、次に切り合い関係から遺構の時期区分を試みてみよう。まず、出土遺物によって区分した中世1期と中世2期については、切り合いからみたSK10→SD01、SD03・06→SD01、SD44B→SD44Aといった遺構の時期的前後関係との間に矛盾はない。また、中世1期の遺構群自体の中にも切り合い関係が認められる（例えばSD48とSD50、SD49とSK111）ことから、中世1期についてはさらに中世1a期（SD50・SK111など）・中世1b期（SD48・49など）と細分できることも判る。

しかし、ここでも土坑墓群の所属時期が問題となる。土坑墓自体は切り合うが、他の遺構との間に切り合い関係が認められないからである。もっとも発想を逆転させて、他の溝などとの間に切り合い関係が認められないことを積極的に評価すれば、SD48・49で区画された範囲内に土坑墓が集中しており、しかも土坑墓の長軸方位と、SD48・49の主軸方位がほぼ一致していることが注目されよう。つまり、SD48・49は墓域を区画する溝で、土坑墓群とほぼ同時期（中世1期）の遺構なのではあるまいか。このように考えるとき、SD44B・48といった中世1期の遺構出土遺物中に五輪塔や火葬骨を入れた蔵骨器があることは、極めて示唆的である。なぜなら、これらの遺物は、中世1期あるいはそれ以前にこの地点が墓地であったことを端的に示しているからである。したがって、状況証拠の積み重ねではあるが、ここでは土坑墓群も中世1期の遺構と考えておくこととしたい。



第91图 中世遺構變遷図

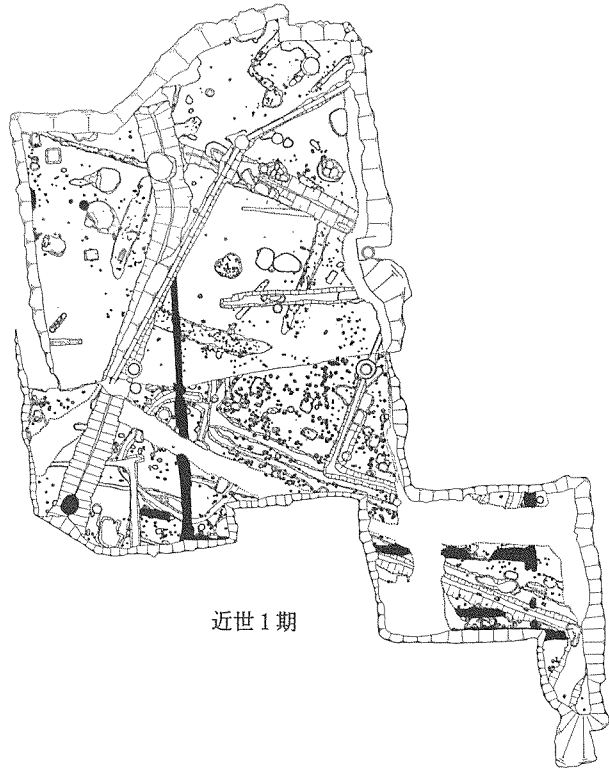
第2節 近世遺構の時期区分

遺構掘り込み面によって、近世遺構が近世1期と近世2期に区分されることは、既に前章で述べた通りである。しかし、掘り込み面を確認できていない遺構も少なくないため、ここで出土遺物の内容から近世遺構の時期区分を行なってみよう。

まず、遺構掘り込み面から明らかに近世1期と考えられる遺構を抽出すると、S D21・25・27・38・42・55・61、S K05・108、S E01・13がある。これらの遺構からの出土瀬戸美濃陶器は、いずれも大窯第4・5段階までのものであるが、大窯第5段階のものは、その中でも早い時期（大窯第9小期）に限られている。一方、明らかに近世2期の遺構であるS D15は、出土瀬戸美濃陶器が本業焼第3小期に位置付け可能である。本業焼第3小期が大窯第11小期に並行するとされている（藤澤1987）ことを考え併せると、近世1期から近世2期への移行は、大窯第10小期＝本業焼第2小期前後のことであったと考えられる。したがって、掘り込み面を確認していない遺構についても、本業焼第3小期以降の遺物の有無によって、S E02・04は近世1期、S K21・26・27・05・08は近世2期と推定できる。



第92図 V層上面検出遺構図 (1:400)



近世1期



近世2期

第93図 近世遺構変遷図

第3節 暦年代観

前節及び前々節での検討結果から、調査地点で発見された遺構群は大きく4時期（中世1期・中世2期・近世1期・近世2期）に区分できた。それでは、各時期は暦年代の上でいつ頃にあたるのであろうか。

まず、中世1期の遺構群については、「瀬戸美濃陶器のすべて、もしくは大半が古瀬戸後期以前のもので占められ、大窯製品は全く含まれないか、あっても大窯第1段階のごく僅かに認められるに過ぎない」ことが、中世2期遺構群との区分基準である以上、下限年代は大窯第1段階のごく初期に位置付けられよう。現在、大窯第1段階には1485～1520年という年代観が与えられているから（藤澤1991a）、中世1期の下限年代としては、1500年前後を当てることが妥当となる。一方、上限年代については、いずれの遺構からも古瀬戸後期の瀬戸美濃陶器、第8型式（中野1994）以降の常滑陶器、大畑大洞4号窯式（田口1983）以降の東濃系山茶碗といった室町時代の陶磁器類が出土していることから、14世紀中葉以降の年代観が与えられる。

続く、中世2期の遺構群については、瀬戸美濃陶器の大窯製品が一定量出土していることから16世紀代を中心とする時期であることが明らかである。但し、大窯第3段階以降の瀬戸美濃陶器の出土はSD01・SK09・SK11の3遺構に限定されることから、この時期には中世2期遺構群は既にその機能を停止しつつあった可能性が高い。特に、大窯第4・5段階については、SD01の2I・2Jグリッドからしか出土しておらず、SD01自体も十全に機能していたかは疑わしい。したがって、出土瀬戸美濃陶器からみる限り、中世2期遺構群の中心となる時期は、大窯第2段階までであり、大窯第3段階以降徐々にその機能を停止していったものと考えられる。現在、大窯第2段階には1520～1555年、大窯第3段階には1555～1590年という年代観が与えられているから（藤澤1991a）、中世2期遺構群は、1500年～1555年前後に中心があり、SD01など一部の遺構が16世紀後葉まで埋没しきらずに残っていた可能性があると考えられる。

次に、近世1期の遺構群であるが、既に述べたように、瀬戸美濃陶器の志野釉製品の有無が中世遺構群との識別基準であるから、志野釉製品の出現する大窯第4段階（大窯第7・8小期）がその上限時期となる。一方、下限時期については、前節での検討により大窯第9小期と推定された。暦年代は、大窯第4段階が1590～1610年、大窯第9小期並行の本業焼第1小期が慶長年間（1596～1615年）後半～元和年間（1615～1624年）とされているから（藤澤1987・1991a）、近世1期は16世紀末から17世紀初頭とすることができよう。

最後に、近世2期の遺構群について考えてみよう。前述したが、基本的に、本業焼第3小期以降の瀬戸美濃陶器の出土が近世1期との区分の目安であった。本業焼第3小期には、正保年間（1644～1648年）～寛文年間（1661～1673年）という年代観が付与されているから（藤澤1987）、この歴年代をもって近世2期の上限年代としてもよさそうである。この場合、近世1期と近世2期の間で、本業焼第2小期にあたる時期が空白となるが、これは単にこの時期に廃絶した遺構がなかったことを示しているに過ぎず、近世2期遺構群の形成が本業焼第2小期にまで遡る可能性を否定するものではない。したがって、近世2期の上限年代については、寛永年間（1624～1644年）とされる本業焼第2小期の歴年代（藤澤1987）を当てておきたい。

第4節 調査地点の景観変遷

以上の検討結果から、調査地点における遺構群の変遷のあらましを把握することができた。そこで次に、各時期の遺構群の性格について考え、調査地点の景観がどのように変化していったのかをみてみよう。

中世1期（14世紀中葉～15世紀：室町時代）

この時期を特徴付ける遺構は土坑墓群と溝である。土坑墓群の存在は、それ自体で調査地点が墓地（墓域）であったことを示しており、S D48・49などの溝に区画された範囲内に集中している状況から、〈溝に区画された墓地〉の景観を想定することができよう。これは、中世1期の遺構出土遺物の中に五輪塔（S D44B・S K10）や蔵骨器（S D48）があることから裏付けられる。また、S K10から大量に出土している自然礫は、中世墓にしばしばみられる集石墓を形造っていた可能性もある。ただ、出土遺物の中には、播鉢・鍋・釜といった日常什器も少なくなく、調査地点は荒野の中の墓地といった景観ではなく、近辺には居住空間も展開していたと推定される。

また、特記される出土遺物として、花瓶・香炉といった仏器類や、いぶし瓦が挙げられる。いぶし瓦については出土量がごく少ないため、中世2期以降の遺物を誤って取り上げている可能性も皆無ではないが、仏器類の存在と併せて、中世寺院の存在を示唆しているように思われる。

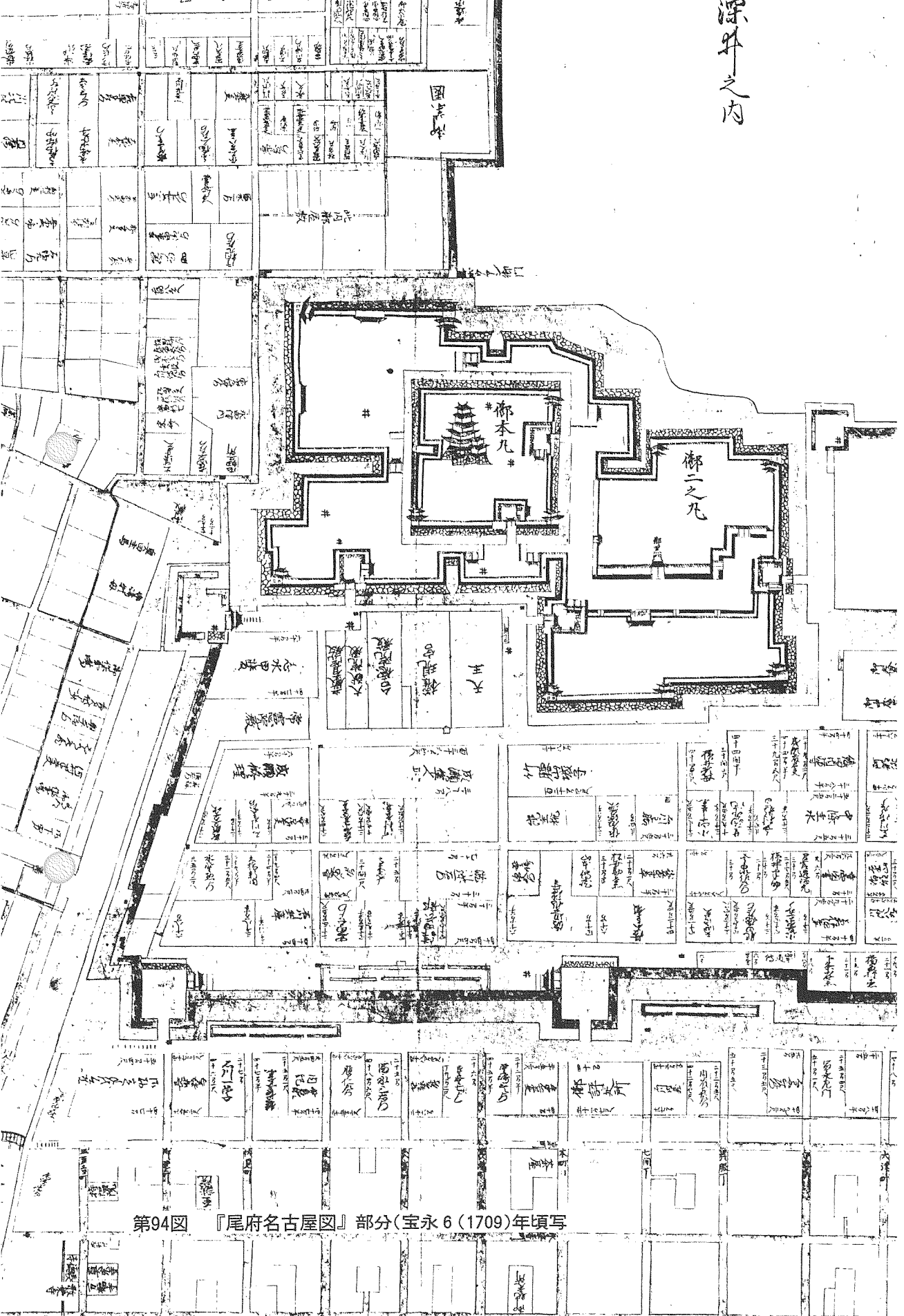
近世の名古屋城下図（『尾府名古屋図』『尾州名古屋御城下之図』など）をみると、調査地点は尾張藩家老志水甲斐守の屋敷地で、道路を挟んですぐ東側の区画に天王社があったことが知られる。『尾張志』などの近世地誌類によれば、天王社は〈清須越〉以前からあったといい、名古屋城築城前の三の丸付近を描いたとされる絵図『那古野古図之写』『尾張国名古屋古図』にも記載されている。ここで注目すべきなのは、これらの絵図に描かれた天王社のすぐ西隣にある、天永寺という寺院の存在である。特に、『尾張国名古屋古図』には、天永寺の欄に「今天王坊」と注記されていて、天永寺が天王社の神宮寺であることが判る。つまり、これらの情報を総合すると、名古屋城築城前、調査地点のすぐ東側付近に天王社の神宮寺の存在を推定することができるのである。これが出土遺物から推定された寺院の正体ではなかろうか。同時代の古文書から確認することはできないが、縁起によれば天王社は延喜11（911）年の創祀といい、神宮寺である天永寺が室町時代にあったとしても矛盾はない。

もっとも、これらはいずれも状況証拠の範囲を超えるものではない以上、今後の調査の進展に待つところもまた大きいと言わねばならない。

中世2期（16世紀：戦国時代）

中世2期の遺構群としては、S D01・02・46といった大溝が目立つが、これ以外には、地下式土坑S K09・11、道路状遺構S D44Aが挙げられるに過ぎない。しかも、S K09・11からは中世2期に相当する時期の遺物が出土しているが、すべて遺構廃絶後の流入遺物であり、遺構が機能していた時期そのものは、中世2期よりも遡る可能性がある。したがって、調査地点における中世2期は、大溝の性格の検討を抜きにしては語れない。

深井之内



第94图 『尾府名古屋图』部分(宝永6(1709)年填写)

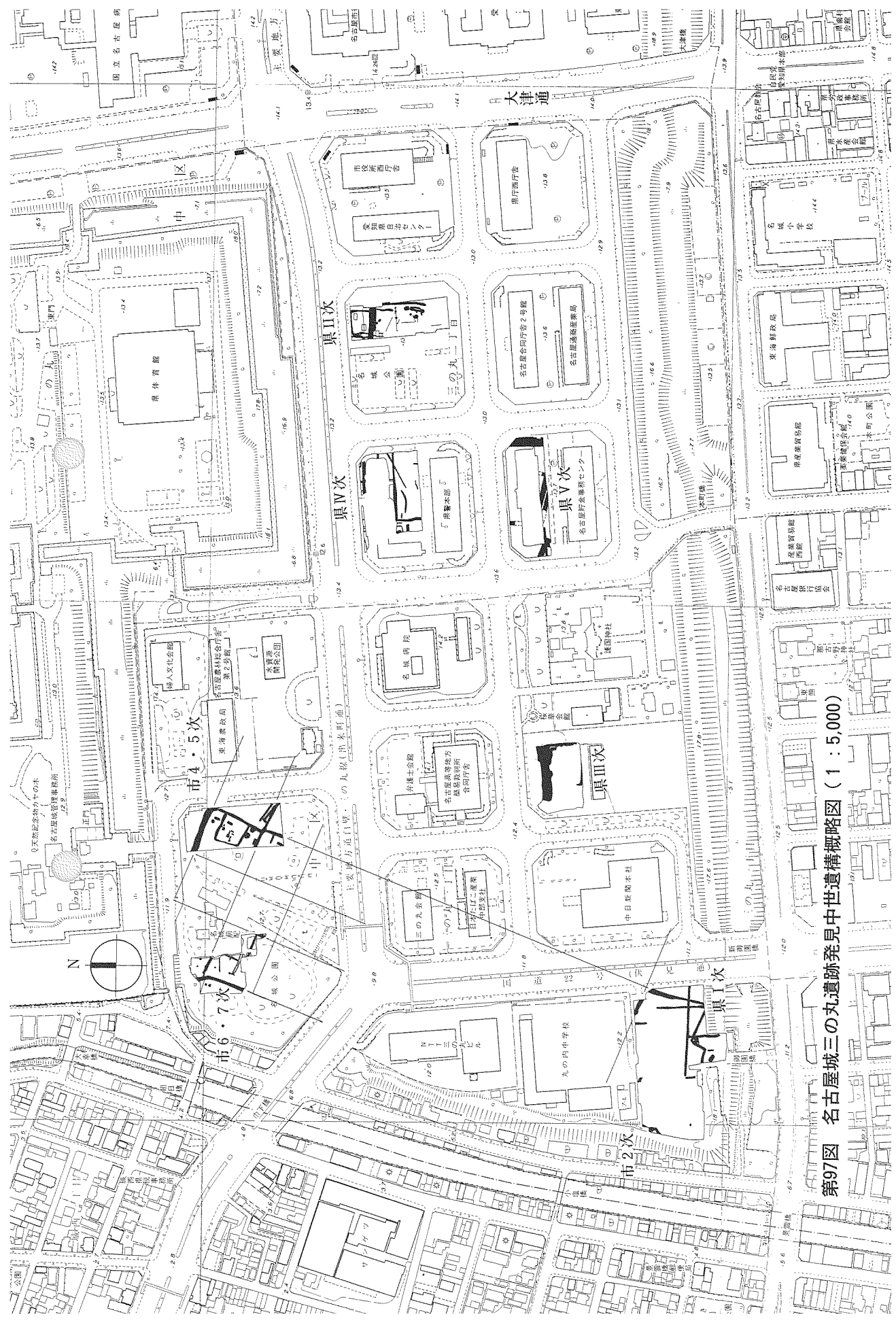
では、大溝S D01・02・44は一体いかなる性格の溝であろうか。まず、大溝S D01・02・44の位置関係に着目してみると、この3者は直交、あるいは並行する関係にあり、1辺50mほどの方格地割を成していることが判る。こうした遺構のあり方は、名古屋市教育委員会（以下、市）第4・5次調査（水野・服部1994）地点で発見された同時代の区画溝S D05・13・24の位置関係と極めて似通っている。しかも、市4・5次調査S D24は、今次調査S D02の延長線上にあり、形態・規模に殆んど違いがみられないことから、両者は同一の遺構である可能性が高い。このことは、市4・5次調査S D05・13・24と今次調査S D01・02・44が一連の遺構であることを示していると考えられる。さらに想像を逞しくすれば、愛知県教育委員会・（財）愛知県埋蔵文化財センター（以下、県）第1次調査（佐藤他1990）地点の戦国時代溝S D313も市4・5次調査S D05・24の延長線上にあり、約50m（ほぼ半町）の方格地割が三の丸の西側一帯に広く展開していた可能性もある。

この方格地割は、中世2期つまり16世紀前半頃の遺構群であるから、時期的には、戦国時代にあったとされる那古野城との関連が想定できる。名古屋城三の丸遺跡の発掘調査では、これまでも那古野城関連と推定される遺構が少なからず発見されているので、ここでは他地点の調査結果も踏まえて、方格地割の性格について考えてみよう。

名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、市1～7次調査で4地点、県I～V次調査で5地点の合計9地点で実施されている。このうち、市1・3次調査の名古屋市公館地点を除いて、調査地点のすべてで戦国時代の遺構が発見されており、現在の天津通以西には三の丸のほぼ全域に那古野城関連とみられる遺構が広がっているようである。これまでに発見されている戦国時代遺構は、その方向性からA・Bの2群に大別できる。A群遺構は、県II次調査（梅本他1990）S D01、県IV次調査（遠藤他1993）S D001・006・009・401・405・407などに代表されるもので、比較的二の丸に近い調査地点でみつかっており、ほぼ東西・南北の方向性を有する。一方、B群遺構は市4・5次調査S D05・13・24、今次調査S D01・02・44に代表されるもので、三の丸地内の西側に偏在しており、N-約20°-E、若しくはこれと直交するN-約70°-Wの方向性をもっている。さらにA群には幅5mを超える大規模な溝があるのに対して、B群の溝は最大でも幅4mであり、規模の面でも顕著な違いを示している。

このA・Bの遺構群の違いについては、既にA群を「城の中心部分、つまり城主の居住空間を防御する堀」、B群の市4・5次調査S D05・13・24を「家臣団の屋敷地を区画するもの」と推定したことがあり（尾野1993）、現在も基本的に見解の変更の必要はないと考えている（那古野城は現在の二の丸付近にあったというから、二の丸に近接して発見されているA群遺構をB群遺構よりも城の中心部分に近いと考えることは、伝承との間の整合性も高い）。したがって、ここではB群遺構に属する今次調査S D01・02・44についても、家臣団屋敷地の区画溝と推定しておきたい。

なお、那古野城が織田信秀によって「丈夫に御要害仰せ付けられ」という『信長公記』の記述から、A・B群の違いを今川氏時代の那古野城と織田氏時代の那古野城と評価する向きがあるかもしれない。しかし、出土瀬戸美濃陶器でみる限り、両者の間に時期的差異は見出し難い。したがって、A群とB群は時期的な遺構の変化としてではなく、同時期における遺構の性格の相違と捉えられるべきであろう。



第97図 名古屋城三の丸遺跡発見中世遺構概略図 (1 : 5,000)

近世1期（16世紀末～17世紀初頭：江戸開幕前後）

近世1期は、出土瀬戸美濃陶器の年代観から、下限年代を17世紀初頭の元和年間（1615～1624年）以前に求めることができた。これは、慶長15（1610）年に始まる〈清須越〉と一致しており、調査区全域にひろがる整地層によって覆われていることを考慮すれば、近世1期の遺構群は〈清須越〉によって廃絶したものと考えられよう。

前出の『那古野古図之写』『尾張国名古屋古図』には、名古屋村の庄屋が慶長年間（1596～1615年）以前の状況を寛永年間（1624～1644年）に描いた旨が記されており、内容はまさに近世1期に相当する時期のものである。調査地点の位置と考えられる天永寺の西側には庄屋屋敷が描かれており、『尾張国名古屋古図』では「今志水屋舗」と注記されている。時期的に合致することからみて、近世1期遺構群はこの庄屋屋敷に関連するものではなかろうか。

これまで、名古屋城三の丸遺跡の発掘調査では、当該時期の遺構は殆んど発見されていない。したがって、この時期三の丸地内の居住性はかなり低下していたと考えられ、絵図に描かれた庄屋屋敷以外に、何らかの施設があったことを推測させる材料は見当たらない。

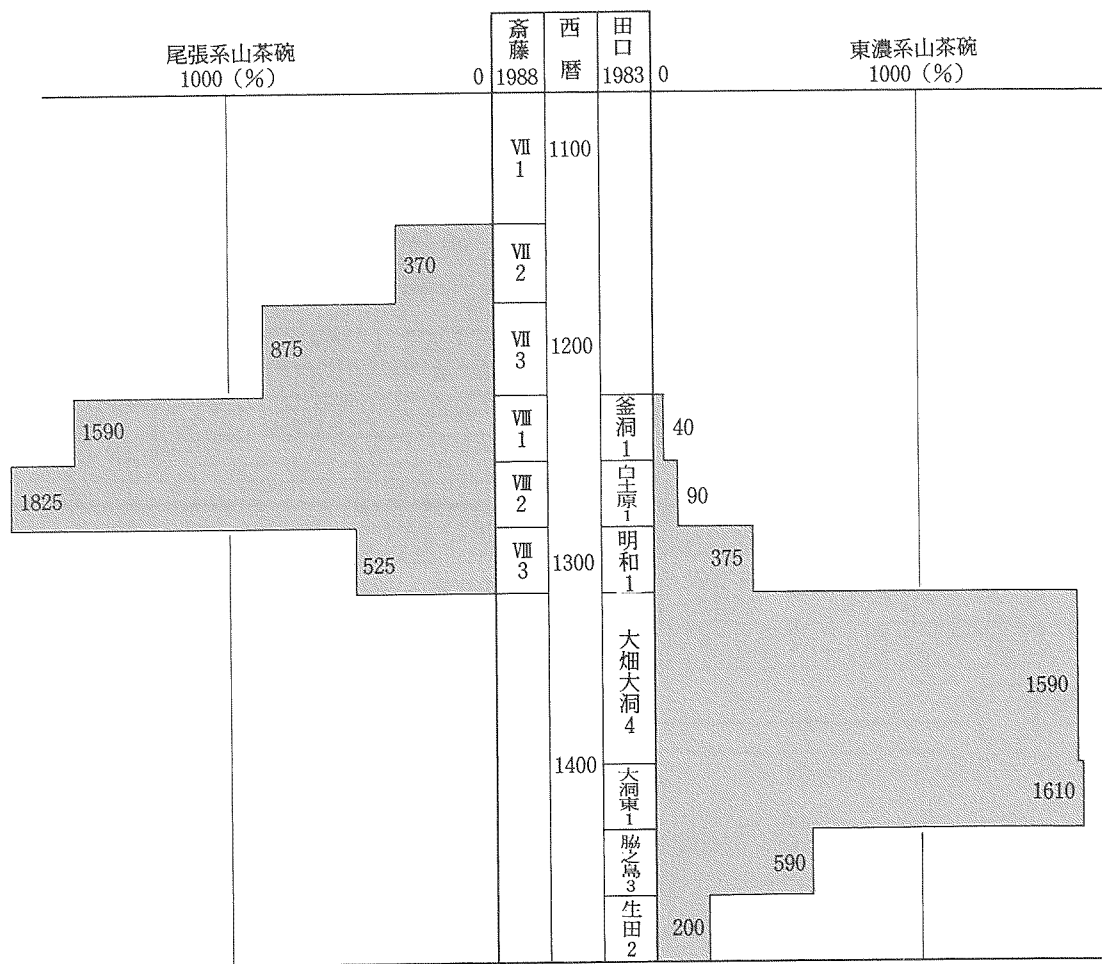
近世2期（17世紀～19世紀：江戸時代）

〈清須越〉以降に成立した遺構群である。調査地点は、寛永3（1626）年以降幕末まで志水甲斐守家の屋敷地であったことが知られているから、近世2期の遺構群は、この屋敷に関連するものとみてよかろう。これは、土坑S K27・井戸S E05など近世2期の遺構から、志水甲斐守家の家紋を瓦当にあしらった瓦が出土していることから裏付けられる。

もっとも、志水甲斐守が屋敷地を拝領する寛永3（1626）年と〈清須越〉（1610年開始）の間に僅かではあるが時間差があるため、近世2期の遺構をすべて志水甲斐守家屋敷関連とすることには問題があるかもしれない。しかし、築城（1610年）以後元和5（1619）年以前の状況を示すとされる（山本1994）『金城温古録』所載の「三之丸内邸宅古図」では、調査地点は空白となっており、空き地となっていたようである。また、出土遺物からみる限り、寛永3（1626）年以前に廃絶していると考えられる近世2期遺構は認められない。したがって、近世2期の遺構を殆んどすべてが志水甲斐守家屋敷に関連するとみても大過ないと思われる。

中世 1 期以前

上記検討結果から、室町時代（中世 1 期）から江戸時代（近世 2 期）にかけての調査地点は、①墓地→②家臣団屋敷→③庄屋屋敷→④家老屋敷という 4 段階の変遷をたどったと推定された。また、中世 1 期より古い時期の遺構としては、弥生時代の方形周溝墓や古墳がみつかにっているに過ぎない。しかし、古墳時代から室町時代まで調査地点一帯が無人の空白地帯であったとは考えにくい。というのも、発見された中・近世遺構からは、尾張系山茶碗など 12・13 世紀の遺物が少なからず出土しているからである。そこで、調査区全体からの山茶碗の型式（時期）別出土量をみると、14 世紀を境として尾張系と東濃系の比率が逆転するものの、12 世紀中葉以降 15 世紀まで山茶碗は一貫して使用されており、この間に遺跡の断絶は認め難いことが判る。



第99図 山茶碗時期・産地別底部残存率図

では、なぜ12・13世紀の遺構が発見されていないのか。今回の調査では、土坑墓の残存状態から、中世の遺構が上部を1 m近く削り取られていることが推定された。地表面から1 mも削り取られれば、よほど深い遺構でなければ残らない。おそらく、12・13世紀の遺構はことごとく削られてしまい、遺物だけが残ったのに相違ない。室町時代に墓地となる以前（以下、中世前1期）の調査地点が、どのような景観を呈していたのか、これについては遺構が残っていない以上、手がかりを出土遺物に求めるしかない。

そこで、土器・陶磁器組成の面から調査地点の中世前1期について考えてみよう。今次調査で採集された中・近世遺物は、接合前破片数で12,816点にのぼる。内訳は、瀬戸美濃陶器1,761・常滑陶器518・尾張系山茶碗527・東濃系山茶碗607・信楽陶器2・京焼陶器3・産地不明陶器14・青磁（中国）9・青花磁器（中国）22・瀬戸美濃磁器46・肥前磁器102・産地不明磁器28・瓦器13・土師器皿2,187・土師器鍋2,972・焼塩壺3・いぶし瓦3,912・陶器瓦3・鉄製品17・銅製品42・石製品22・木製品1・土製品5である。問題は、ここから如何にして中世前1期の土器・陶磁器を抽出するかである。

例えば、常滑陶器の甕の口縁部、山茶碗の底部といった形態の特徴豊かな土器・陶磁器片の場合、時期（型式）を推定することは比較的容易である。しかし、出土土器・陶磁器には口縁部も底部も残っていない胴部・体部片も多く、これら形態の特徴に乏しい小破片のすべてを個別に時期（型式）比定することは困難を極める。このため、以下では口縁部計測法を援用して、中世前1期の土器・陶磁器量（破片数）を推定してみることにしよう。

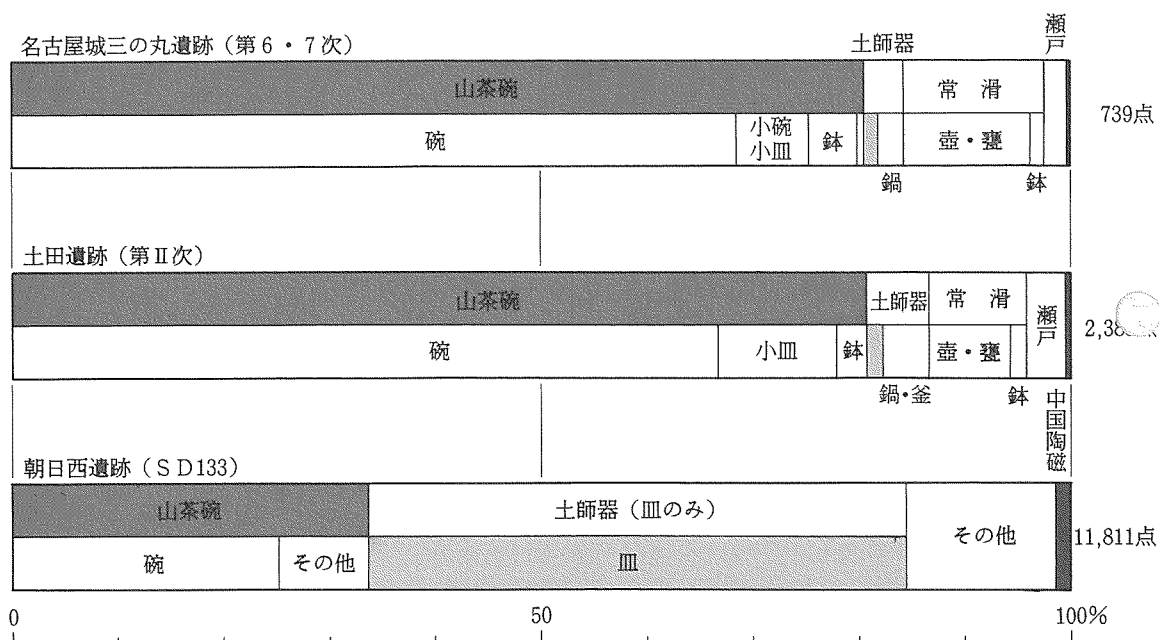
まず、問題としている時期が12・13世紀であることから、中世猿投窯編年（斎藤1988）で13世紀後葉とされている第Ⅷ期第3型式の（尾張系）山茶碗、およびこれと並行する時期（型式）以前の土器・陶磁器を中世前1期のものと見なすこととする。具体的には、明和1号窯式（田口1983）以前の東濃系山茶碗、古瀬戸中1期（藤澤1984）以前の瀬戸美濃陶器、6b型式（中野1994）以前の常滑陶器、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類（横田・森田1978）、土師器大皿Ⅰa・中皿Ⅰa、5類（新田1985）以前の伊勢型鍋（土師器鍋A）である。このうち、尾張系山茶碗については、時期（型式）の判るものがすべて猿投窯第Ⅷ期第3型式以前であることから、全破片を中世前1期のものと推定することができる。しかし、東濃系山茶碗や常滑陶器などは、中世前1期から中世1期以降にまたがっており、尾張系山茶碗のように単純に考えることはできない。そこで、これらについては器種別に口縁部（常滑陶器）・底部（東濃系山茶碗）といった時期（型式）判定の容易な部位の延べ残存率から中世前1期と中世1期以降の出土個体数比率を算出し、この比率で破片数を按分することとした。

以上の手順によって、推定算出された中世前1期の土器・陶磁器量（破片数）は、尾張系山茶碗525（碗437、小碗・小皿49、鉢34、壺5）、東濃系山茶碗71（碗69、小皿2）、瀬戸美濃陶器15（壺のみ）、常滑陶器97（壺・甕88、鉢9）、青磁3（碗2、皿1）、土師器皿10、土師器鍋18の合計739点である（計算にあたっては、小数点以下第1位を四捨五入した）。百分比（%）に換算すると、尾張系山茶碗71.0（碗59.1、小碗・小皿6.6、鉢4.6、壺0.7）、東濃系山茶碗9.6（碗9.3、小皿0.3）、瀬戸美濃陶器2.0（壺のみ）、常滑陶器13.1（壺・甕11.9、鉢1.2）、青磁0.4（碗0.3、皿0.1）、土師器皿1.4、土師器鍋2.4である。これを同時期の尾張地域における他の中世集落遺跡（土田遺跡・朝日西遺跡）と比較してみよう。

土田遺跡は、12・13世紀を中心とする時期の中世集落遺跡で、第Ⅱ次調査（城ヶ谷他1991）出土分を比較対象とした（第Ⅰ次調査出土分については、土器・陶磁器量の報告がない）。一方、朝日西遺跡は、11世紀から近世におよぶ複合遺跡である。朝日西遺跡については、出土中世土器・陶磁器の総量については報告がないため、ここでは便宜的に12・13世紀の遺構の中で、最も多量の遺物が出土しているS D133（小澤他1992）で代表させることとする。

3遺跡を較べてみると、山茶碗が8割以上を占めている名古屋城三の丸遺跡の土器・陶磁器組成は、明らかに土田遺跡のそれと共通しており、土師器皿が過半を占める朝日西遺跡の様相とは大きく異なっていることが判る。饗宴・儀礼に際して使い捨てされたであろう土師器皿の量的な多寡からみて、土田遺跡と朝日西遺跡の土器・陶磁器様相の違いが、居住者の階層性を示していると考えられることについては既に述べたことがある（尾野1994）。つまり、土田遺跡が一般的な村落であるのに対して、朝日西遺跡の居住者は社会的・経済的により上位の階層に属すると推定されたのであった。したがって、土田遺跡と共通した土器・陶磁器組成を示す名古屋城三の丸遺跡は、一般的な村落の景観を呈していたのではないかと思われる。

ところで、出土遺物（特に山茶碗）からみた中世前1期の上限年代は、12世紀中葉であった。これは、開発領主小野法印顕恵によって、三の丸付近に荘園那古野荘が立荘された平安時代末期にあたる。とすれば、土器・陶磁器組成から推測される一般的な中世村落景観とは、この那古野荘の一部ではなかろうか。



第100図 中世集落遺跡出土土器・陶磁器組成比較図

■引用・参考文献一覧

- 伊藤嘉章他 1984『高根山古窯跡群発掘調査概報』 土岐市教育委員会
- 梅本博志他 1990『名古屋城三の丸遺跡（Ⅱ）』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第16集）
- 遠藤才文他 1993『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集）
- 大参義一 1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』X L V II
- 小澤一弘他 1992『朝日西遺跡』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集）
- 尾野善裕 1993「三の丸遺跡の調査から2 那古野城を掘る」『名古屋市考古資料館報みはらし』No.166
- 尾野善裕 1994「東海における土器から見た貿易陶磁器—尾張・朝日西遺跡の事例を中心に—」（第13回中世土器研究集会報告資料）
- 金子健一他 1992『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集）
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 斎藤孝正 1988「中世猿投窯の研究—編年に関する一考察—」『名古屋大学文学部研究論集』C I（史学34）
- 佐藤公保他 1990『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ）』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集）
- 城ヶ谷和広他 1991『土田遺跡Ⅱ』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集）
- 千田嘉博他 1989『名古屋城三の丸遺跡—1・2・3次調査の概要—』 名古屋市教育委員会
- 田口昭二 1983『考古学ライブラリー17 美濃焼』 ニュー・サイエンス社
- 中野晴久 1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」（全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集） 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 檜崎彰一 1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』 愛知県教育委員会
- 新田洋 1985「平安時代～中世における煮炊用具—「伊勢型鍋」—に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会
- 藤澤良祐 1984「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ
- 藤澤良祐 1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ
- 藤澤良祐 1987「本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ
- 藤澤良祐 1988「本業焼の研究（2）—赤津村・上水野村を中心に—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ
- 藤澤良祐 1989「本業焼の研究（3）—下品野村・下半田川村を中心に—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ
- 藤澤良祐 1991 a 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館

研究紀要』X

- 藤澤良祐 1991b 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 松田訓他 1994 「名古屋城三の丸遺跡」『年報 平成5年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 水野裕之・服部哲也 1994 『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査―遺構編―』名古屋市教育委員会
- 水野裕之他 1994 『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査―遺物編―』名古屋市教育委員会
- 山本祐子 1994 「名古屋城下図の年代比定と編年について」『名古屋市博物館研究紀要』第17巻
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4




付編 1 名古屋城三の丸遺跡室町時代（15世紀）土坑墓出土人骨について

毛利 俊雄
京都大学霊長類研究所

名古屋城三の丸遺跡で発掘された室町時代（15世紀）の土坑墓のうち4基から、それぞれ1体、合計4体の人骨が出土した。いずれの人骨も保存状態は不良で、骨質はきわめてもろい。

S K79号人骨


 熟年の女性と推定される。頭部と左側の上腕・前腕の骨の骨幹のみが残存している。頭部は、頭頂を南東に向け、右側を下にして、顔は北東を向いた姿勢で出土した。左腕の骨は肘を強く屈曲させた状態で、頭部のすぐ北西で出土した。

S K80号人骨

成人で、おそらくは女性と推定される。残存する部位は、頭蓋冠の前半と上肢の長骨骨幹の破片2本のみである。頭蓋冠は内面をななめに上に向けた状態で出土した。頭蓋冠の前・後はそれぞれ北東・南西方向を指し、前部が低く、後部が高く位置していた。2本の長骨破片はそれぞれ頭蓋冠の右側面（北西側）と後頭部付近（南西側）で出土した。頭蓋冠の出土姿勢がやや不自然なことや、土坑のサイズを考慮すると、本人骨は坐葬で埋葬され、頭部は死体の軟部が腐敗した時ころがったのではないかと推測される。

S K82号人骨

壮年の男性と推定される。頭部、手足を除く上下肢、寛骨（破片）などが残っている。埋葬姿勢は、股関節と膝関節を強く屈曲させた立て膝の坐葬と推定される。体の向きは北西である。死体の軟部の腐敗にともなって両膝は右に倒れ、頭部は前に落ちて180度回転したようだ。

 右脛骨の上下の関節面の距離は約32cmあるので、脛骨最大長を34cmとすると、身長は藤井の式から158cmと推定される。

S K105号人骨

熟年の女性と推定される。肋骨、手足、頸椎、胸椎などをのぞき、ほぼ全身を残している。埋葬姿勢は右を下にした横臥屈葬で、頭位は北向きである。股関節はほぼ直角に曲げられ、膝は強く屈曲されている。頸はややうつむき加減で、肘はかなり屈曲し、手は顔の前に来ていたらしい。

大腿骨の長さは42cm程度と推定されるので、身長は155cm前後と推定される。

付編 2 名古屋城三の丸遺跡出土鉄滓の金属学的解析

佐々木 稔

1 いきさつ

名古屋城三の丸遺跡の第4～7次調査において、遺構の溝・堀ならびに包含層の中から鉄滓の大小の破片が出土した。遺跡のちょうさくいきないでは、鉄関連の遺構が検出されていないので、鉄滓を金属学的に解析してどの工程で発生したものなのかが判れば、遺跡の性格を検討する上で重要な基礎的資料となることは間違いない。

見晴台考古資料館からの依頼で、鉄滓の分析を新日鉄釜石文化財保存処理センターが受注し、分析は日鉄テクノロジーにおいて実施された。

さらに、筆者の佐々木が分析データの呈示を受けて金属学的解析を行い、報告書として作成したのが本稿である。

2 調査資料および方法

送付された試料は鉄滓4点である。試料の外観的特徴と調査内容は、表1に一括して示した。

試料の中で重要なのはNo.2で、直径が約60mm、最大厚さ25mmのいわゆる椀型滓である。「椀型滓」は、製鉄史研究分野の慣用的術語であって、完形品はお供え餅を逆にしたような形状を有し、大きいものでは直径が200mm近く、厚みも70～80mmに達する。No.1、No.3の2点の試料は、いずれも椀型滓の特徴を部分的に残した破片である。なお、No.4は炉壁の破片と見られる。

一般的に椀型滓は、大鍛冶滓ないしは小鍛冶滓のいずれかであるとされている。大鍛冶滓は鋼精練滓ともいわれ、銑鉄（炭素量4%前後で鋳物にするような鉄）を溶融し、その中の炭素分を低減する処理を行って鋼（炭素量0.9%以下）に変える工程で生成する鉄滓のことである。後者の小鍛冶滓は鋼素材を加熱・鍛打して製品を造る過程で発生し、前者に比べて小さく、化学組成と鋳物組成に大きな相違がある。したがって両者を区別することは可能である。

付編 2・表 1 送付された鉄滓の外観と分析項目

試料 No.	調査 回数	出土場所	年代	鉄滓の外観的 特徴	鉄滓の概略寸法 (mm)	分析項目			
						組織観察	化学成分	定性分析	元素分布
1	VI	C3,D3Gr.SD01	16C前半	椀型滓の破片か	40×30×10(厚さ)	○	○	×	○
2	VII	Gr.包含層	17C前半以前	椀型滓	60×55×25	○	○	○	×
3	IV	SD13	16C前半	椀型滓の破片か	35×25×10	○	○	×	×
4	IV	SD18	15C後半	炉壁片	100×80×70	○	○	×	×

注) 添付資料には他に鉄滓と関連する遺物はないと記載されている。

各試料はほぼ真ん中で切断し、一方は断面を研磨して組織の観察に、他方は粉碎して化学分析に供した。分析方法はいずれも鉄鉱石類に対して定められている日本工業規格に準拠し、T.Fe（全鉄）、SiO₂、Al₂O₃は蛍光X線法、M.Fe（金属鉄）とFeOは滴定法、他はICP法によった。

なお、試料No.1、2のマイクロ組織は、EPMA（エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー）で分析した。

3 鉄滓の組成と組織

3.1 化学組成

鉄滓の組成と化学分析値は、一括して表2に示した。鉄滓試料3点のT.Feはいずれも40%を越しており、しかもFeOが高いので、滓化が進んだ鋼精練滓であることが推測される。M.Feは1%程度にすぎない。No.3は鉄錆が生成しているためFe₂O₃が多い。

ところで近世以前の鉄滓葉、熔融酸化鉄が炉壁材と反応して生成すると一般に考えられている。そこでまず、No.4の炉壁試料の化学組成から検討してみる。炉壁は粘土に須砂を混ぜて構築されるので、SiO₂とAl₂O₃が高い。この試料では、それぞれ73.63、14.78%を示している。CaOは僅か0.9%にすぎない。CaO/SiO₂、CaO/Al₂O₃を計算すると、0.01、0.06と極めて低い。

これに対してNo.1鉄滓試料のCaO含有量は3.41%、CaO/SiO₂は0.13、CaO/Al₂O₃は0.46になる。酸化鉄成分に炉壁材の成分が付け加わっただけのものとはできない。同様にNo.2試料でもCaO/SiO₂、CaO/Al₂O₃の値はそれぞれ0.09、0.48で、炉壁材よりもかなり高い。明らかにCaO分は富加しており、石灰質造滓材の人為的な添加を想定しなければならない。しかしNo.3試料は上述の値は大きくない。これまでの研究にもとづけば、CaO分の富加が認められるのは鋼精練の比較的初期段階の鉄滓、認められないのは後期の段階のものと考えられる。

一方TiO₂については、炉壁材中の0.46%に対しNo.2試料では1.04%と明らかな増加が見られる。砂鉄の意図的な使用を推測させるが、最終的には鉄滓のマイクロ組織を詳細に調べて結論を下す必要があり、次節で述べることにしたい。

付編2・表2 試料鉄滓の化学組成

鉄 滓		化 学 成 分 (%)									CaO CaO		ミクロ組織 (鉱物組織)
遺跡名	No.	T.Fe	M.Fe	FeO	FeO ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	SiO ₂	Al ₂ O ₃	
名古屋城	1	43.44	1.13	40.00	16.16	26.30	7.45	3.14	0.87	0.38	0.13	0.46	ウスタイト, ファヤライト
	2	62.95	1.51	68.26	12.20	11.73	2.17	1.05	0.40	0.40	0.09	0.48	ウスタイト, ファヤライト主体
三の丸跡	3	59.92	1.13	40.24	38.92	13.63	2.24	0.38	0.29	0.29	0.03	0.17	ウスタイト, ファヤライト
	4	4.57	1.13	0.48	4.39	73.63	14.78	0.90	0.35	0.35	0.01	0.06	ガラス化した炉壁材

3.2 マクロ・マイクロ組織

鉄滓ならびに炉壁試料の外観と断面のマクロ・マイクロ組織ならびにEPMAによる分析結果を、写真1～6に示した。以下では試料の番号順に説明する。

(1) No.1 試料 (写真1、2)

外観写真に見られるように表面がかなり滑らかで、操業時には比較的流動性のよい鉄滓であったと思われる。断面の、マクロ組織では空孔が少ない。

代表的なマイクロ組織が下段左の写真である。樹枝状に晶出したウスタイト（理論化学組成は FeO 、符号Wを付す）と粒成長したファヤライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ 、符号F）が観察され、溶融状態にある鉄滓が冷却されたことが判る。その間隙を埋めるのはガラス質珪酸塩（符号S）である。

下段右には未溶融の鉄鉱石粒子を示した。粒子の外形が不整であり、しかも粒子内で結晶粒界に亀裂が入っていることから、溶融した鉄滓の中で加熱分解の途中にあったことが判る。この鉄鉱石は、亀裂の生成状況からみて、磁鉄鉱ではないかと思われる。さらに分解が進んで小結晶粒子に分断され、粒子群を形成している様子が、この鉄滓試料中の多くの個所で見出された。

代表的なマイクロ組織における含有元素の濃度分布をEPMAで調べた結果が、写真2である。ウスタイト粒子からは、FeのほかにTiが弱く検出されている。ファヤライトはFe、Si（ほかに酸素）が主要成分で、Caは少量にすぎない。ガラス質珪酸塩はCa、Al、Siの濃度が高い。組成は $\text{CaO}-\text{FeO}-\text{MgO}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{SiO}_2$ 系である。なお写真2でMgの表示は省略した。マイクロ組織の特徴と前述の石灰石添加の可能性を勘案すれば、石灰分が炉壁材ならびに再酸化鉄との反応に加わり、流動性のよい鉄滓を生成したものと思われる。また鉄鉱石粒子が添加された形跡が認められるので、鉄鉄の脱炭材として意図的に使用されたことを考えなければならない。これについては次節で改めて検討したい。

(2) No.2 試料 (写真3、4)

外観写真にみられるように、鉄滓の外表面は粗粍で、大小の凹凸がある。これも鋼精練滓の一つの特徴と言える。断面のマクロ組織でもやはり大小の丸みを帯びた空孔が観察されるが、精練過程で発生したガスが、そのまま固化した鉄滓の中に閉じ込められてしまったものである。

マイクロ組織の観察では、ウスタイトの大きな結晶粒子が集まっているのが見出された。その代表的な組織を、写真3の下段左に示す。粒子の配列には規則性がなく、晶出物とは言えない。溶融もしくは半溶融状態の鉄が再酸化したものかも知れない。もしそうだとすれば、この鉄滓は鋼精練のやや進んだ段階にあったということになるであろう。

前節で TiO_2 含有量がかかなり高いので、砂鉄が使用された可能性のあることを述べた。僅かに還元が進んだ砂鉄粒子の例を、下段右の写真に示す。角張っており、砂鉄の元の形状をよく残している。この粒子をEPMAで半定量分析した結果が、写真4である。Fe、Ti、Oが主要な成分元素である（Auは試料表面の蒸着膜）。半定量値からウルボスピネ（ $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）と判定することができる。こうして鋼精練過程で少量の砂鉄も同時に添加されたことが分かった。

(3) No.3 試料 (写真5)

外観写真で多孔質の鉄滓であることが判る。マイクロ・マクロ組織からもそれは明瞭で、

多くの気孔が観察される。

この鉄滓の主要構成化合物はウスタイトとファヤライトである。しかしウスタイトの結晶は配列に規則性が認められないので、上述の試料2と同様、おそらくは鉄の再酸化物である。さらにCaO分析値も0.38%と低いことを考え合わせると、鋼精練がより進んだ段階の鉄滓といえるであろう。

(4) No. 4 試料 (写真6)

既に肉眼観察によって炉壁材であることが分かっている。炉壁材が加熱、還元変化を受け、ガラス化している。したがってマクロ・ミクロ組織に際立った特徴は見られない。

ミクロ組織写真でガラス地に金属鉄微粒子の析出が認められるが、これは炉壁材中の鉄分が還元されて生成したものである。

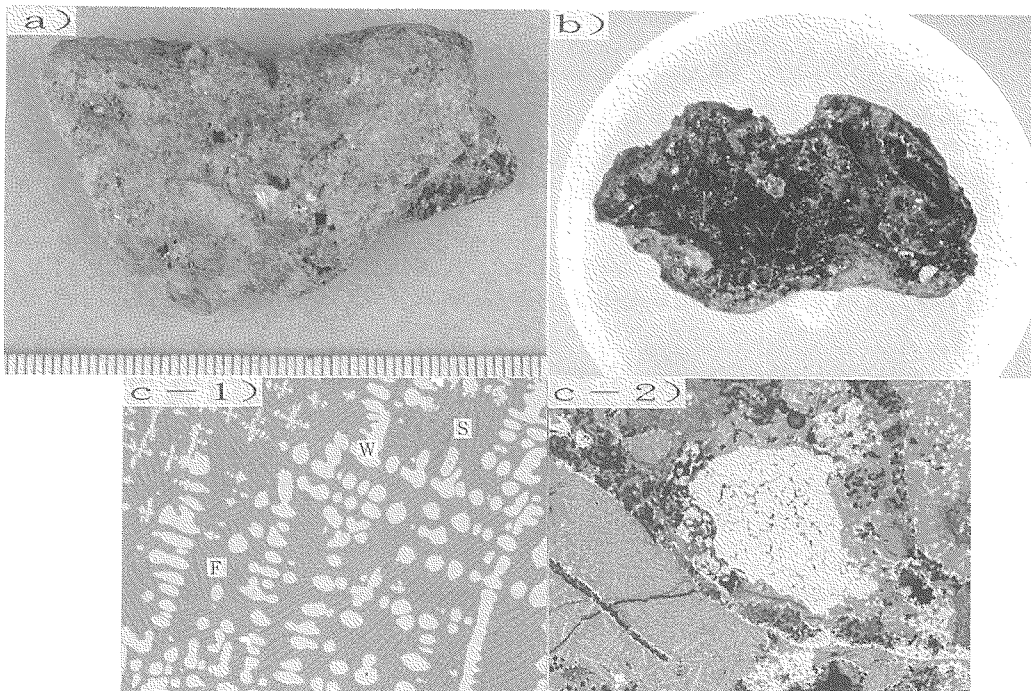


以上、化学組成とマクロ・ミクロ組織を検討した結果、炉壁片を除く3点の鉄滓試料は、すべて鋼精練滓の基本的な特徴を示すことが明確になった。おそらくは銑鉄を素材とし、それを脱炭するのに鉄鉾石粉あるいは砂鉄を使用し、石灰質造滓材を人為的に添加した鋼精練法(註1・2)が、遺跡の近くで行われていたものと思われる。

註1 佐々木稔「ふたたび古代の炒鋼法について」『たたら研究』第27号、1985年、p40。

註2 赤沼英男「古代から中世における北の鉄の変化」『北の鉄文化』岩手県立博物館、1990.10 p.74。

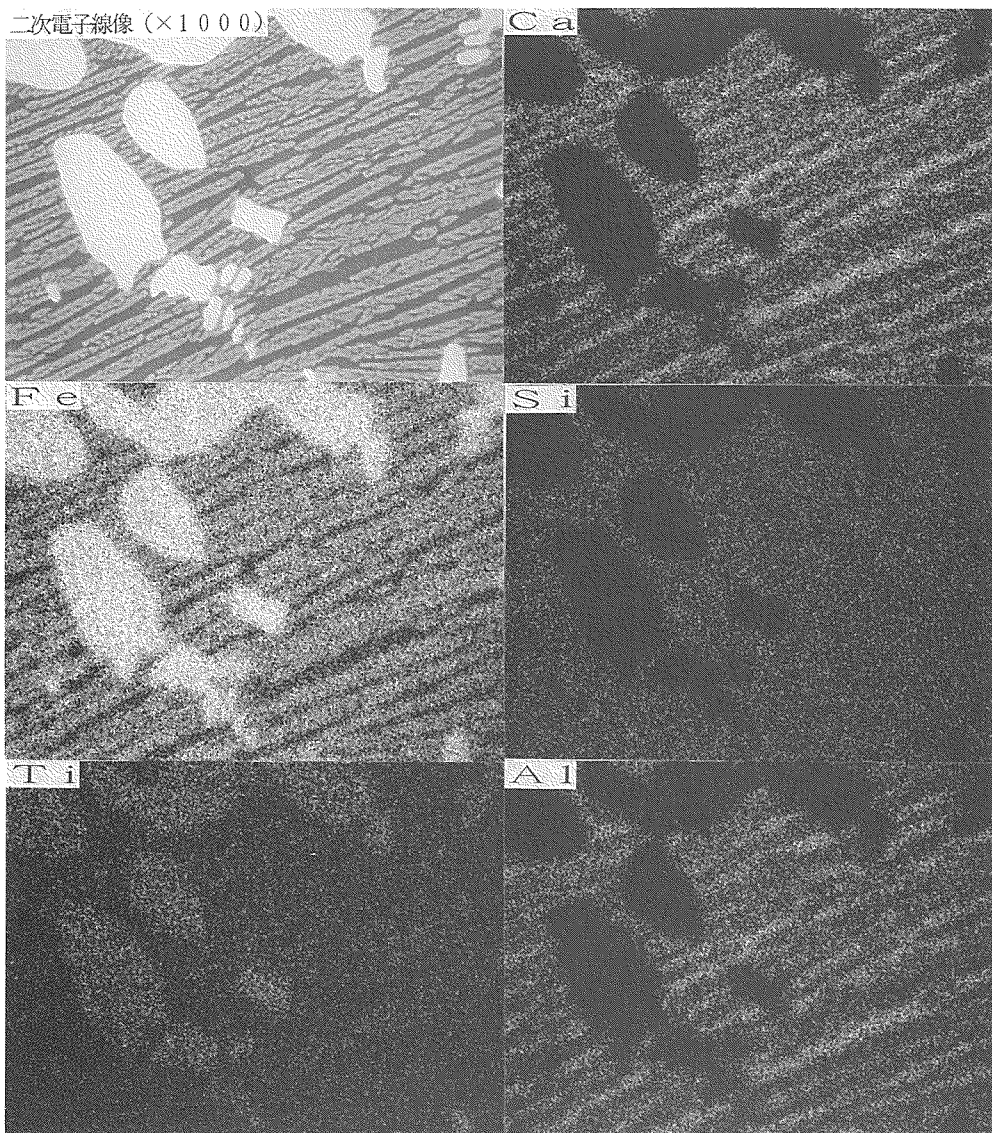




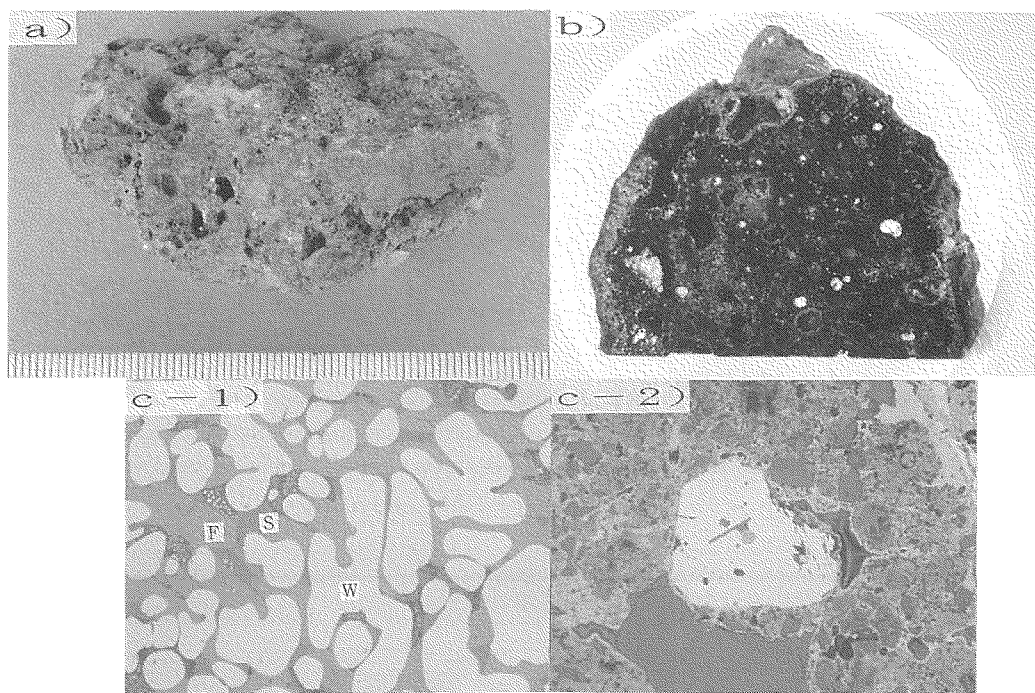
W : ウスタイト (FeO)、F : ファヤライト (2FeO SiO_2)、S : ガラス質珪酸塩

a) 外観、b) 断面マクロ組織 ($\times 3$)、c-1) 断面ミクロ組織 ($\times 200$)、
c-2) 鉄矽石粒子 ($\times 50$)

付編2・写真1 No.1 鉄滓の外観とマクロ・ミクロ組織



付編2・写真2 No.1 鉄滓の元素分布 (EPMA)

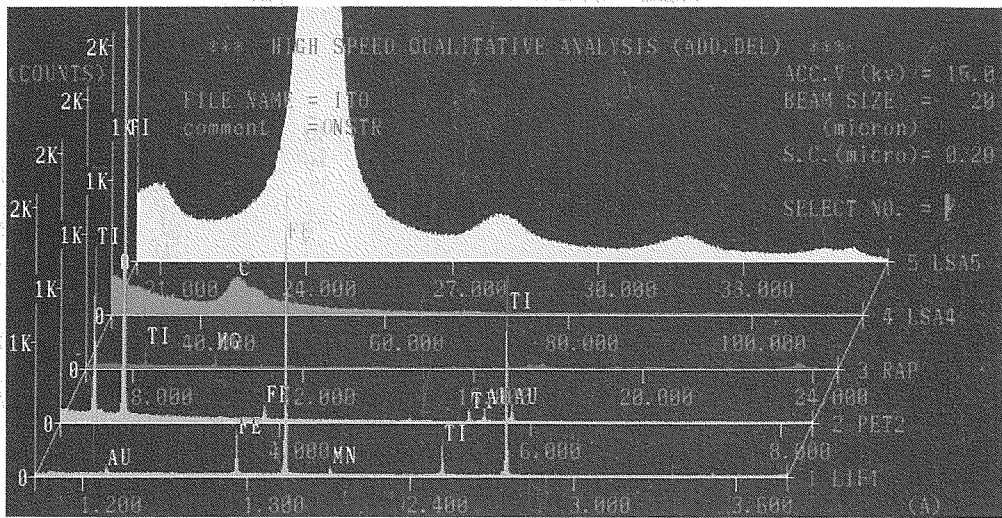
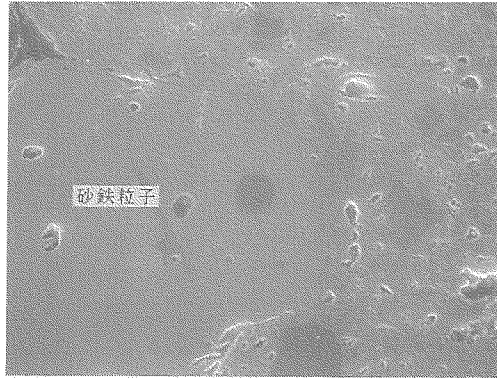


W : ウスタイト (FeO)、F : ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、S : ガラス質珪酸塩

a) 外観、b) 断面マクロ組織 ($\times 3$)、c-1) 断面ミクロ組織 ($\times 200$)、
c-2) 砂鉄粒子 ($\times 200$)

付編 2 ・ 写真 3 No. 2 鉄滓の外観とマクロ・ミクロ組織

二次電子線像 (×500)

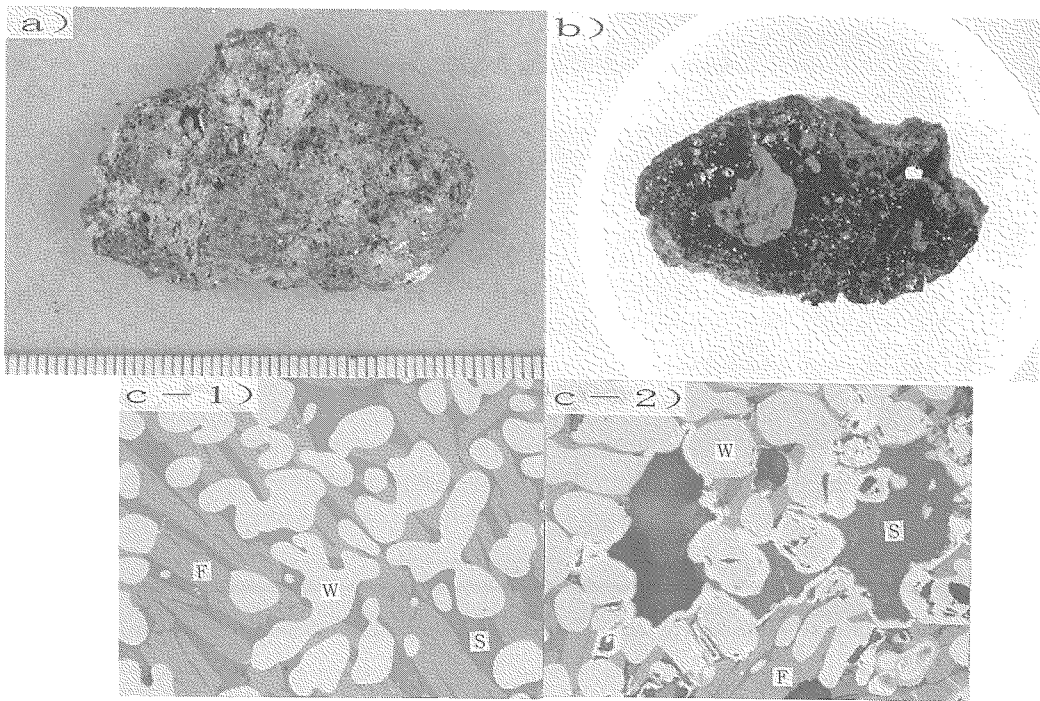


* RATIO

NO.	ELE.	XTAL	W.L.	PKI-BGI	STD(I)	I-RATIO	WT(%)	ELE.
1	FE Ka	LIF1	1.9373	1712.9	373.2	4.5895	47.512	FE
2	TI Ka	PET2	2.7496	7379.9	2382.1	3.0981	32.073	TI
3	O Ka	LSA5	23.6500	3521.7	3199.9	1.1006	11.393	O
4	AU Ma	PET2	5.8400	87.4	138.5	0.6308	6.531	AU
5	MN Ka	LIF1	2.1030	61.0	380.1	0.1605	1.661	MN
6	MG Ka	RAP	9.8900	95.5	1947.5	0.0491	0.508	MG
7	C Ka	LSA4	44.7000	165.9	5333.5	0.0311	0.322	C

TOTAL 100.000

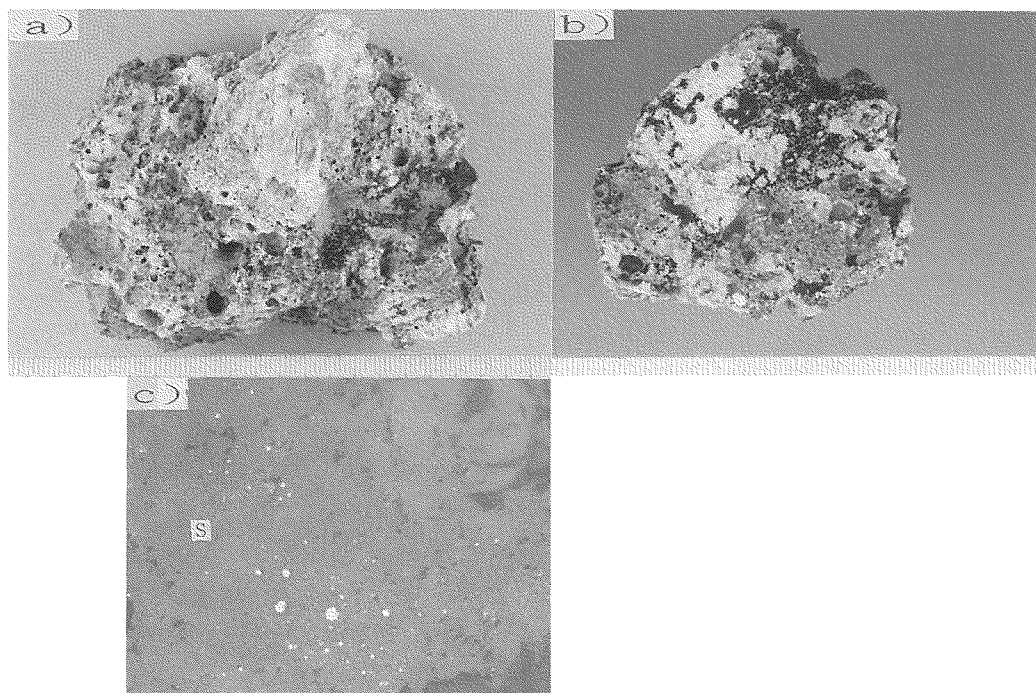
付編2・写真4 砂鉄粒子の定性分析結果 (EPMA)



W : ウスタイト (FeO)、F : ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、S : ガラス質珪酸塩

a) 外観、b) 断面マクロ組織 ($\times 3$)、c-1・2) 断面ミクロ組織 ($\times 200$)

付編2・写真5 No.3 鉄滓の外観とマクロ・ミクロ組織



S : ガラス質珪酸塩、白色粒子は粒状金属鉄

a) 外観、b) 断面マクロ組織 (×3)、c) 断面ミクロ組織 (×500)

付編2・写真6 No.4 炉壁片の外観とマクロ・ミクロ組成

報告書抄録

ふりがな	なごやじょうさんのまるいせきだいろく・ななじはくつちょうさほうこくしょ						
書名	名古屋城三の丸遺跡 第6・7次 発掘調査報告書						
編著者名	尾野善裕 水橋公恵						
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館						
所在地	〒457 愛知県名古屋市南区見晴町47				TEL052-823-3200		
発行年月日	西暦 1995年 3月 30日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
なごやじょう 名古屋城 さんのまるいせき 三の丸遺跡	なごやしなかく 名古屋市中区 さんのまる 三の丸一丁目1番 3号	7-27			1993.12.13～ 1994.11.30	2,400	能楽堂建設 工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名古屋城 三の丸遺跡	墓 古墳 墓 集落跡 武家屋敷跡	弥生 古墳 中世 中世 近世	方形周溝墓 2基 古墳 1基 土坑墓 溝・土坑 地下式土坑 井戸・土坑・溝	銅銭・数珠 瀬戸陶器・常滑陶器 中国陶磁器・土師器 瀬戸陶磁器・肥前磁器 常滑陶器	室町時代の墓地 戦国時代の那古野 城関連遺構群		

名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書

1995年3月30日発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館

名古屋市南区見晴町47番地

〒457 Tel 052-823-3200

発行 名古屋市教育委員会

印刷 菱源印刷工業株式会社

